給支給方 明治二十一年三月 勅令第二號

明治二十年(七月)勅令第三十七號文官試補及見習規則ニ據リ試補ヲ命セラレタル者ニハ年俸六百圓以下見習ヲ命シタル者ニハ月給二十五圓以下其官廳ノ定額内ニ於テ所屬長官便宜之ヲ給スルコトヲ得

明治二十二年(十二月)閣令第八號ニ掲クル試補ノ俸給ハ年俸九百圓以下判任官見習ノ俸給ハ月給四十圓以下其官廳ノ定額内ニ於テ所屬長官便宜之ヲ給スルコトヲ得

内大臣以下俸給 明治二十二年七月 宮内省達第十二號

内大臣以下ノ俸給ヲ改定シ内大臣ハ宮内省官制第五十條ノ高等官俸給第一級俸ヲ賜ヒ宮中顧問官ハ其等位ニ依リ同第三級俸第四級俸第五級俸第六級俸ノ内ヲ賜ヒ内大臣秘書官ハ其等位ニ依リ同第一級俸第二級俸第三級俸第四級俸ノ内ヲ賜フ

帝國博物館帝國京都及奈良博物館書記官等俸給 明治二十三年六月 宮内省達第九號

帝國博物館帝國京都博物館帝國奈良博物館書記ノ官等俸給ハ自今宮内省官制第五十條屬官官等俸給ニ依ル

帝國各博物館技手官等俸給 明治二十三年七月 宮内省達第十四號

帝國博物館帝國京都博物館帝國奈良博物館技手ノ官等俸給ハ自今宮内省官制第五十條技手官等俸給ニ依ル

侍從職幹事俸給 明治二十三年十月 宮内省達第十九號

侍從職幹事俸給ハ其等位ニ依リ宮内省官制第五十條高等官俸給第三級俸第四級俸第五級俸第六級俸ノ内ヲ賜フ

皇族職員官等俸給 明治二十二年七月 宮内省達第十一號

皇族職員官等ヲ左ノ如ク改定シ其高等官俸給ハ宮内省官制第五十條ノ高等官俸給表ニ依リ別當ハ第四級俸第五級俸第六級俸第七級俸ノ内ヲ賜ヒ家令ハ其等位ニ依リ第一級俸第二級俸第三級俸第四級俸ノ内ヲ賜フ

親王家　有栖川宮　山階宮　小松宮　伏見宮　久邇宮　北白川宮　閑院宮　各一人
別當　各一人
家令　各一人
家扶(二十三年十二月二十日宮内省達第二十四號ヲ以テ家扶家從ノ定員ヲ刪除ス)　勅任二等　奏任二等以下　判任一等以下四等以上(二十三年六月十二日宮内省達第七號ヲ以テ家扶家從ノ官等各項ヲ改ム)
家從　判任四等五等六等

諸王家　華頂宮　梨本宮　各一人
家令　奏任二等以下
家扶　判任一等以下四等以上
家從　判任四等五等六等

樞密院議長副議長顧問官書記官長並書記官年俸給 明治二十四年七月 勅令第九十六號

朕茲ニ樞密院議長副議長顧問官並書記官長書記官年俸改正ノ件ヲ裁可ス

樞密院議長副議長顧問官並書記官長書記官ノ年俸左ノ通改ム

議長　五千圓
副議長　四千五百圓
顧問官　四千圓
書記官長　三千五百圓
書記官　(二十六年勅令第百中第二號表ニ依ル)(二十六年勅令第百六十七號高等官官等俸給令第二號表)

附則

本令ハ明治二十四年八月十六日ヨリ施行ス

造幣局印刷局稅關職員俸給令 明治二十六年十月 勅令第百七十四號

朕造幣局印刷局稅關職員俸給令ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

造幣局印刷局稅關職員俸給令

第一條　造幣局印刷局及稅關高等官ノ年俸左ノ如シ

造幣局
局長　二千五百圓
印刷局
局長　二千五百圓
稅關
横濱稅關長　三千圓
神戸稅關長　二千五百圓
長崎稅關長　千五百圓
函館稅關長　千二百圓

第二條　稅關鑒定官及鑒定吏ニ關シテハ明治二十四年勅令第八十四號技術官俸給令ヲ適用ス

第三條　監吏補ノ月俸ハ十五圓以下五圓以上トス

附則

第四條　本令ハ明治二十六年十一月十日ヨリ施行ス

明治二十四年勅令第百二十四號ハ本令施行ノ日ヨリ廢止ス

會計檢査院高等官年俸 明治二十四年七月 勅令第九十七號

朕茲ニ會計檢査院高等官年俸ノ件ヲ裁可ス

會計檢査院高等官年俸左ノ通定ム

院長　四千圓
部長
一級　四千圓
二級　三千圓
三級　二千五百圓
四級　二千圓
五級　二千圓
六級　千五百圓
七級　千二百圓
八級　千圓

檢査官
一級　四千圓
二級　三千圓
三級　二千五百圓
四級　二千圓
五級　千五百圓
六級　千二百圓
七級　千圓
八級　八百圓

書記官
一級　二千圓
二級　千五百圓

書記官ハ一級二級俸各一人トス

檢査官補
一級　九百圓
二級　八百圓
三級　七百圓
四級　六百圓

附則

本令ハ明治二十四年八月十六日ヨリ施行ス

貴族院衆議院書記官長並書記官年俸 明治二十四年七月 勅令第百一號

朕茲ニ貴族院衆議院書記官長並書記官年俸ノ件ヲ裁可ス

貴族院衆議院書記官長並書記官年俸左ノ通定ム

貴族院書記官長
衆議院書記官長　三千圓

貴族院書記官
衆議院書記官
一級　二千圓
二級　千八百圓
三級　千六百圓
四級　千四百圓
五級　千二百圓
六級　千圓
七級　八百圓
八級　六百圓

附則

本令ハ明治二十四年八月十六日ヨリ施行ス

◎大小林區署及鑛山監督署職員俸給令

明治二十六年十月勅令第百七十六號

朕大小林區署及鑛山監督署職員俸給令ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

大小林區署及鑛山監督署職員俸給令

第一條　大林區署及鑛山監督署高等官ノ年俸ハ別表ニ依ル

第二條　大小林區署及鑛山監督署判任官ノ月俸左ノ如シ

林務官補	判任官俸給八級以上
大林區署書記	判任官俸給二級以下
鑛山監督署書記	判任官俸給二級以下
鑛山監督署技手	判任官俸給三級以下
營林主事	二十五圓以下八圓以上
營林主事補	十二圓以下五圓以上
森林監守	

附則

第三條　本令ハ明治二十六年十一月十日ヨリ施行ス

明治二十四年勅令第百四十六號ハ本令施行ノ日ヨリ廢止ス

（別表略之）

◎農事試驗場高等官々等及俸給

明治二十六年四月勅令第十九號

朕茲ニ農事試驗場高等官々等及俸給ノ件ヲ裁可ス

農事試驗場技師ノ官等ハ高等官四等ヨリ高等官九等ニ至リ其俸給及官等相當俸給ハ別表ニ依ル

（別表略之）

◎官林巡邏給料支給規則

明治二十三年九月農商務省訓令第四十九號

官林巡邏給料支給規則左ノ通リ改正ス

官林巡邏給料支給規則

第一條　官林巡邏ノ給料ハ年給トシ左表定ムル所ニ依ル

第二條　年給ハ毎年三月末日ニ十二箇月分ヲ取纏メ之ヲ支給スヘシ

第三條　新ニ採用シタルトキ當月分ノ給料ハ發令ノ翌日ヨリ解免シタルトキ當月分ノ給料ハ發令ノ日マテ日割ヲ以テ計算シ死亡ノトキハ月割ヲ以テ計算スヘシ

第四條　增俸減俸ノ場合ニハ發令ノ翌日ヨリ其月分ヲ日割計算ニテ支給スヘシ（二十三年農商務省訓令第六十六號ヲ以テ本條ヲ追加ス）

第五條　日割計算ノ法ハ其月ノ現日數ニ依ル（同上）

（表ハ略ス）

◎遞信省所屬職員俸給令

明治二十六年十月勅令第百七十八號

朕遞信省所屬俸給令ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

遞信省所屬職員俸給令

第一條　一等郵便電信局長、郵便爲換貯金管理所長及船舶司檢所司檢官ノ年俸ハ別表ニ依ル

一等郵便電信局長ノ中東京郵便電信局長タル者ニハ特ニ年俸二千二百圓ヲ給スルコトヲ得

第二條　遞信省鐵道書記補、郵便電信書記補、郵便爲換貯金書記補ハ月俸十五圓以下五圓以上トス

第三條　三等郵便電信局長、三等鐵道局長ハ俸給ヲ給セス一箇年四百圓以下ノ手當ヲ給ス其ノ細則ハ遞信大臣之ヲ定ム

第四條　航路標識看守ノ俸給ハ別表ニ依ル但一級俸ヲ受ケ三年ヲ踰エ事務熟練優等ナル者ハ三十圓マテ增俸スルコトヲ得

附則

第五條　本令ハ明治二十六年十一月十日ヨリ施行ス

明治二十四年勅令第百五十五號ハ本令施行ノ日ヨリ廢止ス

（別表略之）

◎鐵道廳高等官俸給令

明治二十四年七月勅令第百十七號

朕茲ニ鐵道廳高等官俸給ノ件ヲ裁可ス

第一條　鐵道廳高等官ノ年俸左ノ通定ム

長官	四千圓
部長	三千圓

第二條　事務官及參事官ノ年俸ハ本年勅令第八十二號高等官任命及俸給令第二號表ニ依ル

附則

第三條　本令ハ明治二十四年八月十六日ヨリ施行ス

◎北海道廳高等官俸給令

明治二十四年七月勅令第百十九號

朕茲ニ北海道廳高等官俸給ノ件ヲ裁可ス

第一條　北海道廳高等官ノ年俸左ノ如シ

長官	四千圓
書記官	上級二千二百圓　下級二千四百圓
警部長	千八百圓
財務長	千八百圓
參事官	千圓
典獄	八百圓
郡區長	六百圓

第二條　內務大臣ニ於テ特ニ指定スル各郡區ノ郡區長ハ年俸八百圓ヲ給ス但其人員ハ七人以內トス

第三條　書記官ハ上級俸下級俸一人トス

附則

第四條　本令ハ明治二十四年八月十六日ヨリ施行ス

◎地方高等官俸給令

明治二十四年七月勅令第百二十號

朕茲ニ地方高等官俸給令ヲ裁可ス

地方高等官俸給令

第一條　府縣知事書記官警部長收稅長典獄ノ年俸左ノ

如シ
東京府知事四千圓
京都府知事、大阪府知事、神奈川縣知事、兵庫縣知事、長崎縣知事、新潟縣知事、愛知縣知事、宮城縣知事、廣島縣知事、熊本縣知事三千五百圓
其他ノ縣知事三千圓

	三府及神奈川兵庫長崎新潟愛知宮城廣島熊本ノ八縣	其他ノ諸縣
書記官	二千圓	千五百圓
警部長	千四百圓	千百圓
收稅長	千四百圓	千百圓
典獄	八百圓	六百圓

第二條　東京府書記官ハ特ニ年俸二千二百圓ヲ給スルコトヲ得
大阪府警部長ハ特ニ年俸千八百圓ヲ給スルコトヲ得
大阪府典獄ハ特ニ年俸千圓ヲ給スルコトヲ得
第三條　參事官ノ年俸ハ千圓トス但九百圓又ハ八百圓ヲ給スルコトアルヘシ（二十六年十月勅令第百八十一號ニテ本條改正）
第四條　郡長ノ年俸ハ六百圓トス
內務大臣ニ於テ特ニ指定スル各郡ノ郡長ハ年俸八百圓ヲ給ス但其人員ハ二百人以內トス
第五條　島司ノ年俸ハ千二百圓トス
附則
第六條　本令ハ明治二十四年八月十六日ヨリ施行ス
明治二十三年勅令第二百二十六號地方官官等俸給令ハ本令施行ノ日ヨリ廢止ス

臨時橫濱築港局次長俸給令

明治二十五年六月勅令第五十四號

朕茲ニ臨時橫濱築港局次長俸給令ノ件ヲ裁可ス

臨時橫濱築港局次長　年俸千五百圓

技術官俸給令

明治二十四年七月勅令第八十四號

朕茲ニ技術官俸給令ヲ裁可ス

技術官俸給令
第一條　各廳ニ於テ工藝技術ヲ要スルモノハ職員ノ外特ニ技術官ヲ置ク
第二條　技術官ヲ分テ技監技師技手トス
第三條　技監ハ勅任トシ技師ハ奏任トシ技手ハ判任トス
第四條　技監及技師ノ年俸ハ別ニ定ムルモノヽ外別表ニ依ル（二十六年十月勅令第百六十八號ニテ改正）
第五條　技術官ハ各廳事務ノ繁簡ニ依リ俸給最低額以下ヲ給スルコトアルヘシ
第六條　本令ニ規定スルモノヲ除クノ外技監技師ニ關シテハ本年勅令第八十二號高等官任命及俸給令ヲ適用シ技手ニ關シテハ本年勅令第八十三號判任官俸給令ヲ適用ス
附則
第七條　技術官ニシテ現ニ休職中ノモノハ休職滿期迄仍ホ現俸三分ノ一ヲ支給ス
第八條　本令ハ明治二十四年八月十六日ヨリ施行ス

明治十九年勅令第三十八號技術官官等俸給令ハ本令施行ノ日ヨリ廢止ス

（別表）（二十六年十月勅令第百六十八號）

官名	年俸等級
技監	一級三千五百圓　二級三千圓
技師	一級二千五百圓　二級二千二百圓　三級二千圓　四級千八百圓　五級千六百圓　六級千四百圓　七級千二百圓　八級千百圓　九級九百圓　十級八百圓　十一級七百圓　十二級六百圓

判任官俸給令

明治二十四年七月勅令第八十三號

朕茲ニ判任官俸給令ヲ裁可ス

判任官俸給令
第一條　判任文官ノ月俸ヲ別テ十級トシ別表ニ依リ毎月下旬ニ於テ之ヲ支給ス
第二條　陸海軍准士官下士ノ月俸ハ別ニ定ムル所ニ依ル其他特ニ定ムルモノハ前條ノ限ニアラス
第三條　判任官ハ毎級在職一年以上ニ至ラサレハ增俸スルコトヲ得ス
第四條　判任官最上級俸ヲ受ケ五年ヲ踰ヘ事務練熟優等ナル者ハ特別ヲ以テ別表ノ範圍ニ拘ハラス漸次七十五圓マテ增俸スルコトアルヘシ
第五條　官ニ在リテ死亡シタル者ハ月俸三箇月分ヲ其遺族ニ給ス非職者ニ於テモ亦同シ但遺族トハ官吏遺族扶助法ニ於テ遺族ト稱スルモノヲ謂フ（二十五年十二月勅令第九十七號ニテ改正）
第六條　前條ノ外俸給支給ニ關シテハ高等官任命及俸給令第十五條第十六條第十七條第十八條ノ例ニ依ル（上同）
第七條　俸給支給ニ關スル細則ハ大藏大臣省令ヲ以テ之ヲ定ム
附則
第八條　本令ハ明治二十四年八月十六日ヨリ施行ス
明治十九年勅令第三十六號判任官官等俸給令ハ本令施行ノ日ヨリ廢止ス
（別表略之）

第二款　外交官官等俸給令

公使館領事館費用條例

明治二十六年十月勅令第百七十一號

朕公使館領事館費用條例ノ改正ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

第一章　俸給
第一條　外交官、領事官、公使館書記生及領事館書記生ノ俸給ハ本俸、在勤俸及加俸ノ三種トス

第二條　外交官及領事官ノ本俸ヲ定ムルコト左ノ如シ

特命全權公使	年俸 一級四千圓 二級三千五百圓 三級三千圓
辨理公使	年俸 一級二千五百圓
代理公使	年俸 二級二千二百圓 三級二千圓
公使館一等書記官	
總領事	
公使館二等書記官	年俸 一級千八百圓 二級千六百圓 三級千四百圓 四級千二百圓
一等領事	
公使館三等書記官	年俸 一級千二百圓 二級九百圓 三級八百圓
二等領事	
外交官補	
領事官補	年俸 六百圓

第三條　待命外交官及待命領事官ニハ其ノ本俸三分ノ一以内ヲ給スルコトヲ得

第四條　公使館書記生及領事館書記生ノ本俸ハ判任官俸給令ニ依ル

第五條　在勤俸ハ外國在勤ノ場合ニ於テ本俸ノ外別表第一號及第二號ニ依リ任所到著ノ翌日ヨリ給ス

外國ニ於テ任官シ其ノ地ニ在勤ヲ命セラレタル者ニハ就職ノ日ヨリ其ノ在勤俸ヲ給ス

在勤俸ハ年額ヲ十二分シ毎月之ヲ給ス

任所ニ於テ在勤俸ノ給額ニ異動ヲ生シタル場合ニ於テハ其ノ命令到達ノ日ヨリ起算シ之ヲ給ス

第六條　外交官及領事官ニシテ其ノ妻ヲ任所ニ同伴シ若クハ呼寄セタル者ニハ其ノ妻任所ニ到著ノ翌日ヨリ現ニ受クル在勤俸十分ノ三ヲ增給ス

第七條　外交官領事官公使館書記生及領事館書記生兼任國若クハ兼任地駐在中ハ本任所ノ在勤俸ヲ給ス但本任所ニ於テ不在中代理者ヲ命シ之ニ其ノ代理ニ對スル在勤俸ヲ給スルトキハ事務引繼ヲ爲シタル日ヨリ代理者ニ給スル在勤俸ノ全額ヲ控除シタル殘額ヲ給ス（二十八年三月勅令第二十六號ニテ本條改正）

兼任國若クハ兼任地駐在中ハ到著ノ翌日ヨリ出發ノ前日マテ其ノ日數ニ應シ左ノ割合ニ依リ在勤俸ヲ增給ス

	甲額	乙額
特命全權公使	十八圓	十五圓
辨理公使	十五圓	十二圓
代理公使	十二圓	十圓
公使館一等書記官 總領事	十圓	八圓
公使館二等書記官 一等領事	九圓	七圓
二等領事 公使館三等書記官 外交官補 領事官補	八圓	六圓

公使館書記生 領事館書記生	六圓　四圓

前項ノ增給ハ歐米濠洲布哇ニ於テハ甲額ヲ其ノ他ノ諸國ニ於テハ乙額ヲ給ス

兼任國若クハ兼任地ニ於テ代理ヲ命セラレタル場合ニ於テハ第十四條ニ依リ兼任所ノ代理ニ對スル在勤俸ヲ給シ本任所ノ在勤俸並本條第二項ノ增給ヲ給セス

第八條　歸朝ヲ命セラレタル者又ハ賜暇歸朝ヲ許サレタル者ニハ任所出發ノ前日マテ在勤俸ヲ給ス

轉勤ヲ命セラレ又ハ轉官シタル者ニハ其ノ事務引繼ノ前日マテ從前ノ在勤俸ヲ給シ其ノ當日ヨリ新任所到著ノ日マテハ第二十四條及第二十五條ノ規程ニ依リ日當ヲ給ス但轉官スルモ同一ノ地ニ在勤ヲ命セラレタル者ハ此ノ限ニアラス

第六條ノ增給ヲ受クル者轉官、轉勤又ハ歸朝ヲ命セラレタル場合ニ於テ已ヲ得サル事故ノ爲メ外務大臣ノ許可ヲ得テ其ノ妻ヲ當任地若クハ任地ニ殘置クトキハ其ノ事故ノ存スル間從前ノ通增給ヲ給スルコトヲ得但其ノ地ノ在勤俸支給ヲ止メタル日ヨリ起算シテ百八十日ヲ超ルコトヲ得ス（同上法令ニテ本項追加）

第九條　轉勤又ハ歸朝ヲ命セラレタル者又ハ轉官シタル者ニ在勤俸又ハ其ノ滯留中ニ係ル日當ヲ給スルハ命令到達ノ日ヨリ三週間ヲ以テ限トス但特別ノ命令アルトキ又ハ病ニ罹リ外務大臣ノ許可ヲ得テ滯留スル者ハ此ノ限ニアラス

第十條　外交官及領事官ニシテ第六條及第十二條第四第五ノ支給ヲ受クヘキ者ハ特命全權公使、辨理公使、代理公使、公使館一等書記官、總領事、公使館二等書記官、一等領事及二等領事ニ限ル（同上法令ニテ本條改正）

第十一條　任所ニ於テ非職ヲ命セラレタル者又ハ退官シタル者ニハ其ノ命令到達ノ日マテ本俸及在勤俸ヲ給ス

任所ニ於テ死亡シタルトキハ其ノ當日マテ在勤俸ヲ給ス

前項ノ場合ニ於テ第六條ノ增給ハ死亡ノ日ヨリ四週間以内ヲ限リ其ノ妻舊任地出發ノ前日マテ從前ノ通之ヲ給スルコトヲ得其ノ已ムヲ得サル事故ノ爲メ四週間以内ニ出發スルコト能ハス特ニ外務大臣ノ許可ヲ得タル者ニハ死亡ノ日ヨリ百八十日ヲ限リ其ノ事故ノ存スル間仍其ノ增給ヲ給スルコトヲ得（同上法令ニテ本項追加）

第十二條　加俸ハ本俸及在勤俸ノ外左ノ規程ニ依リ之ヲ給ス

一　新ニ本邦ヨリ赴任スルトキハ特命全權公使、辨理公使、代理公使ハ其ノ赴任地ノ在勤俸年額十分ノ三其ノ他ノ外交官、領事官、公使館書記生、領事館書記生ハ十分ノ二

二　轉勤又ハ轉官ノ場合ニ於テハ其ノ赴任地ノ在勤俸年額十分ノ一但轉官スルモ同一ノ地ニ在勤ヲ命セラレタル者ハ此ノ限ニアラス

三　歸朝ヲ命セラレタル者又ハ賜暇歸朝ヲ許サレタル者ハ其ノ在勤俸年額十分ノ一但歸朝ヲ命セラレタル者赴任スルトキ亦同シ

四　本條第一第二第三ノ場合ニ於テ其ノ妻ヲ同伴スルトキハ更ニ在勤俸年額十分ノ一其ノ妻ヲ呼寄スルトキ及歸朝セシムルトキ亦同シ但後段ノ場合ニ於テ同一任地ニ係ルトキハ往返各一回ヲ限ル（同上法令ニテ本項改正）

五　第八條第三項及第十一條第三項ノ場合ニ於テ其ノ妻歸朝スルトキハ從前ノ在勤俸年額十分ノ一（同上法令ニテ本項追加）

第十三條　在勤又ハ歸朝ヲ命セラレタル者ニシテ出發前在勤ヲ免セラレ又ハ歸朝ノ命令ヲ取消サレタルトキハ其ノ加俸ノ半額以内ヲ給スルコトヲ得、賜暇歸朝ヲ許サレタル者ニシテ出發前其ノ許可ヲ取消サレタルトキ亦同シ

前項ノ場合ニ於テ死亡シタルトキハ其ノ全額以内ヲ給スルコトヲ得第十二條第四第五ノ場合ニ於テ其ノ妻死亡シタルトキ亦同シ（同上法令ニテ本項改正）

第十四條　代理者ハ其ノ事務引繼ヲ受ケタル日ヨリ代理中別表第一號又ハ第二號ニ依リ代理ニ對スル在勤俸ヲ給ス但當該主任官到著ノ場合ニ於テハ其ノ到著ノ日ヲ以テ限トス

第二章　退官賜金及死亡賜金

第十五條　外交官、領事官、公使館書記生及領事館書記生ノ退官賜金及死亡賜金ハ其ノ本俸ニ依リ算出ス

第十六條　外交官、領事官、公使館書記生及領事館書記生外國在勤中又ハ任所往返中死亡シタルトキハ死亡賜金ノ外本官相當ノ在勤俸年額十分ノ三ヲ給ス

第三章　旅費

第十七條　旅費トハ船車料及日當ヲ合稱ス

第十八條　旅費ハ赴任、公用歸朝、賜暇歸朝其ノ他公務ヲ帶ヒ旅行スル場合ニ於テ之ヲ給ス

第十九條　旅費ハ定額アルモノハ其ノ定額ニ依リ其ノ他ノ場合ニハ總テ實費ヲ給ス但本邦ヲ經由スヘキ順路ナルトキハ本邦任所間ノ定額ニ依ルコトヲ得

船車料ノ定額ハ外務大臣大藏大臣ト協議シテ之ヲ定ム（二十七年七月勅令第八十二號ニテ本項ヲ追加ス）

第二十條　任所ニ於テ非職ヲ命セラレ又ハ諭旨ニ依リ退官シタル者其ノ命令到達ノ日ヨリ三週間以内ニ出發歸朝スルトキハ本官若クハ前官相當ノ旅費ヲ給ス但三週間ノ期限ハ交通不便ノ地ニ於テハ現ニ出發スルコトヲ得ル日ヨリ起算ス

第二十一條　外交官、領事官、公使館書記生、領事館書記生及其ノ妻ニハ別表第三號ニ規程アルモノハ其ノ規程ニ依リ其ノ他ノ場合ニハ一等船車料ヲ給ス

官船若クハ官ノ傭船ニテ旅行スル者ニシテ現ニ船賃ヲ要セサルトキハ船車料ヲ給セス

往返ノ路程十二哩ニ滿タサルトキハ船車料ヲ給セス

第二十二條　外交官、領事官、公使館書記生及領事館書記生ノ妻ニ對スル船車料ヲ給スルハ左ノ場合ニ限ル

一　赴任、公用歸朝及賜暇歸朝ノ際同伴スルトキ

二　同伴セサルモ任地ヘ往返スルトキ但第十二條第五ノ場合ヲ除クノ外同一任地ニ係ルトキ往返各一回限リトス（二十八年三月勅令第二十六號ニテ本項以下改正）

三　兼任國若クハ兼任地ヘ出張スル場合ニ於テ同伴スルトキ但特命全權公使、辨理公使、代理公使ヲ除クノ外ハ特ニ外務大臣ノ許可ヲ得タルトキニ限ル

第二十三條　特命全權公使、辨理公使、代理公使赴任、公用歸朝賜暇歸朝又ハ兼任國ヘ旅行スル場合ニ於テ現ニ從者ヲ隨伴スルトキハ從者一人ヲ限リ其ノ實費ヲ給ス

外交官及領事官ニ限リ第二十二條第二ノ場合ニ於テ現ニ從者ヲ隨伴セシムルトキ亦前項ニ同シ從者ノ爲給スヘキ實費ハ特別ノ場合ヲ除クノ外三等船車料ニ限ル

第二十四條　本邦任所間往返中ノ日當ハ別表第四號ニ依リ給ス但其ノ他ノ場合ニ於テ又ハ別表第四號ニ規程ナキモノハ本條第三項ノ割合ニ依リ日當ヲ給ス

特別ノ命令又ハ已ムヲ得サル事故ノ爲中途ニ滯留シ別表第四號ノ豫定日數ヲ超過シタルトキハ其ノ滯留日數ニ對シ本條第三項ノ割合ニ依リ日當ヲ給ス

別表第四號ニ規程アルモノヲ除クノ外陸行中及出張地滯留中ノ日當ハ其ノ日數ニ應シ左ノ割合ニ依リ給ス但往返一日ヲ出テサルトキハ之ヲ給セス

	甲額	乙額
特命全權公使	十圓	八圓
辨理公使	八圓	六圓
代理公使	八圓	六圓
公使館一等書記官	七圓	五圓
總領事		
公使館二等書記官		
一等領事		
公使館三等書記官	六圓	四圓
二等領事		
外交官補		
領事官補		
公使館書記生	五圓	三圓
領事館書記生		

前項ノ日當ハ歐米、濠洲、布哇ニ於テハ甲額ヲ其ノ他ノ諸國ニ於テハ乙額ヲ給ス但甲額ヲ給スヘキ地ヨリ乙額ヲ給スヘキ地ニ又ハ乙額ヲ給スヘキ地ヨリ甲額

ヲ給スヘキ地ニ旅行シ又ハ其ノ旅行中滯留スルトキハ甲額ヲ給ス

第二十五條　別表第四號ニ規程アルモノヲ除クノ外旅行中別ニ食料ヲ要セサル場合ニ於テハ前條日當ノ半額ヲ給ス

船賃ヲ給セサル場合ニ於テハ十分ノ七ヲ給ス

第二十六條　兼任國若クハ兼任地駐在中ハ第七條ニ依リ在勤俸ヲ給シ日當ヲ給セス（上同）

第二十七條　歸朝中轉勤ヲ命セラレ又ハ轉官シタル場合ニ於テハ本邦新任所間ノ旅費ヲ給ス

外國ニ於テ任官シタル者ニハ其ノ現住地ヨリ任所マテノ旅費ヲ給ス

第二十八條　本邦任所間往返中死亡シタル者ニハ其ノ旅費ノ全額ヲ給ス其ノ妻又ハ從者死亡ノトキ亦同シ

實費ヲ給スヘキ旅中ニ於テ死亡シタル者ニハ日當ハ死亡當日マテ船車料ハ其ノ既ニ拂ヒタル全額ヲ給ス

本條第一項第二項ノ場合及任所ニ於テ死亡シタル場合ニ於テ妻又ハ從者ヲ隨伴シタルトキハ其ノ妻ノ歸朝旅費ヲ給スルコトヲ得（上同）

第四章　經費

第二十九條　公使館及領事館經費ハ實費精算ヲ要スルモノト精算ヲ爲サス渡切ルモノトノ二種ニ區分ス其ノ區分ハ外務大臣大藏大臣ト協議シ之ヲ定ム

渡切經費ハ各科目定額ヲ四分シ每三箇月之ヲ各館長ニ交付ス

渡切經費ハ本邦ヲ發送シタル後館長ノ更迭歸朝等ニ依リ受領者ノ氏名ニ異動アルトキハ現ニ館長若クハ其ノ代理者ノ職ニ在ル者之ヲ受領スヘシ

第三十條　渡切經費及在勤滯留旅行中ニ係ル俸給及日當ハ歐米（墨西哥ヲ除ク）濠洲、布哇、印度、露領亞細亞ニ於テハ金貨其ノ他ノ諸國ニ於テハ銀貨ヲ以テ給ス（二十七年第五十一號ヲ以テ下印度以下七字ヲ追加ス）五月勅令

金貨ヲ以テ給スル地ヨリ銀貨ヲ以テ給スル地ニ旅行スルトキハ其ノ旅中ニ係ル本俸及日當ハ銀貨ヲ以テ給ス銀貨ヲ以テ給スル地ヨリ金貨ヲ以テ給スル地ニ旅行スルトキ亦同シ

金貨ヲ以テ給スル地ヨリ銀貨ヲ以テ給スル地ニ出張スルトキハ其ノ旅中及滯留中ニ係ル本俸及在勤俸ハ前項ノ規程ニ拘ラス金貨ヲ以テ給ス但第七條ニ規程シタル增額ハ此ノ限ニアラス

附則

第三十一條　本令ニ於テ轉官トアルハ外交官、領事官、公使館書記生、領事館書記生ノ間ニ其ノ官ヲ轉スルヲ謂ヒ轉勤トアルハ其ノ住所ヲ轉スルヲ謂フ

第三十二條　臨時代理公使旅行又ハ兼任國駐在ノ場合ニハ總テ代理公使ニ關スル規程ヲ適用ス

第三十三條　貿易事務官ニハ其ノ官等ニ應シ本令ニ掲クル一等領事又ハ二等領事ニ關スル規程ヲ適用ス

第三十四條　名譽領事ニハ事務所費トシテ年額八百圓以內ヲ給スルコトヲ得

第三十五條　名譽領事館ニ領事館書記生ヲ在勤セシムルトキハ其ノ在勤俸ハ最近地領事館ノ例ニ依ル

第三十六條　本令ノ施行ニ關スル細則ハ外務大臣之ヲ定ム

第三十七條　本令ハ明治二十六年十一月十日ヨリ施行ス

明治二十五年勅令第四號ハ本令施行ノ日ヨリ廢止ス

（別表略之）

◎外交官領事官及貿易事務官官等令

明治二十六年十月勅令第百七十號

朕外交官領事官及貿易事務官官等令ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

外交官領事官及貿易事務官官等令

第一條　外交官領事官貿易事務官ノ官等ハ左表ニ依ル

高等官等						
一	二	三	四	五	六	七
特命全權公使	辯理公使	代理公使	公使館一等書記官	公使館二等書記官	公使館三等書記官	外交官補
		總領事	總領事	一等領事	二等領事	領事官補
				貿易事務官	貿易事務官	

第二條　七等ニシテ在職滿二年ヲ踰ユルモノハ六等ニ六等ニシテ在職滿二年ヲ踰ユルモノハ五等ニ陞叙スルコトヲ得

第三條　本令ニ規定セサルモノハ明治二十五年勅令第九十六號高等官官等俸給令ニ依ル

附則

第四條　本令ハ明治二十六年十一月十日ヨリ施行ス

本令施行ニ際シ別ニ叙等ノ辭令書ヲ交付セサルモノハ本令第一條ノ相當官等ニ叙セラレタルモノトス

◎外交官領事官貿易事務官公使館領事館書記生ノ本俸支給方

號明治二十五年一月勅令第四

朕茲ニ外交官領事官貿易事務官公使館領事館書記生ノ本俸支給ニ關スル件ヲ裁可ス

外交官領事官貿易事務官ノ本俸ハ海外在勤中ニ限リ年額ヲ十二分シ其一分ヲ一箇月分ト爲シ每月末日ニ之ヲ給ス

歸朝又ハ任所替ノ爲メ任地ヲ離ルヽトキハ日割ヲ以テ出發前日ニ之ヲ給ス公使館書記生領事官書記生任地ヲ離ルヽトキ亦同シ

◎待命外交官及待命領事官ノ俸給ニ關スル件

明治二十七年十一月勅令第百八十九號

朕戰時若ハ事變ニ際シ職務ニ從事セシムル待命外交官及待命領事官ニ關スル件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

戰時若ハ事變ニ際シ待命外交官又ハ待命領事官ヲシテ外務省又ハ他官衙ノ職務ニ從事セシムルトキハ其ノ本俸全額迄ヲ支給スルコトヲ得

前項ノ待命外交官及待命領事官ニハ在職官吏ニ關スル規程ヲ適用ス

◎通譯官及通譯生ノ俸給及旅費ノ件

明治二十八年六月勅令第八十三號

朕通譯官及通譯生ノ俸給及旅費ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

第一條　公使館一等通譯官、公使館二等通譯官ノ俸給及旅費ハ其ノ官等ニ應シ公使館三等書記官又ハ外交官補ニ關スル規程ヲ適用ス

第二條　公使館通譯生領事館通譯生貿易事務館通譯生ノ俸給及旅費ハ公使館書記生、領事官書記生ニ關スル規程ヲ適用ス

◎外交官及領事官俸給旅費給額

明治二十三年十二月勅令第二百八十一號

朕外交官及領事官ノ俸給旅費等ニ關スル件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

明治二十三年勅令第二百五十七號外交官及領事官官制ニ依リ任セラレタル勅任二等特命全權公使、奏任一等辨理公使、奏任二等代理公使、奏任二等公使館參事官及奏任二等總領事ニ給スヘキ俸給及旅費等ハ交際官並領事費用條例中ニ規定シタル特命全權公使、辨理公使、代理公使、參事官及總領事ノ給額ニ依ル

◎外交官及領事官以下ニ支給スヘキ船車料

明治二十七年七月外務省令第八號

明治二十六年勅令第百七十一號公使館領事館費用條例第十九條第二項ニ因リ外交官及領事官以下ニ支給スヘキ船車料左表ノ通相定ム

（表ハ之ヲ略ス）

第三款　陸海軍々人及其附屬俸給令

◎陸軍豫備後備ノ軍籍ニアル文官召集中俸給支給方

明治二十四年七月勅令第百六十二號

朕豫備後備ノ軍籍ニアル文官陸軍召集條例ニ依リ召集中俸給支給方ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

文官ニシテ豫備後備ノ軍籍ニアル者陸軍給與令第十八條ニ依リ俸給ヲ受クル間ハ文官俸給ノ支給ヲ停止ス但其額文官俸給額ヨリ寡少ナルトキハ其不足額ハ奉職官廳ニ於テ文官俸給ヨリ之ヲ補給ス

◎陸軍所屬特別文官俸給令

明治二十六年十月勅令第百七十五號

朕陸軍所屬特別文官俸給令ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

陸軍所屬特別文官俸給令

第一條　勅任官及奏任官ノ年俸ハ第一表判任官以下ノ月俸第二表ニ依リ之ヲ給ス

理事試補ハ軍法會議ノ搆成員ヲ命セラレタル者ニ限リ三百圓以下ノ年俸ヲ給ス

第二條　陸軍監獄長一級俸ヲ受ケ滿七年ヲ踰エ特ニ効績アル者ハ年俸八百圓マテ增給シ陸軍監獄看守滿十年以上勤續スル者ハ月俸十二圓ヲ給スルコトヲ得

第三條　陸地測量師及軍馬補充署技師ニハ第一表定ムル所ノ年俸最低額以下ヲ給スルコトヲ得

附則

第四條　本令ハ明治二十六年十一月十日ヨリ施行ス

明治二十四年勅令第百二十六號、同年勅令第百二十七號、同年勅令第百二十九號、同年勅令第百三十號及同年勅令第百二十八號中陸軍ニ關スルモノハ本令施行ノ日ヨリ廢止ス

（表ハ略ス）

◎陸軍々人航海加俸ノ件

明治二十八年四月勅令第五十八號

朕陸軍軍人軍艦若クハ水雷艇ニ乘組ムトキ航海加俸ヲ給スル件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

陸軍軍人軍艦若クハ水雷艇ノ乘員トシテ航行ノ役務ニ服スル艦艇ニ乘組ムトキハ海軍軍人俸給令ニ準據シ其ノ官職相當ノ航海加俸ヲ給ス但陸軍中佐及相當官ハ海軍大佐ニ陸軍中尉及相當官ハ海軍大尉ニ陸軍上等兵及陸軍一等卒ハ海軍一二等卒ニ陸軍二等卒ハ海軍三四等卒ニ準ス

本令ハ發布ノ日ヨリ施行ス

◎在外國公使館附陸海軍武官俸給令

明治二十六年十一月勅令第二百十二號

朕在外國公使館附陸海軍武官俸給令ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

在外國公使館附陸海軍武官俸給令

第一條　在外國公使館附陸海軍武官ノ俸給ハ分チテ本俸及在勤俸ノ二種トス

第二條　公使館附陸軍武官ノ本俸ハ陸軍給與令ニ定ムル所ノ現役俸及職務俸トス

公使館附海軍武官ノ本俸ハ海軍軍人俸給令中第一表ニ依ル

第三條　公使館附陸海軍武官ノ在勤俸年額ハ別表ニ依ル

陸軍大尉ニシテ公使館附少佐ノ職務心得ヲ命セラレタル者ノ在勤俸ハ陸軍佐官ノ在勤俸額ニ同シ

第四條　清國公使館附陸海軍武官ニシテ特ニ天津在勤ヲ命セラレタル者ニハ年額三百六十圓以內ヲ增給スルコトヲ得

第五條　在勤俸ハ海外在勤ノ場合ニ於テ本俸ノ外任所到著ノ翌日ヨリ任所出發ノ前日マテ之ヲ給ス

第六條　任所替ヲ命セラレタルトキハ舊任所出發ノ當日ヨリ新任所到著ノ日マテハ在勤俸ヲ給セス

第七條　歸朝若クハ任所替ヲ命セラレタル者其ノ辭令到達ノ日ヨリ三十日ヲ過キ尙出發セサルトキハ其ノ翌日ヨリ在勤俸ヲ給セス但特ニ滯在ヲ命セラレタル者ハ此ノ限ニアラス

第八條　俸給ハ年額ヲ十二分シテ一箇月分トシ毎月下旬ニ之ヲ給ス但外國ニ送金ヲ要スルモノハ半箇年分以內ニ於テ前金渡ヲ爲スコトヲ得

第九條　歐米各國ニ在勤スル者ノ在勤俸ハ金貨ヲ以テ支給シ東洋諸國ニ在勤スル者ノ在勤俸ハ銀貨ヲ以テ支給ス

附則

第十條　本令ハ明治二十七年四月一日ヨリ施行ス

明治二十一年勅令第十八號及本年勅令第六號ハ本令施行ノ日ヨリ廢止ス

（別表略之）

◎主理試補ニシテ海軍々法會議員タル者ノ年俸 明治二十六年十一月勅令第二百七號

朕海軍軍法會議構成員ヲ命シタル主理試補年俸ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

主理試補ニシテ軍法會議ノ構成員ヲ命セラレタル者ニハ三百圓以下ノ年俸ヲ給スルコトヲ得

◎望樓長望樓手俸給 明治二十七年七月勅令第七十八號

朕望樓長望樓手俸給ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

望樓長望樓手ノ俸給ハ別表ニ依ル

（別表）

望樓長望樓手俸給表

官名	俸給 月俸等級 一級俸	二級俸	三級俸	四級俸	五級俸
望樓長	三十圓	二十五圓	二十圓	十五圓	十二圓
望樓手	二十五圓	二十圓	十五圓	十二圓	十圓

◎臨時陸軍檢疫部及占領地總督部ノ高等文官及判任文官俸給ノ件 明治二十八年四月勅令第四十二號

朕臨時陸軍檢疫部及占領地總督部ノ高等文官及判任文官俸給ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

明治二十八年勅令第三十三號檢疫部及同年勅令第三十八號占領地總督部ノ高等文官及判任文官ノ俸給ハ左表ニ依ル

（表ハ略ス）

◎傭人給與規則 明治二十三年四月海軍省達第百四十六號

雇員傭人職工人夫給與規則ヲ廢シ傭人職工人夫給與規則左ノ通定ム

傭人給與規則（二十五年八月海軍省達第六十一號ヲ以テ『傭人給與規則』ヲ『傭人給與規則』ト改ム）

第一條　傭人ノ給料ハ左ノ金額ヲ最上限トシ適宜日給額ヲ定メ服業ノ日數ニ應シ之ヲ給ス（二十三年海軍省達第二百五十一號ヲ以テ『最上限』トシ『ノ下』『各所管長官ニ於テ』ノ八字ヲ刪除ス）

第二條　公務ニ原因シ傷痍ヲ受ケ若クハ疾病ニ罹リ爲メニ服業セサル者ニハ其日ヨリ百日マテ日給五分ノ一ヲ給ス

傳染病ニ依リ隔離法施行ノ爲メ服業ヲ禁シタル者ニハ其日數中日給ノ半額ヲ給ス

第三條　增給減給ハ其令達ヲ受ケタル當日ヨリ之ヲ給ス

第四條　解傭者ノ日給ハ從前ノ業務終リタル當日マテ前聽ニ於テ給シ後繼ハ其翌日ヨリ給ス

解傭者ニシテ其當日他ノ職務ヲ命シ其日ヨリ給料ヲ給スルトキハ解傭ノ前日マテ日給ヲ給ス

第五條　日給支給定日ハ毎月判任官同日トシ前月十六日ヨリ其月十五日マテノ日給ヲ給ス但便宜ニ依リ其月分ノ給額ヲ毎月末日ニ給スルコトヲ得（二十六年達第四號ヲ以テ本條改正）

解傭者轉傭者若クハ死亡者ノ日給ハ前項ノ支給定日ニ拘ハラス其際之ヲ給ス

第六條　器械手兵器保護手馭者砲丁馬丁公務ニ原因シ死傷シタル者ニハ明治八年四月第五十四號公布ニ依リ扶助料及埋葬料ヲ給ス（同上法令ヲ以テ本條ヲ改正シ二十五年海軍省達第六十一號ヲ以テ次條ヲ刪除ス）

◎陸軍傭員以下給料支給規則 明治二十三年十一月陸達第二百十九號

傭員以下給料支給規則左ノ通相定メ本年十二月一日ヨリ施行ス

但明治十九年十月省令乙第百四十二號傭員俸給支給規則及明治二十一年七月陸達第百六十一號ハ本文施行ノ日ヨリ廢止ス

傭員傭以下給料支給規則

第一條　傭員ノ給料ハ月給又ハ日給トス（二十四年陸達第百二十五號ヲ以テ本條改ム）

傭役ノ者給料ハ別表ニ依ル

第二條　傭員及傭役ニシテ月給ノ者ハ毎月末日（休日ニ當ルトキハ順次繰上ケトス）ニ支給シ日給傭ノ者ハ出務現日數ニ依リ給料ヲ計算シテ毎月下旬適宜ニ之ヲ支給ス但解傭死亡其他事故アルトキハ其際ニ給スル當日ヨリ給シ罷免ノトキハ其前日死亡ノトキハ其當日マテ給ス

第三條　新ニ傭入レノ者及其他給額ヲ增減スルトキハ總テ其命ヲ受ケタル當日ヨリ給シ罷免ノトキハ其前日死亡ノトキハ其當日マテ給ス

第四條　傭員及傭役ニシテ月給ノ者傷痍疾病（公務ニ起因シタル者ハ除ク）其他事故（忌引又ハ請願休暇等）ニ因リ出務セサル「引續キ三十日」ヲ踰ヘ若クハ收禁留置中ハ日割ヲ以テ半額ヲ減シ拘留以上ノ處刑中ハ總テ支給セス但收禁留置ノ者無罪若クハ免訴ニ歸スルトキハ其減給額ヲ追給ス

第五條　傭員及傭役ニシテ日給ノ者ハ祭日祝日及日曜日其他命令上ノ休暇日又ハ公務ニ起因シタル傷痍疾病其他ノ爲メ不參ノ日ハ全額ヲ給ス

第六條　月給日・計算ノ法ハ其支給スヘキ日數ヲ月額ニ乘シ其月ノ現日數ヲ以テ除シ四捨五入厘位ニ止メ之ヲ支給ス但第四條ノ場合ニ在テハ月額ヲ二分シ之レニ支給スヘキ日數ヲ乘シ其月ノ現日數ヲ以テ除シ（毛以下切捨）之ヲ月額ノ內ヨリ扣除シ支給額ヲ得

（別表ハ之ヲ略ス）

◎陸軍海軍武官官等 明治十九年四月勅令第三十七號

朕茲ニ陸軍海軍武官ノ官等ヲ裁可ス

陸軍海軍武官官等

第一條　陸軍海軍大將ハ親任式ヲ以テ叙任スルノ官トシ中將ハ勅任「一等」少將及相當官ハ勅任「二等」トス

第二條　陸軍海軍大佐ハ奏任「一等」中佐ハ奏任「二等」少佐ハ奏任「三等」大尉ハ奏任「四等」中尉ハ奏任「五等」少尉ハ奏任「六等」トス佐官尉官ノ相當官亦同シ（十九年勅令第五十二號ニヨリ海軍中佐中尉ノ官ハ廢滅ニ屬ス）

第三條　陸軍准士官下士ノ官等ハ判任「一等ヨリ四等」ニ至リ海軍准士官下士ノ官等ハ判任「一等ヨリ五等」ニ至ル

◎海軍武官官階 明治二十四年七月勅令第百五十七號

朕茲ニ海軍武官官階ヲ定ムルノ件ヲ裁可ス

第一條　海軍武官官階ヲ定ムルコト左表ノ如シ

海軍武官官階表

將官	上長官	又佐官	准士官	士官	下士官
			一等	二等	三等

大將	中將	少將	大佐	少佐	大尉	少尉	上等兵曹	一等兵曹	二等兵曹	三等兵曹					
							軍樂師	一等信號手	二等信號手	三等信號手					
			機技部上長官		機技部士官		機技部准士官	機技部下士							
								一等	二等	三等					
		機技總監	機關大監	機關少監	大機關士	少機關士	機關師	一等機關手	二等機關手	三等機關手					
			大技監	少技監	大技士	少技士	船匠師	一等船匠手	二等船匠手	三等船匠手					
								一等鍛冶手	二等鍛冶手	三等鍛冶手					
		軍醫總監	軍醫大監	軍醫少監	大軍醫	少軍醫	軍醫部准士官	軍醫部下士							
				藥劑監	大藥劑官	少藥劑官		一等	二等	三等					
							上等看護手	一等看護手	二等看護手	三等看護手					
		主計總監	主計大監	主計少監	大主計	少主計	上等主帳	一等主帳	二等主帳	三等主帳					
			主計部上長官		主計部士官		主計部准士官	主計部下士							
								一等	二等	三等					

第二條　本令ハ明治二十四年八月十六日ヨリ施行ス

第三條　海軍武官々等表ハ本令施行ノ日ヨリ廢止ス

海軍軍人俸給令

明治二十六年十二月勅令第二百五十二號

朕海軍軍人俸給令ノ改正ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

海軍軍人俸給令

第一條　高等武官ノ俸給ハ第一表准士官ノ俸給ハ第二表、下士卒ノ俸給ハ第三表ニ依ル

准士官以上及下士ニシテ其ノ俸給ニ等級アルモノハ各等級ニ付海軍大臣其ノ定員ヲ定ム

第二條　候補生ノ俸給ハ日給八十錢トス

第三條　准士官以上ニ待命ヲ命シタルトキハ俸給十分ノ八ヲ給シ休職ヲ命シタルトキハ俸給十分ノ六ヲ給シ停職ヲ命シタルトキハ俸給十分ノ三ヲ給ス

第四條　下士卒ノ俸給ハ定員ニ在ル者ニ甲額ヲ給シ定員外ニ在ル者ニ乙額ヲ給ス練習員（五等卒ヲ除ク）ニハ甲額ヲ給ス（廿七年三月勅令第三十三號ニテ改正）

海兵團ニ於テ定員外ニ在ル者ニ須要ニ依リ特ニ執務ヲ命シタルトキハ執務中甲額ヲ給ス

第五條　士官以上ニ上官ノ職務心得ヲ命シタルトキハ上官ノ最下級俸十分ノ二ヲ加給ス

下士ニ准士官ノ職務心得ヲ命シタルトキハ准士官最下級俸十分ノ一ヲ加給ス

第六條　航行ノ役務ニ服スル軍艦ノ定員及乘組候補生ニハ第四表ニ依リ航海加俸ヲ給シ航行ノ役務ニ服スル水雷艇ノ乘員ニハ第五表ニ依リ航海加俸ヲ給ス

第七條　士官以上ニ上官ノ職務心得ヲ命シ若クハ下士ニ准士官ノ職務心得ヲ命シタルトキハ其ノ職務相當ノ航海加俸ヲ給ス

第八條　官有船舶若クハ官ニテ借入備入タル船舶ノ運轉及其ノ他ノ職務ニ服スル爲メ乘組ヲ命シタル者ニハ第六條ニ準シ航海加俸ヲ給ス但炊具臥具ノ設備ナキ船艇ニ乘組ヲ命シ旅費ヲ給スルトキハ航海加俸ヲ給セス

第九條　下士卒ニシテ善行章ヲ有スル者ニハ一線毎ニ一日一錢ノ加俸ヲ給ス

第十條　下士卒ニシテ教員ノ職ヲ奉スル者ニハ一日三錢ノ加俸ヲ給ス

第十一條　下士卒ニシテ砲術教員適任證書ヲ有スル者ニハ一日四錢、一等掌砲證狀ヲ有スル者ニハ一日三錢、二等掌砲證狀ヲ有スル者ニハ一日二錢ノ加俸ヲ給ス

砲術教員適任證書及掌砲證狀ヲ併有スル者ニハ多額ニ就キ加俸ヲ給ス

第十二條　下士卒ニシテ水雷術教員適任證書ヲ有スル者ニハ一日四錢、一等掌水雷證狀ヲ有スル者ニハ一日三錢、二等掌水雷證狀ヲ有スル者ニハ一日二錢ノ加俸ヲ給ス

水雷術教員適任證書及掌水雷證狀ヲ有スル者ニハ多額ニ就キ加俸ヲ給ス

第十三條　准士官以上ニシテ他職ヲ兼務シタルトキ其ノ航海加俸ハ多額ニ就キ之ヲ給ス

第十四條　准士官以上ニシテ豫備後備退役トナリタルトキハ服役終期ノ日マテ其ノ俸給及加俸ヲ給ス但退職恩給免除恩給ノ支給ヲ受ケサル者ニハ其ノ月末日マテノ俸給ヲ給ス（二十八年三月勅令第二十號ニテ但書追加）

第十五條　准士官以上ニシテ免官廢官トナリ若クハ候補生ニシテ候補生ヲ免セラレ又ハ下士卒ニシテ現役ヲ離レ若クハ歸休兵トナリタルトキハ其ノ當日マテ俸給及加俸ヲ給ス但退職恩給免除恩給ノ支給ヲ受ケサル者若クハ死亡シタル者ニハ其ノ日家目マテノ俸給ヲ給ス（上同）

第十六條　准士官以上ノ待命、休職、停職、豫備、後備、退役者若クハ免官廢官トナリタル者事務引繼殘務調理ノ爲メ特ニ命ヲ承ケ公務ニ從事スルトキハ其ノ間俸給及加俸ハ在職ノ例ニ依ル但海軍高等武官進級條例第十三條ニ依リ進級シタル者本條ノ場合ニ於テハ前官職ニ依リ其ノ俸給及加俸ヲ給ス

第十七條　豫備後備ノ准士官以上及豫備兵、後備兵、歸休兵召集中准士官以上ハ在職ニ準シ下士卒ハ現役ニ準シ俸給及加俸ヲ給ス

第十八條　准士官以上及候補生ニシテ禁錮ノ刑ニ處セラレタルトキハ其ノ間俸給十分ノ五ヲ給ス但停職ニ在ル者ニハ停職中ノ俸給額ヲ給ス

第十九條　下士卒ニシテ傷痍ヲ受ケ疾病ニ罹リ入院若クハ陸地療養ノ者若クハ陸上勤務外宿中又ハ公務出張中傷痍ヲ受ケ疾病ニ罹リ一週日以上欠勤スル者ハ其ノ間俸給十分ノ四ヲ給ス但公務ニ原因シ傷痍ヲ受ケ疾病ニ罹リタルトキ若クハ外國出張中ニ在ルトキハ其ノ全額ヲ給ス

第二十條　下士卒ニシテ依願歸鄉、收禁、拘留、處刑、處罰中若クハ被告事件ノ爲メ護送中ハ其ノ間俸給十分ノ二ヲ給ス但無罪若クハ免訴ニ歸スルトキハ其ノ不給額ヲ追給ス未決中死亡スルトキ亦同シ

下士卒ニシテ戴罪服務中ノ者ハ俸給全額ヲ給ス

第二十一條　下士卒ニシテ擅ニ職ヲ離レ若クハ他方ニ赴キ歸著ノ期ニ後レタル者ハ其ノ間俸給ヲ停止ス但自首又ハ捕縛ニ因リ護送中ノ者ハ前條ノ例ニ依ル

第二十二條　准士官以上候補生及下士卒ニシテ請願休暇、陸地療養、公務ニ原因シ傷痍ヲ受ケ疾病ニ罹リタルトキ若クハ外國出張中ニ在ルトキ除ク）入院、收禁、拘留、處刑、處罰中若クハ被告事件ノ爲メ護送中若クハ擅ニ職役ヲ離レ若クハ地方ニ赴キ歸著ノ期ニ後レタルトキハ其ノ間加俸ヲ停止ス但准士官以上及候補生ニシテ處罰中勤務ニ服スルトキ若クハ下士卒ニシテ戴罪服務中ハ加俸ヲ給ス

第二十三條　准士官以上候補生及下士卒通信不便ノ地ニ勤務中又ハ艦船ノ乘員航海中ハ俸給三分ノ二以内ヲ其ノ家族ニ下渡スコトヲ得（廿七年勅令第三十三號）

第二十四條　准士官以上ノ俸給ハ三百六十五分シ其ノ月ノ日數ニ應シ給ス但太平洋ヲ渡航シ日數ニ一日ノ增減アルトキハ曆ノ日數ニ依ル又二月ハ閏年ト雖二十八日分ヲ給ス

第二十五條　俸給及加俸ハ每月下旬ニ於テ之ヲ給ス

第二十六條　本令施行ノ細則ハ海軍大臣之ヲ定ム

附則

第二十七條　本令ハ明治二十七年四月一日ヨリ施行ス

本令ハ海軍軍人ニシテ日清兩國間開戰以後戰死シタル者又ハ戰地ニ於テ傷痍ヲ受ケ若クハ疾病ニ罹リ爲ニ死亡シタル者ニモ適用ス（二十八年三月勅令第二十號ニテ本條ニ追加アリタリ）

（表ハ總テ略ス）

◎海軍文官航海加俸ノ件

明治二十八年四月勅令第五十一號

朕海軍文官航海加俸ヲ給スル件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

海軍文官軍艦乘員トシテ航行ノ役務ニ服スル軍艦ニ乘組ムトキハ海軍軍人俸給令ニ準據シ高等官四等以上ハ大佐ニ同五等ハ少佐ニ同六等七等ハ大尉ニ同八等九等ハ少尉ニ判任官ハ准士官ニ準シ航海加俸ヲ給ス

◎主理錄事俸給令

明治二十四年七月勅令第百三十二號

朕茲ニ主理錄事俸給ノ件ヲ裁可ス

第一條　主理ハ勅任又ハ奏任トス其年俸ハ別表ニ依ル但奏任主理ニハ別表定ムル所ノ年俸最低額以下ヲ給スルコトヲ得

第二條　錄事ハ判任トス其俸給ハ本年勅令第八十三號判任官俸給令ニ依ル

附則

第三條　本令ハ明治二十四年八月十六日ヨリ施行ス

明治二十年勅令第五十五號ハ本令施行ノ日ヨリ廢止ス（別表略之）

◎海軍編修俸給令

明治二十四年七月勅令第百三十三號

朕茲ニ海軍編修俸給ノ件ヲ裁可ス

海軍編修ノ年俸左ノ如シ

一級	千二百圓
二級	千圓
三級	八百圓
四級	六百圓

附則

本令ハ明治二十四年八月十六日ヨリ施行ス

◎海軍諸學校文官教授俸給

明治二十四年七月勅令第百二十八號

朕茲ニ「陸軍」海軍諸學校文官教授俸給ノ件ヲ裁可ス（二十六年十月勅令第百七十五號ヲ以テ陸軍ニ關スルモノヲ除ク）

「陸軍」海軍諸學校文官教授年俸左ノ如シ

一級	千八百圓
二級	千六百圓
三級	千四百圓
四級	千二百圓
五級	千圓
六級	九百圓
七級	八百圓
八級	七百圓
九級	六百圓

十級　五百圓

附則

本令ハ明治二十四年八月十六日ヨリ施行ス

◎海軍軍法會議構成員タル主理試補年俸

明治二十六年十一月勅令第二百七號

朕海軍軍法會議構成員ヲ命シタル主理試補年俸ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

主理試補ニシテ軍法會議ノ構成員ヲ命セラレタル者ニハ三百圓以下ノ年俸ヲ給スルコトヲ得

◎陸軍歸休兵ニテ文官ノ者ノ召集中俸給支給ノ件

明治二十七年八月勅令第百五十七號

朕陸軍歸休兵ニシテ文官タル者召集中俸給支給ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

陸軍歸休兵ニシテ文官タル者職時若クハ非職ニ際シ又ハ演習ノ爲メ召集セラレタルトキハ其ノ俸給支給方ハ明治二十四年勅令第百六十二號ノ規程ヲ準用ス

◎新原採炭所屬技手官等

明治二十三年三月海軍省達第百十一號

新原採炭所ノ屬技手ハ判任三等以下トス

第四款　裁判所職員官等俸給令

◎判事檢事官等俸給令

明治二十七年二月勅令第十七號

朕判事檢事官等俸給令ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

判事檢事官等俸給令

第一條　判事檢事ノ官等ハ高等官一等乃至八等トシ其ノ年俸ハ別表定ムル所ニ依ル

第二條　判事檢事ノ各職ニ就キ其ノ人員及俸給ヲ限定スルコト左ノ如シ

大審院

長	勅任	定員　一人　一級俸
部長	勅任	定員　三人　四級上俸　但年功ニ依リ三級俸ヲ給スルコトヲ得
判事	奏任	定員　二十五人　三級俸　但年功ニ依リ二級俸ヲ給スルコトヲ得

大審院檢事局

檢事總長	勅任	定員　一人　二級俸
檢事	奏任	定員　四人　三級俸　但年功ニ依リ二級俸ヲ給スルコトヲ得

控訴院

長	勅任	定員　七人　東京大阪　二級俸　其ノ他　三級俸
部長	奏任	定員　十五人　五級俸　但年功ニ依リ四級俸又ハ三級俸ヲ給スルコトヲ得

判事
奏任　定員　八十五人
八級俸　但年功ニ依リ七級俸又ハ六級俸ヲ給スルコトヲ得

控訴院檢事局
檢事長
勅任　定員　七人
東京
大阪　三級俸
其ノ他　四級上俸

檢事
奏任　定員　十七人
八級俸　但年功ニ依リ七級俸又ハ六級俸ヲ給スルコトヲ得

地方裁判所
長
奏任　定員　四十九人
東京
大阪　二級俸　但年功ニ依リ一級俸ヲ給スルコトヲ得
京都　横濱　神戸　長崎　函館　三級俸
新潟　仙臺　名古屋　廣島　熊本
但年功ニ依リ二級俸ヲ給スルコトヲ得
其ノ他　但年功ニ依リ四級俸ヲ給スルコトヲ得

部長
奏任　定員　七十人
九級俸　但年功ニ依リ八級俸又ハ七級俸ヲ給スルコトヲ得

判事
奏任　定員　三百十五人
十二級俸　但年功ニ依リ十一級俸又ハ十級俸ヲ給スルコトヲ得

地方裁判所檢事局
檢事正
奏任　定員　四十九人
東京
大阪　二級俸　但年功ニ依リ一級俸ヲ給スルコトヲ得
京都　横濱　神戸　長崎　函館　四級俸
新潟　仙臺　名古屋　廣島　熊本
但年功ニ依リ三級俸ヲ給スルコトヲ得
其ノ他　六級俸　但年功ニ依リ五級俸ヲ給スルコトヲ得

檢事
奏任　定員　九十五人
十二級俸　但年功ニ依リ十一級俸又ハ十級俸ヲ給スルコトヲ得

區裁判所
判事
奏任　定員　六百五十一人
十二級俸　但年功ニ依リ十一級俸又ハ十級俸ヲ給スルコトヲ得

區裁判所檢事局
檢事
奏任　定員　二百十八
十二級俸　但年功ニ依リ十一級俸又ハ十級俸ヲ給スルコトヲ得

第三條　大審院判事ノ中四人、大審院檢事ノ中一人ヲ限リ特ニ勅任ニ進メ四級俸ヲ給スルコトヲ得

第四條　控訴院檢事ノ中六人ヲ限リ五級俸乃至三級俸ヲ給スルコトヲ得

第五條　東京及大阪ノ地方裁判所長ニシテ一級俸ヲ給セラルヽ者ハ特ニ勅任ニ進ムルコトヲ得

第六條　東京及大阪ノ地方裁判所判事ノ中各一人ハ七級俸ヲ給スルコトヲ得

第七條　東京及大阪ノ地方裁判所檢事ノ中各一人ハ七級俸ヲ給スルコトヲ得

第八條　地方裁判所判事及區裁判所判事ニシテ豫審掛ヲ命セラレタル者ハ百三十人ヲ限リ九級俸又ハ八級俸ヲ給スルコトヲ得

第九條　區裁判所判事ニシテ其ノ裁判所監督ヲ命セラレタル者ハ八十人ヲ限リ九級俸又ハ八級俸ヲ給スルコトヲ得

第十條　地方裁判所及區裁判所檢事ノ中八十人ヲ限リ九級俸又ハ八級俸ヲ給スルコトヲ得

第十一條　豫備判事ハ二十五人、豫備檢事ハ五人ヲ以テ定員トス

豫備判事及豫備檢事ハ年俸四百圓トス

第十二條　司法官試補ハ奏任官ノ待遇トス

司法官試補ニシテ檢事代理ヲ命セラレタル者ハ百五十人ヲ限リ年俸三百圓以下ヲ給スルコトヲ得

第十三條　判事檢事ノ裁判所內ニ於ケル席次ハ官等ニ依リ官等同シキ者ハ俸給ノ多寡ニ依リ俸給同シキ者ハ俸給下賜辭令ノ日附ニ依ル

附則

第十四條　本令施行ノ際別ニ辭令ヲ交付セサル者ハ其ノ職ニ相當スル俸給ヲ給セラルヽモノトス

第十五條　本令ハ明治二十七年四月一日ヨリ施行ス

第十六條　明治二十四年勅令第百三十四號判事檢事俸給令ハ本令施行ノ日ヨリ廢止ス

明治二十五年勅令第九十六號高等官官等俸給令中文武高等官官等表ノ中裁判所ノ欄竝ニ高等文官官等相當俸給表ノ中判事檢事ノ欄ハ本令施行ノ日ヨリ削除ス

（別表略ス）

◎裁判所書記長ノ官等ニ關スル件

明治廿七年二月
勅令第十八號

朕裁判所書記長ノ官等ニ關スル件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

大審院書記長ノ官等ハ高等官五等以下、控訴院書記長ノ官等ハ高等官六等以下トス

◎裁判所書記長書記定員及俸給令

明治二十六年十月
勅令第百七十七號

朕裁判所書記長書記定員及俸給令ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

裁判所書記長書記定員及俸給令

第一條　裁判所書記長ハ奏任トス

裁判所書記ハ判任トス

第二條　裁判所書記長及書記ノ各職ニ付人員及俸給ヲ限定スルコト左ノ如シ

大審院
書記長　一人
年俸千二百圓又ハ千圓
裁判所書記　十一人
一級俸乃至八級俸
大審院檢事局
裁判所書記　三人
一級俸乃至八級俸
控訴院
書記長　七人
東京
大阪　年俸千圓又ハ九百圓
其ノ他年俸八百圓又ハ七百圓
裁判所書記　六十二人
一級俸乃至九級俸
控訴院檢事局
裁判所書記　十八人
一級俸乃至九級俸
地方裁判所
裁判所書記　四百六十七人
二級俸乃至十級俸
地方裁判所檢事局
裁判所書記　百五十八人
二級俸乃至十級俸
區裁判所及區裁判所檢事局
裁判所書記　三千三百一人
六級俸乃至十級俸又ハ月俸十圓以下六圓以上

附則

第三條　本令ハ明治二十六年十一月十日ヨリ施行ス

明治二十四年勅令第百三十五號ハ本令施行ノ日ヨリ廢止ス

◎行政裁判所長官竝評定官年俸

明治二十四年七月勅令第九十八號

朕茲ニ行政裁判所長官竝評定官年俸改正ノ件ヲ裁可ス

行政裁判所長官評定官年俸左ノ通改ム

長官　四千圓

評定官

勅任

一級	三千圓
二級	二千五百圓
三級	二千二百圓
奏任	
四級	二千圓
五級	一千八百圓
六級	一千六百圓
七級	一千四百圓
	一千二百圓

附則

本令ハ明治二十四年八月十六日ヨリ施行ス

第五款　學校職員官等俸給令

◎帝國大學教官俸給令

明治二十六年八月勅令第八十四號

朕帝國大學教官俸給令ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

帝國大學教官俸給令

第一條　各分科大學教授助教授ノ俸給ハ分チテ本俸及職務俸トス

第二條　教授ノ本俸ハ第一表助教授ノ本俸ハ第二表ニ依ル

教授ニシテ學術著明ノ効績アリ五年以上一級俸ヲ受ル者ハ特ニ一級俸ノ三分ノ一以内ヲ增給スルコトヲ得

但本令施行ノ前年俸二千四百圓以上ヲ受ケタル者ハ其年數ヲ通算スルヿヲ得

第三條　各講座ニ職務俸ヲ附ス

各講座ニ對スル職務俸ハ學科ノ種類職務ノ繁閑ニ從ヒ年俸四百圓以上千圓以下トシ文部大臣之ヲ定ム

第四條　教授ハ其擔任スル所ノ講座ニ對スル職務俸ヲ受ク

助教授ニシテ講座ヲ擔任スル者ハ其講座ニ對スル職務俸ノ半額ヲ受ク

第五條　助教授ハ學科ノ種類職務ノ繁閑ニ從ヒ年額貳百圓以上五百圓以下ノ職務俸ヲ受ク

第六條　教授ニシテ二箇ノ講座ヲ擔任スル場合ニ於テハ其兼擔スル所ノ講座ニ對スル職務俸ノ半額ヲ加給ス

第七條　講師ヲ囑託シテ講座ヲ擔任セシムルトキハ其講座ニ對スル職務俸ノ内ヨリ年額六百圓以下ノ手當ヲ給ス

第八條　一時他ノ公務ニ從事シ若クハ特ニ學術上ノ必要ニヨリ文部大臣ノ指揮ヲ受ケ一時講座ヲ擔任セス又ハ職務ヲ離ルヽ者ハ二年以内ヲ限リ仍本俸ヲ給スルヿヲ得

第九條　講義又ハ職務ヲ欠クヿ三週日以上ニ及フモノハ其日ヨリ職務俸ヲ給セス

第十條　本令ノ施行ニ關スル細則ハ文部大臣之ヲ定ム

第十一條　本令ハ明治二十六年九月十一日ヨリ施行ス

（表ハ略ス）

◎帝國大學文部省直轄諸學校及東京圖書館高等官官等俸給令

明治二十六年八月勅令第八十八號

朕帝國大學文部省直轄諸學校及東京圖書館高等官官等俸給令ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

帝國大學文部省直轄諸學校及東京圖書館高等官官等俸給令

第一條　帝國大學各分科大學教授ハ高等官二等以下助教授ハ高等官六等以下トシ文部省直轄諸學校教官ハ高等官三等以下トス

文部省直轄諸學校教官ニシテ高等官三等ニ叙セラルル者ハ定員ノ七分ノ一以内四等ニ叙セラルヽ者ハ四分ノ一以内トス

第二條　帝國大學總長ノ官等ハ高等官一等又ハ二等トシ文部省直轄諸學校長ハ東京盲啞學校長ヲ除クノ外三等以下六等以上トシ帝國大學書記官東京圖書館長及東京盲啞學校長ハ四等以下七等以上トス

文部省直轄諸學校專任ノ舍監ハ高等官七等以下九等以上トシ兼任ノ舍監ハ其ノ本官ノ官等ニ從フ

第三條　帝國大學總長ノ年俸ハ三千五百圓文部省直轄諸學校長ノ年俸ハ二千圓トス但東京盲啞學校長ノ年俸ハ七百圓トス

第四條　東京圖書館長及帝國大學書記官ノ年俸ハ千二百圓トス

第五條　文部省直轄諸學校教官ノ年俸ハ別表ニ依ル

第六條　高等師範學校舍監ノ年俸ハ五百圓女子高等師範學校舍監ノ年俸ハ二百五十圓トス

第七條　文部省直轄諸學校教官ハ其授業ノ時間及學科ノ難易輕重ニ依リ別表ニ掲クル最低額以下ノ年俸ヲ給スルコトアルヘシ

第八條　文部省直轄諸學校教官ニシテ一校若クハ數校ノ教官ヲ兼任スル者ニハ本官並兼官ニ於クル時間及學科ノ難易輕重ニ應シ其ノ本官ノ俸額ヲ分割シテ各學校ヨリ支給スルコトヲ得

第九條　文部省直轄諸學校官制第十五條ニ依リ其學科ノ授業ヲ擔任スル囑託講師ニハ教官俸給額ノ内ヨリ相當ノ手當ヲ給スルコトヲ得

第十條　帝國大學教官ノ俸給ハ別ニ定ムル所ニ依ル

附　則

第十一條　本令ハ明治廿六年九月十一日ヨリ施行ス

第十二條　明治二十四年勅令第百三十九號明治二十四年勅令第二百四號明治二十六年勅令第十號ハ本令施行ノ日ヨリ廢止ス

明治二十五年勅令第九十六號高等官官等俸給令中文武高等官官等表ノ中帝國大學文部省直轄諸學校及東京圖書館ノ欄並高等文官官等相當俸給表ノ中帝國大學教授ノ欄帝國大學助教授ノ欄文部省直轄諸學校教授ノ官名及文部省諸學校教諭ノ欄ハ本令施行ノ日ヨリ削除ス

（別表略之）

◎帝國大學各分科大學講座ニ屬スル職務及手當ノ件

明治二十六年九月勅令第九十四號

朕帝國大學各分科大學講座ニ屬スル職務分擔ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

帝國大學各分科大學ニ於テ臨時ノ必要ニ依リ教授助教授若クハ講師ヲシテ一講座ニ屬スル職務ヲ分擔セシムル場合ニ於テ教授助教授ニ分給スヘキ俸給及講師ニ分給スヘキ手當ハ合シテ其ノ講座ニ對スル職務俸ノ年額ヲ越ユルコトヲ得ス

附　則

本令ハ明治二十六年九月十一日ヨリ施行ス

◎札幌農學校高等官俸給令

明治二十四年七月勅令第百四十三號

朕茲ニ札幌農學校高等官俸給ノ件ヲ裁可ス

第一條　學校長　二千圓
　　舍監　五百圓

第二條　教授ノ年俸ニ關シテハ本年勅令第百三十九號帝國大學文部省直轄諸學校及圖書館高等官俸給令第二號表中文部省直轄諸學校教授年俸表並第三條第四條ヲ適用ス

附　則

第三條　本令ハ明治二十四年八月十六日ヨリ施行ス

◎札幌農學校教授ノ官等俸給ノ件

明治二十六年九月勅令第九十五號

朕札幌農學校教授ノ官等俸給ニ關スル件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

札幌農學校教授ノ官等俸給ハ文部省直轄諸學校教授ノ例ニ依ル

附　則

本令ハ明治二十六年九月十一日ヨリ施行ス

◎札幌農學校教官俸給減額方

明治二十五年三月勅令第二十號

朕茲ニ札幌農學校教官俸給ノ件ヲ裁可ス

札幌農學校教官ノ俸給ハ其授業ノ時間及學科ノ輕重難易等ニ依リ年俸等級相當ノ額ヲ減給スルコトヲ得

◎府縣立師範學校長任命及俸給令

明治二十四年八月勅令第百七十二號

朕茲ニ府縣立師範學校長任命及俸給令ヲ裁可ス

府縣立師範學校長任命及俸給令

第一條　府縣立師範學校長ハ奏任トス

第二條　府縣立師範學校長ノ年俸ハ別表ニ依リ之ヲ支給ス

第三條　本令ニ規定スルモノヽ外總テ本年勅令第八十二號高等官任命及俸給令ニ依ル

附　則

第四條　本令ハ明治二十五年四月一日ヨリ施行ス

別表

一級	二千百圓	二級	二千圓	三級	九百圓	四級	八百圓	五級	七百圓	六級	六百圓

◎尋常師範學校教諭助教諭訓導及書記俸額

明治二十五年四月文部省令第六號

明治二十四年（十一月）勅令第二百十七號尋常師範學校官制第九條ニ基キ尋常師範學校教諭助教諭訓導及書記ノ俸額ヲ定ムルコト左ノ如シ但明治二十五年度ノ經費豫算内ニ於テ支辨スヘカラサルモノアルトキハ同年度中便宜俸給等級相當ノ額ヲ減給スヘシ

尋常師範學校教諭助教諭訓導及書記ノ俸額

第一條　尋常師範學校教諭ノ俸給ハ其月俸ヲ別テ五級トシ一號表ニ依リ支給スヘシ但奏任文官ト同一ノ待遇ヲ受クル者ハ該表ノ範圍ニ拘ラス特ニ百圓マテ增俸スルコトヲ得

第二條　尋常師範學校助教諭訓導及書記ノ俸給ハ其月俸ヲ別テ五級トシ二號表ニ依リ支給スヘシ

第三條　尋常師範學校教諭助教諭及訓導ノ俸給ハ其授業ノ時間及學科ノ輕重難易等ニ依リ一號表及二號表ニ掲クル俸給等級相當ノ額ヲ減給スルコトヲ得

（表ハ之ヲ略ス）

◎會計ヲ異ニスル學校ノ教官ヲ兼ヌル者俸給支給方

明治二十三年九月勅令第二百五號

朕會計ヲ異ニスル學校ノ教官ヲ兼ヌル者俸給支給方ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

教官又ハ教官ニアラサル官吏ニシテ其學校又ハ部局ト會計ヲ異ニセル學校ノ教官ヲ兼ヌル者ハ兼官相當ノ俸給三分一以内ヲ增給スルコトヲ得

◎遞信省所管學校職員俸給令

明治二十四年七月勅令第百五十六號

第一條　商船學校長ノ年俸ハ千八百圓トス

第二條　商船學校教授東京郵便電信學校教授ノ年俸ハ別表ニ依ル（二十六年十月勅令第百七十九號ニテ改正）

附　則

第三條　本令ハ明治二十四年八月十六日ヨリ施行ス

第六款　警察官司獄官守衛官等俸給令

◎警視廳高等官俸給令

明治二十六年十月勅令第百八十號

朕警視廳高等官俸給令ノ改正ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

警視廳高等官俸給令

第一條　警視廳高等官ノ年俸左ノ如シ

警視總監	四千圓
警視　第一部長ニ補スル者	二千二百圓
警視　第二部長ニ補スル者	千八百圓
警視　第三部長ニ補スル者	千五百圓
警視　官房第一課長ニ補スル者	千二百圓
警視　官房第二課長ニ補スル者	千二百圓
警視	九百圓
警察署長ニ補スル者	八百圓
消防司令長	七百圓
警察醫長	千五百圓
典獄	千圓
	千圓

第二條　警察署長ニ補スル警視ノ俸給區別ハ內務大臣其ノ警察署ニ就テ之ヲ指定スヘシ

附則

第三條　本令ハ明治二十六年十一月十日ヨリ施行ス

警視廳北海道廳府縣及集治監判任官俸給額ニ關スル件

明治二十六年十月勅令第百八十二號

朕警視廳北海道廳府縣及集治監判任官俸給額ニ關スル件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

警視廳、北海道廳、府縣（島廳郡區ヲ包含ス）及集治監判任官ニハ判任官俸給令中別表ニ掲クル最低額以下六圓マテノ月俸ヲ給スルコトアルヘシ

附則

本令ハ明治二十六年十一月十日ヨリ施行ス

明治二十四年勅令第百六十號ハ本令施行ノ日ヨリ廢止ス

集治監假留監高等官俸給

明治二十四年七月勅令第百十五號

朕茲ニ集治監假留監高等官俸給ノ件ヲ裁可ス

集治監假留監高等官ノ年俸左ノ通定ム

東京集治監典獄	千四百圓
三池集治監典獄	千四百圓
宮城集治監典獄	千圓
兵庫假留監典獄	千圓
北海道集治監典獄	千八百圓
北海道集治監分監長	八百圓

附則

本令ハ明治二十四年八月十六日ヨリ施行ス

集治監假留監看守人員及俸給

明治二十三年十月勅令第二百二十八號

朕集治監假留監看守人員及俸給ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

集治監假留監看守ノ人員及俸給ヲ定ムルコト左ノ如シ

一　看守ノ人員ハ在監人五百名ニ付七十五名トス但三池集治監及北海道ニアル各集治監ニハ此定員ノ外五十名以下ノ看守ヲ增置スルコトヲ得

二　在監人五百名ヲ超ユルトキハ百名ヲ增ス每ニ看守十名ヲ加ヘ五百名ニ滿タサルトキハ百名ヲ減スル每ニ看守十名ヲ減ス

三　看守員人員ノ增減ヲ行フハ在監人ノ員數ニ百名ノ差ヲ生シタルトキニ於テスヘシ

四　看守俸給ハ月俸拾圓以下六圓以上トス但勤續滿九年以上ノ者ハ拾二圓滿十二年以上ノ者ハ拾五圓ヲ給スルコトヲ得北海道集治監ニ限リ勤續滿五年以上ニシテ勤勞拔群ナルモノニハ現俸四分ノ一以內ノ加俸ヲ給スルコトヲ得（二十四年勅令第百十六號ヲ以テ改正）

五　在監人ノ減少ニ由リ過員トナリタル看守ハ休職ヲ命シ現俸ノ三分一ヲ給スルコトヲ得但休職ハ一年ヲ期トス期滿ツレハ其職ヲ免ス

巡査俸給令

明治二十四年八月勅令第百六十九號

朕茲ニ巡査俸給ノ件ヲ裁可ス

巡査俸給令

第一條　巡査ノ月俸ハ左ノ如シ

一級	十圓
二級	九圓
三級	八圓

第二條　巡査勤續滿九年以上ノ者ハ月俸十二圓滿十二年以上ノ者ハ月俸十五圓ヲ給スルコトヲ得

第三條　巡査教習所ニ於テ職務教習中ノ者ニ限リ月俸六圓ヲ給ス但地方ノ便宜ニ依リ其半額迄ハ之ヲ減スルコトヲ得

第四條　本令ハ明治二十五年四月一日ヨリ施行ス

看守俸給ニ關スル件

明治二十六年十月勅令第百十五號

朕看守俸給ニ關スル件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

集治監看守ノ俸給ハ最下限ヲ月俸八圓トス但教習中ノ者ニハ月俸六圓ヲ給ス

本令ハ廳府縣看守ニモ適用ス

附則

本令ハ明治二十七年四月一日ヨリ施行ス

廳府縣看守俸給ノ件

明治二十三年十月勅令第二百二十九號

朕廳府縣看守俸給ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

勅令第二百二十八號集治監假留監看守人員及俸給ノ件中俸給及休職ニ關ル規定ハ廳府縣看守ニモ適用ス

女監取締及押丁ノ人員並俸給

明治二十七年一月內務省訓令第一號

女監取締及押丁ノ人員並俸給左ノ如ク改ム但明治廿八年一月一日ヨリ施行ス

一　女監取締ハ每監獄拘禁婦女二十五人以下ハ二人ヲ置キ以上ハ拘禁婦女二十五人ヲ增ス每ニ女監取締人一人ヲ加フ

一　監獄內ニアルモ拘置女監ト囚人女監ノ位地相隔離スル所ニ在テハ前項定員ノ外女監取締人一人ヲ增置スルコトヲ得又稀ニ婦女ヲ拘禁スル小監獄ニ在テハ相當ノ婦女ヲ女監取締ノ豫備員ニ定メ置キ必要アル每ニ出勤セシムルコトヲ得

一　押丁ハ拘禁男子五百人ニ付十人ヲ置クコトヲ得以上ハ拘禁男子百人ヲ增ス每ニ押丁一人ヲ加ヘ以下ハ拘禁男子百人ヲ減スル每ニ押丁一人ヲ減ス

一　女監取締人員ノ增減ハ拘禁婦女ニ二十五人ノ差押丁ノ增減ハ拘禁男子ニ百人ノ差ヲ生シタルトキニ於テ之ヲ行フ

一　女監取締ノ俸給ハ四圓以上拾五圓以下トシ押丁ノ俸給ハ四圓以上八圓以下トシテ總テ日給トス

◎警視廳警部消防士消防機關士監獄書記看守長俸給ノ件

明治二十六年三月勅令第十五號

朕警視廳警部消防士消防機關士監獄書記看守長俸給ノ件ヲ裁可ス

第一條　警視廳警部消防士消防機關士監獄書記看守長ノ俸給ハ明治二十四年勅令第八十三號判任官俸給令ニ依ル

第二條　現在ノ職員ハ別ニ辭令ヲ用ヰス現俸給相當ノ俸給ヲ給スルモノトス但月俸七拾五圓ヲ受ケ判任官俸給令第四條ノ期限ニ滿タサル者ハ一級俸ヲ給スルモノトス

第三條　本令ハ明治二十六年四月一日ヨリ施行ス

明治二十四年勅令第三十六號ハ本令施行ノ日ヨリ廢止ス

◎警察署長俸給區別

明治二十六年十一月内務省告示第五十號

明治二十六年十月勅令百八十號警視廳高等官俸給令第二條ニ依リ警察署長俸給ノ區別ニ關シ警察署ヲ指定スルコト左ノ如シ

麹町警察署　神田警察署　日本橋警察署
京橋警察署　芝警察署　下谷警察署
淺草警察署　本所警察署
右警察署長年俸九百圓
麻布警察署　牛込警察署　本郷警察署
深川警察署　品川警察署　八王子警察署
右警察署長年俸八百圓
赤阪警察署　四谷警察署　小石川警察署
新宿警察署　板橋警察署　千住警察署
小松川警察署　府中警察署　青梅警察署
水上警察署
右警察署長年俸七百圓

◎朝鮮國在勤警部任用及支給規則

明治二十五年二月勅令第十四號

第一條　朝鮮國在勤警部及巡査ハ外務大臣之ヲ任命ス

第二條　朝鮮國在勤警部ノ任用ハ一般判任官ノ任用法ニ從フ

朝鮮國在勤巡査ノ任用法ハ外務大臣之ヲ定ム

第三條　朝鮮國在勤警部及巡査ハ同國駐劄帝國公使又ハ同國各地駐在帝國領事又ハ其代理者ノ指揮監督ニ屬ス

第四條　朝鮮國在勤警部及巡査ハ引續三箇年間勤務スヘキモノトス

傷痍若クハ疾病ニシテ職務ニ從事スルコト能ハサルモノト認ムルトキハ外務大臣ハ前項ノ期限ニ拘ハラス其辭職ヲ許可スルコトヲ得

第五條　朝鮮國在勤警部巡査三箇年以上勤續シタルトキハ外務大臣ハ公務差支ナキ場合ニ限リ本人ノ願ニ依リ往復日數ヲ除キ警部ハ三箇月巡査ハ二箇月以内賜暇歸朝ヲ許可スルコトヲ得

第六條　朝鮮國在勤巡査ニシテ其職務執行ニ關スル規則又ハ上官ノ命令ニ違背シ又ハ職務上怠慢アルトキハ公使又ハ領事ニ於テ其情狀ヲ審案シ月俸百分ノ一以上一箇月分以下ノ罰俸ヲ科ス但犯狀最モ輕キ者ハ譴責ニ止ム

犯狀重クシテ公使又ハ領事ニ於テ其職ヲ免スルヲ相當ト認メタルトキハ其情狀ヲ外務大臣ニ具申スヘシ

第七條　前條ニ依リ罰俸ヲ科シタルトキハ月俸三分ノ一以内ノ額ヲ毎月俸給ヨリ控除シテ完納セシム

罰俸完納前ニ於テ本人其職ヲ免セラレ又ハ死亡シタルトキハ之ヲ追徵スルコトナシ

第八條　朝鮮國在勤警部ノ月俸ハ明治二十四年勅令第八十三號判任官俸給令ニ依ル

朝鮮國在勤巡査ノ月俸ハ八圓乃至十五圓トス但俸給支給方ハ前項ニ同シ

第九條　朝鮮國在勤警部及巡査ニハ月俸ノ外任地着翌日ヨリ任地出發日マテ在勤月手當ヲ給ス其金額左ノ如シ

警部　一箇月貳拾圓乃至參拾圓
巡査　一箇月拾五圓乃至貳拾圓

第十條　臨時ノ須要ニ依リ朝鮮國在勤巡査ニ代用スル傭員ニハ月俸拾圓以内ヲ給シ在勤手當ヲ給セス

第十一條　朝鮮國在勤警部及巡査ノ旅費ハ明治二十年閣令第十二號外國旅費規則ニ依ル但巡査ハ總テ傭員ノ例ニ倣フ

第十二條　旅費ハ警部及巡査ノ赴任、官用歸朝、賜暇、歸朝、任所替其他官務旅行ノトキニ限リ給スルモノトス

第十三條　朝鮮國在勤巡査又ハ其遺族ニハ左ノ諸項ニ依テ給助ヲ爲ス

第一　勤續四年ニシテ退職スル者ハ一時金貳拾五圓ヲ給ス四年以上九年マテハ一年毎ニ金拾圓ヲ增給ス勤續十年ニシテ退職ノ者ニハ一時金百圓ヲ給シ十年以上ハ一年毎ニ金拾五圓ヲ增給ス同上ノ年限間勤續シテ死亡シタルトキハ各同上ノ金額ヲ其遺族ニ給ス

第二　職務ノ爲メ負傷又ハ疾病ニ罹ル者ハ傷痍又ハ病症ノ輕重ニ依リ適宜療治料ヲ給ス

第三　職務ノ爲メ負傷シ終身不具トナリタル者ハ一時金百圓以上百五十圓以下ニ於テ適宜之ヲ給ス

第四　職務ノ爲メ死亡シタルトキハ第一項賜金ノ外一時金貳百圓ヲ其遺族ニ給ス

左ニ揭クル事項ノ一ニ當ルトキハ給助ヲ爲サス

第一　他ノ報酬ヲ受クヘキ官職ニ轉シタルトキ

第二　懲罰ニ依リ免職セラレタルトキ

第十四條　明治十九年外務省令第二號朝鮮國在勤巡査給與規則ハ此規則施行ノ日ヨリ廢止ス

◎貴族院及衆議院守衛待遇ノ件

明治二十四年十一月勅令第二百八號

朕貴族院及衆議院守衛待遇ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

貴族院及衆議院ノ守衛ハ判任官ヲ以テ待遇ス

第七款　神官官等俸給

神官職員俸給令

明治十九年一月勅令第七十一號

朕茲ニ神宮職員官等改正ノ件ヲ裁可ス（二十四年勅令第八十二號ヲ以テ官等ノ項ヲ削除ス）

月俸	勅任		奏任		判任
	祭主ハ皇族ヲ以テ之ニ充ツ				
八拾圓	三拾圓五	二等	三等	五等	五等
	貳拾圓	三等	五等	六等	四等
	拾五圓	五等	六等	四等	五等
	拾貳圓	六等	四等	五等	五等
	八圓	四等	五等	五等	五等
	七圓	五等	五等	五等	五等
		宮司	權宮司	祠官	權祠官
		權祠官	主典	宮掌	

戶長身分取扱及俸給支給方

明治十九年十月內務省令第二十一號判任官等三等以下ニ準シ其俸給ハ道廳長官府縣知事適宜ニ之ヲ定ムヘシ

戶長身分取扱方ハ勅令第三十六號判任官等三等以下ニ準シ其俸給ハ道廳長官府縣知事適宜ニ之ヲ定ムヘシ

町村制ヲ施行セサル島嶼ノ戶長以下給料旅費並浦役場費ノ件

明治二十二年一月勅令第二號

朕町村制ヲ施行セサル島嶼ノ戶長以下給料旅費並浦役場費ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

町村制ヲ施行セサル島嶼ハ別ニ勅令ヲ以テ其制ヲ定ムル迄本廳府縣ニ於テ町村制施行ノ後ニ要スル戶長以下給料旅費並浦役場費ハ其町村ノ負擔トス但東京府管轄小笠原島伊豆七島、從前ノ通園廳ヨリ支給ス

全額ヲ其際支給スルモノトス

高等官官等俸給令第十七條ニ依リ殘務調理ヲ命セラレタルモノ其調理翌月以降ニ渉リ全月分ヲ支給スルモノハ第一條ノ支給定日ニ依ル但最後ノ月ハ日割ヲ以テ調理結了ノ日迄ヲ其際支給ス

第三條　轉任者ノ俸給ハ其發令當日迄ヲ甲廳ノ負擔トシ翌日以降ノ分ハ乙廳ニ於テ之ヲ支給スルモノトス

第四條　他廳ヘ轉任シタルモノハ第一條ノ支給日ニ拘ハラス日割計算ヲ以テ發令ノ當日迄ニ係ル俸給ヲ其際支給ス

第五條　他廳ヘ轉任ノ際俸給過渡アルトキハ前任廳ニ於テ其際之ヲ追徵スヘシ

第六條　俸給支給定日後他廳ヨリ轉任シ來リタルトキハ後任廳ニ於テ其ノ月ノ殘日數ニ對スル俸給ヲ其際支給スルモノトス

第七條　高等官官等俸給令第十八條ニ依リ減給ノ者非職廢官退官退職及死亡ノ時ハ其減給ニ係ル當月分ノ全額ヲ支給スルモノトス

第八條　傷痍忌引若クハ特旨賜暇ノ場合ハ病氣若クハ私事故障ト連續スルモ減俸トナルヘキ闕勤日數中ニ算入セス又病氣ト私事故障ト連續スル場合ニ於テハ之ヲ通算セス

第九條　俸給ヲ支給スルニ當リ計算上厘位未滿ノ端數ヲ生スルトキハ之ヲ切捨ルモノトス

伊豆七島地役人及名主待遇ノ件

明治二十八年五月勅令第六十二號

朕伊豆七島地役人及名主待遇ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

東京府管下大島三宅島八丈島御藏島神津島新島地役人及利島名主ハ判任官ノ待遇トス

第八款　支給規則及雜則

文官俸給支給細則

明治二十五年十二月大藏省令第十一號

文官俸給支給細則左ノ通リ相定メ明治二十六年一月一日ヨリ施行ス但明治二十三年當省令第十號ハ本令施行ノ日ヨリ廢止ス

文官俸給支給細則

第一條　高等文官及判任文官ノ俸給ハ各廳左ノ日割定日ニ於テ支給スルモノトス但休日ニ當ルトキハ順延トス

毎月二十一日　外務省及其所管經費ニ屬スル官廳　內務省及其所管經費ニ屬スル官廳　大藏省及其所管經費ニ屬スル官廳

毎月二十二日　陸軍省及其所管經費ニ屬スル官廳　海軍省及其所管經費ニ屬スル官廳　司法省及其所管經費ニ屬スル官廳

毎月二十三日　文部省及其所管經費ニ屬スル官廳　農商務省及其所管經費ニ屬スル官廳　逓信省及其所管經費ニ屬スル官廳

第二條　非職廢官退官退職及死亡ノ時ハ當月分ノ俸給日割計算ノ法ハ其月ノ現日數ニ依ルヘシ

官制ノ改正ニ依リ俸給支給方

明治二十四年八月勅令第百六十五號

朕官制ノ改正ニ依ル俸給支給方ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

官制又ハ俸給令ノ改正ニ依リ新ニ給スヘキ俸給ハ新令施行ノ當日ヨリ計算ス

雇員其他俸給及諸手當支給方

明治二十六年二月勅令第七號

朕傭員俸給及傭員其他ニ給スル諸手當支給方ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

傭員俸給及傭員其他ニ給スル諸手當ニシテ月額ヲ以テ支給スルモノハ每月下旬ニ之ヲ支給スルコトヲ得

年額及月額ノ手當金支給方

明治二十二年一月大藏省令第一號

年額又ハ月額ノ手當金ハ每月（年額ノモノハ之ヲ十二分シ）末日（休日ニ當ル時ハ繰上ク）之ヲ支給シ任轉免等ノ場合ハ其月ノ現日數ニ由リ日割ヲ以テ計算ス

但明治十六年當省達第五十七號ハ廢止ス

文武官及雇員ノ俸給中ヨリ製艦費ノ補足ニ充テシムルノ件

明治二十六年二月勅令第五號

朕國家軍防ノ必要ヲ認メ文武官及雇員ノ俸給中ヨリ製艦費ノ補足ニ充テ

シムルノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

第一條　文武官及雇員ノ俸給ハ本令施行ノ日ヨリ六箇年間其ノ十分一ヲ國庫ニ納付セシム但シ納付ノ手續ハ大藏大臣ノ定ムル所ニ依ル

第二條　左ニ掲クル者ハ前條ヲ適用セス

一　外國在勤ノ命ヲ受ケタル公使公使館參事官同書記官交際官試補公使館書記生領事領事館書記生外交事務官貿易事務官公使館附武官並雇員

二　陸海軍屯田兵憲兵ノ下士卒並巡査看守

三　國庫ヨリ俸給ヲ受ケサル官吏並准官吏

四　雜給ヲ以テ支辨スル雇員

第三條　本令ハ明治二十六年四月一日ヨリ施行ス

第二節　手當

第一款　死傷手當

◎技術工藝者就業上死傷手當內規

明治十二年二月太政官達第四號

各廳技術工藝ノ者就業上死傷ノ節手當內規別紙ノ通相定メ候自今右ニ照準施行可致此旨相達候事但一般官吏ト雖技術上死傷ノ節ハ本文ニ準シ候儀ト可心得事

各廳技術工藝ノ者就業上死傷手當內規

第一條　凡ソ技術工藝ノ者就業上死傷ニ罹ルトキハ其原由幷傷痍ヲ檢察シ醫員ノ診斷書ヲ審査シ表面ニ照シテ手當ヲ給スヘシ

第二條　傷痍ノ輕重ヲ分ツテ左ノ五等トス

一等　重傷死ニ至ル者

二等　重傷死ニ至ラスト雖終身不具トナリ自用ヲ辨スル事能ハサル者

三等　自用ヲ辨シ得ルト雖終身事業ヲ營ムヿ能ハサル者

四等　事業ヲ營ムヿヲ得ルト雖身躰ヲ毀傷シ舊ニ復スルヿヲ得サル者

五等　身躰ヲ毀傷スト雖一時治療ヲ施シ止タ其瘢痕ヲ存スルマテニテ其運用全ク舊ニ復スル者

第三條　手當金ヲ分テ療養埋葬及扶助料ノ三種トス一等傷ニ罹ル者ハ療養料埋葬料ヲ給シ遺族ニ扶助料ヲ給ス尤遺族ハ死者ニヨリ生計ヲ營ミ來リタルモノ（一戸ノ內ニアルモノ）ニ限ルヘシ但シ即死シテ治療ヲ施サヽル者療治料ヲ給セス且療養中ニ他ノ病ノ爲メニ死スル者ハ扶助料ヲ給セス

埋葬料ハ親戚ナキトキハ同僚又ハ其所在戶長ニ下付シテ埋葬セシム

二等三等四等ノ傷痍ニ罹ル者ハ療治料扶助料ヲ給ス

五等傷ニ罹ル者ハ療養料ノミヲ給ス但身躰ヲ毀傷シ舊ニ復スル見込アリト雖治療數月ニ渉リ職務ヲ免スル者ハ四等傷ニ準シ扶助料ヲ給ス尤モ療養料ハ免官翌日ヨリ之ヲ給セス

各廳技術工藝者就業上死傷手當內規表

給與	事項	奏任	判任	等外
一等	埋葬料	金百圓	金五拾圓	金二拾五圓
	遺族扶助料	金三百五拾圓	金百七拾五圓	金九拾圓
二等	扶助料	金三百五拾圓	金百七拾五圓	金九拾圓
三等	仝上	金三百五拾圓	金百七拾五圓	金九拾圓
四等	仝上	金百貳拾五圓	金百貳拾五圓	金六拾五圓
五等				

一　右之金高ハ表面ノ額最上限トシ實際ノ情狀ヲ酌量シテ支給ス

一　療養料ハ總テ現費トス

一　雇名義ヲ以テ等內外官吏ノ事務ヲ取扱フ者ハ月俸三百五拾圓以上奏任ニ三百五拾圓未滿三拾圓以上ハ判任ニ三拾圓未滿ハ等外ニ準シ日給ノ者ハ其給三十日分ヲ積算シ月俸ニ見做シ本文ノ割合ヲ以テ給ス

◎官吏准官吏公務上傳染病豫防等ニ從事シ感染死亡シタル者ヘ手當金給與方

明治十九年七月閣令第二十三號

官吏准官吏公務ニ依リ傳染病豫防救治ニ從事シ爲メニ感染シ又ハ死亡シタルトキハ左ノ區別ニ從ヒ手當金ヲ給ス

一　手當金ヲ分チ吊祭料、救治料、療治料ノ三種トス

一　救助料ハ感染者又ハ死亡シタル者ノ遺族ニ之ヲ給ス

一　療治料ハ感染者治療看護ノ雜費トシテ之ヲ給ス

一　吊祭料ハ年俸十二分ノ一若クハ月俸一箇月分若クハ日給三十日分ヲ給ス但官ヨリ埋葬スル者ハ之ヲ給セス

救助料ヲ分テ二等トス

一等　俸給五箇月分日給百五十日分

二等　俸給三箇月分日給九十日分

一　感染者死亡シタルトキハ一等救助料ヲ給シ死亡セサルトキハ二等救助料ヲ給ス

一　療治料ハ一日壹圓ヲ給ス但官ヨリ治療スル者ハ之ヲ給セス

◎流行病豫防救濟ニ傭使スル醫師以下感染及死亡手當

明治十年十二月太政官達第八十九號

流行病豫防救治ノ爲メ諸官廳ニ於テ該事ニ服從セシム

ル屬ノ醫師檢疫委員幷ニ地方公立病院醫師其他從事ノ者該病毒ニ感染及死亡候節ハ本年ヨリ左ノ規則ニ照準シ處分可致此旨相達候事但本文手當金ノ儀省使ハ經費金ノ内府縣ハ豫備金ノ内ヲ以テ繰替仕拂置追テ大藏省ヘ受取方可申出事

流行病豫防救濟ニ傭使スル醫師以下感染及死亡手當規則

第一條　凡ソ流行病アル節諸官廳ニ於テ豫防救治ノ方法ヲ施行スル爲メ傭使スル醫師檢疫委員（官員ニテ委員トナル者ハ此限ニアラス）看護人幷ニ地方公立病院醫師其他人夫等該病毒ニ感染及死亡スルモノハ此規則ニ照ラシ手當金ヲ給スヘシ

第二條　手當金ヲ分ツテ療養埋葬及ヒ遺族扶助ノ三種トナシ病者ハ療治料ヲ給シ死者ハ埋葬料及ヒ扶助料ヲ給スヘシ

第三條　手當金ノ差等ハ其月給ノ多寡ニ因リテ之ヲ定ム則貳百圓以上百五拾圓以上百圓以上五拾圓以上拾圓以上拾圓未滿トナシ等級ニ應シテ支給スヘシ但日給ノモノハ一ケ月ヲ平均三十日ト看做シ該日數ヲ乘シテ本條月給ノ等差ニ準スヘシ

第四條　療治料ハ自宅ニ於テ治療スルモノニ一日ニ付壹圓ヲ給シ其官公立病院ニ入ルモノハ適宜官費ヲ以テ支給スヘシ

第五條　遺族扶助料ハ戸主ニシテ家族ナキ者及戸主ニアラスシテ妻子ナキ者ハ給セス尤死者戸主ニアラス且妻子ナキ者ト雖モ其死者ニ依リ活計ヲ營ミ來タル遺族（一戸籍内ニアルモノ）アレハ之ヲ給スヘシ

第六條　埋葬料ヲ給スルニ獨身ニシテ且親戚ナキ者ハ病院或ハ同僚或ハ區戸長ニ下付スヘシ

第七條　流行病ノ節雇入ル、醫師ノ月給ハ明治八年第四十九號達ノ通タルヘシト雖モ現ニ拾五圓以上ノ給料ヲ以使府縣公立病院ニ從事スル醫師ヲ臨時該流行病ノ治療ニ任スルモノ幷ニ虎列拉病ノ節拾五圓以上ヲ以テ雇タル檢疫委員ハ此規則ノ表面ニシテ給スヘシ

（手當表畧之）

◉一般人民ニシテ巡査同樣ノ働ヲナシ死傷セシ者吊祭扶助料療治料支給方

明治十五年十二月太政官達第六十七號

一般人民ニシテ巡査同樣ノ働ヲナシ死傷セシ者吊祭扶助療治料支給方左ノ通相定候條此旨相達候事

吊祭扶助療治料

一　吊祭料

重傷死ニ至ル者ヘ金三拾圓ヲ給ス親族故酉ナキモノハ戸長役場ニ付シ便宜處分セシム

一　遺族扶助料

父母妻子若クハ死者ニ依リ從來生計ヲナセシモノヘ金五拾圓ヨリ少カラス百圓ヨリ多カラサル額ヲ給ス

傷痍扶助料

一等傷（終身不具トナリ自用ヲ辨スル能ハサル者）ヘ金六拾圓ヨリ少カラス百圓ヨリ多カラサル額ヲ給ス

二等傷（終身不具トナルモ自用ヲ辨シ得ル者）ヘ金拾圓ヨリ少カラス五拾圓ヨリ多カラサル額ヲ給ス

一　療治料

傷痍ノ輕重ニ依リ其適度ヲ量リ之ヲ給ス

◉警察及監獄雇員死傷者吊祭扶助療治料支給方

明治二十年九月内務省訓令第四十二號

警察及監獄傭員ニシテ職務上死傷セシモノ吊祭扶助療治料ハ十五年第六十七號公達ニ照準支給スヘシ但警察傭ハ警察費監獄傭ハ監獄費ヨリ支辨スルモノトス

◉官廳ノ諸工事ニ使役スル人夫死傷手當規則

明治八年四月太政官第五十四號

官廳ノ諸工事ニ使役スル者其職事ノタメニ死傷候節ハ自今左ノ規則ニ照準シ處分可致此旨相達候事但本文手當金ノ儀院省使廳ハ定額金ノ内ヨリ府縣ハ別途請取方大藏省ヘ可申出事（八年十一月太政官達第百九十七號及十四年六月同第五十四號ヲ以テ本項中削除スル所アリタリ）

官役人夫死傷手當規則

第一條　凡ソ各廳ニ於テ工事ニ使役スル者死傷スル時ハ相當ノ手當ヲナスヘシ其傷痍ノ輕重ヲ分チ五等トス左ノ如シ

第一等　重傷死ニ至ル者

第二等　重傷死ニ至ラスト雖モ終身自用ヲ辨スル能ハサル者

第三等　自己ノ動作ヲ得ルト雖モ終身事業ヲ營ムヿ能ハサル者

第四等　譬ヘ事業ヲ營ムヿヲ得ルト雖モ身體ヲ毀傷シテ舊ニ復スルヿヲ得サル者

第五等　身體ヲ毀傷スルト雖モ一時ノ治療ヲ以テ舊ニ復スルヿヲ得ル者

第二條　凡ソ死傷人アル時ハ其原由ト輕重トヲ檢察シ醫員ノ診斷證書ヲ審査シ表面ニ照シテ救助金ヲ與フヘシ

第三條　手當金ヲ分ツテ療養埋葬及ヒ遺族扶助ノ三種トス（十年七月太政官達第五十二號ヲ以テ本條ヲ改正ス）

一　一等傷ニ罹リ死スル者ハ療養料埋葬料ヲ給ス遺族扶助料ハ戸主ニシテ家族ナキ者及ヒ戸主ニアラスシテ妻子ナキ者ハ給セス尤モ死者戸主ニアラス且妻子ナキ者ト雖モ其死者ニ依リ活計ヲ營ミ來リタル遺族（一戸籍内ニ在ルモノ）アレハ之ヲ給スヘシ但即死シテ療治ニ掛ラサル者ヘハ療治料ヲ給セス且療養中全ク他病ノタメニ死スル者ヘハ扶助料ヲ給セス

二等三等四等傷ニ罹ル者ハ療養料扶助料ヲ給與スヘシ

一　五等傷ニ罹ル者ハ療養料ノミヲ給與スヘシ

第四條　傷痍ノ輕重ハ即時ニ確定シ難シト雖モ其實況ヲ見計ヒ即時ニ療養料ヲ給シ證キ治療ノ後醫員二名以上ノ診斷證書ト其容體トヲ審査シ相當ノ給與スヘシ

（死傷手當表畧之）

◉陸海軍雇員ノ死傷手當金給與ノ件

明治二十七年九月勅令第百六十四號

陸戰時若クハ事變ニ際シ陸海軍雇員、軍艦乘組傭人、官用船舶ノ船員等ニシテ傷痍ヲ受ケ疾病ニ罹リ又ハ死歿

シタルトキ手當金ヲ給與スルノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

第一條　陸海軍雇員、軍艦乘組傭人、官用船舶ノ船員若クハ鐵道從事員其ノ他陸海軍傭人等ニシテ戰地ニ於テ公務ノ爲メ傷痍ヲ受ケ若クハ疾病ニ罹リ又ハ之ニ原因シ死歿シタルトキハ本令ニ依リ一時限リ手當金ヲ給ス

戰地ニ非ラサルモ出征事務ニ關シ公務ノ爲メ死傷シタルトキ亦前項ニ同シ

第二條　傷痍疾病手當金ハ軍人恩給法第九條ニ揭クル各事項ニ準シ別表各項ニ依リ之ヲ給ス

傷痍疾病ニシテ軍人恩給法第九條第一乃至第六ノ事項ヨリ輕キ者ニハ別表第七項ノ金額ヲ給ス

第三條　左ニ揭クル者ニハ別表ノ甲額ヲ給ス

一　雇員又ハ軍艦乘組傭人、官用船舶ノ船員若クハ鐵道從事員ニシテ其ノ職務士官ニ準スヘキ者

二　臨時兵務ニ服スル者

第四條　左ニ揭クル者ニハ別表ノ乙額ヲ給ス

一　雇員、軍艦乘組傭人、官用船舶ノ船員若クハ鐵道從事員ニシテ其ノ職務下士ニ準スヘキ者

二　雇員ニシテ月俸十五圓以上ヲ受ル者

第五條　左ニ揭クル者ニハ別表ノ丙額ヲ給ス

一　雇員、軍艦乘組傭人、官用船舶ノ船員若クハ鐵道從事員ニシテ其ノ職務卒ニ準スヘキ者

二　雇員ニシテ月俸十五圓未滿ヲ受クル者

第六條　第四條第二及第五條第二ノ月俸額ハ日給ヲ受クル雇員ニ在テハ日給ノ三十日分トス

第七條　當時傭入ニハ別表ノ丁額ヲ、臨時傭入ニハ戊額ヲ給ス

第八條　軍艦乘組傭入ニハ第三條乃至第五條ノ金額ノ外仍各本額ノ四分ノ三ヲ增給ス

第九條　扶助料又ハ弔祭料ハ別表ニ依リ死者ノ遺族ニ給ス但既ニ傷痍又ハ疾病手當金ノ給與ヲ受ケタル者ノ遺族ハ此ノ限ニアラス

第十條　軍艦乘組傭人若クハ臨時兵務ニ服スル者ヲ解放スルトキハ其ノ勤勞ニ依リ慰勞金トシテ各給料二箇月分以內ノ金額ヲ給スルコトヲ得

第十一條　第一條第二項ニ該ル者ノ區域及第二條傷痍疾病ノ等差竝ニ第三條第四條第五條ノ士官下士卒ニ準スヘキ職務ノ區分ハ陸海軍大臣之ヲ定ム

（別表略之）

◎同上法令ノ適用方ニ關スル件

明治二十八年五月勅令第六十五號

朕明治二十七年六月以後同年勅令第百六十四號ニ該當スル者ニ關スル件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

明治二十七年六月以後同年勅令第百六十四號施行以前ニ於テ同勅令ニ該當スル者ニハ其ノ規定ヲ適用ス

◎官吏療治料ノ件

明治二十五年九月勅令第八十號

朕官吏療治料給與ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

官吏ニシテ職務ノ爲メ傷痍ヲ受ケタル者ハ特別ノ規定アルモノヲ除ク外療治料實費ヲ以テ給與ス

但府縣ノ收入ヨリ給料ヲ受クル者ノ療治料ハ其府縣ノ負擔トス

◎獸醫臨時傭入手當金

明治二十五年十一月農商務省訓令第三十六號

明治十九年(十月)當省訓令第十五號臨時獸醫ヲ傭入ルヽトキ其手當金十五圓以內トアルハ三十圓以內ト改正ス

第二款　議員及官吏准官吏手當

◎帝國議會議長副議長議員歲費及旅費支給規則

明治二十三年十月勅令第二百六十三號

朕帝國議會議長副議長議員歲費及旅費支給規則ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

帝國議會議長副議長議員歲費及旅費支給規則

第一條　帝國議會議長副議長及議員ノ歲費ハ每年七月ヨリ翌年六月ニ至ル十二箇月ヲ以テ一歲トシ計算ス

第二條　議長副議長及議員ノ歲費ハ其ノ前六箇月分ヲ帝國議會通常會開會ノ後三十日以內ニ其ノ後六箇月分ヲ閉會ノ後七日以內ニ支給ス

第三條　議長副議長ノ歲費ハ其勅任セラレタル當月分ヨリ支給ス

議長副議長ニ勅任セラレタル議員ノ歲費ハ其ノ勅任セラレタル前月分マテ支給ス

第四條　貴族院勅任議員ノ歲費ハ其勅任セラレタル當月分ヨリ支給ス（本條ハ二十四年勅令第百七十九號ヲ以テ改正ス）

第五條　議長副議長及議員退職辭職除名ノ場合ニ於テハ其當月分迄ヲ支給ス

第六條　衆議院解散ヲ命セラレタルトキハ其ノ議長副議長及議員ノ歲費ハ解散ヲ命セラレタル當月迄ヲ支給ス

第七條　衆議院解散ヲ命セラレタル後選擧セラレタル議員及補缺議員ノ歲費ハ其ノ選擧セラレタル當月分ヨリ支給ス

第八條　衆議院ノ議員貴族院ノ議員トナリタルトキ其ノ他如何ナル場合ヲ問ハス歲費ハ同一人ニ對シ重複支給セス

第九條　官吏ニシテ議員タル者官吏ヲ罷メタルトキハ其ノ當月分ヨリ議員ニシテ官吏ニ任セラレタル者仍議員タルトキハ其ノ當月分マテヲ支給ス

第十條　議長副議長及議員ノ旅費ハ別表定ムル所ニ從ヒ之ヲ支給ス官吏ニシテ議員タル者亦同シ

上京旅費ハ歲費ノ前半額ト歸鄉旅費ハ歲費ノ後半額

ト同時ニ之ヲ支給ス

第十一條　旅費ハ當選區ノ何地ニ在ルヲ問ハス其ノ住居地ヨリ直路ノ里程ヲ計算シテ之ヲ支給ス

第十二條　議院ヲ距ル三里以内ノ地ニ住居スル者ハ何地ノ議員タルヲ問ハス旅費ヲ支給セス

第十三條　瀛車旅行ハ一日二百哩詰瀛船旅行ハ一日百海里詰陸路旅行ハ一日十二里詰ノ割合ヲ以テ直路ノ行程ニ應シ支給ス但シ一日ノ行程ニ滿タサル端數ハ切捨トス

第十四條　召集ニ應セサル議員ニハ事故ノ如何ヲ問ハス旅費ヲ支給セス

旅費表（上同）

瀛車一哩ニ付	瀛船一海里ニ付	車馬一里ニ付	日當
六錢五厘	七錢	十八錢	弐圓

◎在外國本邦郵便電信局長郵便局長等月手當金

明治二十四年六月勅令第六十七號

朕在外國本邦郵便電信局長郵便局長以下局員手當金ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

在外國本邦郵便電信局長郵便局長以下局員月手當金ハ別表定ムル所ニ依ル其給與細則ハ遞信大臣之ヲ定ム

本令ハ明治二十四年七月一日ヨリ施行ス

（別表略之）

◎傳染病救治ニ從事スル者ニ手當支給ノ件

明治二十八年六月勅令第七十一號

朕傳染病豫防救治ニ從事スル官吏准官吏及傭員ニ手當支給ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

傳染病豫防救治ニ從事スル官吏准官吏及傭員ニシテ專ラ該病者又ハ病毒汚染ノ虞アル物品ニ接近スル者ニハ各其ノ俸給又ハ給料月額三分一以内ノ月手當ヲ給スルコトヲ得

但府縣ノ收入ヨリ俸給又ハ給料ヲ受クル官吏准官吏及傭員ニシテ本官職ノ資格ヲ以テ從事スル者ニ給スル手當竝ニ明治十三年第三十四號布告傳染病豫防規則第十四條ニ依リ檢疫委員ト爲ル者ニ給スル手當ハ府縣ノ負擔トス

◎三等郵便電信局長郵便局長電信局長手當金年額

明治二十四年八月遞信省令第十二號

三等郵便電信局長郵便局長電信局長手當金年額ヲ改定シ左表ニ依リ支給ス

其勤勞顯著ナル者ハ特ニ左表ノ範圍ニ拘ラス漸次年額四百圓迄ヲ給與スルコトアルヘシ

本令ハ明治二十四年八月十六日ヨリ施行ス

一級	九拾六圓	二級	八拾四圓
三級	七拾弐圓	四級	六拾圓
五級	四拾八圓	六級	三拾六圓
七級	弐拾四圓	八級	拾八圓
九級	拾弐圓	十級	九圓六拾錢

第三款　學生及下士手當

◎陸軍諸生徒手當金給與

明治二十五年勅令第百五十八號

朕陸軍諸生徒手當金給與ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

陸軍々人ト爲ルヘキ諸生徒ニシテ平時屯營内又ハ野外ニ於テ演習中傷痍ヲ受ケ若クハ之ニ原因シテ疾病ニ罹リ將來軍人ノ服役ニ堪ヘス退學ヲ命シタル者ハ左ノ區別ニ依リ一時限手當金ヲ給スルコトヲ得

一　軍人恩給法第九條ノ各項ニ等シキ傷痍ヲ受ケ若クハ疾病ニ罹リタルトキハ同法第三號表ノ各項ニ從ヒ陸軍卒ノ金額六箇年分ヲ給ス

二　軍人恩給法第十四條第二項ニ等シキ傷痍ヲ受ケ若クハ疾病ニ罹リタルトキハ同法第三號表第六項陸軍卒ニ相當スル一箇年分ヨリ少カラス五箇年分ヨリ多カラサル金額ヲ給ス

三　本令ハ明治二十三年七月ヨリ本令實施マテノ間ニ於テ本令ニ該當スル者ニモ適用ス（二十六年十二月勅令二百二十三號ヲ以テ追加）

前項ノ傷痍疾病輕重ノ等差ハ陸軍大臣之ヲ定ム

◎陸軍諸生徒手當金給與方ニ關スル傷痍疾病等差例

明治二十六年一月陸軍省達第三號

明治二十五年十二月勅令第百十八號ニ基ク傷痍疾病輕重ノ等差ハ陸軍々人傷痍疾病恩給等差例ニ準據シ其取扱陸軍々人恩給取扱手續ヲ適用スヘシ

◎海軍下士卒手當金規則

明治二十六年十二月勅令第二百五十三號

朕海軍下士卒手當金規則ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

海軍下士卒手當金規則

第一條　陸上勤務ノ下士卒ニシテ外宿セシムルトキハ下士ニハ一日二十錢卒ニハ一日十五錢ノ手當金ヲ給ス但入院シタルトキ若クハ旅行中旅費ヲ給スルトキハ之ヲ給セス

第二條　下士卒ニシテ水底事業若クハ艦底、汽罐内部、汽罐室底部、水罐底部ノ掃除ニ從事シ若クハ難波船漂流人救助其ノ他非常ノ場合ニ於テ勞働セシムルトキハ一日二十錢以内ノ手當金ヲ給スルコトヲ得

第三條　下士卒ニシテ又期九十日間若クハ熱帶地方ニ於テ艦船ノ汽罐（小蒸汽船ハ除ク）ニ點火シ汽罐部ノ事業ニ從事セシムルトキハ服務日數ニ應シ一日十錢以内ノ手當金ヲ給スルコトヲ得

第四條　徵兵ニシテ再服役ノ許可ヲ受ケタル者ニハ一度限リ十圓ノ手當金ヲ給ス

第五條　此ノ規則ノ手當金ハ處刑、處罰、收禁、拘留中ノ者若クハ被告事件ノ爲メ護送中ノ者若クハ擅ニ職役ヲ離レタル者若クハ他方ニ赴キ歸著ノ期ニ後レ復歸セサル者ニハ之ヲ給セス但戴罪肥務中及處罰中勤務ニ服スル者ハ此ノ限ニアラス

第六條　此ノ規則施行ノ細則ハ海軍大臣之ヲ定ム

附則

第七條　此ノ規則ハ明治二十七年四月一日ヨリ施行ス

第八條　海軍軍人手當金規則ハ此ノ規則施行ノ日ヨリ廢止ス

◎海軍在外國學生學資金規則

明治二十三年二月勅令第十五號

朕海軍在外國學生學資規則ヲ裁可ス

海軍在外國學生學資金規則

第一條　在外國學生ニハ修學ノ難易ニ應シ別表ニ依リ學資ヲ給ス

第二條　在外國學生在官者ナルトキ若クハ在官者ニシテ外國軍艦ニ乘組ミタルトキ別表ノ年額ニテ不足スル場合ニ限リ年額二千五百圓以内ノ學資金ヲ給スルコトヲ得

第三條　本則ニ關スル支給細則ハ海軍大臣之ヲ定ム

第四條　本則ハ明治二十三年四月一日ヨリ施行ス

（別表略之）

◎海軍生徒手當金規則

明治二十六年十二月勅令第二百五十四號

朕海軍生徒手當金規則ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

海軍生徒手當金規則

第一條　海軍將校生徒及機關生徒ニハ一日二十錢ノ手當金ヲ給シ被服其ノ他日用物品ノ費用ニ充テシム但實地練習ノ爲メ乘艦中ハ內國ニ於テハ一日三十錢外國ニ於テハ一日五十錢ノ手當金ヲ給ス（二十七年八月勅令第百四十號ニテ本條改正）

第二條　海軍技手生徒ニハ一日二十五錢ノ手當金ヲ給シ糧食被服其ノ他日用物品ノ費用ニ充テシム但傷痍ヲ受ケ若クハ疾病ニ罹リ入院中ハ海軍糧食條例ニ依リ糧食ヲ給ス

第三條　傷痍ヲ受ケ若クハ疾病ニ罹リ病院ニ入ル者若クハ在校在艦セサル者ニハ其ノ間第一條及第二條ノ手當金ヲ停止シ一日二錢ノ手當金ヲ給ス但外國航海中本條ノ場合ニ該當スル者ハ手當金ヲ停止セス（同上）

第四條　處刑、懲罰、取禁、拘留、逃亡若クハ被告事件ノ爲メ護送中ノ者及其ノ他事故ヲ以テ在校在艦セサル者ニハ手當金ヲ給セス（同上）

第五條　將校生徒若クハ機關生徒ヲ命シタル者ニハ其ノ際一度限リ被服費トシテ四十五圓ヲ給ス

第六條　將校生徒若クハ機關生徒天災其ノ他避ク可カラサル事由ニ因リ被服ヲ亡失シタルトキハ四十五圓ヲ最上限トシ適宜被服費ヲ給スルコトヲ得

第七條　生徒手當金ハ每月下旬ニ於テ之ヲ給ス

第八條　此ノ規則施行ノ細則ハ海軍大臣之ヲ定ム

附則

第九條　此ノ規則ハ明治二十七年四月一日ヨリ施行ス

第十條　明治二十二年勅令第百二十號海軍生徒手當金規則及明治二十四年勅令第五十三號海軍造船工學校生徒手當金規則ハ此ノ規則施行ノ日ヨリ廢止ス

◎海軍機關生徒及技手生徒手當金ノ件

明治二十六年十二月勅令第二百五十六號

朕海軍機關生徒及技手生徒手當金ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

明治二十六年度ニ於テ海軍機關生徒ノ手當金ハ海軍兵學校生徒手當金ノ例ニ依リ技手生徒手當金ハ海軍造船工學校生徒手當金ノ例ニ依リ支給ス

◎海軍上等技工、技工及工夫手當金加給方

明治二十二年七月勅令第九十七號

朕海軍上等技工、技工及工夫手當金加給ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

海軍上等技工、技工及工夫ヲ定時間外ニ服務セシムルトキ及潛水器ヲ用フル作業ニ從事セシムルトキハ一時間ニ付等級相當技術手當金ノ五分ノ二ヲ最上限トシ加給スルコトヲ得

第四款　雜則

◎馬匹ノ減亡馬格ノ損耗補給ノ件

明治二十七年七月勅令第百三十一號

朕戰時及事變ノ際ニ於ケル馬匹ノ減亡並馬格ノ損耗補給ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

戰時若クハ事變ニ際シテハ陸軍乘馬飼養條例ニ定ムル上長官以上ノ自馬及同條例第十三條委員ノ取扱フ馬匹ノ減亡並馬格ノ損耗ハ特ニ之ヲ補給ス

◎艦長內地ニ於テ外國人接待ノ處辨金ノ件

明治二十二年六月海軍省達第二百二十六號

軍艦長內地ニ於テ外國人ヲ饗應若クハ接待セントスルトキハ左ノ金額以外ヲ以テ處辨スヘシ但當該年度中前月ノ豫定額內ニ仕拂殘餘アルトキハ漸次後月繰越シ使用スルコトヲ得（二十三年海軍省達第二百三十九號ニテ削除）

艦長大佐　少佐　一箇月　金拾圓

艦長大尉　一箇月　金五圓

◎宿直徹夜勤務使役ノ者ニハ適宜食料給與方

明治二十四年勅令第二十七號

朕明治六年大藏省達第百六十一號及明治二十二年閣令廢止ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

明治六年大藏省達第百六十一號及明治二十二年閣令第四號ハ本年三月三十一日限リ廢止ス但宿直又ハ徹夜勤務使役ノ者ニハ適宜食料（現品又ハ代料）ヲ給與シ又特別用ノ文具ハ官廳ニ備ヘテ使用セシムルコトヲ得

第三節　旅費

◎內國旅費規則

明治十九年六月閣令第十四號

內國旅費規則ヲ定ムルコト左ノ如シ但明治九年太政官達六十四號旅費定則中內國ノ部ハ廢止ス

內國旅費規則

二十四年八月勅令第百六十六號　二十年閣令第十七號ニテ改正

第一條　內國旅費ハ官吏公務ニ依リ本邦內ヲ旅行スルトキ旅行中一切ノ費用ニ充ツル爲メ之ヲ支給ス

第二條　內國旅費ハ分チテ四等トシ別表ノ定ムル所ニ從ヒ順路ノ路程ニ依リ汽車賃汽船賃車馬賃及日當ヲ支給ス（二十四年八月勅令第百六十六號ニテ改正）

第三條　汽車賃ハ汽車旅行汽船賃ハ汽船旅行車馬賃ハ陸路旅行日當ハ休泊料及其他ノ諸費ニ充ツル爲メ之ヲ支給ス

第四條　官有ノ車馬及官廳ニ於テ借入備入レタル舟車馬等ニテ旅行シ若クハ旅行ノ性質ニ依リ特ニ舟車馬等ノ實費拂ヲ許可シタルトキハ本令ノ汽車賃汽船賃及

車馬賃ヲ支給セス

第五條　瀛車賃ハ哩數、瀛船賃ハ海里數、車馬賃ハ里數、日當ハ日數ニ應シ之ヲ支給スヘシ

第六條（二十四年八月勅令第百六十六號ヲ以テ本條ヲ削除ス）

第七條　日當ハ六里未滿瀛車十哩未滿及瀛船十海里未滿ノ旅行ニハ支給セサルモノトス但公務ノ都合ニ依リ宿泊ヲ要スルトキハ宿泊ノ數ニ應シテ日給ヲ支給スヘシ

第八條　瀛車賃瀛船賃及車馬賃ハ其種類毎ニ經過セシ路程ノ總數ヲ合算シテ之ヲ支給スヘシ但其一位未滿ノ端數ハ計算セサルモノトス

第九條　旅行ノ兩會計年度ニ跨ルトキハ各年度毎ニ之ヲ區別シ旅費ヲ計算スヘシ但瀛車賃及瀛船賃ハ會計年度ニ係ハラス瀛車瀛船ノ到達日ニ著シタル日ヲ以テ之ヲ區別シテ計算スヘシ

第十條　檢田測量及土木工事等ノ爲メ現場ヲ巡視スルトキハ車馬賃ヲ給セス日當額ニ三割ヲ增給スヘシ

第十一條　赴任旅費ハ舊任地ヨリ新任地ニ至ルマテ車馬賃瀛車賃若クハ瀛船賃ノ二倍ヲ支給スヘシ

第十二條　廢官若クハ退官ノ際事務引繼若クハ殘務取調其他公務ノ爲メ旅行セシムルトキハ前官相當ノ旅費ヲ支給スヘシ

第十三條　新ニ任用スル爲メ召喚スル者ハ其新任官相當ノ旅費ヲ支給スヘシ

第十四條　旅行中歸省其他私事ノ爲メ許可ヲ得テ迂路ヲ通過スルトキハ順路ノ路程ニ應シ旅費ヲ支給スヘシ

第十五條　旅行中廢官死亡又ハ諭旨退官シタルモノハ前官相當ヲ以テ舊任地迄ノ旅費ヲ支給スヘシ

第十六條　前二條ノ場合ニ於テ日當ヲ支給スル爲メ其日數ヲ計算スルハ瀛車旅行ハ一日二百哩詰瀛船旅行ハ一日百海里詰陸路旅行ハ一日十二里詰トス但シ距離接近シテ數種ノ旅行相跨ルトキハ各其路程十二分ノ一ヲ以テ一時間ノ行程トシ一日ノ旅行時間ハ十二時間トシ其日數ヲ計算スヘシ

第十七條　各省大臣ハ平常旅行ヲ要スル官吏ニ對シ特ニ其旅費額ヲ定メ月額ヲ以テ之ヲ支給スルヿヲ得（二十四年勅令第百六十六號ヲ以テ本條中削除）

第十八條　各省大臣ハ定額ヲ以テ旅費ヲ減少スルヿヲ得（二十四年勅令第百六十六號ヲ以テ本條中削除）

第十九條（二十年閣令第十七號ニテ削除）

第二十條　陸海軍武官文官及警察官ノ旅費ハ主任大臣大藏大臣ト協議シ別ニ之ヲ定ムヘシ（二十年閣令第六號本條中ニ追加ス）

第二十一條　神官及傭員其他本令ニ明文ナキモノ、旅費ハ主任大臣大藏大臣ト協議シテ之ヲ定ムヘシ（別表略之）

◎內國旅費附則

明治十九年十二月閣令第三十四號

第一條　北海道廳、沖繩縣、東京府小笠原島廳、長崎縣對馬島廳、鹿兒島大島々廳所轄地及東京府管轄伊豆七島內ハ管內巡回ト雖モ管外旅行ニ準シ旅費ヲ支給スルコトヲ得

第二條　北海道總沖繩縣管轄內ハ車馬賃ニ限リ管外額ノ五割以內ヲ增給スルコトヲ得

但北海道廳管轄內ハ每年十一月ヨリ翌年三月マテ五箇月間車馬賃ニ限リ管外額ノ二倍以內ヲ增給スルコトヲ得

第三條　各省大臣ハ前二條ニ據リ旅費額ヲ定メタルトキハ大藏大臣ニ通知スヘシ

◎內國旅費支給心得方

明治十九年六月大藏省訓令第二十八號

閣令第十四號ヲ以テ定メラレタル旅費支給方左ノ通心得ヘシ

一　北海道廳集治監典獄ハ內國旅費規則四等旅費ヲ給ス

一（二十四年三月二十日大藏省訓令第二十一號ニ依リ本項ヲ削リ因テ表ニ刪除ヲ加フ）

一　北海道廳府縣ノ判任官并ニ準判任官（新官制ニ據リ官等ヲ定メサルモノ）ハ屬官御用掛ノ外ト雖總テ當省訓令第二十三號第一項ニ據リテ旅費ヲ給ス但地方稅支辨ノ官吏ト雖國庫ヨリ旅費ヲ給スルトキ亦同シ

一　支給上新舊旅費規則相跨リタル場合ニ於テハ新規則施行期日後直ニ到著セシ御用地ヲ以テ打切リ又巡廻中ノ者ハ該期日ヲ押ヘ新舊支給方ヲ區分スヘシ

◎內國旅費規則第四條官船ニ乘込出張ノ官吏食卓料支給方

明治二十二年四月閣令第十四號

閣令第十九年閣令第十四號內國旅費規則第四條ニ依リ官船若クハ各廳ニ於テ借入傭入ノ船舶ニ乘組出張スル場合ニ於テハ官ヨリ賄ヲナサヽルトキハ左ノ食卓料支給方

奏任官一日	金壹圓七拾錢
勅任官一日	金壹圓五拾錢
奏任官一日	金壹圓貳拾錢
判任官一日	金九拾錢

◎外國旅費規則

明治二十年五月閣令第十二號

外國旅費規則左ノ通相定本年七月一日ヨリ施行ス

第一條　外國旅費ハ官吏公務ニ依リ外國ニ旅行スルトキ其行程日數ニ應シ旅行中一切ノ費用ニ充ツル爲メ之ヲ支給ス

第二條　外國旅費ハ船舶料、瀛車料、客舍料、食卓料、日當及支度料ノ六種トス

第三條　客舍料、食卓料、日當、支度料ハ各官等ニ依リ分テ五等トシ第一號表ニ照シ船舶料、瀛車料ハ勅奏判任官ハ一等、傭員ハ二等ノ額ヲ以テ第二號表ニ照シ之ヲ支給ス

第四條　表面外ノ地ニ旅行スルトキ勅奏判任官ハ瀛船、瀛車賃ノ一等定價、傭員ハ二等定價ヲ支給ス其二等ナキ場合ハ一等ヲ支給ス

瀛船、瀛車ノ設ナキ地方ヲ旅行スルトキハ舟、車、馬賃ノ實費ヲ支給ス

定價及實費ヲ支給スル場合ニ於テハ私屬ノ荷物三十五貫目マテノ運賃ハ官費支給スルコトヲ得

第五條　前條ノ場合ニ於テハ旅行者ヨリ旅行日記、受取書等精確ナル證明書ヲ出サシメ之ニ基キ支給スヘ

シ

旅行者ハ精密ナル旅行日記ヲ作リ毎日ノ行程、宿泊ノ場所、旅店名稱船名、賃銀等ヲ記入スヘシ

旅行者ハ成ルヘク運輸會社或ハ運輸營業人ノ受取書其他舟、車、馬賃ノ證明トナルヘキモノヲ取置ヘシ

第六條　船舶料、瀛車料ハ官ヨリ船、車ヲ供スルトキハ之ヲ支給セス

第七條　食卓料ハ官ヨリ船舶ヲ供スルモ賄ヲ爲サヽルトキニ限リ航海ノ日數ニ應シ之ヲ支給ス

食卓料ハ客舍料ト重複ニ支給セス

第八條　客舍料ハ陸地宿泊ノ數ニ應シ之ヲ支給ス

航海途中瀛船ノ寄港シタル場合ニ於テ自己ノ便宜ヲ以テ上陸宿泊スルトキハ客舍料ヲ支給セス

第九條　日當ハ本邦出發港抜錨ノ日ヨリ本邦歸着港ニ投錨ノ日マテ日數ニ應シテ支給ス

第十條　支度料ハ各省大臣ニ於テ豫メ旅程ノ遠近、日ノ多少、數公務ノ性質等ヲ斟酌シ第一號表ニ揭クル範圍内ニ於テ相當ノ額ヲ定メ支給スヘシ

支度料ハ本邦ヨリ外國ヘ旅行ヲ命シタルトキ之ヲ支給シ其外國ニ在テ甲國ヨリ乙國ヘ旅行ヲ命スルコトアルモ之ヲ支給セサルモノトス

第十一條　奏任官四等以上ノ者從者ヲ伴ヒ外國ニ旅行メルトキ從者一人ニ限リ願ニ依リ表面二等ノ船舶料、車料（表面外ノ地ハ第四條ニ據ル）及五等ノ食卓料ヲ支給スルコトアルヘシ

第十二條　外國ヘ旅行ヲ命セラレタル者出發前死去又ハ官ノ都合ニ由リ旅行ヲ免シタルトキハ支度料ノ半額ヲ支給ス

第十三條　外國旅行若クハ在勤中廢官退官及非職ノ者其命令到達ノ日ヨリ四週間以内ニ其所在地ヲ出發歸朝スルトキハ其地ヨリ本邦出發地マテ本官若クハ舊官相當ノ旅費ヲ給ス但自己ノ便宜又ハ刑事裁判及懲戒處分ニ由リ退官ノ者ハ此限ニアラス

外國旅行若クハ在勤中死亡ノ者ハ其地ヨリ本邦出發港マテ舊官相當ヲ以テ第二號表瀛車料、船舶料ノ一割增ヲ支給シ第一號表ノ旅費ハ支給セス（本條二十六年五月勅令第五十七號）

第十四條　外國旅行中許可ヲ得テ公務ヲ終ルノ後尚私事ノ爲メ滯在スルトキ其間ハ一切旅費ヲ支給セス但病氣ハ此限ニアラス

許可ヲ得テ私事ノ爲メ迂路ヲ經過スルトキハ其迂路ニ就キタル日若クハ場所ヨリ其再ヒ順路ニ就クノ日若クハ場所マテハ順路ニ應スル船舶料、瀛車料ノ一割增ヲ支給シ日當、客舍料ハ支給セス

第十五條　第十三條及第十四條ニ據リ死亡者及許可ヲ得テ迂路ヲ經過スル者ニ順路船舶料、瀛車料ヲ支給スルトキ表面外ノ地ニ於テハ陸地ハ一英里ニ付金七錢海路ハ一海里ニ付金六錢ノ割ヲ以テ支給ス

表面外ノ地ノ里程ハ各地運輸會社或ハ各國政府ノ公認セル里程表ニ基キ旅行者或ハ遺族ヨリ精確ノ證明書ヲ出サシムルモノトス

第十六條　傭員中特別ノ取扱ヲ要スル者（傭外國人等）及其他本則ニ明文ナキモノヽ旅費ハ主任大臣大藏大臣ト協議シ之ヲ定ムヘシ

第十七條　交際官、領事等別段ノ旅費規則アルモノニハ本則ヲ適用セス

第十八條　各省大臣ハ大藏大臣ト協議シ定額ノ旅費ヲ減少スルコトヲ得

附則

外國旅費ハ内國旅費ト重複ニ支給スルコトナシ

外國旅行ノ爲メ本邦内ヲ通過シ及出發港ニ滯在スルトキハ内國旅費規則ニ據リ旅費ヲ支給ス

出發港抜錨ノ後郵船ノ都合ニ由リ本邦内ニ寄港シ上陸滯在スルトキハ其間ハ内國旅費規則ニ據リ日當ヲ支給ス

歸朝ノ際目的ノ港ニ達スヘキ直航船ナキカ爲メ一旦本邦内ニ寄港シ其地ヨリ瀛船ヲ乘替ルトキハ其寄港シタル日以後ニ起ル旅行ハ内國旅費規則ニ據リ旅費ヲ支給ス

（表ハ之ヲ署ス）

◉徵兵旅費定則

（明治二十年十二月大藏省令第十七號）

明治十八年七月當省達第四十二號徵兵旅費定則左ノ通改正ス

徵兵旅費定則

第一條　徵兵旅費ハ檢査及入營ノ二種トシ片道三里以上ノ旅費ヨリ之ヲ支給ス

檢査旅費ハ檢丁、呼出ニ係ル檢丁ノ父兄、癈疾不具者ニ同伴シタル保護人及抽籤人檢査所又ハ抽籤場ヘ往復ノ旅費トス

入營旅費ハ新兵入營ノ旅費トス

第二條　檢査旅費ハ一里ニ付金貳錢五厘入營旅費ハ同金四錢ノ割ヲ以テ支給ス但一里未滿ノ端里數ハ切捨トス

官ノ都合ニヨリ特ニ滯在ヲ命シタルトキ檢査旅費ニ在テハ金貳拾貳錢入營旅費ニ在テハ金貳拾八錢ノ滯在日當ヲ支給ス

官ノ都合ニヨリ特ニ滯在ヲ命シタルニアラスト雖トモ川留雪間ニシテ途中ニ滯在スルトキ其地戶長ノ證明書ヲ添ヘ請求スルトキハ滯在日當ヲ支給スルコトヲ得

第三條　片道三里未滿ノ旅行ト雖モ島嶼ニ住居シ渡航ニアラサレハ至リ難キトキハ渡航賃ノ實費ヲ支給スルコトヲ得

片道三里未滿ノ旅行ト雖モ官ノ都合ニヨリ特ニ宿泊ヲ命シタルトキハ檢査旅費ニ在テハ金拾五錢入營旅費ニ在テハ金貳拾錢ノ宿泊料ヲ支給ス

第四條　片道三里以上ノ旅行ニシテ島嶼ニ住居シ渡航ニアラサレハ至リ難キモノ若クハ地勢上渡航又ハ汽車乘用ヲ便トスルトキハ第二條ニヨラス其實費（瀛車瀛船ハ下等賃タルヘシ）ヲ支給スルコトヲ得

本條ノ場合ニ於テハ泊數ニ應シテ前條ノ宿泊料ヲ給ス其陸行（徒歩旅行）ト相跨ル日亦之ニ準シ尚陸路里數ニ應シテ別ニ第二條ノ旅費ヲ支給ス

第五條　新兵入營ノ旅行ハ一日十里詰ニシ若シ各兵集合上ノ都合ニヨリ其見積行程ヨリ延著セシメタルトキハ增日數ニ應シ滯在日當ノ額ヲ支給ス

第六條　檢丁若クハ呼出ニ係ル檢丁ノ父兄癈疾不具ニシテ歩行スル能ハ

サル者ハ第二條ノ外片道一里以上ヨリ一里ニ付金六錢ノ駕車賃ヲ支給ス但一里未滿ノ端數ハ切捨トス

第七條　新兵入營途中疾病ニヨリ歩行スル能ハスシテ駕車ヲ乘用シ又ハ滯在シタルトキハ附添吏員ノ證明書及醫師ノ診斷書ヲ添ヘ請求スルトキハ駕車賃ノ實費若クハ滯在日當ヲ支給スルコトヲ得

第八條　新兵ニ附添ヒ營所ニ至ル郡區書記若クハ戸長ノ旅費ハ內國旅費規則ニヨル

第九條　北海道廳長官府縣知事ノ見込ニヨリ本則中ノ給額ヲ減少スルハ便宜タルヘシ

◎徵兵檢査ノ節一時雇入ノ者解雇ノトキ旅費支給方

明治二十年二月內務省訓令第九號

徵兵檢査ノ節醫師等一時限リ雇入ノ者解雇スルトキハ該地ヨリ最初採用セシ節ノ本人居住地迄旅費ヲ支給スヘシ

◎徵兵參事員手當金竝ニ旅費支給規則

明治二十二年四月內務省令第六號

一　手當金ハ府縣郡市島嶼ヲ問ハス出務日數ニ應シ一日金壹圓ヲ支給ス

一　旅費ハ左表ノ金額ヲ支給ス其支給法ハ明治十九年六月閣令第十四號內國旅費規則ニ據ル（二十四年八月內務省令第十六號ニテ改正）

（表ハ之ヲ略ス）

◎北海道廳府縣內國旅費支給方心得

明治十九年六月大藏省訓令第九號

閣令第十四號ヲ以テ內國旅費規則ヲ定メラレタルニ付左ノ通リ心得ヘシ

一　府縣「大小書記官」ハ三等旅費取稅長ハ四等旅費屬官判任御用掛ハ月俸四拾圓以上五等旅費月俸四拾圓未滿六等旅費ヲ給スヘシ

一　北海道廳官府縣知事「縣令」ハ旅行ヲ命スルトキ豫メ事務ノ便宜路程ノ近便等ヲ量リ經過ノ路筋旅行ノ日數ヲ定ムヘシ

一　海灣河湖等ノ海里ヲ以テ路程ヲ算セサル場合ハ里數ニ應シテ車馬賃ヲ支給スヘシ

一　非常急行上司隨行等ノ如キ場合ニ於テ定額ノ車馬賃ヲ以テ支辨シ難キト見認ムルトキハ北海道廳官府知事「縣令」ノ見込ヲ以テ臨時費拂ヲ許可スヘシ

一　海里ノ距離ハ明治五年第百三十號布告ニ據ルヘシ

一　赴任旅費ハ在勤地ヲ轉シタル時ニ限リ之ヲ支給スヘシ

一　新ニ任用ノ者ハ在勤地マテ規則第十三條ノ旅費ヲ支給スヘシ

一　兼官者ハ兼官ノ用務ニ據リ旅行スルトキハ兼官相當ノ旅費ヲ給シ本官兼官ノ用務ヲ兼ルトキハ本官相當ノ旅費ヲ給スヘシ（二十年大藏省訓令第六十號ヲ以テ但書ヲ削除ス）

一　從前特例ヲ以テ旅費ノ支給法ヲ定メタルモノト雖總テ閣令第十四號內國旅費規則ニ據ルヘシ

◎警察官吏其他內國旅費概則

明治十九年六月內務省令第十一號

警察官吏「司獄官吏「神官」及等外吏雇員其他內國旅費概則左ノ通リ相定ム但シ來年七月一日ヨリ施行スヘシ

警察官吏其他內國旅費概則

第一條　警視警部長警部警部補ノ旅費ハ閣令第十四號內國旅費規則ニ依リ支給スヘシ但警部長ハ四等旅費府縣ノ警部月俸四拾圓以上ハ五等旅費月俸四拾圓未滿及警部補ハ六等旅費ヲ支給スルモノトス

第二條　警視及警部補ノ持區內ヲ巡廻スルトキハ旅費ヲ給セス一切ノ費用トシテ日當ヲ支給スヘシ但其ノ給與方ハ左ノ各項ニ據ルヘシ

警視日當　金壹圓貳拾錢

警部（警部補）日當　金八拾錢

第一項　十二里以上ノ巡廻ハ其日數ニ應シ日當ヲ支給スヘシ

第二項　六里以上拾二里未滿ノ巡廻ハ其日數ニ應シ日當半額ヲ支給スヘシ

第三項　六里以上ニ渉ル巡廻中滯在スルトキハ其滯在ノ日數ニ應シ日當ノ半額ヲ支給スヘシ

第四項　六里未滿ノ巡廻ハ日當ヲ給セス但シ宿泊ヲ要スルトキハ其泊數ニ應シ日當ノ半額ヲ支給スヘシ

第五項　官有ノ舟車馬及各官廳ニ於テ借入傭入タル舟車馬等ニテ派出シ又ハ特ニ舟車馬等ノ實費拂ヲ許可シタルトキハ日數ニ應シ日當ノ半額ヲ支給スヘシ但里程六里未滿ノトキハ第四項ニ據ル

第六項　水上警察署ノ區內ハ里程ニ係ハラス一泊毎ニ日當ノ半額ヲ支給スヘシ

第三條　巡査ノ旅費ハ左ノ各項ニ據ルヘシ

第一項　巡査ハ甲號表面ノ旅費ヲ支給スヘシ

第二項　召集旅費及免職歸國旅費（給助令施行ノ期マテ）ハ一里毎ニ金五錢ヲ支給スヘシ但里程三里未滿ハ給與セス

第三項　免職歸國旅費ハ奉職期限ニ至ラサル者ニハ支給セスト雖職務上重傷ヲ受ケ又官ノ都合ニヨリ免職スルモノハ支給スヘシ

第四項　職務上死シ及奉職中病死スル者ハ奉職期限ニ拘ラス歸國旅費ノ額ヲ手當トシテ支給スヘシ

第四條　巡査持區內ヲ巡廻スルトキハ旅費ヲ給セス一切ノ費用トシテ日當ヲ支給スヘシ但シ其給與方ハ左ノ各項ニ依ルヘシ

第一項　宿泊スルトキハ其泊數ニ應シ日當ヲ支給スヘシ

第二項　至急ノ派出ヲ要シ特ニ舟車馬ノ傭入ヲ許可シタルトキハ該實費ヲ支拂フヘシ但此場合ニ於テモ日當ハ前項ニ依ル

第五條　集治監假留監典獄副典獄看守長書記御用掛ノ旅費ハ左ノ各項ニ依ルヘシ

第一項　典獄ハ閣令第十四號內國旅費規則ノ四等旅費副典獄ハ同五等旅費ヲ支給スヘシ

第二項　書記看守長判任御用掛ハ月俸四拾圓以上ハ閣令第十四號內國旅費規則ノ五等旅費月俸四拾圓未滿ハ同六等旅費ヲ支給スヘシ

第六條（二十四年內務省令第十五號ニテ削除）看守等外吏等外御用掛雇員等ノ旅費ハ左ノ各項ニ依ルヘシ

第一項　看守等外吏等外御用掛雇員ハ甲號表面ノ旅費ヲ支給スヘシ

第二項　看守ノ召集旅費及免職歸國旅費ハ第三條ノ第二項第三項第四項ニ依ルヘシ

第三項　押丁給仕小使職工等ハ乙號表面ノ旅費ヲ支給スヘシ

第四項　華族及從六位勳六等以上ノ士民ヲ公務ニテ旅行セシムルトキハ閣令第十四號內國旅費規則ノ三等旅費其他有位帶勳ノ士民同上ノ節ハ同四等旅費ヲ支給スヘシ（二十四年內務省令第十五號ニテ改正）

第五項　一般ノ人民同上ノ節ハ甲號表面ノ旅費ヲ支給スヘシ

第八條　支給ノ方法ハ第二條及第三條ノ第二項第三項第四項及第七條ノ第二項ヲ除クノ外總テ閣令第四號內國旅費規則ニ依ルヘシ

第九條　地方ノ情況ニ據リ認可ヲ經テ定額ノ旅費ヲ節減スルコトヲ得

（表ハ之ヲ略ス）

◎北海道廳警察官吏旅費支給方

明治十九年六月內務省訓令第九號

其廳警察官吏「及神官」ノ旅費ハ當省令第十一號ニ據リ支給スヘシ

◎官船乘込出張ノ巡査看守及雇員等食卓料支給額

明治二十二年六月內務省訓令第二十四號

明治十九年六月內務省令第十一號警察官吏其他內國旅費概則中巡査看守

及雇員其他ノ者官船若クハ各廳ニ於テ借入雇入ノ船舶ニ乘込出張スル場合ニ於テハ官ヨリ賄ナナサヽルトキハ左ノ食卓料ヲ支給スヘシ

巡査看守雇員　一日　金五拾錢
押丁給仕小使職工　一日　金三拾錢

華族及從六位勳六等以上ノ士民ハ本年(四月)閣令第十四號奏任官ノ額其他有位帶勳ノ士民ハ同判任官ノ額及一般ノ人民ハ本訓令第一項ノ額ヲ給ス

◉公務ニテ往復スル警察官及囚徒護送ノ官吏漁車賃支給方

明治二十一年二月內務省訓令第二號

私設鐵道條例第二十一條公務ヲ以テ往復スル警察官吏及第二十二條囚徒護送ノ官吏ニシテ半價ヲ以テ乘車スル場合ニ於テハ明治十九年(六月)閣令第十四號及同年(六月)內務省令第十一號內國旅費ニ屬スル汽車賃半額ヲ支給スヘシ

◉警察官吏持區內巡廻日當支給方

明治二十年四月內務省訓令第二十五號

警察官吏ニシテ其持區內ヲ巡廻スルトキ給與スヘキ日當ハ特ニ月額ヲ以テ定メ本大臣ノ認可ヲ經テ之ヲ支給スルコトヲ得

◉司法省傭外國人及傭員以下內國旅費定則

明治十九年七月司法省訓令第十三號

傭外國人及傭員以下內國旅費定則左ノ通相定ム

但七月十日ヨリ施行スヘシ

傭外國人及傭員以下內國旅費定則

第一條　旅費支給ノ方法ハ閣令第十四號內國旅費規則ニ據ル

第二條　傭外國人ハ旅費額三等ヲ給ス
但勅任取扱ノモノハ此限ニ非ス

第三條　傭月給金十二圓以上日給金四十錢以上ハ旅費額六等ヲ給ス

第四條　傭月給金十二圓以下日給金四十錢以下及給仕小使等ハ左ノ表面金額ヲ給ス

第五條　赴任旅費ヲ給スルハ「始審裁判所」管內本支廳「治安裁判所」ノ間轉在勤ニ限ル

第六條　官吏ニアラサル者ニ官ノ用務ヲ以テ旅行セシムルトキハ其旅費ハ左項ニ依ル(二十年司法省訓令第二十五號ヲ以テ各項共追加)

一　從六位及勳六等以上ノ輩ハ十九年閣令第十四號旅費額ノ四等ヲ給ス

二　正七位勳七等以下ノ輩ハ同斷六等ノ額ヲ給ス

三　無位無勳ノ輩ハ本則第四條表面雇ノ額ヲ給ス

第七條　傭員(月俸十二圓以下日給四十錢以下)及給仕小使等ヘ旅行ノ性質ニ依リ實費拂ヲ許可スルトキハ左項ニ依ル(二十年司法省訓令第二十五號ヲ以テ各項共追加)

一　本則第四條表面ノ雇ヘハ汽車汽船賃ハ中等以下トス

二　同斷給仕小使ハ凡テ下等トス

◉司法省新官等級ニ叙任セサル官吏旅費

明治十九年七月司法省訓令第十四號

新官等級ニ叙任セサル官吏旅費ノ儀ハ判事檢事年俸月割八十圓以上ハ三等旅費同六十五圓以下ハ四等旅費及判事補檢事補書記等ノ判任月俸四十圓以上ハ五等旅費同三十五圓以下ハ六等旅費支給スヘシ

◉司法省轉任新任者採用廳ヘ到着シ辭令交付前日當支給方

明治二十年六月司法省訓令第十七號

轉任又ハ新任ノ爲メ他所ノ者ヲ呼出シ其採用廳ヘ到着スルモ休暇又ハ其廳ノ都合ニ依リ即日辭令書ヲ交付セサルトキハ辭令交付ノ當日マテ內國旅費規則ノ日當ヲ支給スヘシ

◉裁判所管內外ヲ兼出張ノ者旅費支給方

明治十九年十月司法省訓令第二十六號

管內外公務ヲ兼出張スル者及ヒ管外出張中臨時管內ノ公務ヲ爲ス者並赴任途中同斷ノ者ハ自今管外旅費ヲ支給ス但管內出張ノ者更ニ管外ニ出張スル者ハ管外ニ向ヲ出發ノ日ヨリ管外旅費ヲ支給ス可シ

◉司法省海路旅費支給方

明治二十年一月司法省訓令第二號

旅費規則第二條ニ基キ旅費支給方左ノ通リ相定ム

一　海路旅行ハ汽船ノ都合ニ依リ寄港スト雖トモ直路ノ汽船賃ヲ支給スヘシ
但汽船ノ乘替ヲナサヽレハ難到場所ハ此限ニ非ラス

◉司獄官吏旅費支給方

明治二十年二月內務省訓令第十號

集治監及假留監管制被定候ニ付テハ典獄副典獄書記看守長「監獄醫」ノ旅費ハ明治十九年六月閣令第十四號內國旅費規則ニ依リ「官等」相當ノ旅費ヲ支給スヘシ

◉監獄醫及教誨師ノ判任待遇者旅費額

明治二十四年八月內務省訓令第十六號

監獄醫及教誨師ニシテ判任待遇ヲ受クル者ノ旅費ハ左ノ表ノ金額ヲ明治十九年(六月)閣令第十四號內國旅費規則ニ依リ支給スヘシ但地方ノ情況ニ依リ認可ヲ經テ定額ノ旅費ヲ節スルコトヲ得　(表ハ之ヲ略ス)

◉學校職員及郡區書記戶長旅費額

明治二十四年八月內務省訓令第十八號

明治二十年(六月)當省訓令第三十七號學校職員及郡區書記戶長旅費額左ノ通リ改正シ明治二十四年八月十六日ヨリ施行ス

明治十九年勅令第六十五號同年閣令第三十五號ノ學校職員及ヒ郡區書記戶長等國庫費支辨ニ屬スル用務ヲ以テ旅行セシムルトキ學校職員ニシテ其奏任待遇ヲ受クルモノハ三等旅費判任待遇ヲ受クルモノ及ヒ郡區書記

戶長ハ四等旅費ヲ內國旅費規則ニ依リ支給スヘシ

蠶種檢査員解傭旅費

明治二十年十一月內務省訓令第四十八號

蠶種檢査員等ノ如キ一時限リ傭入ノモノ解傭ノトキハ本年二月訓令第九條ニ準シ旅費支給スヘシ

租稅檢査員旅費支給方

明治十九年(八月)大藏省訓令第二十九號

明治二十二年四月大藏省訓令第二十九號

定シ本年五月一日ヨリ施行ス

一　租稅檢査員受持檢査區內ノ巡廻旅費ハ月額金十三圓ヲ支給スヘシ其巡廻日數一箇月ニ滿タサル者ハ月額三十分一ノ割合ヲ以テ其日數ニ應シ支給スヘシ(二十三年大藏省訓令第六十六號ヲ以テ『十五圓』ヲ『十三圓』ト改ム)

一　府縣廳下檢査區內ノ旅費月額ハ實地ノ狀況ニ依テ大藏大臣ノ認可ヲ經テ適宜減額支給スヘシ

一　府縣廳下外ノ檢査區ト雖モ廳下所屬檢査區ト其狀況ヲ同フスル地方ハ前項ニ依リ適宜減額支給スヘシ(二十三年大藏省訓令第六十六號ヲ以テ追加)

土地檢査ノ收稅屬旅費支給方

明治二十二年六月大藏省訓令第四十八號

土地檢査ノ爲メ出張スル收稅屬ノ旅費ハ本年七月一日以降月額ヲ廢シ內國旅費規則ニ依リ支給スヘシ

內國稅徵收費ノ支辨旅費支給方

明治二十四年三月大藏省訓令第二十一號

內國稅徵收費支辨方左ノ通相定メ明治二十四年四月一日ヨリ施行ス但明治十九年(六月)當省訓令第二十八號第二項及明治二十三年(十一月)訓令第百四十七條本年(一月)訓令第六號ハ本訓令施行ノ日ヨリ相廢ス

一　月額ヲ以テ支給スヘキハ旅費ノ外總テノ內國旅費規則ニ據リ支給スヘシ(二十四年大藏省訓令第六十七號ニテ改正)

一　土地檢査員所轄內ノ巡廻旅費ハ月額金十五圓ヲ支給スヘシ

一　官稅檢査員所轄內ノ巡廻旅費ハ月額金十二圓ヲ支給スヘシ

一　土地及間稅ノ檢査員其分署所在地市町村內ノ巡廻ハ旅費ヲ給セス但宿泊スルトキハ其數ニ應シ一泊金參拾錢以內ヲ增給スルコトヲ得此場合ニ於テハ其支給額及施行期日ヲ屆出ヘシ(明治二十七年四月大藏省訓令第二十四號ニテ改正)

一　分署所在地市町村ニ接續スル町村若ハ其町村ノ一部落(大小字等ヲ總稱ス)ニシテ分署所在地市町村ト別ニ區分ヲ要セサルモノハ大藏大臣ノ認可ヲ經テ分署所在地市町村ニ準スルコトヲ得

一　土地及間稅ノ檢査巡廻日數一箇月ニ滿タサルモノハ月額三十分一ノ割合ヲ以テ其日數ニ應シ支給スヘシ

一　土地ノ便利其他ノ狀況ニ依リ府縣知事大藏大臣ノ認可ヲ經テ適宜減額支給スルコトヲ得

雇員ノ旅費ハ府縣知事適宜其支給額ヲ定メ大藏大臣ノ認可ヲ經ヘシ

市町村吏國庫支辨ノ用務旅行ノ旅費支給方

明治二十三年四月內務省訓令第十八號

市町村吏ナシテ國庫支辨ノ用務ニ付旅行セシムルトキハ明治十九年本省令第十一號警察署吏其他內國旅費概則甲號表面ノ旅費ヲ同年閣令第十四號內國旅費規則ニ據リ支給スヘシ

水產及馬匹兩調査會ノ會長及其他ノ者ノ旅費支給ノ件

明治二十八年六月勅令第七十八號

朕水產調査會及馬匹調査會ノ會長、委員、臨時委員旅費支給ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

水產調査會及馬匹調査會ノ會長、委員、臨時委員ノ旅費ハ鐵道會議議長議員及臨時議員旅費支給規則ノ例ニ依リ之ヲ支給ス

鐵道會議々長議員及臨時議員旅費支給規則

明治二十五年十二月勅令第百九號

朕鐵道會議々長議員及臨時議員旅費支給規則ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

鐵道會議々長議員及臨時議員旅費支給規則

第一條　鐵道會議々長議員及臨時議員ノ旅費ハ別表定ムル所ニ從ヒ之ヲ支給ス但東京滯在中ハ日當ヲ支給セス

第二條　官吏又ハ帝國議會議員ニシテ鐵道會議々長議員若クハ臨時議員タルモノ所屬官廳又ハ帝國議會ヨリ旅費ヲ受取リ又ハ受取ヘキ場合ハ別ニ旅費ヲ支給セス

第三條　內國旅費規則第四條ニ據リ官船若クハ各廳ニ於テ借入傭入ノ船舶ニ乘込ミ出張スル場合ニ於テハ官ヨリ賄ヲナサヽルトキハ一日食卓料金壹圓參拾錢ヲ支給ス

第四條　鐵道會議々長議員及臨時議員ノ旅費ニ關スル規程ハ本則ニ定ムル外總テ明治十九年閣令第十四號內國旅費規則ニ準據スヘシ

(別表畧之)

土木會委員及臨時委員旅費支給方

明治二十六年七月勅令第六十六號

土木會會長委員及臨時委員ノ旅費ハ明治二十五年勅令第百九號鐵道會議々長議員及臨時議員旅費支給規則ノ例ニ依リ之ヲ支給ス

北海道廳集治監典獄判任等外吏傭等旅費支給方

明治十九年六月大藏省訓令第二十八號

閣令第十四號ヲ以テ定メラレタル旅費支給方左ノ通心得ヘシ

一　北海道集治監典獄ハ內國旅費規則四等旅費ヲ給ス(二十四年大藏省訓令第二十一號ヲ以テ次項ヲ削除ス)

一　北海道廳府縣ノ判任官並ニ准判任官(新官制ニ據リ官等ヲ定メサルモノ)ハ屬官御用掛ノ外ト雖總テ當省訓令第二十三號第一項ニ據リテ旅費ヲ給ス但地方稅支辨ノ官吏ト雖國庫ヨリ旅費ヲ給スルトキ亦同シ

一　支給上新舊旅費規則相跨リタル場合ニ於テハ新規則施行期日後直

ニ到着セシ御用地ヲ以テ打切リ又巡廻中ノ者ハ該期日ヲ押ヘ新舊支給方ヲ區分スヘシ

◉陸軍豫備役後備軍軀員兵員並歸休兵召集旅費概則

明治二十一年七月陸軍省令第十五號

陸軍豫備役後備軍軀員兵員並歸休兵召集旅費支給概則左ノ通相定ム

第一條　豫備役後備軍軀員將校ニ在リテハ旅中諸費トシテ一日陸路十里詰ノ割ヲ以テ日當金壹圓五拾錢ヲ支給ス但近方三里未滿ハ之ヲ給セス三里以上六里未滿ハ日當ノ半額六里以上ハ全額ヲ給ス又十里以上ノ端里數一里未滿ハ給セス一里以上六里未滿ハ半額六里以上ハ全額ヲ給ス

第二條　歸休兵並豫備役後備軍軀員下士及兵員ニ在リテハ旅中諸費トシテ一日陸路十里詰ノ割ヲ以テ日當金四拾錢ヲ支給ス但近方及端里數ノ給與方ハ前條ニ同シ

第三條　召集地到着ノ際官ノ都合ニ依リ各自ニ宿泊セシムルトキハ其到着翌日ヨリ宿泊ノ數ニ應シ軀員將校ハ滯在日當金五拾錢軀員下士及兵員ハ日當金貳拾八錢ヲ支給ス但近方三里未滿ノ者及三里以上六里未滿ノ者並十里以上端里數六里未滿ノ者ニ限リ到着當日ハ軀員兵員共旅中日當ノ半額ヲ給ス又下士以下ニシテ翌日午後ニ至リ入營セシムルトキハ費食料トシテ金八錢ヲ支給ス

第四條　旅中川留雪支ノ爲メ他道ヲ迂回シ若シクハ滯在シ又ハ病氣船待等ノ爲メ滯在シタルトキハ其事由ヲ詳具セシメ其判然タルモノハ右迂路ニ係ル延伸里程ヲ通算シテ日當ヲ給シ戒ハ宿泊ノ數ニ應シテ滯在日當ヲ支給ス但下士以下ニ在リテハ郡區長若クハ戸長ノ證明書病氣ハ醫師ノ診斷書ヲ要ス

第五條　陸路計算法ハ概子郵便線路圖ニ依リ算出スルモノトス但島嶼居住ノ者船賃ハ時宜ニ依リ實費支給スルコトアルヘシ

第六條　此概則ハ明治二十一年十一月十日ヨリ施行シ同日ヨリ明治二十年逆甲第三十二號陸軍省達ハ廢止ス

◉陸軍召集條例樣式召集旅費概算表調査方

明治十九年十二月陸軍省訓令甲第三號

本年當省令甲第三十九號陸軍召集條例第十四樣式召集旅費概算表ハ現員ノ十分ノ三ヲ加ヘ調査スヘシ

但本文十分ノ三ニ當ル人員ノ旅費金ハ現員中最遠隔ノ者ニ均シキ額ヲ以テ算スヘシ

◉陸軍召集條例第六十六條召集旅費概算表差出方

明治二十年六月陸軍省訓令甲第六號

陸軍召集條例第百六十六條ニ據リ地方廳ヨリ當省ヘ可差出召集旅費概算表ハ本年十一月十日調ノ分ヨリ左ノ雛形ニ準シ各郡區ヲ一表ニ調製シ正副二通差出スヘシ

（雛形ハ略ス）

◉召集旅費受領ノ爲メ出頭スヘキ者一日間ニ往復シ能ハサルトキ出張及通知方

明治二十三年三月陸軍省訓令甲第三號

明治二十三年（二月）陸軍省令第五號ニ依リ召集旅費金受領ノ爲メ監視區長駐劄所郡役所等ヘ出頭スヘキ者ノ內若シ一日間ニ往復シ能ハサル者アルトキハ更ニ最寄ノ町村役場ヘ監視區長ヲ出張セシム可シ其一日間ニ往復シ能ハサル者ハ島司又ハ郡長ヲシテ豫メ取調ヘシメ且適宜ノ町村役場ヲ監視區長ヘ通知セシム可シ

◉農商務省雇及官林巡邏旅費規則

明治十九年七月農商務省訓令第十一號

明治十三年（七月）內務省丙第五十四號達中旅費ニ關スル事項ヲ廢シ更ニ左ノ通リ相定メ本年八月一日ヨリ施行ス

雇及官林巡邏旅費規則

第一條　官林保護費ヲ以テ支給スル雇及官林巡邏旅費ハ左表定ムル所ニ從ヒ之ヲ支給ス

第二條　官林巡邏擬當官林ヲ巡視スルハ其常務ナルヲ以テ旅費ヲ給セス殊更ニ出張中附及官林被害事件ニ付地方廳又ハ警察署等ヘ出張スル時ニ限リ旅費ヲ支給スルモノトス

第三條　前條ノ外支給方法ハ內國旅費規則ニ據ル

別表（二十三年五月農商務省訓令第二十五號ヲ以テ本表改正）

職名＼事項	汽車賃	汽船賃	官外車馬賃	官內車馬賃	官外日當	官內日當
雇	一哩毎ニ	一海里毎ニ	一里毎ニ	一里毎ニ	一日毎ニ	一日毎ニ
官林巡邏	金貳錢	金貳錢	金七錢	金四錢	第五拾錢	金三拾錢

◉鑛業條例中ノ出張吏員旅費日當納附手續

明治二十五年四月農商務省令第九號

鑛業條例第十四條第三十一條第四項及ヒ第四十五條ニ依リ旅費日當ヲ納付スル手續左ノ通相定ム

第一條　鑛業條例第十四條第一項第三十一條第四項及第四十五條第一項ニ依リ吏員ノ出張ヲ命シタルトキハ鑛山監督署長ハ出張吏員ノ氏名及ヒ旅費日當ノ概算額ヲ出願人又ハ鑛業人ニ通知スヘシ

第二條　出願人又ハ鑛業人ハ前條ノ通知書到達ノ日ヨリ十四日以內ニ旅費日當ノ概算額ヲ出張吏員ニ交付スヘシ

第三條　出張吏員ハ實地臨檢ヲ終ヘタル後旅費日當ノ精算ヲ爲シ過不足アルトキハ鑛山監督署長ヨリ之ヲ出願人又ハ鑛業人ニ通知シ出張吏員ヲシテ超過額ヲ返付シ又ハ不足額ヲ追求セシムヘシ

◉陸軍召集條例中召集旅費ニ關スル件

明治二十五年三月陸軍省令第六號

陸軍召集條例中召集旅費ニ關スル件左ノ通定ム

一　條例第三十二條第五十三條第六十三條第八十四條ノ召集令狀若クハ第百條第百二十三條ノ演習令狀ヲ領收シタル在鄉陸軍々人ハ陸軍召集旅費支出規程第八條ノ官吏ニ就キ其旅費金ヲ受領ス可シ但特ニ支給ノ場所ヲ設クル地ト雖モ疾病其他ノ事故ニ由リ期ニ後レ召集ニ應スル者ハ島嶼郡役所ニ就キ其旅費ヲ受領ス可シ

一　條例第三十二條第五十三條ノ出發時限ハ召集令狀領收後二十四時以內（旅費金受領ノ爲メ二十四時ヲ經過シタルモノハ旅費金受領後即時トス）但一日行程ハ滊車路二百哩海路百海里陸路十二里詰ヲ以テ最下限トス（二十六年四月陸軍省令第六號ニテ追加）

一　本令ハ明治二十五年五月一日ヨリ施行ス

◉召集演習旅費支給日時ヲ定メ達方

二十五年三月陸軍省訓令甲第二號

陸軍召集旅費支出規程第十一條ニ據リ演習召集ノ旅費金ヲ支給スル日時ハ島司郡長（北海道廳函館ハ區長）ヨリ之ヲ各自ニ達セシメ又市ニ在テハ市長（東京京都大坂ノ三市ハ區長）ヨリ直間稅分署長ヘ協議ノ上之ヲ定メ各自ニ達セシム

第四節　恩給年金其他諸給與

第一款　文官恩給年金其他諸

給與

◎官吏恩給法 明治二十三年六月 法律第四十三號

朕官吏恩給法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

官吏恩給法

第一條　文官判任以上ノ者退官シタルトキハ此法律ノ規定スル所ニ依リ恩給ヲ受クルノ權利ヲ有ス

第二條　在官滿十五年以上ノ者左ニ掲クル事項ノ一ニ當ルトキハ終身恩給ヲ給ス

一　年齡六十才ヲ越エ退官ヲ許シタルトキ

一　傷痍ヲ受ケ若シクハ疾病ニ罹リ其職ニ堪ヘス退官ヲ許シタルトキ

一　廢官廢廳若シクハ官廳事務ノ伸縮又ハ非職滿期ニ依リ退官シタルトキ

第三條　左ニ掲クル事項ノ一ニ當ル者ハ前條ノ年限ニ滿タサルモ終身恩給ヲ給シ尙其最下金額十分ノ七マテノ增加恩給ヲ給ス

一　公務ニ因リ傷痍ヲ受ケ一肢以上ノ用ヲ失ヒ若クハ之ニ準スヘキモノニシテ其職務ニ堪ス退官シタルトキ

二　公務ニ依リ健康ニ有害ナル感動ヲ受クルヲ顧ルコト能ハスシテ勤務ニ從事シ爲メニ疾病ニ罹リ一肢以上ノ用ヲ失ヒ若クハ之ニ準スヘキ者ニシテ其職務ニ堪ヘス退官シタルトキ

第四條　滿五年以上國務大臣ノ職ニアル者退官シタルトキハ第二條ノ制限ニ拘ハラス恩給ヲ給ス

第五條　恩給ノ年額ハ退官現時ノ俸給ト在官年數トニ依リ之ヲ定ム即チ在官滿十五年以上十六年未滿ニシテ退官シタル者ノ恩給年額ハ俸給年額ハ二百四十分ノ六十トシ十五年以後滿一年每ニ二百四十分ノ一ヲ加ヘ滿四十年ニ至リテ止ム但シ在官四十年以上ノ者ニ給スヘキ恩給ハ四十年ノ額又十五年未滿ノ者ニ給スヘキ恩給ハ十五年ノ額トス非職滿期ニ由テ退官シタル者ノ恩給ハ其在職最終ノ俸額ニ依テ之ヲ算定ス交際官及領事貿易事務官等ノ恩給ハ其官等ニ對スル普通文官ノ俸額ニ依テ之ヲ算定ス

兼官ニ依テ受クル加俸ハ恩給年額ヲ算定スルニ當リ之ヲ除算ス

恩給年額圓位未滿ノ數ハ圓位ニ滿タシム

第六條　恩給ヲ受ケ又ハ恩給ヲ受クスシテ退官シタル者在官中ノ公務ニ起因スル傷痍疾病引續キ重症ニ趨キタルトキハ其事由ヲ詳悉シ左ノ期限內ニ申出レハ査覈ノ上相當ノ恩給ヲ給ス

一　一肢ノ用ヲ失ヒ若クハ之レニ準スヘキ者ハ退官後二ケ年

二　一肢ヲ亡シ或ハ二肢ノ用ヲ失ヒ又ハ兩眼ヲ盲シ若クハ二肢ヲ亡シ若クハ之ニ準スヘキ者ハ退官後三ケ年

第七條　在官年數ハ判任官以上初任ノ月ヨリ起算シ退官ノ月ヲ以テ終リトス

明治四年八月以前ヨリ任官セラレタル者ハ同年同月ヨリ起算ス但シ本項ニ掲クル者退官スルトキハ明治四年七月以前ノ勤務ニ對シテハ同年同月ノ現官等ニ相當スル月俸ノ半額ヲ以テ在官年數ノ一ケ年ニ當テ其年數ニ應スル金額ヲ一時支給ス

第八條　左ニ掲クル月數及日數ハ在官年數中ニ算入スヘシ

一　判任以上出仕官ニ在ルノ月數

二　武官ヨリ文官ニ轉シタル者又ハ軍人恩給ヲ受ケスシテ現役ヲ退キタル後文官ニ任シタル者ハ現役中ノ日數

三　從軍年加算ノ年月

四　非職及休職中ノ月數

五　退官ノ後再ヒ任官シタル者ハ前在官ノ月數

六　宮內省ヨリ文官ニ轉シタル者又ハ恩給ヲ受ケスシテ宮內省ヲ退キタル後文官ニ任シタル者ハ宮內判任以上在官中ノ月數

第九條　左ニ掲クル月數及日數ハ在官中ヨリ除算スヘシ

一　年齡二十歲未滿ノ者在官月數

二　高等官試補及判任官見習中ノ月數

三　郡區書記ヲ除クノ外政府ヨリ俸給ヲ受クサル官職ニ在ル月數及商業ヲ營ムコトヲ得ヘキ官職ニアル月數

四　御用掛リ雇等外出仕勤仕ノ月數

五　第八條第二ニ掲クル者ニ在テハ軍人恩給法ニ依リ除算スヘキ日數

六　自己ノ便宜ニ依リ退官シタル後又ハ懲戒處分若クハ刑事裁判ニ依リ免官シタル後再ヒ任官シタル者ニ在テハ其前官ノ月數

第十條　文官ニシテ從軍シタル者ハ軍人恩給法ノ算則ニ照シテ其從軍年ヲ加算ス

第十一條　恩給ヲ受クル者再ヒ官ニ就キ滿一年以上在官シタル後退官シタルトキハ左ノ區別ニ依リ恩給ヲ給ス

一　退官現時ノ俸給前後相同シカラサルトキハ前官年數ヲ後官年數ニ通算シ後官ニ對スル恩給額ト前ノ恩給額トヲ比較シ其多キ方ヲ給ス

二　退官現時ノ俸給前後相同シキトキハ在官年數ニ依リ恩給ヲ增加ス但前官十五年未滿ニシテ恩給ヲ受ケタル者ニ在テハ前後通算シテ十六年以上ニ至ラサレハ增加セス

第十二條　恩給ヲ受クル者重罪ノ刑ニ處セラレ若クハ日本臣民タルノ分限ヲ失ヒタルトキハ恩給ヲ剝奪ス左ニ掲クル事項ノ一ニ當ルトキハ其間恩給ヲ停止ス

一　判任以上ノ官ニ任シ政府ヨリ俸給ヲ受クルトキ但商業ヲ營ムヿヲ得ヘキ官職ニ在ルトキハ此ノ限ニ非ス

二　公權停止セラレタルトキ

第十三條　年齢未タ六十歳ニ至ラスシテ自己ノ便宜ニ依リ退官シタル者又ハ懲戒處分若クハ刑事裁判ニ依リ免官シタル者ハ恩給ヲ受クルノ資格ヲ失フ

法律ヲ以テ設立シタル議會ノ議員トナリタルノ故ヲ以テ退官シタル者ハ恩給ヲ受クルノ資格ヲ失フ

第十四條　政府ヨリ俸給ヲ受クサル官吏前商業ヲ營ムヿヲ得ヘキ官吏並ニ高等官試補判任官見習ハ恩給ヲ受クルノ權ナキモノトス但シ郡區書記ハ此ノ限リニアラス

商業ヲ營ムコトヲ得ヘキ官吏並ニ高等官試補判任官見習ニシテ公務ノ爲メ傷痍ヲ受ケ若クハ疾病ニ罹リ此ノ法律第三條ニ該當スル者ニ限リ退官又ハ罷免現時ノ俸給四分ノ一ヲ終身給スルコトヲ得

第十五條　恩給支給ノ期ハ退官ノ翌月ヨリ始マリ死亡ノ月ヲ以テ終ルモノトス

第十六條　恩給ハ之ヲ受クヘキ事由ノ生シタル後三ケ年内ニ請求セサレハ其權利ヲ抛棄シタルモノトス

第十七條　恩給ノ支給ハ本屬長官ノ證明ニ依リ恩給局ノ審査ヲ經テ内閣總理大臣之ヲ裁定ス行政上ノ處分ニ依リ恩給ニ關スル權利ノ障害セラレタリトスル者ハ六ケ月以内ニ恩給局ニ具申シテ裁決ヲ請フヿヲ得其裁決ニ服セサル者ハ一ケ年以内行政裁判所ニ出訴スルヿヲ得但シ左ノ事件ニ關シテハ恩給局ノ裁決ハ終審確定スルモノトス

一　傷痍疾病ノ原因及其輕重

二　職務ニ堪ヘルト否ラサルト

第十八條　恩給ハ賣買質入書入スルコトヲ得ス又負債ノ抵當トシテ差押フルコトヲ得ス

第十九條　明治十七年達官吏恩給ニ依リ恩給ヲ受クタル者ハ總テ其恩給令ニ依ルヘシ但シ其權利消滅及停止ハ此法律ニ依ル

第二十條　此法律施行前ニ退官シタル者ノ恩給ハ明治十七年達官吏恩給法ニ依ルヘシ但シ此法律施行ノ日ヨリ三ケ年内ニ請求セサレハ之ヲ受クヘキ權利ヲ抛棄シタルモノトス

第二十一條　此法律ハ明治二十三年七月一日ヨリ施行ス

從前ノ命令ニシテ此法律ニ抵觸スルモノハ總テ廢止ス

官吏恩給法施行規則

明治二十三年七月閣令第三號

官吏恩給法施行規則左之通リ定ム

第一條　恩給ノ請求

官吏恩給法第二條第三條第六條及第七條第二項第十四條第二項ニ依リ恩給ヲ受クヘキ者ハ恩給請求書ヲ退官當時ノ本屬長官ニ差出スヘシ但シ廳官廳廳等ニ當リタルトキハ其事務ノ引繼ヲ受ケタル官廳ノ長官ニ差出スヘシ

第二條　官吏恩給法第四條ニ依リ恩給ヲ受クヘキ者ハ恩給請求書ヲ内閣總理大臣ニ差出スヘシ

第三條　恩給請求書ニハ左ノ書類ヲ添付スヘシ

一　任官中履歴書

二　市町村長ノ證明シタル戸籍調書但シ官吏恩給法第十四條第二項ニ掲クタルモノハ之ヲ添付スルニ及ハス

第四條　公ノ爲メ傷痍ヲ受ケ若クハ疾病ニ罹リ恩給ヲ請求スル者ハ前條ニ掲クル書類ノ外左ノ書類ヲ以テ其事實ヲ證明スヘシ官吏恩給法第六條ニ依リ恩給ヲ請求スル者亦同シ

一　現認證書又ハ之ヲ證スル公文ノ寫若クハ口供書

二　醫師ノ診斷證書

第五條　恩給ノ請求ヲ受ケタル各廳長官ハ査覈ノ上請求ノ理由アリト認ムルトキハ請求者ノ在官年數及恩給年額計算書ヲ作リ證據書類ヲ添ヘ内閣總理大臣ニ差出スヘシ

各廳長官ニ於テ請求ノ理由ナシト認ムルトキハ意見書ヲ具シテ之ヲ内閣總理大臣ニ差出スヘシ

第六條　内閣ニ於テ前條ノ請求ヲ許可シタルトキハ恩給證ヲ作リ本屬廳ヲ經テ本人居住ノ地方廳ヲシテ之ヲ下付セシム但シ一時ノ支給ニ係ルモノハ辭令書ヲ用ユ

恩給證書若クハ辭令書ヲ下付シタルトキハ内閣ハ其旨ヲ大藏大臣ニ通報スヘシ

第二章　恩給ノ支給

第七條　恩給ハ其年額ヲ四分シ四月七月十月一月ニ於テ其前三ケ月分ヲ大藏省ヨリ本人居住地ノ地方廳ヲ經テ支給ス但シ權利消滅若クハ停止ノトキ及一時支給ノ金額ハ期月ニ係ハラス之ヲ支給ス（二十七年十月閣令第五號ニテ本條改正）

第八條　恩給ヲ受クル者其金額ヲ受領セントスルトキハ恩給證書ヲ以テ其受領權アルコトヲ證明スヘシ

第九條　恩給ヲ受クル者他ノ地方ニ居住ヲ轉スルトキハ恩給支給ノ月ヨリ三十日以前其ノ旨ヲ新舊居住地ノ地方廳ニ屆出ヘシ若シ此ノ期日ヲ過キ屆出タルトキハ其ノ一期ノ金額ハ尚ホ從前ノ地方廳ニ於テ支給ス

地方廳ニ於テ前項ノ屆出ヲ受ケタルトキハ各廳間互ニ其ノ者ニ係ル恩給支給ノ受繼ヲ爲シ其ノ引繼ヲ受ケタル地方廳ヨリ大藏省ニ通知スヘシ（同上）

第十條　官吏恩給法第十二條ニ當リタル者ノ恩給支給ノ終始ハ左ノ各項ニ依ルヘシ

一　重罪ノ刑ニ處セラレタルトキハ確定裁判ノ宣告ヲ受ケタル日、日本臣民タルノ權利ヲ失ヒタルトキハ其失ヒタル日ヲ以テ支給ヲ終ル

二　判任官以上ニ任シ政府ヨリ俸給ヲ受ルトキハ俸給ノ支給ヲ始ムル日ノ前日ヲ以テ支給ヲ終リ其退官シタルトキハ俸給ノ支給ヲ終リタル日ノ翌日ヨリ支給ヲ始ム

三　公權ヲ停止セラレタルトキハ禁錮ノ刑ニ處セラレ若クハ監視ニ付セラルヘキ確定裁判ノ宣告ヲ受タル日ヲ以テ支給ヲ終リ刑期滿限ノ翌日ヨリ支給ヲ始ム

第十一條　官吏恩給法第七條第二項ニ掲クル月俸トハ明治四年六月東京淺草米廳ノ平均相場ニ依リ當時ノ官祿一ケ月分ニ相當スル金額トス

第十二條　官吏恩給法第三條ニ掲クル最下金額十分ノ七マテノ增加恩給等差ハ左ノ如シ

第一項　兩眼ヲ盲シ若クハ二肢以上ヲ亡シタルトキ　十分ノ七

第二項　前項ニ準スヘキ傷痍ヲ受ケ若クハ疾病ニ罹リタルトキ　十分ノ六

第三項　一肢ヲ亡シ若クハ二肢ヲ失ヒタルトキ　十分ノ五

第四項　前項ニ準スヘキ傷痍ヲ受ケ若クハ疾病ニ罹リタルトキ　十分ノ四

第五項　一眼ヲ盲シ若クハ一肢ノ用ヲ失シタルトキ　十分ノ三
第六項　前項ニ準スヘキ傷痍ヲ受ケ若クハ疾病ニ罹リタルトキ　十分ノ二
傷痍疾病ノ等差ハ明治十八年達文官傷痍疾病等差例ニ依ル

第三章　恩給ノ停止

第十三條　恩給ヲ受ル者重罪若クハ禁錮ノ刑ニ處セラレ又ハ監視ニ付セラレタルトキハ其確定裁判ノ宣告ヲ爲シタル裁判所ヨリ之ヲ大藏省ニ通知スヘシ

第十四條　官吏恩給法第十二條第二項ノ第一ニ當ル者アルトキハ其任用シタル官廳ヨリ大藏省ニ通知スヘシ解任シタル時モ又同シ但シ此通知書ニハ本人恩給ノ支給ヲ受ケタル地方廳名及俸給ノ支給ヲ始ムル日(解任ノトキハ支給ヲ終リタル日)ヲ付記スヘシ

第十五條　恩給ヲ受ル者死去シタルトキハ其遺族ヨリ地方廳ニ届出ヘシ其遺族ニシテ扶助料ヲ受クヘキ權利ナキトキハ死去ノ届出ヲ爲スト同時ニ恩給證書ヲ返納スヘシ
地方廳ニ於テ前項ノ届出ヲ受タルトキハ直チニ大藏省ニ通知シ其恩給證書ハ內閣恩給局ニ送付スヘシ

第十六條　大藏省ニ於テ第十三條第十四條第十五條ノ通知ヲ受ケタルトキハ之ヲ內閣恩給局ニ通知シ且第十三條第十四條ノ場合ニ於テハ地方廳ニ通知シテ其恩給ノ支給ヲ停止シ又ハ復給セシムヘシ
地方廳ニ於テ此ノ通知ヲ受ケタルトキハ其恩給ヲ剝奪スヘキモノハ恩給證書ヲ收メテ內閣恩給局ニ送付スヘシ

第四章　雜則

第十七條　水火災盜難等ニ由リ恩給證書ヲ亡失シタル者ハ居住地ノ地方廳ニ届出ヘシ
地方廳ニ於テ前項ノ届出ヲ受タルトキハ其事實ヲ調査シ亡失ノ事由ヲ具シテ內閣恩給局ニ申出ヘシ此場合ニ於テ恩給局ハ恩給證書ノ謄本ヲ作リ地方廳ヲ經テ本人ニ下付スヘシ
前項恩給證書ノ謄本ハ恩給證書ト同一ノ効力アルモノトス

第十八條　恩給ヲ受ル者改氏名シタルトキハ居住地ノ地方廳ニ届出ヘシ
地方廳ハ恩給證書ノ裏面ニ其事實ヲ記載シ長官署名捺印ノ上本人ニ下付シ其旨ヲ內閣恩給局及大藏省ニ通知スヘシ

第十九條　明治十七年達官吏恩給令ニ依リ恩給ヲ受ル者左ノ場合ニ於テハ本則ニ依ル
一　死去又ハ權利消滅又ハ停止ノトキ
二　恩給證書ノ亡失シタルトキ
三　改氏名又ハ居住地ヲ轉シタルトキ(上同)

第二十條　官吏恩給法第二十條ニ依リ恩給ヲ請求スルモノハ本則ニ依ルヘシ

第二十一條　市制町村制ヲ施行セサル地方ニ於テハ本規則ニ依リ市長村長ノ爲ヘキ職務ハ區戶長ニ於テ之ヲ行フヘシ

◎恩給扶助料ノ權利ニ關スル恩給局裁決手續

明治二十四年六月閣令第二號

行政上ノ處分ニ依リ恩給扶助料ノ權利ニ關スル恩給局裁決手續左ノ通リ定ム

第一條　行政上ノ處分ニ因リ恩給扶助料ニ關スル權利ヲ障害セラレタリトスル者恩給局ノ裁決ヲ請ハントスルトキハ其事由ヲ文書ニ認メ身分職業住所年齡ヲ記載シ署名捺印シ之ニ證據書類ヲ添ヘ內閣恩給局長ニ差出スヘシ
前項ノ書類ハ郵便ヲ以テ之ヲ差出フヲ得

第二條　恩給局ニ於テ前條ノ申立理由アリト認ルトキハ其書類ヲ當該官廳ニ送付シ相當ノ期限ヲ定メ答辯書ヲ添ヘテ之ヲ恩給局ニ差出サシムヘシ

第三條　恩給局ニ於テ必要ト認ムルトキハ請求者又ハ當該官廳ノ官吏ヲ召喚シ口頭陳述ヲ爲サシムルヲヲ得

第四條　恩給局ニ於テ裁決シタルトキハ裁決書二通ヲ作リ請求者及當該官廳ニ交付スヘシ

◎文官判任以上退官賜金

明治廿三年六月勅令第九十八號

朕茲ニ文官判任以上ノ者退官賜金ノ件ヲ裁可ス
文官判任以上ノ者在官滿一年以上ニシテ退官シタル者ニハ退官現時ノ俸給半箇月分ヲ以テ在官年數ノ一箇年ニ當テ其年數ニ應スル金額ヲ一時支給ス但シ非職滿期ニ依リ退官シタル者ハ其在職最終ノ俸給額ニ依リ之ヲ給ス(第廿號ニテ削除ス二十六年四月勅令)
本令施行前ニ滿年賜金若クハ一時賜金ヲ受ケタル者又ハ前項ノ賜金ヲ受ケタル者再ヒ任官シ自後退官シタルトキハ前項ニ掲クル在官年數ヲ其再任ノ日ヨリ起算ス
恩給ヲ受クル者竝ニ自己ノ便宜ニ由リ退官シタル者又ハ懲戒處分若クハ刑罪裁判ニ由リ免官シタル者ニハ本令ノ賜金ヲ給セス
本令ハ明治二十三年七月一日ヨリ施行ス

◎官吏遺族扶助法

明治二十三年六月法律第四十四號

朕官吏遺族扶助法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

官吏遺族扶助法

第一條　文官判任以上ノ者左ニ掲クル事項ノ一ニ當ルトキハ其遺族ハ此法律ノ規定スル所ニ依リ扶助料ヲ受クルノ權利ヲ有ス但第二條ノ納金ヲ爲スヘキ義務ナキ者ノ遺族ハ此限ニアラス
一　在官十五年以上ノ者在官中死去シタルトキ
二　在官十五年未滿ノ者公務ノ爲メ死去シタルトキ
三　恩給ヲ受ル者死去シタルトキ

第二條　文官判任以上ノ者ハ其俸給等分ヲ國庫ニ納ムヘシ

第三條　交際官領事貿易事務官等其俸給普通文官ヨリ多額ナルトキハ普通文官ノ俸給ニ依リ小額ナルトキハ現ニ受ル所ノ俸給ニ依リ第二條ノ納金ヲ爲スヘシ
政府ヨリ俸給ヲ受ケサル官吏及商業ヲ營ムヲヲ得ヘキ官吏並ニ高等官試補判任官見習ノ俸給及兼官ニ依テ受ル加俸ニ對シテハ第二條納金ヲ要セス

第四條　寡婦扶助料年額ハ亡夫ノ受クタル若クハ受クヘキ恩給年額三分ノ一トス公務ノ爲メ受ケタル傷痍ニ原因シテ死去シ又ハ非常ノ勞動及困苦ヲ忍ヒ勤務ニ從事シ爲メニ發病死去シ又ハ公務ニ依リ傳染病者ニ接シ該病毒ニ感染シテ死去シ又ハ戰地ニ於テ若クハ公務旅行中流行病ニ罹リ死去シタル者ノ寡婦扶助料ハ亡夫ノ俸給ニ對シ官吏恩給法第五條ニ依リ算出シタル恩給年額三分ノ二トス
扶助料年額圓位未滿ノ數ハ圓位ニ滿タシム

第五條　寡婦ナキトキ又ハ扶助料ヲ受クル寡婦死去シ若クハ權利消滅シタルトキハ其扶助料ヲ孤兒ニ給ス

第六條　孤兒扶助料ハ數子アルトキハ家名繼襲者ニ給シ戶主ニ非サル者ノ孤兒ニ在テハ長子ニ給ス其繼襲者及長子死去シ若クハ權利消滅シ若クハ支給期限ノ滿ツルトキハ順次年少者ニ轉給スルモノトス但家名繼襲者ヲ除クノ外男子ヲ先ニシ女子ヲ後ニス

第七條　恩給ヲ受クタル者ノ寡婦ニシテ其夫退官後結婚シタル者ハ扶助料ヲ受クルコトヲ得ス

第八條　此法律ニ於テ孤兒トハ年齡二十歲未滿ノ男女子ニシテ未タ結婚セサル者ヲ云フ但養男女子ハ家名繼襲者ニ限ル

第九條　扶助料ハ之ヲ受クヘキ事由ノ生シタル月ノ翌月ヨリ之ヲ給ス

第十條　扶助料ヲ受クヘキ寡婦及孤兒ナク若クハ扶助料ヲ受クタル寡婦又孤兒戶籍ヲ去リ若クハ死去シ若クハ權利消滅シタルトキハ父母又ハ祖父母ニ終身給スルコトヲ得

其扶助料ハ先ツ父ニ給シ其父存在セサルトキ若クハ權利消滅シタルトキハ母ニ給ス母ヨリ祖父ニ祖父ヨリ祖母ニ轉給スルハ順次此例ニ依ル

第十一條　扶助料ヲ受クヘキ寡婦孤兒又ハ父母祖父母ナクシテ死シタル者ノ戶籍內ニアル二十歲未滿又ハ癈疾若クハ不具ニシテ產業ヲ營ムヿ能ハサル兄弟姉妹アリテ之ヲ給養スル者ナキトキハ寡婦ニ相當スル扶助料一ケ年分ヨリ少カラス五個年ヨリ多カラサル金額ヲ人員ニ拘ハラス一時限リ其兄弟姉妹ニ給スルコトヲ得

第十二條　扶助料ハ之レヲ受クヘキ權利ノ生シタル日ヨリ三ケ年內ニ請求セサレハ其權利ヲ拋棄シタルモノトス

第十三條　扶助料ハ賣買讓與質入書入スルヿヲ得ス又負債ノ抵當トシテ差押フルヿヲ得ス

第十四條　扶助料ヲ受クルノ權利ハ左ノ時ヨリ消滅ス

一　寡婦死去又ハ婚嫁シ若クハ戶籍ヲ去リタル月ノ翌月

二　孤兒死去又ハ婚嫁シ又ハ他家ノ養子女トナリ又ハ年齡二十歲ニ滿チタル月ノ翌月

三　父母祖父母死去シ又ハ戶籍ヲ去リタル月ノ翌月

第十五條　孤兒二十歲ニ滿ツルモ癈疾若クハ不具ニシテ產業ヲ營ムヿ能ハス他ニ給養スル者ナキトキハ寡婦扶助料ノ三分ノ一ヲ其孤兒ニ各終身給スルヿヲ得但シ一戶籍內ニ寡婦ト同額ノ扶助料ヲ受クル者アルトキハ其間之ヲ給セス

第十六條　扶助料ヲ受クル者日本臣民タルノ分限ヲ失ヒ若クハ重罪ノ刑ニ處セラレタルトキハ扶助料ノ支給ヲ廢ス

公權ヲ停止セラレタルトキハ其間支給ヲ停止ス

扶助料ヲ受クル者公權停止中ハ其轉給ヲ受クヘキ者ニ之ヲ給ス

第十七條　在官十五年未滿ノ者在官中公務ノ故ニアラスシテ死去シタルトキハ其遺族ニ一時扶助金ヲ給ス

前項ノ扶助金ハ在職最終ノ俸給年額百分ノ一ヲ在官年數ニ乘シタル額トス但一年未滿ノ在官月數ハ計算セス

第十八條　扶助料ノ支給ハ地方長官ノ申牒ニ依リ恩給局ノ審査ヲ經テ內閣總理大臣之ヲ裁定ス

行政上ノ處分ニ依リ扶助料ニ關スル權利ヲ障害セラレタリトスル者ハ六ケ月以內ニ恩給局ニ具申シテ裁決ヲ請フヿヲ得其裁決ニ服セサル者ハ一ケ年以內ニ行政裁判所ニ出訴スルヿヲ得

第十九條　明治十七年達官吏恩給令ニ依リ扶助料ヲ受クタル者及恩給ヲ受ケタル者ノ遺族扶助料ハ總テ其恩給令ニ依ルヘシ但シ其權利消滅及停止ハ此法律ニ依ル

第二十條　此法律ハ明治二十三年七月一日ヨリ施行ス

◎官吏遺族扶助法施行規則

官吏遺族扶助法施行規則左ノ通リ定ム　明治二十三年七月閣令第四號

官吏遺族扶助法施行規則

第一章　扶助料ノ請求

第一條　官吏遺族扶助法第一條第一第二及第十七條ニ當ル者アリタルトキハ本屬廳ヨリ死者ノ履歷書ヲ其遺族ニ下付スヘシ遺族ハ之ヲ以テ扶助料又ハ一時扶助金請求ノ證トタスヘシ

第二條　官吏遺族扶助法第一條第三ニ當ル者ノ遺族ハ其恩給證書ヲ以テ扶助料請求ノ證トナスヘシ

第三條　官吏遺族扶助法第四條第二項ニ當ル者アリタルトキハ本屬廳ニ於テ事實ヲ查覈シ其傷痍若クハ疾病ノ公務ニ起因シタル正據トナルヘキ書類及醫師ノ診斷ヲナサシメタル場合ニ於テハ其診斷書ヲ併セテ其遺族ニ下付スヘシ遺族ハ之ヲ以テ扶助料請求ノ證トタスヘシ

第四條　扶助料ヲ受ル者死去シ若クハ權利消滅シ若クハ支給期限ノ滿チタルトキ其扶助料ノ轉給ヲ請フ者ハ前者ノ扶助料證書ヲ以テ請求ノ證トタスヘシ

第五條　公權停止中ニ因リ扶助料ノ轉給ヲ受クヘキ者ハ確定裁判ノ宣告書寫ヲ以テ請求ノ證トタスヘシ

第六條　官吏遺族扶助法第十一條及第十五條ニ當ル者ハ其事由ヲ辭記シ癈疾不具ニシテ產業ヲ營ムヿ能ハサル者ハ醫師ノ診斷書ヲ添ヘ扶助料ヲ請求スヘシ

第七條　扶助料ノ請求書ハ請求者署名シ（後見人アレハ其後見人署名スヘシ）親族二名親族ナキトキハ居住地ノ戶主二名以上連署シ市長村長ノ奧印ヲ受ケ第一條乃至第六條ニ揭クル書類ノ外市長村長ノ證明シタル戶籍ノ謄書ヲ添附シ地方長官ニ差出スヘシ

第八條　扶助料ノ請求ヲ受タル地方長官ハ查覈ノ上扶助料年額計算書ヲ作リ證據書類ヲ添ヘ內閣總理大臣ニ差出スヘシ

內閣ニ於テ之ヲ許可シタルトキハ扶助料證書ヲ作リ地方廳ヲシテ之ヲ本人ニ下付セシム但シ一時ノ支給ニ係ルモノハ辭令書ヲ用ユ

扶助料證書若クハ辭令書ヲ下付シタルトキハ內閣ハ其旨ヲ大藏省ニ通報スヘシ

第二章　納金ノ徵收

第九條　官吏遺族扶助法第二條ニ揭クル納金ハ俸給支給ノトキ各廳ニ於テ之ヲ徵收シテ國庫ニ納ムヘシ

第三章　扶助料ノ支給及停止

第十條　扶助料ノ支給ハ官吏恩給法施行規則第七條第八條第九條及第十條第一第三ノ例ニ依リ

第十一條　扶助料ヲ受クル者死去シ若クハ權利消滅シ若クハ支給期限ノ滿チタルトキハ地方廳ニ於テ扶助料ノ支給ヲ廢シ其旨ヲ大藏省ニ通知スヘシ

前項ノ場合ニ於テ扶助料ノ轉給ヲ受クヘキ者ナキトキハ地方廳ニ於テ其扶助料證書ヲ納メテ內閣恩給局ニ送付スヘシ

第十二條　扶助料ヲ受ル者重罪ノ刑ニ處セラレ若クハ公權ヲ停止セラレタルトキハ官吏恩給法施行規則第十三條ノ例ニ依ル

第十三條　大藏省ニ於テ第十一條第十二條ノ通知ヲ受ケタルトキハ官吏恩給法施行規則第十六條ノ例ニ依ル

雜　則

第十四條　水火災盜難等ニ依リ扶助料證書ヲ亡失シタルトキ及扶助料ヲ受取ル者改氏名ヲ爲シタルトキハ官吏恩給法施行規則第十七條及十八條ノ例ニ依ル

第十五條　明治十七年逐官吏恩給令ニ依リ扶助料ヲ請求スルトキハ本則ニ依ルヘシ同令ニ依リ扶助料ヲ受ル者ハ左ノ場合ニ於テ本則ニ依ル

一　死去又ハ權利消滅又ハ停止ノトキ

二　恩給證書ヲ亡失シタルトキ

三　改氏名又ハ居住地ヲ轉シタルトキ（二十七年十月閣令第六號ニテ本項改正）

第十六條　市制町村制ヲ施行セサル地方ニ於テハ本規則ニ依リ市長村長ノ爲スヘキ職務ハ區戸長ニ於テ之ヲ行フヘシ

◎文官傷痍疾病等差例

明治十八年三月第十六號達

「官吏恩給令附則第五條」傷痍疾病等差例左ノ通相定候條右ニ據リ取調候儀ト可心得此旨相達候事

文官傷痍疾病等差例

公務ノ爲メ傷痍ヲ受ケ又ハ疾病ニ罹リ遂ニ一肢以上ノ用ヲ失フニ等シキ不治ノ症トナリ「官吏恩給令附則第五條」ニ揭クル各項ニ該當スル者ニ等差ヲ付スルコト概子左ノ如シ

第一條　偏眼ヲ盲スル者全鼻ヲ失スル者ハ共ニ第五項トシ之ニ偏耳ノ官能ヲ併セ廢スル者ハ第四項トス

第二條　兩耳ヲ聾スル者ハ第四項トス

第三條　偏聾兩耳ノ官能ヲ併セ廢スル者ハ（輕重ヲ酌量シテ）第二項或ハ第三項トス

第四條　一眼ヲ失ヒ他ノ一眼暗昧シ僅ニ自己ノ用ヲ辨スルヲ得ル者ハ第二項トス

第五條　咀嚼言語ノ兩機ヲ併セ廢スル者ハ（輕重ヲ酌量シテ）第一項或ハ第二項トス

第六條　咀嚼ノ用ヲ廢スル者ハ（輕重ヲ酌量シテ）第二項或ハ第三項トシ幾分ノ障碍アル者ハ第五項其輕キ者ハ第六項トス

第七條　精神亡失或ハ錯亂シテ常ニ看護ヲ要スル者ハ第一項トス

第八條　癡呆者クハ健忘症ヲ遺シ常ニ看護ヲ要セサル者ハ（輕重ヲ酌量シテ）第三項若クハ第五項トス

第九條　神經痛ヲ遺シ常ニ看護ヲ要セサル者ハ（輕重ヲ酌量シテ）第五項或ハ第六項トス

第十條　言語ノ機能ヲ廢スル者ハ第三項トシ言語ノ機能ヲ妨ケラレタル者ハ（輕重ヲ酌量シテ）第五項或ハ第六項トス

第十一條　胃腸膀胱等ニ痼疾ヲ遺ス者ハ（輕重ヲ酌量シテ）第二項或ハ第三項トス

第十二條　腸歇爾尼亞ヲ遺ス者ハ（輕重ヲ酌量シテ）第五項或ハ第六項トス

第十三條　陰莖或ハ睾丸ヲ全失スル者ハ第三項トス

第十四條　陰莖ヲ半失スル者偏睾丸ヲ失スル者ハ共ニ第六項トス

第十五條　頸項背腰諸筋ノ運用ヲ妨クル者ハ（輕重ヲ酌量シテ）第五項或ハ第六項トス

第十六條　一肢ヲ失ヒ且他肢ノ用ヲ全廢スル者ハ第一項トス

第十七條　一上肢ヲ失フ者ハ肩關節ヨリ腕關節ニ至ル間ハ何レノ部位ヲ論セス第三項トス

第十八條　肩關節ヨリ腕關節ニ至ル間ノ關節作用ヲ廢スルモ全肢ノ用ヲ廢スルニ至ラサル者ハ第六項トス

第十九條　一手ニ於テ四指以上ヲ失スル者ハ第四項トシ五指癒著若クハ强硬等ノ爲メニ把握採摘ノ用ヲ廢スル者ハ第五項トス

第二十條　一手ニ於テ四指或ハ五指ノ各一部ヲ失スルモ尙把握ノ用ヲ爲シ得ル者ハ第六項トス

第二十一條　一手ニ於テ拇指示指ヲ併セ失スル者或ハ拇指示指ヲ除キ他ノ三指ヲ失スル者ハ第六項トス

第二十二條　一下肢ヲ失スル者ハ股關節ヨリ踝關節ニ至ル間ハ何レノ部位ヲ論セス第三項トス

第二十三條　股關節ヨリ踝關節ニ至ル間ノ作用ヲ妨ケラレタル者ハ（輕重ヲ酌量シテ）第五項或ハ第六項トス

第二十四條　踝骨ヨリ蹠骨ニ至ルノ部ヲ失スル者ハ何レノ部位ヲ論セス第四項トス

第二十五條　一足ニ於テ五指ヲ失スル者ハ第五項トシ第一指ヲ併セ三指ヲ失スル者ハ第六項トス

第二十六條　不治病ノ爲メ常ニ看護ヲ要スル者ハ（輕重ヲ酌量シテ）第一項或ハ第二項トス

第二十七條　不治病前項ヨリ輕キモ歩行スル能ハサル者ハ第三項トス

第二十八條　不治病前項ヨリ輕キモ自己ノ用辨ニ妨碍アル者ハ第四項トス

第二十九條　不治病前項ヨリ輕キモ營業ヲ爲シ難キ者ハ第五項トス

第三十條　不治病前項ヨリ輕キモ營業ヲ妨ケサル者ハ第六項トス

◎恩給及扶助料每期受領ノトキ證書差出方

明治二十三年十月大藏省令第二十四號

本年法律第四十三號第四十四號第四十五號ニ據リ恩給及扶助料ヲ受クルモノハ每期受領ノトキハ本人生存證書ヲ恩給證書ニ添ヘ差出スヘシ

◎三等郵便及電信局長退官死亡賜金

明治二十三年八月勅令第百六十二號

朕三等郵便及電信局長手當金並退官死亡賜金ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

第一條（二十四年勅令第百五十五號ヲ以テ本條ヲ削除ス）

第二條　三等郵便電信局長三等郵便局長及三等電信局長在官中死亡シタルトキ若クハ廢官廢局ノトキ又ハ滿三年以上勤續シタル者退官セシトキハ遞信大臣ニ於テ其勤勞ニ依リ百圓以內ノ金額ヲ給與ス但懲戒處分ニ依リ免官セラレ若クハ刑事裁判ニ依リ官職ヲ失ヒタル者ハ總テ之ヲ給與セス

◎官吏ノ勤續ニ關スル件

明治二十六年十月勅令第百九十八號

朕官吏ノ勤續ニ關スル件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

廢官廢置若クハ官名改定ノ際其ノ廢改ニ係ル官職ニ在ル者即日他官ニ任セラルヽトキハ勤續者トス

第二款　武官恩給年金其他諸給與

◎軍人恩給法

明治二十三年六月法律第四十五號

朕軍人恩給法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

軍人恩給法

第一章　總　則

第一條　陸海軍軍人ニシテ現役ヲ離レタル者ハ此法律ノ規定スル所ニ依リ恩給ヲ受クル權利ヲ有ス

第二條　陸海軍軍人恩給ハ左ノ六種トス

一　退職恩給

二　免除恩給

三　增加恩給
四　賑恤金
五　給助金
六　扶助料

第三條　退職恩給免除恩給增加恩給及寡婦ノ扶助料ハ終身孤兒ノ扶助料ハ年齡滿二十歲ニ至ルマテ賑恤金給助金ハ一時限リ之ヲ給ス

第二章　退職恩給、免除恩給、增加恩給、

第四條　退職恩給ハ准士官以上左ニ揭クル事項ノ一ニ當ルトキハ之ヲ給ス

一　現役十一年以上ニシテ定限ノ年齡ニ達シ又ハ定限ノ年齡ニ達セサルモ傷痍ヲ受ケ若クハ疾病ニ罹リ服役ニ堪ヘス退職シタルトキ
二　戰鬪及戰時平時ニ拘ハラス公務ノ爲メ傷痍ヲ受ケ一肢以上ノ用ヲ失ヒ若クハ之ニ準スヘキ者ニシテ退職シタルトキ
三　戰地ニ於テ流行病ニ罹リ又ハ戰時平時ニ拘ハラス公務ノ爲メ傷痍ヲ受ケ若クハ疾病ニ罹リ服役ニ堪ヘス退職シタルトキ
四　現役十一年以上ニシテ定限ノ年齡ニ達シ又ハ定限ノ年齡ニ達セサルモ服役滿期トナリ或ハ傷痍ヲ受ケ若クハ疾病ニ罹リ服役ニ堪ヘス免官若クハ現役ヲ免除シタルトキ
二　第四條第二又ハ第三ニ依リ免官若クハ現役ヲ免除シタルトキ

第五條　免除恩給ハ下士以下左ニ揭クル事項ノ一ニ當ルトキハ之ヲ給ス
一　現役十一年以上ニシテ定限ノ年齡ニ達シ又ハ定限ノ年齡ニ達セサルモ服役滿期トナリ或ハ傷痍ヲ受ケ若クハ疾病ニ罹リ服役ニ堪ヘス免官若クハ現役ヲ免除シタルトキ
二　第四條第二又ハ第三ニ依リ免官若クハ現役ヲ免除シタルトキ

第六條　退職恩給、免除恩給、年額ハ軍人恩給ヲ受クヘキ事故ノ生シタルトキノ現官階ト其服役年數トニ從ヒ第一號表若クハ第二號表ニ依テ之ヲ給ス但現役四十年以上ノ者ニ給スヘキ恩給ハ四十年ノ額又ハ十一年未滿ノ者ニ給スヘキ恩給ハ十一年ノ額トス

第七條　軍人現役十一年以上ニシテ文官ニ任シタル者又ハ文官ヲ兼任スル者十五年未滿ニシテ退官退職スルトキハ軍人ノ服役年數ニ對スル恩給ヲ給ス其十五年以上ニシテ退官退職スルトキハ文武官ヲ比較シ其年額ノ多キ方ヲ給ス

第八條　退職恩給免除恩給ヲ受タル後再ヒ現役ニ就キ滿一年以上服役シタル者退職又ハ現役ヲ免除シタルトキハ左ノ區別ニ依リ恩給ヲ給ス
一　再ヒ現役ヲ離ルヽトキノ現官階當初恩給ヲ受ケタルトキノ官階ト同等ナラサルトキハ前後年數ニ再役年數ヲ通算シ再役ニ對スル恩給トヲ比較シ其多キ方ヲ給ス
二　前後ノ官階同等ナルトキハ再役ノ年數ニ依リ恩給ヲ增加ス但シ前役十一年未滿ニシテ恩給ヲ受ケタル者ニアリテハ前後通算シテ十二年以上ニ至ラサレハ增加セス

第九條　增加恩給ハ戰鬪及戰時平時ニ拘ラス公務ノ爲メ傷痍ヲ受ケ若クハ疾病ニ罹リ左ニ揭クル事項ノ一ニ當ル者ニ退職恩給免除恩給ノ外特ニ給スルモノトス
一　兩眼ヲ盲シ若クハ二肢以上ヲ亡シタルトキ
二　前項ニ準スヘキ傷痍ヲ受ケ若クハ疾病ニ罹リタルトキ
三　一肢ヲ亡シ若クハ二肢ノ用ヲ失ヒタルトキ
四　前項ニ準スヘキ傷痍ヲ受ケ若クハ疾病ニ罹リタルトキ
五　一眼ヲ盲シ一肢ノ用ヲ失ヒタルトキ
六　前項ニ準スヘキ傷痍ヲ受ケ若クハ疾病ニ罹リタルトキ

第十條　增加恩給ノ年額ハ軍人之ヲ受クヘキ事故ノ生シタルトキノ現官階ニ從ヒ第三號表ニ依リ之ヲ給ス

第十一條　戰鬪及戰時平時ニ拘ラス公務ノ爲メ傷痍ヲ受ケ若クハ疾病ニ罹リ恩給ヲ受ケ又ハ之ヲ受クスシテ現役ヲ離レタル後重症ニ趨キタル者左ノ期限內ニ檢査ヲ出願スルトキハ箇定ノ上相當ノ恩給ヲ給ス
一　一眼ヲ盲シ若クハ一肢ヲ失フニ至リタル者若クハ之ニ準スヘキ者ハ現役ヲ離レタル日ヨリ二箇年
二　一肢ヲシ盲若クハ二肢ノ用ヲ失ヒ若クハ兩眼ヲ盲シ若クハ二肢以上ヲ亡スルニ至リタル者若クハ之ニ準スヘキ者ハ現役ヲ離レタル日ヨリ三箇年

第十二條　傷痍疾病ニ起因シ恩給ヲ請求スル者ハ左ノ書類ニ依リ證明スヘシ

一　傷痍疾病ノ原因ハ現認證書又ハ之ヲ證スル公文ノ寫若クハ口供書
二　傷痍疾病輕重ノ度ハ陸海軍醫官ノ證書若クハ陸海軍長官ノ査驗ヲ經タル醫師ノ證明書

第十三條　退職恩給增加恩給ノ支給ハ現役ヲ離レタル日ノ翌日ヨリ始マリ死亡ノ月ヲ以テ終ルモノトス

第三章　賑恤金給助金

第十四條　賑恤金ハ下士以下左ニ揭クル一項ノ一ニ當リ第九條第六條ヨリ輕症ニシテ免除恩給ヲ受ケサルモノニ之ヲ給ス
一　戰鬪及戰地公務ノ爲メ傷痍ヲ受ケ若クハ第四條第三ニ原因スル疾病ニ罹リ現役ヲ離レタルトキ
二　戰時平時公務ノ爲メ傷痍ヲ受ケ若クハ第四條第三ニ原因スル疾病ニ罹リ現役ヲ離レタルトキ

第十五條　賑恤ハ之ヲ受クヘキ事故ノ生シタルトキノ現官階ニ應シ前條第一ニ當ル者ハ第三號表第五項一ケ年分ヨリ少カラス十ケ年分ヨリ多カラス前條第二ニ當ル者ハ同表第六項一ケ年分ヨリ少カラス十ケ年分ヨリ多カラサル金額トス

第十六條　給助金ハ下士以上現役中死亡シ若クハ現役四年以上十一年未滿ニシテ現役ヲ離レ退職恩給免除恩給ヲ受サル者ニ之ヲ給ス其額ハ第四號表ニ依ル

第四章　服役年

第十七條　服役年ノ始期終期ハ左ノ各項ニ依ル
第一　退職恩給免除恩給ニ依ル服役年之始期
一　下士以上ハ初任ノ日陸軍兵卒ヨリ出身ノ下士以上ハ入營ノ日海軍卒ヨリ出身ノ下士以上ハ五等卒トナリタル日但第二十四條第六ニ當リタル者ハ其兵卒トナリタル日
二　陸軍兵卒ハ入營ノ日海軍卒ハ五等卒トナリタル日但廿四條第七ニ當リタル者ハ其刑期滿限ノ翌日
三　北海道ニ移住ノ際定規ノ給助ヲ受タル屯田兵下士卒ヨリ出身ノ士官以上ハ其士官ニ任シタル日
四　陸軍々人及海軍準士官以上ニシテ明治四年八月以前ヨリ勤仕ノ者ハ同月一日
五　海軍下士以下ニシテ明治二年五月一日以前ヨリ勤仕ノ者ハ同月一日

第二
一　給助金ニ係ル服役年ノ始期
下士以上初任ノ日

第三
一　服役年ノ終期
現役ヲ離レタル日

第十八條　左ニ揭クル日數ハ服役年ニ通算ス
一　前條ニ揭クル服役年ノ始期ヨリ終期ニ至ルマテノ日數
二　豫備後備ニアル者戰時若クハ事變ニ際シ召集シタルトキハ其召集中ノ日數
三　海軍軍人轉シテ陸軍軍人トナリタルトキハ海軍服務ノ日數陸軍軍人轉シテ海軍軍人トナリタルトキハ陸軍服務ノ日數
四　文官ヨリ轉シテ陸軍軍人トナリタル者ニ在テハ恩給ヲ受クヘキ最下限ノ期ニ至ルマテハ文官服務中ノ日數四分ノ三
五　現役ノ者陸軍見習士官海軍候補生若クハ陸海軍諸生徒トナリ再ヒ現役ニ就クルトキハ前後ノ日數
六　現役ヲ離レタル後再ヒ現役ニ就タルトキハ前後ノ日數
七　陸軍見習士官、海軍候補生、陸海軍諸生徒海軍水雷夫及北海道移住ノ際定規ノ給助ヲ受タル屯田兵下士卒ニシテ從軍シタル時ハ其日數

第十九條　左ニ揭クル日數ハ服役年ヨリ除算ス
一　刑期中及逃走中ノ日數
二　陸軍見習士官海軍候補生陸海軍諸生徒中ノ日數從軍中ノ日數ハ此限ニアラス
三　文官奏職中ノ日數ニシテ官吏恩給法ニ依リ除算スヘキ月數
四　年齡十七年未滿ノ日數

第五章　從軍年

第二十條　從軍年ハ現役外ノ年月ト爲シ之ヲ其服役年數ニ加算スルモノトス

第二十一條　從軍年ノ加算ハ左ノ各項ニ依ルヘシ

一　外國戰ニ當リ出征軍ニ編入セラレ內國港灣ヲ出發シタルトキハ二個年

二　內國戰ニ當リ出征軍ニ編入セラレ戰地ニ臨ミタルトキハ一個年

三　臨戰合圍地境內ニ於テ服役シタルトキ外國ニ在テハ二個年內國ニ在テハ一個年

四　日本國外ノ鎭戍ニ在タルトキハ一個年

五　出征事件ニ關シ功績アル者一時ノ出兵ヲ出征軍ト見做シ從軍年ニ加算スヘキ場合ニハ勅裁ニ依ル

第二十二條　海軍軍人ノ外國航海ハ從軍年ニ準シ內國港灣出發ノ日ヨリ一航海ヲ半ケ年ニ加算ス其航海十二月ニ超エルトキハ更ニ半個年ヲ加算ス但シ第二十一條ニ當ルトキハ本條ヲ適用セス

第二十三條　從軍年ノ加算ハ十二ケ月間數回ノ戰役ニ從ヒ若クハ航海ヲ爲スト雖モ重複シテ之ヲ算セス但其一年以上ニ亘リ十二ケ月ニ餘ル所ノ分數ハ更ニ一役若クハ一航海ト爲ス

第六章　恩給ヲ受ヘキ資格及權利ノ消滅停止

第二十四條　軍人左ニ揭クル事項ノ一ニ當ルトキハ退職恩給免除恩給增加恩給賑恤金給助金ヲ受ヘキ資格消滅ス

一　重罪ノ刑ニ處セラレタルトキ

二　日本臣民タルノ分限ヲ失ヒタルトキ

三　將校相當官准士官ニ於テハ陸海軍刑法剝官ヲ附加スル禁錮ノ刑ニ處セラレ若クハ普通刑法其他ノ罰則ニ依リ禁錮ノ刑ニ處セラレ官職ヲ失ヒタルトキ

四　將校及相當官ニ於テハ陸海軍將校分限令第二條第一項第六項ニ依リ免官トナリタルトキ

五　准士官以下願ニ依リ免官若クハ現役ヲ免除シタルトキ

六　陸海軍下士陸軍上等兵看護手藥手補ニ於テハ陸海軍刑法普通刑法其他ノ罰則ニ依リ禁錮ノ刑ニ處セラレ官職ヲ失ヒ若クハ陸軍懲罰令若クハ憲兵條令第三十五條ニ依リ官職ヲ免セラレタルトキ

七　諸卒ニ於テハ普通刑法其他ノ罰則ニ依リ禁錮ノ刑ニ處セラレ若クハ陸海軍刑法ニ依リ將校ニ對シテ剝官ヲ附加スヘキ禁錮ノ刑ニ處セラレタルトキ

第二十五條　退職恩給免除增加恩給ヲ受ル者重罪ノ刑ニ處セラレ若クハ日本臣民ノ分限ヲ失ヒタルトキハ恩給ヲ剝奪ス左ニ揭クル事項ノ一リ當ルトキハ其間之ヲ停止ス

一　再ヒ現役ニ就キ若クハ文官判任以上ニ任シ政府ヨリ俸給ヲ受ルトキ但商業ヲ營ムコトヲ得ヘキ官職ニアルトキハ此限ニアラス

二　公權ヲ停止セラレタルトキ

增加恩給ハ公權ヲ停止セラレタル場合ニアラサレハ停止セサルモノトス

第二十六條　恩給ハ之ヲ受クヘキ事由ノ生シタル後三箇年內ニ請求セサレハ其權利ヲ拋棄シタルモノトス

第七章　扶助料

第二十七條　軍人左ニ揭クル一ニ當ルトキハ其寡婦ハ扶助料ヲ受ルノ權利アルモノトス

第一　第四條第二第三ニ當リ死歿シタルトキ

第二　第四條第一第四第五第一ニ當リ恩給ヲ受ケ又ハ之ヲ受クヘキ權利ヲ有シテ死歿シタルトキ

第二十八條　寡婦扶助料ノ年額ハ當該軍人ノ現階ト死歿ノ因由ニ依リ前條第一ニ當ル時ハ第五號表ニ依リ第二ニ當ル時ハ六號表ニ依テ之ヲ給ス

第二十九條　扶助料ヲ受ル者左ニ揭クル事項ノ一ニ當ルトキハ其權利消滅ス

一　重罪ノ刑ニ處セラレタルトキ

二　日本臣民タルノ分限ヲ失ヒタルトキ

三　扶助料ヲ受クヘキ權利ノ生シタル日ヨリ三ケ年內ニ請求セサルトキ

四　死歿若クハ戶籍ヲ去リ若クハ婚嫁シタルトキ

第三十條　扶助料ヲ受ル者公權ヲ停止セラレタルトキハ其間扶助料ヲ停止ス

第三十一條　寡婦ナキトキ又ハ扶助料ヲ受ル寡婦死歿シ若クハ權利消滅シタルトキハ其扶助料ヲ孤兒ニ給ス

第三十二條　孤兒扶助料ハ數子アルトキハ家名繼承者ニ給シ非戶主軍人ノ戶主ニ在テハ長子ニ給ス其繼承者及長子歿シ若クハ權利消滅シ若クハ支給期限ノ滿タルトキハ順次年少者ニ及フ者トス但家名繼承者ヲ除ク外男子ヲ先ニシテ女子ヲ後ニス

第三十三條　扶助料ヲ受クヘキ寡婦及孤兒ナク若クハ扶助料ヲ受ケタル寡婦及孤兒戶籍ヲ去リ若クハ死歿シ若クハ權利消滅シタルトキ父母又ハ祖父母アルトキハ寡婦ニ相當スル扶助料ノ金額ヲ其父母又ハ祖父母ニ終身給スルヿヲ得

其扶助料ハ先ツ父ニ給シ其父存在セサルトキ若クハ權利ノ消滅シタルトキハ母ニ給ス母ヨリ祖父ニ祖父ヨリ祖母ニ順次轉給スルハ此例ニ依ル

第三十四條　扶助料ヲ受クヘキ寡婦孤兒又ハ父母祖父母ナクシテ死歿シタル軍人ノ戶籍內ニアル二十歲未滿若クハ癈疾若クハ不具ニシテ產業ヲ營ムヿ能ハサル兄弟姉妹アリテ之ヲ給養スル者ナキトキハ寡婦ニ相當スル扶助料一ケ年分ヨリ少カラス五ケ年分ヨリ多カラサル金額ヲ人員ニ拘ラス一時限リ其兄弟姉妹ニ給スルコトヲ得

第三十五條　第二十七條乃至第三十四條ヲ適要スヘキ軍人ノ寡婦父母祖父母及兄弟姉妹ハ其軍人現役中陸海軍兵籍簿ニ登記シタル者ニ限ル

第三十六條　此法律ニ於テ孤兒トハ年齡二十歲未滿ノ男女子ニシテ未タ結婚セサル者ヲ云フ但シ養男女子ハ家名繼承者ニ限ルス

第三十七條　扶助料ハ之ヲ受クヘキ事由ノ生シタル月ノ翌月ヨリ之ヲ給ス

雜則

第三十八條　陸軍々人及海軍准士官以上ニシテ明治四年八月以前ヨリ勤仕ノ者退職若クハ免官スルトキハ同年七月以前ノ勤仕ニ對シテハ同年同月ノ現官等ニ相當スル月俸ノ半額ヲ以テ率職年數ノ一ケ年ニ當テ其年數ニ應スル金額ヲ一時支給ス

海軍下士以下ニシテ明治二年五月以前ヨリ勤仕ノ者ハ同年四月以前ノ勤仕ニ對シテハ同年同月ノ現官等ニ相當スル月俸ノ半額ヲ以テ率職年數ノ一ケ年ニ當テ其年數ニ應スル金額ヲ一時支給ス

第三十九條　除籍後備ニ在ル者平時召集中職務ノ爲メ死歿シ又ハ傷痍ヲ受ケ若クハ疾病ニ罹リ服役ニ堪ヘサルトキハ此法律ノ期定スル所ニ依リ恩給ヲ受ルノ權ヲ有ス

屯田兵下士卒ニシテ規定ノ給助ヲ受クル者平時軍隊勤務ノ爲メ死歿シ又ハ傷痍ヲ受ケ若クハ疾病ニ罹リ服務ニ堪ヘサルトキ亦同シ

第四十條　陸軍見習士官海軍候補生陸海軍諸生徒規定ノ給助ヲ受ル屯田兵下士卒及海軍水雷夫ハ第四條第二第三ニ因リ死傷シ又傷痍ヲ受ケ若クハ疾病ニ因リ服務ニ堪ヘサル者ニ限リ恩給ヲ受ルノ權利ヲ有ス

第四十一條　恩給ノ支給ハ陸海軍大臣ノ證明ニ依リ恩給局ノ審査ヲ經テ內閣總理大臣之ヲ裁定ス

行政上ノ處分ニ依リ恩給ニ關スル權利ヲ障害セラレタリトスル者ハ六ケ月以內ニ恩給局ニ具申シテ裁決ヲ請フヿヲ得其裁決ニ服セサル者ハ一ケ年以內ニ行政裁判所ニ出訴スルヿヲ得但シ左ノ事件ニ關シテハ恩給局ノ裁決ニ終審確定ノモノトス

一　傷痍疾病ノ原因及其輕重

二　職務ニ堪ユルト否ラサルト

第四十二條　恩給ハ賣買讓與質入書入スルコトヲ得ス

又負債ノ抵當トシテ差押フルコトヲ得ス

第四十三條　明治八年達海軍退隱明治九年陸軍武官恩給令明治十六年陸軍恩給令海軍恩給令ニ依リ恩給又ハ退隱料及扶助料ヲ受クル者ハ總テ該令ニ依ルヘシ但シ明治九年達陸軍武官恩給令ニ依リ受タル傷痍恩給テ除クノ外其權利消滅及停止ハ此法律ニ依ル

明治七年佐賀及鹿灣ノ役明治九年熊本及山口ノ役明治十年鹿兒島ノ役ニ從軍シタル者竝ニ明治十五年同七年朝鮮國京城變亂ノ際該國ニ駐在若クハ派遣シタル者ノ從軍年計算ハ總テ從前ノ命令ニ依ル

第四十四條　此法律施行前ニ現役ヲ離レタル者ノ恩給ハ明治十六年達陸軍恩給令海軍恩給令ニ依ルヘシ但シ此法律施行ノ月ヨリ三ケ年內ニ請求セサレハ之ヲ受クヘキ權利ヲ拋棄シタルモノトス

第四十五條　此法律ハ明治二十三年七月一日ヨリ施行ス

（表ハ之ヲ略ス）

軍人恩給法施行規則

明治二十三年七月閣令第五號

軍人恩給法施行規則左ノ通定ム

軍人恩給法施行規則

第一條　軍人恩給法ニ依リ退職恩給免除恩給增加恩給賜恤金給助金ヲ受ヘキ者ハ其請求書ニ履歴書ヲ添ヘ公務ノ爲傷病疾病ニ起因シ之ヲ請求スル者ハ軍人恩給法第十二條ニ掲クル書類ヲ添ヘ所管長官ニ差出シ所管長官ヨリ陸軍大臣若ハ海軍大臣ニ進出スヘシ

第二條　軍人恩給法ニ依リ恩給ヲ受ヘキ資格アル軍人死歿シタルトキハ所管長官ヨリ履歴書ヲ其遺族ニ下付スヘシ

軍人恩給法第二十七條第一ニ當ル者アリタルトキハ所管長官ヨリ其實ヲ證明スヘキ書類ヲ其遺族ニ下付スヘシ

第三條　軍人恩給法ニヨリ扶助料ヲ請求スル者ハ其請求書ニ請求者名ヲ(後見人アレハ其後見人連署ス(シ)親族二名親族ナキトキハ住居地ノ戶主二名以上連署シ市町村長ノ奥印ヲ受ケ左ニ掲クル書類ノ外市町村長ノ證明シタル戶籍謄書ヲ添ヘ地方長官ニ差出スヘシ

第一　現役中死歿シタル軍人ノ遺族ハ所管長官ヨリ下渡シタル履歴書

第二　前項ノ者軍人恩給法第二十七條第一ニ當ルトキハ履歴書ノ外所管長官ヨリ下渡シタル公務ノ爲メ死歿シタル事實ヲ證明スヘキ書類

第三　恩給ヲ受ケタル軍人ノ遺族ハ其恩給證書

第四　扶助料ヲ受ケル者死歿者クハ權利消滅シ者クハ支給期限ノ滿タルトキ其轉給ヲ受クヘキ者ハ前之ノ恩給證書

第五　扶助料ヲ受ル者公權停止ニヨリ其轉給ヲ受ヘキ者ハ確定裁判宣告書

第六　軍人恩給法第三十四條ニ當ル缺缺不具ニシテ產業ヲ營ムコト能ハサル者ハ第一第二若クハ第四ニ掲ケタル書類ノ外醫師ノ診斷書

地方長官前項ノ請求ヲ受クルトキハ陸軍大臣若クハ海軍大臣ニ進出スヘシ但明治十年鹿兒島ノ役ニ從軍シ陸軍恩給令ニ依リ恩給ヲ受タル元特親屬員ノ遺族ヨリ本條ノ請求ヲ爲シタルトキハ地方長官ヨリ內務大臣ニ進出スヘシ

第四條　陸海軍大臣又ハ內務大臣前條ノ請求書ヲ受タルトキハ審査ノ上請求ノ理由アリト認ムルトキハ恩給計算書ヲ作リ證書書類ヲ添ヘ其傷痍疾病ニ起因スル者ニ付テハ陸軍省醫務局若クハ海軍中央衛生會議ノ診斷ヲ經タル書類、軍人ノ寡婦父母祖父母及兄弟姉妹ノ扶助料ニ付テハ陸海軍兵部卿ノ寫ヲ添ヘ內閣總理大臣ニ差出スヘシ

陸海軍大臣又ハ內務大臣ニ於テ前項請求ノ理由ナシト認ムルトキハ意見ヲ具シテ之ヲ內閣總理大臣ニ進出スヘシ

第五條　內閣ニ於テ恩給ノ請求ヲ許可シタルトキハ恩給證書ヲ作リ陸軍省若クハ海軍省若クハ內務省ヲ經テ本人居住地ノ地方廳ヲシテ之ヲ下付セシム但シ一時ノ支給ニ係ルモノハ辭令書ヲ用フ

第六條　軍人恩給法第三十八條ノ月俸ニシテ米給ニ係ル者ハ官吏恩給法施行規則第三十一條ノ例ニ依ル

第七條　扶助料ヲ受ル者死歿者クハ戶籍ヲ去リ若クハ婚姻シ若クハ支給期限ノ滿タルトキハ地方廳ニ於テ其月ノ翌月ヨリ扶助料ノ支給ヲ廢シ其旨ヲ大藏省ニ通知スヘシ大藏省ハ之ヲ內閣恩給局ニ通知スヘシ

前項ノ場合ニ於テ扶助料ノ輕給ヲ受クヘキ者ナキトキハ地方廳ニ於テ其恩給證書ヲ收メテ內閣恩給局ニ還付スヘシ

第八條　軍人恩給法第九條第十四條第十五條ノ傷痍疾病輕重ノ等差ハ陸軍海軍大臣之ヲ定ム

第九條　明治八年遼陸軍武官傷痍扶助死亡ノ者係樂家族扶助概則及海軍退隱例明治九年遼陸軍恩給令海軍恩給令ニ依リ恩給令又退隱料扶助料ヲ受ル者左ノ場合ニ於テハ本則ニ依ル

一　死歿又ハ權利消滅又ハ停止ノトキ

二　恩給證書ヲ亡失シタルトキ

三　改氏名又ハ居住地ヲ變シタルトキ(二十七年十月閣令第七號ニテ本項改正)

恩給資格アル下士卒死歿等ノ時兵籍寫送致方

明治二十三年十二月陸軍省達第百九十四號

恩給ヲ受クヘキ資格アル下士卒ニシテ死歿者クハ現役ヲ離レタルトキハ其兵籍ノ寫ヲ陸軍省ヘ送致スヘシ

官吏遺族扶助法及軍人恩給法施行規則ニヨリ履歴書下付方

明治二十三年七月海軍省達第二百五十九號

官吏遺族扶助法施行規則第一條及軍人恩給法施行規則第二條ニ依リ死者ノ履歴書ヲ其遺族ニ下付スルハ其履歴書主管ノ局ニ於テ取計フヘシ

陸軍軍人ノ服役ニ耐ヘサルモノトスヘキ場合下士以下ノ兵役ニ堪ヘサルモノトスヘキ場合及下士以下ノ常備後備ノ服役ニ堪ヘサルモノトスヘキ場合

明治二十六年陸軍省陸達第十號

第十條　明治十六年陸軍恩給令ニ依リ恩給又ハ扶助料ヲ請求スル者ハ本則ニ依ルヘシ

第十一條　市制町村制ヲ施行セサル地方ニ於テハ本規則ニ依市町村長ノ爲スヘキ職務ハ區戶長ニ於テ之ヲ行フヘシ

第十二條　本規則ニ於テ特別規定ヲ設ケサル者ハ總テ官吏恩給法施行規則ノ例ニ依ル

陸軍軍人傷痍疾病恩給等差例

明治二十三年七月陸軍省達第百四十二號

陸軍軍人傷痍疾病恩給等差例別冊ノ通定ム

陸軍軍人傷痍疾病恩給差等例（別冊）

第一條　軍人恩給法第九條各項ニ當ル傷痍疾病ハ概ヲ左ノ如シ

一　不具者クハ癒疾ニシテ起臥飲食澁ノ如クナラス常ニ看護ヲ必要トスルモノハ輕重ヲ酌量シテ第一項若クハ第二項トス

二　不具者ハ癒疾ニシテ起臥飲食澁ノ如クナラサルモ常ニ看護ヲ要セサルモノハ輕重ヲ酌量シテ第三項若クハ第四項トス

三　不具者クハ癒疾ニシテ自己ノ用ヲ辨シ得ルモ營業ニ妨アルモノハ輕重ヲ酌量シテ第五項若クハ第六項トス

四　一眼百シ他ノ一眼ノ視力ニ大ナル妨アルモノハ第二項トシ一眼ノ視力ニ大ナル妨ヲ遂シ他ノ一眼ノ視力ニ若干ノ妨アルモノハ輕重ヲ酌量シテ第四項若クハ第五項トシ一眼ノ視力ニ大ナル妨アルモノハ第六項トス

五　兩耳ノ機能ヲ廢シタルモノハ第三項トス

六　一眼兩耳ノ機能ヲ併セテ廢シタルモノハ第二項トシ一眼一耳ノ機能ヲ併セテ廢シタルモノハ第四項トス

七　金品ヲ失シタルモノハ第五項トス

八　咀嚼言語ノ兩機ヲ廢シタルモノハ第一項トシ矜恤之ヲ廢シタルモノハ第二項トス其機能ニ妨アルモノハ輕重ヲ酌量シテ第三項若クハ第四項第五項第六項トス

九　咀嚼若クハ言語ノ機能ヲ廢シタルモノハ第二項トシ殆ト之ヲ廢シタルモノハ第三項トス其機能ニ妨アルモノハ輕重ヲ酌量シテ第四項若クハ第五項第六項トス

十　精神錯誤若クハ神識缺乏シテ常ニ看護ヲ必要トスルモノハ輕重ヲ酌量シテ第一項若クハ第二項トシ其看護ヲ要セサルモノハ輕重ヲ酌量シテ第三項若クハ第四項第五項トス

十一　半身不隨ヲ遺シタルモノハ輕重ヲ酌量シテ第二項若クハ第三項第四項トス

十二　直腸膀胱ノ麻痺ヲ併セ遺シタルモノハ輕重ヲ酌量シテ第二項若クハ第三項トシ直腸若クハ膀胱ノ麻痺ヲ遺シタルモノハ輕重ヲ酌量シテ第四項若クハ第五項トス

十三　呼吸機能ニ妨アルモノハ輕重ヲ酌量シテ第三項若クハ第四項第五項第六項トス

十四　胸腹内ノ臓器ニ瘻管ヲ遺シタルモノハ輕重ヲ酌量シテ第二項若クハ第三項第四項トス

十五　陰莖若クハ兩睾丸ヲ失シタルモノハ第二項トシ陰莖ヲ半失シタルモノハ第五項トス

十六　項若クハ腰ノ運動ニ妨アルモノハ輕重ヲ酌量シテ第四項若クハ第五項第六項トス

十七　一肢ヲ亡シ併セテ他ノ一肢ノ用ヲ廢シタルモノハ第一項トス

十八　二肢ノ運用ニ妨アルモノハ輕重ヲ酌量シテ第四項若クハ第五項トシ一肢ノ運用ニ妨アルモノハ第六項トス

十九　一上肢ヲ亡シタルモノハ肩關節ヨリ腕關節ニ至ル間何レノ部ヨリ亡シタルヲ論セス第三項トシ兩上肢ニアリテハ第一項トス

二十　一上肢ニ於テ肩關節ヨリ腕關節ニ至ル間ノ一關節以上ノ運動ヲ廢シタルモノハ輕重ヲ酌量シテ第五項若クハ第六項トシ兩上ニアリテハ輕重ヲ酌量シテ第三項若クハ第四項トス

二十一　一手ニ於テ拇指ヲ併セ四指以上ヲ失シタルモノハ第四項トシ兩手ニアリテハ第二項トス

二十二　一手ニ於テ拇指示指ヲ併セ失シタルモノハ第五項トシ兩手ニアリテハ第三項トス

二十三　一手ニ於テ拇指ヲ失シタルモノ若クハ示指中指ヲ併セ失シタルモノ若クハ示指中指環指ヲ併セ失シタルモノ若クハ拇指示指ヲ除キ他ノ三指ヲ併セ失シタルモノハ第六項トシ兩手ニアリテハ第四項トス

二十四　一手ニ於テ示指中指環指小指ヲ併セ失シタルモノハ第五項トシ兩手ニアリテハ第三項トス

二十五　一手ニ於テ示指中環指若クハ示指中指環指小指若クハ拇指ヲ併セ三指以上ノ瘢痕或ハ強剛等ヲ遺シタルモノハ輕重ヲ酌量シテ第五項若クハ第六項トシ兩手ニアリテハ輕重ヲ酌量シテ第三項若クハ第四項トス

二十六　一手ニ於テ四指以上ノ各一部ヲ併セ失シタルモノハ輕重ヲ酌量シテ第五項若クハ第六項トシ兩手ニアリテハ輕重ヲ酌量シテ第三項若クハ第四項トス

二十七　兩手ニ以テ拇指示指ノ用ヲ併セテ廢シタルモノハ第五項トス

二十八　一下肢ヲ亡シタルモノハ胯關節ヨリ踝關節ニ至ル間何レノ部ヨリ亡シタルヲ論セス第三項トシ兩下肢ニアリテハ第一項トス

二十九　一下肢ニ於テ跨關節ヨリ踝關節ニ至ル間ノ一關節以上ノ運動ヲ廢シタルモノハ輕重ヲ酌量シテ第五項若クハ第六項トシ兩下肢ニアリテハ輕重ヲ酌量シテ第三項若クハ第四項トス

三十　一足ニ於テ踝關節ノ下概子三分ノ一以上ヲ亡シタルモノハ輕重ヲ酌量シテ第五項若クハ第六項トシ兩足ニアリテハ輕重ヲ酌量シテ第三項若クハ第四項トス

三十一　一足ニ於テ第一趾ヲ併セ三趾以上ヲ亡シタルモノハ第六項トシ兩足ニアリテハ第四項トス

第二條　軍人恩給法第十四條第一項第二項ニ當該スヘキ傷痍疾病ハ輕重ノ度ニ因リ五款トス其區分ハ概子左ノ如シ

第一款

一　一耳ノ機能ヲ廢シタルモノ若クハ兩耳ノ機能ニ妨アルモノ

二　偏睾丸ヲ失シタルモノ

三　筋ノ瘢痕、短縮等ノ爲メ其部ノ運用ニ大ナル妨アルモノ

四　骨折傷後其部ノ運用ニ大ナル妨アルモノ

五　一手ニ於テ拇指示指ノ用ヲ併セテ廢シタルモノ

六　前各症ノ他恩給法第九條第六項ニ比準シテ其症輕キモノ

第二款

一　肩若クハ腕關節ノ運動ニ妨アルモノ

二　拇指ノ末節ヲ失シタルモノ

三　示指ニ環指若クハ小指ヲ併セ失シタルモノ

四　示指ヲ除キ他ノ一指ト拇指ノ用ヲ併セテ廢シタルモノ

五　第一趾ニ他ノ一趾ヲ併セ失シタルモノ

六　前各症ノ他第一款ニ比準シテ其症輕キモノ

第三款

一　耳殼ヲ失シタルモノ若クハ頭部ニ著大ナル醜形ヲ遺シタルモノ

二　示指ヲ失シタルモノ

三　拇指示指ヲ除キ他ノ二指ヲ失シタルモノ

四　拇指ノ用ヲ廢シタルモノ

五　示指中指ノ用ヲ併セテ廢シタルモノ

六　前各症ノ他第二款ニ比準シテ其症輕キモノ

第四款

一　一眼ノ視力ニ妨アルモノ

二　拇指中指ヲ除キ他ノ三指ノ用ヲ廢シタルモノ

三　第一趾ヲ失シタルモノ

四　第一趾ヲ除キ他ノ四趾ヲ失シタルモノ

五　第一趾ヲ併セ三趾以上ノ用ヲ廢シタルモノ

六　前各症ノ他第三款ニ比準シテ其症輕キモノ

第五款

一　中指ヲ失シタルモノ（二十三年十二月陸軍省陸達第二百二十一號ヲ以テ本文中削除ス）

二　拇指示指ヲ除キ二指ノ用ヲ廢シタルモノ（同上）

三　示指若クハ中指ノ用ヲ廢シタルモノ（同上）

四　第一趾ヲ除キ他ノ二趾若クハ三趾ヲ失シタルモノ（同上法令ヲ以テ本文中追加ス）

五　前各症ノ他第四款ニ比準シテ其症輕キモノ

以上ノ各款ハ共ニ輕重ヲ酌量シテ甲症若クハ乙症トス

第三條　第二條第二款乃至第五款ノ諸症中四肢ニ於テハ一上肢若クハ一下肢ニ就テ示スト雖モ兩肢ニ同樣ノ障碍アルトキハ各一款ヲ上ホスヘキモノトス

第二條中ノ各款共ニ輕重ヲ酌量シテ甲症若クハ乙症トナスハ概子左ノ例ニ據ル

一　合併症ノ有無例之單ニ拇指ノ末節ヲ失シタルモノハ第二款ノ乙症トシ掌骨指骨間關節ノ强剛ヲ合併スルトキハ同款ノ甲症トナスノ類

一　上肢ノ障碍ニアリテハ左右ノ區別例之左示指ヲ失シタルモノハ第三款ノ乙症トシ右示指ヲ失シタルモノハ同款ノ甲症トナスノ類

第四條　第一條ノ各症ハ總テ軍人ノ服役ニ堪ヘサルモノトス第二條ノ各症ハ下士以下ノ服役ニ堪ヘサルモノトス（二十三年十二月二十二日陸軍省達第二百二十一號ヲ以テ本條但書ヲ削除ス）

◉陸軍軍人恩給取扱手續

陸軍軍人恩給取扱手續左ノ通定ム　明治二十三年七月陸軍省令第二十二號

陸軍軍人恩給取扱手續

第一條　軍人恩給法ニ依リ恩給ヲ請求スル手續ハ軍人恩給法施行規則ニ示シタルモノヽ外陸軍部内ニ在テハ此細則ニ準據スヘシ

第二條　退職恩給免除恩給增加恩給ノ請求書ハ當該軍人現役ヲ離レタル

後第一第二書式ニ示シタル書類ヲ具備シ營所屬長ニ呈スヘシ所屬長之ヲ調査シ計算書(第九書式)ヲ作リ順序ヲ經テ所管長官ニ呈シ所管長官ハ之ヲ陸軍大臣ニ進達スヘシ

第三條　傷痍疾病ニ基ク恩給ノ請求ニ係ルトキハ所管長官其診斷證書(第五書式)ヲ軍醫長ニ移シテ審査セシメタル上陸軍大臣ニ進達スヘシ

地方醫師ノ診斷證書ヲ以テ恩給ヲ請求スルハ陸軍醫官ノ診斷ヲ受クルコト能ハサル場合ニ限ル其證書ニハ原因經過療法及ヒ現症ヲ詳記シテ醫師二名署名セシムヘシ所管長官ハ醫官ヲシテ其傷痍疾病ノ等差ヲ判定シ審査證書ヲ作ラシメタル上書類ヲ軍醫長ニ移シ之ヲ審査セシムヘシ

第四條　軍人恩給法第十一條ニ當ル者ハ其期限内ニ於テ居住地方ノ師團長若クハ屯田兵司令官ニ檢査ヲ請求スルコトヲ得

師團長若クハ屯田兵司令官其請求ヲ受ケタルトキハ醫官ヲシテ其症狀ヲ覆査セシメ診斷證書(第五書式)ヲ作ラシム其診斷證書ノ審査ニ係ル取扱ハ第三條ノ例ニ同シ

第五條　休職者停職者ノ恩給請求書ハ直ニ所管師團長若クハ屯田兵司令官(兵籍ヲ寄留地ニ移シタル者ハ其寄留地ノ師團等)ニ呈スヘシ師團長ハ之ヲ參謀長屯田兵司令官ハ參謀ニ下シテ調査セシメ計算書(第九書式)ヲ作リ之ヲ陸軍大臣ニ進達スヘシ

第六條　賑恤金ノ請求ハ第三書式ニ示シタル書類ヲ具備シ舊所屬長ニ呈スヘシ所屬長ハ順序ヲ經テ所管長官ニ呈シ所管長官ハ第三條ノ例ニ依リ之ヲ取扱フヘシ

第七條　給助金ノ請求ハ第四書式ニ示シタル書類ヲ具備シ本人若クハ遺族ヨリ舊所管長官ニ呈スヘシ所管長官ハ之ヲ陸軍大臣ニ進達スヘシ

第八條　恩給ヲ受クル權利ヲ有スル士官傭補生ノ内見習士官ハ曹長ニ一等軍曹二等軍曹ノ各階級ニ進ミタル者ハ其階級ニ其他ノ生徒ハ總テ兵卒ニ準ス

第九條　服役年ヲ算スルニ當リ初任ノ月ニ端日數ヲ生シタルトキハ其月ノ大小ニ依リ之ヲ算スルヲ法トス故ニ現役ヲ離レタル月ノ端日數ト合セテ三十日以上ニ及ヒタルトキハ其初任ノ月ノ大小ニ從ヒ一箇月ノ區域ヲ定ム

第十條　軍人恩給法施行規則第二條ニ依リ所管長官ヨリ死者ノ履歷書ヲ其ノ遺族ヘ下附スルトキハ兵籍ノ寫ヲ添ユヘシ(戸籍ニ關スル部分ノミ記ス)但給助金ノミヲ受クヘキ遺族ニ在テモ亦同シ

前項ノ履歷書(第八書式)及兵籍寫ニハ所管長官其事實ヲ證明スヘシ但兵籍寫ノ證明書式ハ第八書式末文ニ依ル(二十五年六月陸軍省令第十號ヲ以テ本條ヲ改正追加スルノ所アリタリ)

第十一條　恩給、賑恤金、給助金ノ請求書及ヒ履歷書ハ各二通ヲ差出スヘシ

(書式ハ悉皆省ク)

海軍軍人傷痍疾病恩給等差例

明治二十三年七月海軍省達第二百六十四號

海軍軍人傷痍疾病恩給等差例左ノ通定ム

第一條　軍人恩給法第九條各項ニ當該スヘキ傷痍疾病ハ概テ左ノ如シ

一　不具若クハ癈疾ニシテ起臥飲食意ノ如クナラス常ニ看護ヲ必要トスルモノハ輕重ヲ酌量シテ第一項若クハ第二項トス

二　不具若クハ癈疾ニシテ起臥飲食意ノ如クナラサルモ常ニ看護ヲ要セサルモノハ輕重ヲ酌量シテ第三項若クハ第四項トス

三　不具若クハ癈疾ニシテ自己ノ用ヲ辨シ得ルモ營業ニ妨アルモノハ輕重ヲ酌量シテ第五項若クハ第六項トス

四　一眼盲シ他ノ一視ノ眼力ニ大ナル妨アルモノハ第二項トシ一眼ノ視力ニ大ナル妨ヲ遺シ他ノ一眼ノ視力ニ若干ノ妨アルモノハ輕重ヲ酌量シテ第四項若クハ第五項トシ一眼ノ視力ニ大ナル妨アルモノハ第六項トス

五　兩耳ノ機能ヲ廢シタルモノハ第三項トス

六　一眼兩耳ノ機能ヲ併セテ廢シタルモノハ第二項トシ一眼一耳機能ヲ併セテ廢シタルモノハ第四項トス

七　全鼻ヲ失シタルモノハ第五項トス

八　咀嚼言語ノ兩機ヲ廢シタルモノハ一項トシ殆ト之ヲ廢シタルモノハ第二項トス其機能ニ妨アルモノハ輕重ヲ酌量シテ第三項若クハ第四項第五項第六項トス

九　咀嚼若クハ言語ノ機能ヲ廢シタルモノハ第二項トシ殆ト之ヲ廢シタルモノハ第三項トス其機能ニ妨アルモノハ輕重ヲ酌量シテ第四項若クハ第五項第六項トス

十　精神錯誤若クハ神識缺乏シテ常ニ看護ヲ必要トスルモノハ輕重ヲ酌量シテ第一項若クハ第二項トシ其看護ヲ要セサルモノハ輕重ヲ酌量シテ第三項若クハ第四項第五項トス

十一　半身不遂ヲ遺シタルモノハ輕重ヲ酌量シテ第二項若クハ第三項第四項トス

十二　直腸膀胱ノ癈弾ヲ併セ遺シタルモノハ輕重ヲ酌量シテ第二項若クハ第三項トシ直腸若クハ膀胱ノ癈弾ヲ遺シタルモノハ輕重ヲ酌量シテ第四項若クハ第五項トス

十三　呼吸機能ニ妨アルモノハ輕重ヲ酌量シテ第三項若クハ第四項第五項第六項トス

十四　胸腹内ノ臟器ニ癈管ヲ遺シタルモノハ輕重ヲ酌量シテ第二項若クハ第三項第四項トス

十五　陰莖若クハ兩睾丸ヲ失シタルモノハ第二項トシ陰莖ヲ半失シタルモノハ第五項トス

十六　項若クハ腰ノ運動ニ妨アルモノハ輕重ヲ酌量シテ第四項若クハ第五項第六項トス

十七　一肢ヲ亡シ併セテ他ノ一肢ノ用ヲ廢シタルモノハ第一項トス

十八　二肢ノ運動ニ妨アルモノハ輕重ヲ酌量シテ第四項若クハ第五項トシ一肢ノ運動ニ妨アルモノハ第六項トス

十九　一上肢ヲ亡シタルモノハ肩關節ヨリ腕關節ニ至ル間何レノ部ヨリ亡シタルヲ論セス第三項トシ兩上肢ニアリテハ第一項トス

二十　一上肢ニ於テ肩關節ヨリ腕關節ニ至ル間ノ一關節以上ノ運動ヲ廢シタルモノハ輕重ヲ酌量シテ第五項若クハ第六項トシ兩ニアリテハ輕重ヲ酌量シテ第三項若クハ第四項トス

二十一　一手ニ於テ拇指ヲ併セ四指以上ヲ失シタルモノハ第二項トス

二十二　一手ニ於テ拇指示指ヲ併セ失シタルモノハ第五項トシ兩手ニアリテハ第三項トス

二十三　一手ニ於テ拇指ヲ失シタルモノ若クハ示指中指ヲ併セ失シタルモノ若クハ示指中指環指ヲ併セ失シタルモノ若クハ拇指示指ヲ除キ他ノ三指ヲ併セ失シタルモノハ第六項トシ兩手ニアリテハ第四項トス

二十四　一手ニ於テ示指中指環指小指ヲ併セ失シタルモノハ第五項トシ兩手ニアリテハ第三項トス

二十五　一手ニ於テ示指中指環指若クハ示指中指環指小指若クハ拇指ヲ併セ三指以上ノ癒着或ハ強剛等ヲ遺シタルモノハ輕重ヲ酌量シテ第五項若クハ第六項トシ兩手ニアリテハ輕重ヲ酌量シテ第三項若クハ第四項トス

二十六　一手ニ於テ四指以上ノ各一部ヲ併セ失シタルモノハ輕重ヲ酌量シテ第五項若クハ第六項トシ兩手ニアリテハ輕重ヲ酌量シテ第三項若クハ第四項トス

二十七　兩手ニ於テ拇指示指ノ用ヲ併セテ廢シタルモノハ第五項トス

二十八　一下肢ヲ亡シタルモノハ膀關節ヨリ踝關節ニ至ル間何レノ部ヨリ亡シタルヲ論セス第三項トシ兩下肢ニアリテハ第一項トス

二十九　一下肢ニ於テ膀關節ヨリ踝關節ニ至ル間ノ一關節以上ノ運動ヲ廢シタルモノハ輕重ヲ酌量シテ第五項若クハ第六項トシ兩下肢ニアリテハ輕重ヲ酌量シテ第三項若クハ第四項トス

三十　一足ニ於テ踝關節ノ下概ヲ三分ノ一以上ヲ失シタルモノハ輕重ヲ酌量シテ第五項若クハ第六項トシ兩足ニアリテハ輕重ヲ

酌量シテ第三項若クハ第四項トス

三十一　一足ニ於テ第一趾ヲ併セ三趾以上ヲ失シタルモノハ第六項トシ兩足ニアリテハ第四項トス

第二條　軍人恩給法第十四條第一項第二項ニ該當スヘキ傷疾病ハ輕重ノ度ニ由リ五款トス其區分ハ概子左ノ如シ

第一款

一　一耳ノ機能ヲ廢シタルモノ若クハ兩耳ノ機能ニ妨アルモノ
二　偏睾丸ヲ失シタルモノ
三　筋ノ癒著短縮等ノ爲メ其部ノ運用ニ大ナル妨アルモノ
四　骨折傷後其部ノ運用ニ大ナル妨アルモノ
五　一手ニ於テ拇指示指ノ用ヲ併セテ廢シタルモノ
六　前各症ノ他恩給法第九條第六項ニ比準シテ其症輕キモノ

第二款

一　肘若クハ腕關節ノ運動ニ妨アルモノ
二　拇指ノ末節ヲ失シタルモノ
三　示指ニ環指若クハ小指ヲ併セ失シタルモノ
四　示指ヲ除キ他ノ一指ト拇指ノ用ヲ併セテ廢シタルモノ
五　第一趾ニ他ノ一趾ヲ併セ失シタルモノ
六　前各症ノ他第一款ニ比準シテ其症輕キモノ

第三款

一　耳殼ヲ失シタルモノ若クハ頭部ニ著大ナル醜形ヲ遺シタルモノ
二　示指ヲ失シタルモノ
三　拇指示指ヲ除キ他ノ二指ヲ失シタルモノ
四　拇指ノ用ヲ廢シタルモノ
五　示指中指ノ用ヲ併セテ廢シタルモノ
六　前各症ノ他第二款ニ比準シテ其症輕キモノ

第四款

一　一眼ノ視力ニ妨アルモノ
二　拇指示指ヲ除キ他ノ三指ノ用ヲ廢シタルモノ
三　第一趾ヲ失シタルモノ
四　第一趾ヲ除キ他ノ四趾ヲ失シタルモノ
五　第一趾ヲ併セ三趾以上ノ用ヲ廢シタルモノ
六　前各症ノ他第三款ニ比準シテ其症輕キモノ

第五款

一　中指ヲ失ヒタルモノ（二十三年十二月海軍省達第四百二十號本文中削除）
二　拇指示指ヲ除キ他ノ二種ノ用ヲ廢シタルモノ（仝上）
三　示指若クハ中指ノ用ヲ廢シタルモノ（仝上）
四　第一趾ヲ除キ他ノ二趾若クハ三趾ヲ失シタルモノ（二十三年海軍省達第四百二十號本文中追加）
五　前各症ノ他第四款ニ比準シテ其症輕キモノ

以上ノ各款ハ共ニ輕重ヲ酌量シテ甲症若クハ乙症トス

第三條　第二條第二款乃至第五款ノ四症中四肢ニ於テハ一上肢若クハ一下肢ニ就テ示スト雖モ兩肢ニ同樣ノ障碍アルトキハ各一款ヲ上スモノトス

第二條中ノ各款共ニ輕重ヲ酌量シテ甲症若クハ乙症トナスハ概子左ノ例ニ據ル

一　合併症ノ有無（例之單ニ拇指ノ末節ヲ失ヒタルモノハ第二款ノ乙症トシ掌骨指間關節ノ强直ヲ合併スルトキハ同款ノ甲症トナスノ類）

一　上肢ノ障碍ニアリテ左右ノ區別（例之左示指ヲ失ヒタルモノハ第三款ノ乙症トシ右示指ヲ失ヒタルモノハ同款ノ甲症トナスノ類）

第四條（二十四年二月海軍省達第二十七號本條削除）

◎海軍志願兵家族扶助金支給規則

明治二十二年六月海軍省令第三號

海軍志願兵家族扶助金支給規則左ノ通定ム

海軍志願兵家族扶助金支給規則

第一條　家族扶助金ハ志願兵ノ家族（附籍ハ除ク）アル者ニ限リ入營ノ日ヨリ現役ヲ離レタル日マテ支給ス

第二條　一日金五錢七厘ヲ給スル者ニ再服役ヲ許シタルトキハ再服役ノ日ヨリ一日金貳錢七厘ヲ支給ス

第三條　家族扶助金ハ毎月末日（十二月ハ二十五日）本人所轄廳（所轄廳トハ艦船團其他下士卒ヲ直轄スル廳ヲ云フ以下之ニ同シ）ニ於テ支給シ其日休暇ニ當ルトキハ前日ニ繰上ケ支給スヘシ（二十三年二月一日海軍省令第三號ヲ以テ本條中追加スル所アリタリ）

但服役場所ニ異動アルモ本文ニ同シ

第四條　准士官ニ昇級シタルトキハ辭令書拜受ノ日マテ免官免役セラレ死亡シ若クハ現役ヲ退キタルトキハ其當日マテ前條ノ支給定日ニ拘ハラス其際支給スヘシ（尙上法令ヲ以テ本條ヲ改正ス）

第五條　單身ノ下士卒家族ヲ有シタルトキハ其報告本人所在ノ廳ニ到達ノ日ヨリ家族扶助金ヲ支給ス

家族アル下士卒單身ト爲リタルトキハ其報告本人所在ノ廳ニ到達ノ日マテ支給ス

第六條　海軍部內ニ於テ會計ヲ異ニスル廳ヨリ借用シタル者ノ家族扶助金ハ本廳發程ノ翌日ヨリ歸廳ノ當日マテ借用廳ニ於テ支給スヘシ

海軍部外ノ各廳ヘ貸與シタル者ニハ發程ノ翌日ヨリ歸廳ノ當日マテ支給セス

奏樂ノ爲メ一時貸與スル軍樂員ハ前二項ノ限ニアラス

第七條　家族扶助金ハ處刑罰收禁拘留若クハ遞傳護送中ノ者又ハ擅ニ艦船團若クハ職役ヲ離レタル者ニハ其當日ヨリ歸廳ノ當日マテ之ヲ支給セス但無罪免訴若クハ無罪トナリタルトキハ之ヲ追給スヘシ（同上法令ヲ以テ本條中ニ追加スル所アリタリ）

第八條　所轄ヲ轉シタル後追給若クハ追徵スヘキモノアルトキハ本人所在ノ廳ニ於テ追給若クハ追徵スヘシ（二十三年四月海軍省令第六號ヲ以テ本條ヲ改正ス）

第九條（二十三年四月海軍省令第七號ヲ以テ本條ヲ削除ス）

第十條（同上）　死亡者若クハ逃亡者ニ支給スヘキ金額アルトキハ其家族ノ請求ニ依リ之ヲ下付スヘシ

第十一條　家族扶助金ヲ受クル者家族ニ異動アルトキ若クハ轉居轉籍シタルトキハ家族又ハ親族ヨリ地方廳ニ屆出テ各地方廳ハ其都度其者在籍ノ鎭守府海兵團ニ報告スヘシ單身ノ下士卒家族ヲ有シタルトキ亦同シ（同上法令ヲ以テ本條中ニ追加スル所アリタリ）

第十二條　家族扶助金ヲ受クル者家族ニ異動アルトキハ前條ノ報告ヲ得タルトキハ直ニ本人所在ノ廳ニ報送スヘシ

第十三條　海兵團ニ於テ前條ノ報告ヲ得タルトキハ直ニ本人所在ノ廳ニ報送スヘシ

附則

第十四條　本年五月三十一日マテハ從前ノ例規ニ依リ橫須賀鎭守府ニ於テ取扱フヘシ

第十五條　舊規則ニ依リ一箇年金拾圓ノ家族扶助金ヲ給スル者ニハ本年六月一日ヨリ志願兵徴募規則ニ依リ一日金貳錢七厘ヲ支給ス

第十六條　舊規則ニ依リ一箇月金壹圓七拾五錢ノ家族扶助金ヲ給スル者ニハ本年六月一日ヨリ九月三十日マテ日割計算ヲ以テ志願兵徴募規則ニ依リ支給スルモノトス

第十七條　前條ノ家族扶助金ヲ給スル者ニハ本年十月一日ヨリ志願兵徴募規則ニ依リ一日金五錢七厘ヲ支給ス

◎海軍大佐大尉及同等官ノ恩給支給方

明治二十五年一月勅令第九號

朕海軍大佐大尉及同等官ノ恩給ニ關スル件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

明治二十四年勅令第百五十七號海軍武官々階制定ノ後ニ於ケル海軍大佐及同等官並大尉及同等官ノ恩給ハ左ノ通リ取扱フヘシ

一　大佐及同等官ニシテ實役停年最下限ノ半數ヲ過キサルモノニハ奏任二等ノ欄內ニ掲クル金額ヲ支給ス

二　大尉及同等官ニシテ實役停年最下限ノ半數ヲ過キサルモノニハ奏任五等ノ欄内ニ掲クル金額ヲ支給ス

◎明治七年以後ノ戰役ニ死歿セシ軍人軍屬ノ遺父母及祖父母扶助

明治二十四年十二月法律第四號

朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル明治七年以後ノ戰役ニ死歿シタル軍人軍屬ノ遺父母及祖父母扶助ニ關スル法律ヲ裁可シ玆ニ之ヲ公布セシム

第一條　明治七年佐賀及臺灣ノ役明治九年熊本及山口ノ役明治十年鹿兒島ノ役ニ從軍シ戰鬪若クハ公ノ爲メ死歿シ又ハ傷痍ヲ受ケ若クハ疾病ニ罹リ之ニ原因シテ死歿シタル軍人軍屬ノ存在セル遺父母及祖父母ニハ當時ノ法律ニ依リ從軍者ノ寡婦ノ受クタル若クハ受ヘキ扶助料ヲ給ス

前項ノ戰役ニ當リ臨時軍隊ニ編入セラレタル者戰地ニ派遣セラレタル軍人軍屬ニシテ死歿ノ原因從軍者ト同キトキハ其遺父母及祖父母ハ前項ニ依ラシム

前二項ニ掲クル父母祖父母ハ軍人軍屬及臨時軍隊ニ編入セラレタル者戰死ノ時又ハ死歿ノ原因トナリタル傷痍ヲ受ケ若クハ疾病ニ罹リタル時ノ陸海軍兵籍簿中若クハ戸籍簿中ニ在ル者ニ限ル

第二條　第一條ニ當ル父母祖父母アルモ同一戸籍内ニ於テ現ニ扶助料ヲ受クル者アルトキハ其間扶助料ヲ給セス

第三條　扶助料ハ本法施行ノ日ヨリ起算シテ之ヲ給ス

第四條　扶助料ハ受ル者ノ權利消滅停止及停止中扶助料ノ支給並ニ扶助料ノ轉給及支給ノ順序ハ現行軍人恩給法ノ定ムル所ニ依ル

第五條　遺父母及祖父母ニシテ廢家其他ノ事故ニ依リ他家ニ入籍シタル者廢家ノ日ヨリ本法施行後三箇年内ニ廢家再興又ハ復籍スルトキハ其再興又ハ復籍ノ日ヨリ本法ニ依リ扶助料ヲ受クルコトヲ得

第六條　扶助料ハ轉給ノ場合ヲ除クノ外本法施行ノ日ヨリ三箇年内ニ請求セサルトキハ其權利ヲ拋棄シタルモノトス

第七條　本法ハ明治二十五年四月一日ヨリ施行ス

◎海軍候補生及海軍生徒ノ恩給額ニ關スル件

明治二十七年八月勅令第百四十五號

朕海軍候補生及海軍生徒ノ恩給額ニ關スル件ヲ裁可シ玆ニ之ヲ公布セシム

軍人恩給法第四十條ニ該當スル海軍候補生及生徒ノ恩給額ニ關シテハ候補生ノ階級ハ判任官等級一等トシ將校生徒及機關生徒ノ階級ハ判任官等級二等トス

第三款　學校職員ノ恩給年金其他諸給與

◎府縣立師範學校長俸給並公立學校職員退隱料及遺族扶助料法

明治二十三年十月法律第九十一號

朕府縣立師範學校長俸給並公立學校職員退隱料及遺族扶助料法ヲ裁可シ玆ニ之ヲ公布セシム

府縣立師範學校長俸給並公立學校職員退隱料及遺族扶助料法

第一條　府縣立師範學校長ノ俸給ハ國庫ノ負擔トス

第二條　府縣立師範學校及公立中學校ノ學校長正教員ハ此法律ノ規定ニ從ヒ退隱料ヲ受クルノ權利ヲ有ス

第三條　在職滿十五年以上ノ者左ノ事項ノ一ニ當ルトキハ終身退隱料ヲ給ス

一　年齡六十歲ヲ超ヘ退職ヲ命シタルトキ

二　傷痍ヲ受ケ若クハ疾病ニ罹リ其職務ニ堪ヘサルカ爲退職ヲ命シタルトキ

三　廢校ニ依リ退職シ又ハ學校編制ノ變更ニ依リ退職ヲ命シタルトキ

第四條　左ノ事項ノ一ニ當ルトキハ前條ノ年限ニ滿タサルモ終身退隱料ヲ給シ尙其最下金額十分ノ七マテノ增加退隱料ヲ給ス

一　職務ニ依リ傷痍ヲ受ケ一肢以上ノ用ヲ失ヒ若クハ之ニ準スヘキ者ニシテ其職務ニ堪ヘサルカ爲退職ヲ命シタルトキ

二　職務ニ依リ健康ニ有害ナル感動ヲ受クルヲ顧ミルコト能ハスシテ勤務ニ從事シ爲ニ疾病ニ罹リ一肢以上ノ用ヲ失ヒ若クハ之ニ準スヘキ者ニシテ其職務ニ堪ヘサルカ爲退職ヲ命シタルトキ

第五條　官吏恩給法第五條第一項第四項第五項第六條及第十一條ハ退職料ニ適用ス

第六條　府縣立師範學校及公立中學校ノ學校長正教員ニ準スヘキ官立公立學校職員ヨリ府縣立師範學校及公立中學校ノ學校長正教員ニ轉シタル者ハ該官立公立學校ニ於テル勤務ノ年數ヲ退隱料等ノ給與上在職年數ニ算入スヘキモノトス其在職年數ノ算定ニ關スル規則並府縣立師範學校及公立中學校ノ學校長正教員ニ準スヘキ官立公立學校職員ト認ムヘキ者ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

第七條　退隱料ヲ受クル者左ノ事項ノ一ニ當ルトキハ退隱料ヲ受クルノ權利ヲ失フモノトス

一　失職ニ該當スヘキ現職中ノ所爲確定シタルトキ

二　禁錮以上ノ刑ニ處セラレタルトキ

三　日本臣民タルノ分限ヲ失ヒタルトキ

四　第三條第二第四條若クハ第九條ニ依リ退隱料ヲ受クル者復タヒ其職務ニ堪フルニ至ルコトアルモ仍官ヨリ指令セラルヽ所ノ教職ニ就カサルトキ又ハ第三條第三ニ依リ退隱料ヲ受クル者官ヨリ指定セラルヽ所ノ教職ニ就カサルトキ但其俸給ハ退職現時ノ俸給ヨリ少額ナラス且年齡未タ六十歲ニ至ラサル場合ニ限ル

五　府縣知事ノ許可ヲ經スシテ公務ニ就キタルトキ

退隱料ヲ受クル者左ノ事項ノ一ニ當ルトキハ其時間退隱料ヲ受クルコトヲ得ス

一　公務ニ就キ退職現時ノ俸給額ト同額以上ノ給料ヲ受クルトキ

二　三箇年以上受領ヲ怠リタルトキ

三　公權ヲ停止セラレタルトキ

第八條　年齡未タ六十歳ニ至ラスシテ自己ノ便宜ニ依リ退職シタル者又ハ免職ニ處セラレ若クハ失職ニ該當シタル者ハ退隱料ヲ受クルノ資格ヲ失フモノトス

第九條　府縣立師範學校及公立中學校ノ准教員ハ職務ノ爲傷痍ヲ受ケ若クハ疾病ニ罹リ第四條ニ該當スル者ニ限リ退職現時ノ俸給四分ノ一ノ退隱料ヲ終身給與ス

第十條　府縣立師範學校及公立中學校ノ學校長正教員在職滿一年以上五年未滿ニシテ退職シタル者ハ退職現時ノ俸給一箇月分ニ當ル金員ヲ給シ其滿五年以上十一年未滿ニシテ退職シタル者ハ俸給二箇月分ニ當ル金員ヲ給シ其滿十一年以上十五年未滿ニシテ退職シタル者ハ俸給三箇月分ニ當ル金員ヲ給ス

第三條第四條又ハ第九條ニ依リ退隱料ヲ受クル者自己ノ便宜ニ依リ退職シタル者又ハ免職ニ處セラレ若クハ失職ニ該當シタル者又ハ前項ノ給與ヲ受クヘキ事由ノ生シタル後三箇月內ニ之ヲ請求セサル者ハ前項ノ限ニ在ラス

自己ノ便宜ニ依リ本條第一項ノ給與ヲ受ケサル者他日府縣立師範學校及公立中學校長正教員ノ職ニ就クトキハ前ノ在職年數ヲ以テ退隱料等ノ給與上ニ關スル在職年數ニ算入スヘキモノトス但其給與ヲ受クヘキ事由ノ生シタル後三箇月以內ニ之ヲ受ケサルコトヲ申立サル者ハ本文ノ限ニ在ラス

本條ノ給與及之ニ關スル費用ハ退職者ノ退職ノ際勤務セシ學校附屬ニ府縣郡町村ノ負擔トス

第十一條　退隱料ノ支給ハ府縣知事ノ證明ニ依リ文部大臣之ヲ裁定ス

官吏恩給法第十六條及第十八條ハ退隱料ニ適用ス

第十二條　府縣立師範學校及公立中學校ノ學校長正教員左ノ事項ノ一ニ當ルトキハ其遺族ハ此法律ノ規定ニ從ヒ扶助料ヲ受クルノ權利ヲ有ス

一　在職十五年以上ノ者在職中死去シタルトキ

二　在職十五年未滿ノ者職務ノ爲死去シタルトキ

三　退隱料ヲ受クル者死去シタルトキ

第十三條　官吏遺族扶助法第四條乃至第十條第十二條乃至第十六條ハ此法律ニ規定スル扶助料ニ適用ス

官吏遺族扶助法第十一條ハ此法律ニ規定スル扶助料ヲ受クヘキ寡婦孤兒又ハ父母祖父母ナクシテ死去シタル者ノ戶籍內ニ在ル二十歳未滿又ハ癈疾若クハ不具ニシテ產業ヲ營ムコト能ハサル兄弟姉妹アリテ之ヲ給養スル者ナキ場合ニ適用ス

第十四條　府縣立師範學校及公立中學校ノ學校長正教員ニシテ在職十五年未滿ノ者在職中職務ノ故ニアラスシテ死去シタルトキハ其遺族ニ一時扶助金ヲ給ス

前項ノ扶助金ニ就キテハ官吏遺族扶助法第十七條第二項ヲ適用ス

第十五條　扶助料及扶助金ノ支給並第十三條第二項ノ給與ハ府縣知事ノ申牒ニ依リ文部大臣之ヲ裁定ス

第十六條　府縣立師範學校及公立中學校ノ學校長正教員ハ其俸給百分ノ一ヲ毎年國庫ニ納ムヘシ

府縣郡市町村ハ其府縣立師範學校及公立中學校長正教員ノ俸給百分ノ一ニ當ル金員ヲ毎年國庫ニ納ムヘシ

第十七條　退隱料扶助料扶助金及第十三條第二項ノ給與並其支給ニ關スル費用ハ國庫ノ負擔トス

退隱料扶助料扶助金等ノ支給ニ關スル規則ハ文部大臣之ヲ定ム

第十八條　同一人ニシテ國庫ヨリ二種以上ノ退隱料又ハ扶助料ヲ受クヘキ者アルトキハ本人ノ所擇ニ任セ其一ヲ給スルモノトス

第十九條　府縣立師範學校及公立中學校書記ノ退隱料等ハ府縣知事郡長市町村長ニ於テ府縣郡市町村會ノ意見ヲ聞キ之ヲ定ムルコトヲ得

府縣立師範學校及公立中學校並市町村立小學校ニアラサル公立學校職員ノ退隱料等ハ前項ノ例ニ依ル

本條ノ退隱料等及其支給ニ關スル費用ハ其府縣郡市町村ノ負擔トス

第二十條　此法律第一條ハ明治二十五年度ヨリ第二條乃至第十九條ハ明治二十六年度ヨリ之ヲ施行ス

第二十一條　府縣制郡制及ハ市制町村制ヲ施行セサル地方ニ於テ此法律ノ條規ニ對シ特例ヲ設クルコトヲ必要トスルトキハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

◎市町村立小學校教員退隱料及遺族扶助料法

明治二十三年十月法律第九十號

朕市町村立小學校教員退隱料及遺族扶助料法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

市町村立小學校教員退隱料及遺族扶助料法

第一條　市町村立小學校ノ正教員ハ此法律ノ規定ニ從ヒ退隱料ヲ受クルノ權利ヲ有ス

第二條　在職滿十五年以上ノ者左ノ事項ノ一ニ當ルトキハ終身退隱料ヲ給ス

一　年齡六十歳ヲ超ヘ退職ヲ命シタルトキ

二　傷痍ヲ受ケ若クハ疾病ニ罹リ其職務ニ堪ヘサルカ爲メ退職ヲ命シタルトキ

三　廢校ニ依リ退職シ又ハ學校編制ノ變更ニ依リ退職ヲ命シタルトキ

第三條　左ノ事項ノ一ニ當ルトキハ前條ノ年限ニ滿タサルモ終身退隱料ヲ給シ尙其最下金額十分ノ七マテノ增加退隱料ヲ給ス

一　職務ニ依リ傷痍ヲ受ケ一肢以上ノ用ヲ失ヒ若ク

ハ之ニ準スヘキ者ニシテ其職務ニ堪ヘサルカ爲退職ヲ命シタルトキ

二　職務ニ依リ健康ニ有害ナル感動ヲ受クルヲ顧ミルコト能ハスシテ勤務ニ從事シ爲ニ疾病ニ罹リ一肢以上ノ用ヲ失ヒ若クハ之ニ準スヘキ者ニシテ其職務ニ堪ヘサルカ爲退職ヲ命シタルトキ

第四條　官吏恩給法第五條第一項第四項第六條第十一條ハ退隱料ニ適用ス

退隱料等ノ支給上ニ關スル在職年數ノ算入ニ關スル規則ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

第五條　退隱料ヲ受クル者左ノ事項ノ一ニ當ルトキハ退隱料ヲ受クルノ權利ヲ失フモノトス

一　失職ニ該當スヘキ現職中ノ所爲確定シタルトキ

二　禁錮以上ノ刑ニ處セラレタルトキ

三　日本臣民タルノ分限ヲ失ヒタルトキ

四　第二條第二第三條若クハ第七條ニ依リ退隱料ヲ受クル者復タヒ其職務ニ堪フルニ至ルコトアルモ仍府縣知事ヨリ指命セラルヽ所ノ敎職ニ就カサルトキ又ハ第二條第三ニ依リ退隱料ヲ受クル者府縣知事ヨリ指名セラルヽ所ノ敎職ニ就カサルトキ但其給料ハ退職現時ノ給料ヨリ少額ナラス且年齡未タ六十歲ニ至ラサル場合ニ限ル

五　府縣知事ノ許可ヲ經スシテ公務ニ就キタルトキ

退隱料ヲ受クル者左ノ事項ノ一ニ當ルトキハ其時間退隱料ヲ受クルコトヲ得ス

一　公務ニ就キ退職現時ノ給料額ト同額以上ノ給料ヲ受クルトキ

二　三箇年以上受領ヲ怠リタルトキ

三　公權ヲ停止セラレタルトキ

第六條　年齡未タ六十歲ニ至ラスシテ自己ノ便宜ニ依リ退職シタル者又ハ免職ニ處セラレ若クハ失職ニ該當シタル者ハ退隱料ヲ受クルノ資格ヲ失フモノトス

第七條　市町村立小學校ノ准敎員ハ職務ノ爲傷痍ヲ受ケ若クハ疾病ニ罹リ第三條ニ該當スル者ニ限リ退職現時ノ給料四分ノ一ノ退隱料ヲ終身給與ス

第八條　在職滿五年以上十一年未滿ニシテ退職シタル市町村立小學校正敎員ハ退職現時ノ給料二箇月分ニ當ル金員ヲ給シ其滿十一年以上十五年未滿ニシテ退職シタル者ハ給料三箇月分ニ當ル金員ヲ給ス

第二條第三條又ハ第七條ニ依リ退隱料ヲ受クル者自己ノ便宜ニ依リ退職シタル者又ハ免職ニ處セラレ若クハ失職ニ該當シタル者又ハ前項ノ給與ヲ受クヘキ事由ノ生シタル後三箇月內ニ之ヲ請求セサル者ハ前項ノ限ニ在ラス

自己ノ便宜ニ依リ本條第一項ノ給與ヲ受ケサル者他日市町村立小學校正敎員ノ職ニ就クトキハ前ノ在職年數ヲ以テ退隱料等ノ給與上ニ關スル在職年數ニ算入スヘキモノトス但其給與ヲ受クヘキ事由ノ生シタル後三箇月內ニ之ヲ受ケサルコトヲ申立テサル者ハ本文ノ限ニ在ラス

第九條　退隱料ノ支給及第八條ノ給與ハ市町村長ノ證明ニ依リ府縣知事之ヲ裁定ス

官吏恩給法第十六條及第十八條ハ退隱料ニ適用ス

第十條　市町村立小學校正敎員左ノ事項ノ一ニ當ルトキハ其遺族ハ此法律ノ規定ニ從ヒ扶助料ヲ受クルノ權利ヲ有ス

一　在職十五年以上ノ者在職中死去シタルトキ

二　在職十五年未滿ノ者職務ノ爲死去シタルトキ

三　退隱料ヲ受クル者死去シタルトキ

第十一條　官吏遺族扶助法第四條第一項第二項第五條乃至第十條第十二條乃至第十六條ハ此法律ニ規定スル扶助料ニ適用ス

官吏遺族扶助法第十一條ハ此法律ニ規定スル扶助料ヲ受クヘキ寡婦孤兒又ハ父母祖父母ナクシテ死去シタル者ノ戶籍內ニ在ル二十歲未滿又ハ癈疾若クハ不具ニシテ產業ヲ營ムコト能ハサル兄弟姉妹アリテ之ヲ給襲スル者ナキ場合ニ適用ス

第十二條　在職十五年未滿ノ市町村立小學校正敎員在職中職務ノ故ニアラスシテ死去シタルトキハ其遺族ニ一時扶助金ヲ給ス

前項ノ扶助金ハ在職三年未滿ニシテ在職最終ノ給料一箇月分ニ當ル金員トシ三年以後滿一年每ニ給料年額百分ノ二ニ當ル金員ヲ加フ

第十三條　扶助料及扶助金ノ支給並第八條及第十一條第二項ノ給與ハ市町村長ノ申牒ニ依リ府縣知事之ヲ裁定ス

第十四條　府縣ハ小學校敎員恩給基金ヲ備フヘキモノトス

市町村ハ其市町村立小學校ニ在職スル正敎員ノ給料額百分ノ一ニ當ル金員ヲ每年其府縣ニ納ムヘキモノトス

市町村立小學校正敎員ハ其給料額百分ノ一ニ當ル金員ヲ每年其府縣ニ納ムヘキモノトス

本條第二項及第三項ノ納金ハ府縣小學校敎員恩給基金ト爲スヘシ

恩給基金ハ其利子ヲ以テ退隱料扶助料扶助金第八條及第十一條第二項ノ給與ニ充ツルノ外之ヲ支消スルコトヲ得サルモノトス

本條第二項及第三項ニ依リ各府縣ニ於テ收入シタル納金額四分ノ一ニ當ル金員ヲ收入年度ノ翌々年度每ニ國庫ヨリ府縣ニ給與スルモノトス

退隱料扶助料扶助金第八條及第十一條第二項ノ給與ハ恩給基金ノ利子及國庫ノ給與金其他ノ收入ヲ以テ之ヲ支辨シ不足アルトキハ府縣費ヲ以テ之ヲ補充スヘキモノトス

恩給基金ノ管理並退隱料扶助料扶助金第八條及第十

一條第二項ノ給與ノ支給等ニ關スル規則ハ文部大臣之ヲ定ム恩給基金ノ管理並ニ退隱料扶助料扶助金第八條及第十一條第二項ノ給與ノ支給ニ關スル費用ハ總テ府縣ノ負擔トス

第十五條　此法律中第一條乃至第十三條ハ明治二十六年度ヨリ第十四條ハ明治二十五年度ヨリ之ヲ施行ス

第十六條　府縣制郡制又ハ市制町村制ヲ施行セサル地方ニ於テ此法律ノ條規ニ對シ特例ヲ設クルコトヲ必要トスルトキハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

◎府縣立師範學校長俸給並公立學校職員退隱料及遺族扶助料ニ於ケル學校職員ノ資格在職年數算定方

明治二十五年二月勅令第十七號

朕府縣立師範學校長俸給並公立學校職員退隱料及遺族扶助料法ニ於ケル學校職員ノ資格及其在職年數ノ算定ニ關スル件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

第一條　府縣立師範學校長俸給並公立學校職員退隱料及遺族扶助料法ニ於テ府縣立師範學校及公立中學校ノ正教員トハ教諭訓導トシ準教員トハ其他ノ教員トス

第二條　府縣立師範學校長俸給並公立學校職員退隱料及遺族扶助料法第六條ニ掲クル府縣立師範學校及公立中學校ノ學校長正教員ニ準スヘキ官立公立學校職員ト認ムヘキ者左ノ如シ

一　官立學校ノ學校長及教官

二　府縣立師範學校長俸給並公立學校職員退隱料及遺族扶助料法第十九條第二項ニ依リ退隱料等ノ制ヲ設ケタル公立學校ノ學校長教員ニシテ退隱料等ヲ受クヘキ資格アル者

三　明治二十六年三月三十一日以前小學校ニアラサル公立學校ノ學校長教員ニシテ判任官ノ待遇又ハ判任以上文官ト同一ノ待遇ヲ受クル者府縣立師範學校ノ正教員及公立中學校ノ學校長正教員休職中ノ年數及月數亦同シ（二十七年八月勅令第百四十二號ニテ本項改正）

第三條　府縣立師範學校及公立中學校ノ學校長正教員ノ在職年數ハ就職ノ月ヨリ起算シ退職ノ月ヲ以テ終リトス

明治十四年六月以前ヨリ在職ノ者ハ同年同月ヨリ起算ス

府縣立師範學校長非職中ノ年數及月數並府縣立師範學校長補在職中ノ年數及月數ハ在職年數ニ算入スヘシ

第四條　第二條ニ掲クル官公立學校職員ヨリ府縣立師範學校及公立中學校ノ學校長正教員ニ轉シタル者ノ退隱料等ノ給與上在職年數ニ算入スヘキ年數及月數左ノ如シ

一　第二條第一ニ掲クル者ニ在テハ官立學校ニ於ケル在官年數ニ對シ官吏恩給法ニ於テ算入スヘキ在官ノ年數及月數

二　第二條第二ニ掲クル者ニ在テハ該公立學校ニ於テ退隱料等ノ給與上算入スヘキ在職ノ年數及月數但該公立學校ニ於ケル勤務ニ對シ退隱料ヲ受クル者ハ其退隱料ヲ受クヘキ事由ノ生シタル前ノ在職年數及月數ヲ算入セス

三　第二條第三ニ掲クル者ニ在テハ該公立學校ニ於ケル在職ノ年數及月數

第五條　左ニ掲クル年數及月數ハ在職年數ヨリ除算スヘシ

一　男子年齡二十年未滿女子年齡十八年未滿ノ在職年數及月數

二　退隱料ヲ受クルノ權利又ハ資格ヲ失ヒタル者再ヒ就職シタルトキハ其前在職ノ年數及月數

三　府縣立師範學校長俸給並公立學校職員退隱料及遺族扶助料法第十條第一項ノ給與ヲ受ケタル者又ハ同條第三項但書ノ申立ナクシテ之ヲ受ケサリシ者再ヒ就職シタルトキハ其前在職ノ年數及月數

四　恩給若クハ退隱料ヲ受クヘキ職ニ在ル者ニシテ府縣立師範學校及公立中學校ノ學校長正教員ヲ兼ヌルトキハ其兼職中ノ年數及月數

◎市町村立小學校教員退隱料支給ニ關スル在職年數算定方

明治二十五年二月勅令第十八號

朕市町村立小學校教員退隱料等ノ支給上ニ關スル在職年數算定ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

第一條　市町村立小學校教員退隱料等ノ支給上ニ關スル正教員ノ在職年數ハ就職ノ月ヨリ起算シ退職ノ月ヲ以テ終リトス

第二條　左ニ掲クル年數及月數ハ正教員在職年數ニ算入スヘシ

一　市町村立小學校正教員休職中ノ年數及月數

二　明治十四年六月以後市町村立小學校訓導ノ職ニ在リタル年數及月數

第三條　左ニ掲クル年數及月數ハ正教員在職年數ヨリ除算スヘシ

一　男子年齡二十年未滿女子年齡十八年未滿ノ在職年數及月數

二　退隱料ヲ受クルノ權利又ハ資格ヲ失ヒタル者再ヒ就職シタルトキハ其前在職ノ年數及月數

三　市町村立小學校教員退隱料及遺族扶助料法第八條第一項ノ給與ヲ受クタル者又ハ同條第三項但書ノ申立ナクシテ之ヲ受ケサリシ者再ヒ就職シタルトキハ其前在職ノ年數及月數

四　恩給若クハ退隱料ヲ受クヘキ職ニ在ル者ニシテ市町村立小學校正教員ヲ兼ヌルトキハ其兼職中ノ年數及月數

◎府縣制郡制又ハ市制町村制ヲ施行セサル地方ニ於テ府縣立師範學校長俸給並公立學校職員退隱料及遺族扶助料法及市町村立小學校教員退隱料及遺族扶助料法

明治二十四年十二月勅令第二百四十八號

朕府縣制郡制又ハ市制町村制ヲ施行セサル地方ニ於テ府縣立師範學校長俸給並公立學校職員退隱料及遺族扶助料法及市町村立小學校教員退隱料及遺族扶助料法ノ施行ニ關スル件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

第一條　府縣立師範學校長俸給並公立學校職員退隱料及遺族扶助料法及市町村立小學校教員退隱料及遺族扶助料法ニ規定スル府縣知事ノ職務ハ北海道ニ於テハ北海道廳長官之ヲ行ヒ市長町村長ノ職務ハ市制町村制ヲ施行セサル地方ニ於テハ島司郡區長戸長又ハ之ニ準スヘキ者之ヲ行フヘシ

第二條　府縣立師範學校長俸給並公立學校職員退隱料及遺族扶助料法及市町村立小學校教員退隱料及遺族扶助料法ニ規定スル府縣ノ負擔ハ府縣制又ハ地方稅ノ制ヲ施行セサル地方ニ於テハ地方經濟ニ屬スル費用ノ負擔トシ市町村ノ負擔ハ市制町村制ヲ施行セサル地方ニ於テハ區町村公費ノ負擔トス

第三條　府縣立師範學校長俸給並公立學校職員退隱料及遺族扶助料法第十六條第二項ノ納金ハ國庫ノ支辨ニ屬スル地方費ヲ以テ維持スル公立學校ノ學校長正教員ノ俸給ニ對シテハ之ヲ納ムルコトヲ要セス

第四條　市町村立小學校教員退隱料及遺族扶助法ニ規定スル府縣ノ負擔ハ府縣內ニ在ル島嶼ト本地ト經濟ヲ異ニスルトキハ府縣知事ニ於テ府縣會ノ議決ヲ經內務大臣文部大臣ノ認可ヲ得テ其島嶼ノ分擔額ヲ定ムヘシ

前項ノ規定ニ依リ難キ特別ノ事情アルトキハ府縣知事ニ於テ府縣會ノ議決ヲ經內務大臣文部大臣ノ認可ヲ得テ該島嶼ノ爲ニ別ニ小學校教員恩給基金ヲ備ヘ總テ其負擔ヲ本地ト分別スルコトヲ得

◎府縣小學校教員恩給基金管理規則

明治二十四年十月文部省令第七號

明治二十三年(十月)法律第九十號市町村立小學校教員退隱料及遺族扶助

料法第十四條ニ基キ府縣小學校教員恩給基金管理規則ヲ定ムルコト左ノ如シ

府縣小學校教員恩給基金管理規則

第一條　小學校教員恩給基金ハ他ノ府縣有財産ト區分シテ之ヲ管理スヘシ

第二條　小學校教員恩給基金ハ現金又ハ公債證書トシ總テ大藏省預金局ニ寄託スヘシ

第三條　當該年度ノ支出ニ充テタル小學校教員恩給基金ノ利子及國庫ノ給與金其他ノ收入ニシテ殘餘アルトキハ府縣參事會ノ議決ヲ經テ恩給基金ニ加入シ又ハ翌年度ヘ繰越スヘシ

第四條　小學校教員恩給基金ノ整理方法ハ特別ノ規定ナキモノハ總テ他ノ府縣有財産ノ例ニ依ル

◉小學校教員ノ勤續ニ關スル件

明治二十七年二月文部省令第三號

市町村立小學校廢止ノ際其ノ小學校教員ノ職ニ在ル者即日他ノ市町村立小學校教員ニ任セラルヽトキハ勤續者トス

◉府縣立師範學校公立中學校長正教員及市町村立小學校正教員ノ退隱料遺族扶助料ニ關スル權利障害ノ出訴方

明治二十五年四月勅令第三十二號

府縣立師範學校及公立中學校ノ學校長正教員並町村立小學校正教員ノ退隱料又ハ遺族扶助料ニ關シ權利ヲ障害セラレタリトスル者ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

府縣立師範學校公立中學校ノ學校長正教員並市町村立小學校正教員ノ退隱料又ハ遺族扶助料ニ關シ行政上ノ處分ニ依リ權利ヲ障害セラレタリトスル者ハ一箇年以內ニ行政裁判所ニ出訴スルコトヲ得但左ノ事件ニ關シテハ文部大臣若クハ府縣知事ノ裁定ハ終審確定ノモノトス

一　傷痍疾病ノ原因及其輕重

二　職務ニ堪ユルト否ラサルト

第四款　宮內官吏准官吏恩給年金其他諸給與

◉宮內省官吏准官吏恩給例及遺族扶助例

明治二十三年八月宮內省達第十六號

明治二十年達第二號宮內省官吏恩給例明治二十二年達第二十四號宮內省准官吏恩給例ヲ廢シ宮內省官吏准官吏恩給例同遺族扶助例左ノ通相定ム

宮內省官吏恩給例

第一條　宮內省官吏判任以上ノ者退官シタルトキハ本例ノ規定スル所ニ依リ恩給ヲ給ス

第二條　左ノ事項ハ明治二十三年法律第四十三號官吏恩給法ニ規定ノ條項ヲ適用ス

一　在官滿十五年以上ノ者ニ對シ恩給ヲ給スル場合及其給額

二　傷痍疾病ニ罹リシ者ニ對シ恩給ヲ給スル場合及其給額

三　在官數年ノ計算並ニ明治四年七月以前ノ在官者ニ對スル支給方

四　恩給ヲ受ル者再官ニ付退官シタルトキ支給ノ區別

五　恩給ノ停止及剝奪

六　恩給ヲ受ル資格ノ存否

第三條　宮內大臣ノ在職年數ハ國務大臣ノ例ニ依ル

第四條　政府ノ文官ヨリ宮內省ニ轉任シタル者又ハ恩給ヲ受スシテ政府ヲ退キタル後宮內官ニ任シタル者ハ政府ノ判任官以上ニ在シ月數モ在官年數中ニ通算ス

第五條　准官吏（宮內省官制ニ於テ特ニ指定シタル準判任以上ヲ云フ以下皆同シ）ヨリ官吏トナリタル者ハ准官吏在官年數五分ノ一ヲ減シテ官吏在官年數ニ通算ス

第六條　准官吏ヨリ官吏トナリタル當月ハ官吏在官年數中ニ算入ス

第七條　俸給ヲ受サル官吏並ニ高等官試補判任官見習補助員顧問員評議員又ハ御用掛勤務殿掌殿部其他何等ノ名稱ヲ附スルモ宮內省官制外ニ屬スル者ニハ恩給ヲ給スルヿナク但高等官試補及判任官見習ノ傷痍疾病ニ對スルモノハ此限ニアラス

第八條　恩給ノ支給ハ其所管長所管長ナキ者ハ內事課長ノ證明ニ依リ調査課ノ審査ヲ經テ宮內大臣之ヲ裁定ス

第九條　前條ノ裁定ニ服セサル者ハ六ケ月以內ニ宮內大臣ニ具狀シ再審査ヲ請求スルヿヲ得

第十條　前條再審査ノ請求アルトキ宮內大臣ハ特ニ審査委員ヲ命シ審査ノ上裁決ス此裁決ヲ以テ終結トシ他ニ告訴スルヿヲ得ス

第十一條　恩給ハ賣買讓與質入書入スルヿヲ得ス又負債ノ抵當トナスヿヲ得ス違フ者ハ恩給ヲ停止ス

第十二條　恩給ハ之ヲ受ヘキ理由ノ生シタル後三箇年ヲ過クレハ之ヲ請求スルヿヲ得ス

第十三條　明治二十年達第二號宮內省官吏恩給例ニ依リ恩給ヲ受タル者ハ其恩給例ニ依ルヘシ

第十四條　判任以上ノ者在官滿一年以上ニシテ退官シタル者ニハ明治二十三年勅令第九十八號ヲ適用シ一時賜金ヲ給ス（廿六年四月宮內省達甲第二號ニテ改正）

宮內省准官吏恩給例

第一條　宮內省准官吏（宮內省官制ニ於テ特ニ指定シタル准判任以上ヲ云フ以下皆同シ）ノ退官シタルトキハ本例ノ規定スル所ニ依リ恩給ヲ給ス

第二條　左ノ事項ハ明治二十三年法律第四十三號官吏恩給法ニ規定ノ條項ヲ適用ス

一　在官滿十五年以上ノ者ニ對シ恩給ヲ給スル場合

二　傷痍疾病ニ罹リシ者ニ對シ恩給ヲ給スル場合

三　在官年數ノ計算並ニ明治四年七月以前ノ在官者ニ對スル支給方

四　恩給ヲ受クル者再ヒ官ニ就キ退官シタルトキ支給ノ區別

五　恩給ノ停止及剝奪

六　恩給ヲ受ル資格ノ存否

第三條　准官吏恩給ノ年額ハ退官現時ノ俸給ト在官ノ年數トニ依リ之ヲ定ム即チ在官滿十五年以上十六年未滿ニシテ退官シタル者ノ恩給年額ハ俸給年額四百分ノ八十トシ滿十五年以上一年毎ニ四百分ノ一ヲ加ヘ滿四十年ニ至リテ止ム但在官四十年以上ノ者ニ給スヘキ恩給ハ四十年ノ額又十五年未滿ノ者ニ給スヘキ恩給ハ十五年ノ額トス

非職滿期ニ由テ退官シタル者ノ恩給ハ其在職最終ノ俸額ニ依テ之ヲ算定ス兼官ニ依テ受ル加俸ハ恩給年額ヲ算定スルニ當リ之ヲ除算ス恩給年額四位未滿ノ數ハ四位ニ滿タシム

第四條　官吏ヨリ准官吏トナリタル者通算シテ十五年ニ滿ルトキハ官吏在官年數ニ五分ノ一ヲ加ヘテ准官吏在官年數ニ通算シ加算ノ年數並ニ爾後勤續ノ年數ニハ第三條ノ算則ヲ以テ滿一年毎ニ四百分ノ一ヲ加ヘ加算ノ年數ニ併算四十年ニ至テ止ム

第五條　官吏滿十五年以上在官ノ後准官吏トナリタル者ハ其准官吏退官ノ時ニ於テ准官吏在官年數ノ五分ノ一ヲ減シテ官吏在官年數ニ併算シ官吏恩給支給ノ例ニ依ル

第六條　官吏ヨリ准官吏トナリタル當月ハ官吏在官ノ年數中ニ算入ス

第七條　宮內省官吏恩給例第四條第八條第九條第十條第十一條第十二條ハ本例ニ適用ス

第八條　准官吏在官滿一年以上ニシテ退官シタル者ニハ明治二十三年勅令第九十八號ヲ適用シ一時賜金ヲ給ス（二十六年四月宮內省達甲第二號ニテ改正）

宮内省官吏准官吏遺族扶助料

第一條　宮内官吏准官吏列任以上ノ者左ニ掲ル事項ノ一ニ當ルトキハ本則ノ規定スル處ニ依リ其遺族ニ扶助料ヲ給ス但第三條ノ納金ヲ爲スヲ要セサル者ノ遺族ハ此限リニアラス

一　在官十五年以上ノ者在官中死去シタルトキ

二　在官十五年未滿ノ者公務ノ爲メ死去シタルトキ

三　恩給ヲ受ル者死去シタルトキ

第二條　左ノ事項ハ明治二十三年法律第四十四號官吏遺族扶助法ニ規定ノ條項ヲ適用ス

一　寡婦扶助料ノ年額

二　扶助料ヲ支給スヘキ者及支給轉給ノ制限

三　扶助料ノ廢止停止

四　扶助料ヲ受クヘキ資格ノ消滅

五　在官十五年未滿ニシテ在官中公務ノ故ニアラスシテ死去シタル者ノ遺族ニ給スル一時扶助金

第三條　官吏准官吏列任以上ノ者ハ其俸給百分一ヲ内藏寮ニ納ムヘシ

俸給ヲ受サル官吏並ニ高等官試補列任官見習補助員顧問員評議員又ハ御用掛勅務殿祭殿部其他何等ノ名稱ヲ附スルモ宮内省官制外ニ屬スル者ハ納金ヲ要セス又兼務ニ依テ受ル加俸ニ對シテハ納金ヲ要セス

第四條　扶助料ノ支給ハ本人元所管長所管長ナキ者ハ内事課長ノ申牒ニ依リ調査課ノ審査ヲ經テ宮内大臣之ヲ裁定ス

第五條　前條ノ裁定ニ服セサル者ハ六ケ月以内ニ宮内大臣ニ具狀シ再審査ヲ請求スルヿヲ得

第六條　前條再審査ノ請求アルトキ宮内大臣ハ特ニ審査委員ヲ命シ審査ノ上裁決ス此裁決ヲ以テ終結トシ他ニ告訴スルヿヲ得ス

第七條　扶助料ハ賣買讓與質入書入スルヿヲ得ス又負債ノ抵償トナスヿヲ得ス違フ者ハ扶助料ヲ停止ス

第八條　扶助料ハ之ヲ受ヘキ理由ノ生シタル日ヨリ三ケ年ヲ過レハ之ヲ請求スルヿヲ得ス

◎宮内省官吏恩給扶助料支給方

二十五年一月宮内省達甲第二號

第一條　政府ヨリ恩給ヲ受ル者宮内官ニ任シ退官シタルトキハ宮内省官吏恩給例及同准官吏恩給例第二條第四ノ規定ニ依リ前後恩給ヲ比較シ後官恩給ノ超過額又ハ在官年數ニ對スル增加額ニ限リ終身恩給トシテ之ヲ給ス

第二條　軍人現役十一年以上ニシテ政府ヨリ恩給ヲ受ケサルモノ宮内官ニ任シ退官シタルトキハ明治二十三年法律第四十五號軍人恩給法第七條ヲ適用シ終身恩給ヲ給ス

第三條　宮内省ヨリ恩給ヲ受クル者政府列任以上ニ任シ俸給ヲ受ルトキハ此間恩給ヲ停止ス但シ商業ヲ營ムコトヲ得ヘキ官職ニアルトキハ此限リニ非ス

第四條　第一條第二條ニ依リ恩給ヲ受クルモノ又ハ恩給ヲ受クヘキモノ死去シタルトキハ宮内省官吏准官吏遺族扶助例ニ依リ其遺族ニ扶助料ヲ給ス

◎皇宮警手給助例

二十六年六月宮内省達乙第二號

皇宮警手給助例左ノ通リ相定ム

第一條　皇宮警手又ハ其遺族ニハ本例ノ規定スル所ニ依リ給助ヲ與フルモノトス

第二條　給助ハ左ノ五種トス

一　退職給助

二　傷痍給助

三　死亡給助

四　療治料

五　祭祀料

第三條　退職給助ハ奉職滿五年以上ニシテ退職スルモノニ左ノ區別ニ依リ之ヲ給ス但他ノ官職ニ轉任スルモノモ亦本條ニ準シ打切支給スルモノトス

一　奉職滿五年ノ者ハ一時金貳拾五圓ヲ給シ五年以上十年未滿ハ滿一年毎ニ金五圓ヲ增給ス

二　奉職滿十年ノ者ハ終身年金參拾圓ヲ給シ十年以上ハ滿一年毎ニ金一圓ヲ增ス

三　前項ノ年金ヲ受クル者再ヒ就職シ滿五年以上ニシテ退官シタルトキハ奉職年數ニ應シ年金ヲ增給ス

第四條　左ニ掲クル事項ノ一ニ當ル者ハ退職給助ヲ受ルコトヲ得ス

一　懲罰ニ依リ免職セラレタル者

二　懲罰ニ依リ免職スヘキ者特典ニヨリ諭旨解職シタル者

三　刑事裁判ニ依リ免職セラレタル者

第五條　傷痍給助ハ職務ノタメ終身不具トナリタル者左ノ區別ニ依リ之ヲ給ス

一　自用ヲ辨スル能ハサル者ハ一等傷トシ終身年金四拾圓ヲ給ス

二　自用ヲ辨シ得ル者ハ終身年金參拾圓ヲ給ス

第六條　退職給助ト傷痍給助トハ併セテ給スルモノトス

第七條　死亡給助ハ職務ノ爲メ負傷若クハ其負傷ニ原因シテ死去シタル者又ハ職務上傳染病ニ罹リ死去シタルモノヽ遺族ニ左ノ區別ニ依リ之ヲ給ス

一　寡婦ハ終身年金參拾圓ヲ給ス

二　寡婦ナキトキ又ハ年金ヲ受クル寡婦死去シ又ハ婚嫁シ又ハ戸籍ヲ去リタルトキハ其年金ヲ相續ノ孤兒ニ給ス

三　年金ヲ受クヘキ寡婦孤兒ナク死去シタル者ノ父母若クハ其戸籍内ニアル二十歲未滿又ハ癈疾又ハ不具ノ兄弟姉妹ニシテ從來死者ニ依リテ生計ヲ爲セシ者アルトキハ血緣近キ者一人ニ一時金百圓ヲ給ス

四　年金ヲ受クル孤兒二十歲ニ滿ルモ癈疾又ハ不具ナルトキハ年金廢止ノ際一時金百圓ヲ給ス

前各項ニ於テ寡婦トハ其夫退職前ニ結婚シタル者孤兒トハ年齡二十歲未滿ニシテ未タ結婚セサルモノヲ云フ

第八條　年金ヲ受クル者重罪ノ刑ニ處セラレ若クハ日本臣民タルノ分限ヲ失ヒタルトキハ年金ヲ廢止ス

左ニ掲クル事項ノ一ニ當ルトキハ其間年金ヲ停止ス

一　俸給ヲ受クル官職（凡ソ官衙ノ俸給ヲ受クル者ヲ云フ）ニ就キタルトキ

二　公權ヲ停止セラレタルトキ

三　失踪シタルトキ

四　許可ヲ得スシテ外國ニ出テ一年以上歸朝セサルトキ

第九條　年金支給ノ期ハ左ノ如シ

一　退職又ハ傷痍ノ年金ニアリテハ退職又ハ傷痍等確定ニ翌月ヨリ始マリ死去ノ月ヲ以テ終ルモノトス

二　死亡年金ニアリテハ之ヲ受クヘキ事由ノ生シタル月ノ翌月ヨリ始マリ寡婦ハ死去シ又ハ結婚シ又ハ戸籍ヲ去リタル月孤兒ハ死去シ又ハ婚嫁シ又ハ戸籍ヲ去リ又ハ年齡二十歲ニ滿チタル月ヲ以テ終ルモノトス

第十條　奉職年數ハ月ヲ以テ計算ス

第十一條　年金ハ賣却讓與質入書入トナスコトヲ得ス又負債ノ抵償トナフヿヲ得ス違フ者ハ年金ヲ停止ス

第十二條　療治料ハ職務ノ爲メ負傷シ又ハ傳染病ニ罹リタル者ニ之ヲ給ス其金額ハ一日壹圓以下トシ傷痍又ハ疾病ノ重症ニ依リ不足ヲ生スルトキハ實費ヲ給ス但シ官費治療ヲ爲ストキハ此限リニアラス

第十三條　祭祀料ハ奉職中死去シタルトキ左ノ區別ニヨリ之ヲ給ス

一　奉職一年未滿ハ一時金拾五圓ヲ給シ滿一年以上二年未滿ハ金五圓ヲ增給シ以上一年毎ニ此例ニ依リ同額ノ金員ヲ增給ス

二　職務ノ爲メ死去シタル者ハ前項ノ外一時金百圓ヲ給ス

第十四條　第三條第二第三及第五條ニ依リ退職又ハ傷痍給助ヲ受クヘキ者ハ願書（宮内大臣宛以下皆同シ）ニ履歷書ヲ添ヘ皇宮警察長ニ差出スヘシ但傷痍給助ヲ受クヘキ者ハ履歷書ノ外皇宮警察長ノ下付シタル傷等確定書寫及現認證書ヲ添付スヘシ

第十五條　第七條ニ依リ死亡給助ヲ受クヘキ家族ハ願書ニ自署シ（後見人アレハ其後見人連署スヘシ）親族二名（親族ナキトキハ他ノ戸主二

名）連署シ市町村長（市制町村制ヲ施行セサル地ニ於テハ區戸長（以下皆同シ）ノ奥印ヲ受ケ左ノ書類ヲ添ヘ皇宮警察長ニ差出スヘシ

一　死亡者ノ履歴書

二　醫師ノ診斷書

三　市町村長ノ證明シタル戸籍調書

第十六條　年金ハ其年額ヲ二分シ六月十二月ニ於テ前六箇月分ヲ內藏寮ヨリ交付ス但資格消滅ノトキハ期月ニ拘ハラス之ヲ交付ス

年金ノ交付ヲ受タルモノハ領收證ニ市長村長ノ證明シタル生存證書ヲ添ヘ內藏寮ニ差出スヘシ

第十七條　年金支給ノ期日ハ左ノ如シ

一　重罪ノ刑ニ處セラレタルトキハ確定裁判ノ宣告ヲ受ケタル日日本臣民タルノ分限ヲ失ヒタル日ヲ以テ支給ヲ終ル

二　俸給ヲ受クル官職ニ就キタルトキハ俸給ノ支給ヲ始ムル日ヲ以テ支給ヲ終リ其退職シタルトキハ俸給ノ支給ヲ終リタル日ノ翌日ヨリ之カ支給ヲ始ム

三　公權ヲ停止セラレタルトキハ禁錮ニ處セラレ若クハ監守ニ付セラルヘキ確定裁判ノ宣告ヲ受ケタル日ヲ以テ支給ヲ終リ刑期滿限ノ翌日ヨリ支給ヲ始ム

四　失踪シタル者ハ失踪ノ當日ヲ以テ支給ヲ終リ復歸ノ當日ヨリ支給ヲ始ム

五　許可ヲ得スシテ外國ニ出テ一年以上歸朝セサル者ハ外國ニ出テタル當日ヲ以テ支給ヲ終リ歸朝ノ當日ヨリ支給ヲ始ム

第十八條　年金ヲ受クル者輙居又ハ改印又ハ改氏名ヲ爲シタルトキハ市町村長ノ奥印ヲ受ケタル屆書ヲ調査課ニ差出スヘシ

前項改氏名ノ屆書ニハ年金證書ヲ添付スヘシ此ノ場合ニ於テハ調査課ハ證書裏面ニ其旨ヲ記載シ課印押捺ノ上本人ニ下付スヘシ

第十九條　年金ヲ受クル者左ノ場合ニ於テハ本人又ハ親族ヨリ調査課ニ屆出ヘシ

一　公權ヲ停止セラレタルトキ但シ確定裁判宣告書寫ヲ添付スヘシ

二　公權ヲ停止セラレタルトキ及退職シタルトキ

三　俸給ヲ受クル官職ニ就キタルトキ及退職シタルトキ

四　退職又ハ傷痍年金受領者死去シタルトキ但年金證書ヲ添付スヘシ

五　寡婦孤兒婚嫁シ又ハ戸籍ヲ去リ又ハ死去シタルトキ但他ニ輕給ヲ受クヘキ者ナキトキハ年金證書ヲ添付スヘシ

六　孤兒二十歲ニ滿チタルトキ但年金證書ヲ添付スヘシ

七　失踪シタルトキ及復歸シタルトキ

八　許可ヲ得スシテ外國ニ出タルトキ及歸朝シタルトキ

第二十條　水火災盜難等ニ依リ年金證書ヲ亡失シタルトキハ市町村長ノ奥印ヲ受ケタル屆書ヲ調査課ニ差出スヘシ調査課ハ年金證書ノ謄本ヲ作リ本人ニ下付スヘシ

前項ノ謄本ハ本證書ト同一ノ効力アルモノトス

◎宮內官吏恩給停止ノ件

明治二十六年三月廿八日宮內省達甲第一號

宮內省ヨリ恩給ヲ受クル者宮內省ヨリ一定ノ俸給ヲ受ル職務ニ就キタルトキハ其間恩給ヲ停止ス

第五款　巡査看守監獄雇員及守衛恩給年金其他諸給與

◎巡査看守給助例

明治十五年七月　第四十一號達

巡査看守給助例別紙ノ通リ相定メ候條各地方ニ於テ給助金額ヲ定メ「內務卿」ノ認可ヲ經テ施行可致此段相達候事但シ實施ノ府縣ハ八年一月第三號達幷ニ九年八月第八十號別表中免職歸國旅費ハ相廢候儀ト心得ヘシ

（別紙）

巡査看守給助規則

第一條　給助ハ退職給助傷痍給助死亡給助療治料祭祀料ノ五種トス

第二條　給助ヲ與ル者ハ左ノ如シ

一　退職給助　勤續巡査ヨリ看守ニ看守ヨリ巡査ニ轉スルモ總テ勤續トス滿五年以上ニシテ退職スル者ニハ一時之ヲ給ス滿十年以上ニシテ退職スル者ニハ終身之ヲ給ス

二　傷痍給助　職務ノ爲負傷スル者ニ終身之ヲ給ス

三　死亡給助　職務上ノ爲重傷死ニ至ル者及負傷後其傷痍ニ原因シテ死亡スル者又ハ職務上ノ傳染病ニ罹リ死亡スル者ノ遺族ニ之ヲ給ス

四　療治料　職務ノ爲メ負傷シ若クハ傳染病ニ罹ル者ニ之ヲ給ス

五　祭祀料　奉職中死亡スル者ニ之ヲ給ス

第三條　退職給助ノ額

一　勤續滿五年ノ者ハ一時金貳拾圓ヨリ少カラス參拾圓ヨリ多カラサル額ヲ給ス滿六年以上九年迄ハ一年每ニ金參圓ヨリ少カラス五圓ヨリ多カラサル額ヲ增給ス

二　勤續滿十年ノ者ハ年金貳拾五圓ヨリ少カラス三拾圓ヨリ多カラサル額ヲ給ス滿十一年以上ハ一年每ニ金五拾錢ヨリ少カラス壹圓ヨリ多カラサル額ヲ增給ス

第四條　傷痍給助ノ額

一　一等傷（終身不具トナリ自用ヲ辨スル能ハサル者）ハ年金參拾圓ヨリ少カラス四拾圓ヨリ多カラサル額ヲ給ス

二　二等傷（終身不具トナリ自用ヲ辨シ得ル者）ハ年金貳拾圓ヨリ少カラス參拾圓ヨリ多カラサル額ヲ給ス

第五條　死亡給助ノ額

一　寡婦又ハ相續ノ孤兒アル時ハ年金三拾圓ヨリ少カラス五拾圓ヨリ多カラサル額ヲ給ス寡婦再嫁シ孤兒二十歲ニ至レハ廢止ス但シ寡婦アレハ孤兒ニ給セス

二　寡婦又ハ孤兒ノ給助ヲ受ル者ナク祖父母父母又ハ二十歲未滿ノ兄弟姉妹ニシテ死者ニ依リ從來生計ヲ爲セシ者アルトキハ一時金五拾圓ヨリ少カラス百圓ヨリ多カラサル額ヲ給ス

三　相續者タル孤兒滿二十歲ニ至ルモ癈篤疾ナルトキハ年金ヲ廢止スルニ際シ一時金五拾圓ヨリ少カラス百圓ヨリ多カラサル額ヲ給ス

第六條　療治料ハ傷痍又ハ病症ノ輕重ニ依リ其適度ヲ量リ之ヲ給ス

第七條　祭祀料

一　奉職一年未滿ニシテ死亡スル者ハ一時金拾圓ヨリ少カラス拾五圓ヨリ多カラサル額ヲ給ス滿一年以上一年每ニ金三圓ヨリ少カラス五圓ヨリ多カラサル額ヲ給ス

二　職務ノ爲メ死亡スル者ヘハ前項ノ外一時金五拾圓ヨリ少カラス百圓ヨリ多カラサル額ヲ給ス

第八條　左ノ各項ニ該ル者ハ給助ヲ受ルヲ得ス

一　公權ヲ剝奪セラレタル者

二　懲罰ニ依リ免職セラレタル者

第九條　左ノ各項ニ該ル者ハ其時間給助ヲ停止ス

一　俸給ヲ受ルノ官職ニ就キタル者

一　公權ヲ停止セラレタル者

三　失踪シタル者

四　許可ヲ得スシテ外國ニ出テ一年以上歸朝セサル者

◉巡査看守給助例施行前二年以上在職者退職ノトキ慰勞金支給方

明治十五年七月第四十二號達

巡査看守給助例施行ノ期ニ際シ現在職滿二年以上五年未滿ノ者引繼キ五年未滿（奉職ノ日ヨリ算入）ニシテ退職スルトキハ給助施行ノ日ヲ期界トシ勤續年數ニ照シ滿年賜金ノ例ニ據リ當時月俸額ヲ以テ退職ノ際一時慰勞金ヲ支給スヘシ此旨相達候事

◉巡査看守給助例實施ノ府縣減員ニテ免職者ヘ一時慰勞金支給方

明治十年十二月第六十六號達

七年（七月）第四十一號ヲ以テ巡査看守給助例相達候處右實施ノ府縣ニ於テ人員減少等ニヨリ免職スルヿアルトキ奉職五年未滿ノ者ハ免職當時迄ノ勤續年數ニ照シ滿年賜金ノ例ニ依リ一時慰勞金トシテ支給スヘシ此旨相達候事

◉巡査看守給助例第二條第一項割註適用ハ一地方內轉任者ニ限ル件

明治十五年十二月內務省乙第六十八號達

本年七月第四十一號公達巡査看守給助例第二條第一項勤續割註ノ趣ハ全ク一地方內轉任スル者ニ限ル儀ニ付此旨爲心得相達候事

◉巡査看守給助例中年金支給方

明治二十年四月內務省訓令第二十三號

巡査看守給助例中年金ハ左ノ各項ニ據リ支給スヘシ

一　年金ハ每年三月及九月ニ於テ其月ヨリ前六ケ月（六ケ月ニ滿タサル者ハ現月數ヲ以テ計算ス）分ヲ支給スヘシ

一　年金ハ退職又ハ死亡又ハ傷痍ノ翌月ヨリ支給スヘシ

一　年金ヲ受ケタル者本例第一項及第九條ニ該當スルトキハ日割ヲ以テ支給スヘシ

一　年金ヲ受ケタル者死亡又ハ本例第五條第一項後段ニ該當スルトキハ其月分全額ヲ支給スヘシ

◉府縣分合又ハ管轄替ニ依リ巡査看守轉任ノトキ滿年賜金ヲ支給セサル件

明治二十六年四月內務省訓令第四號

府縣ノ分合又ハ管轄替ニ依リ巡査看守等甲廳ヨリ乙廳ニ引繼勤務スル者ハ勤續トシ明治十五年（一月）當省達第三號ニ依リ滿年賜金ヲ支給スルノ限リニアラス

◉巡査看守等經濟ヲ異ニスル向ヘ轉任スル節ハ滿年賜金ヲ給ス

明治十五年一月內務省乙第三號達

巡査監獄看守等經濟ヲ異ニスル向ヘ轉任スル節ハ一旦打切滿年賜金ヲ給スヘク此旨相達候事

◉警察及監獄雇員死傷者吊祭扶助療治料支給方

明治二十年九月內務省訓令第四十二號

警察及監獄傭員ニシテ職務上死傷セシモノ吊祭扶助療治料ハ十五年第六十七號公達ニ照準支給スヘシ

但警察傭ハ警察費監獄傭ハ監獄費ヨリ支辨スルモノトス

◉守衛給助ノ件

明治二十七年五月勅令第五十二號

朕貴族院竝衆議院守衛給助ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

貴族院竝衆議院守衛ノ給助ハ明治十五年太政官達第四十一號巡査看守給助例ニ依ル

◉海軍監獄看守被服料給與令

明治二十八年一月勅令第五號

朕海軍監獄看守被服料給與令ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

第一條　海軍監獄看守ニハ採用ノ際被服料金十八圓六十九錢ヲ給ス

第二條　海軍監獄看守ニハ被服保續料年額金五圓六十一錢ヲ給ス

第三條　海軍監獄看守職務上避クヘカラサル事故ニ因リ被服ヲ破損若クハ亡失シタルトキハ特ニ金十五圓以內ノ被服料ヲ給スルコトヲ得

第四條　本令施行ニ關スル細則ハ海軍大臣之ヲ定ム

附則

第五條　本令ハ明治二十八年四月一日ヨリ施行ス

第六條　本令施行以前ヨリ海軍監獄看守ノ職ニ在ル者ニハ本令施行ノ際第一條ノ被服料ヲ給ス

第三章　任用罷免

第一節　任用

◉文官任用令

明治二十六年十月勅令第百八十三號

朕文官任用令ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

文官任用令

第一條　奏任文官ハ別ニ任用ノ規程ヲ設クルモノヽ外左ノ資格ノ一ヲ有スル者ノ中ヨリ之ヲ任用ス

一　文官高等試驗ヲ經テ其ノ合格證書ヲ有スル者

二　滿三年以上高等文官ノ職ニ在リタル者但特別任用ノ規程ニ依リ在職シタル者竝ニ敎官技術官ノ在職年數ヲ除ク

三　滿三年以上判事檢事ノ職ニ在ル者及在リタル者

第二條　判任文官ハ別ニ任用ノ規程ヲ設クルモノヽ外左ノ資格ノ一ヲ有スル者ノ中ヨリ之ヲ任用ス

一　文官普通試驗ヲ經テ其ノ合格證書ヲ有スル者

二　文官高等試驗ヲ經テ其ノ合格證書ヲ有スル者

三　官立公立尋常中學校又ハ文部大臣ニ於テ之ト同

等以上ト認メタル官立公立學校ノ卒業證書ヲ有スル者

四　高等商業學校舊附屬主計學校及舊主計專修科ノ卒業證書ヲ有スル者竝ニ文部大臣ノ認可ヲ經タル學則ニ依リ法律學政治學又ハ經濟學ヲ敎授スル私立學校ニ於テ本令施行前ニ卒業證書ヲ得タル者

五　滿三年以上文官ノ職ニ在リタル者但特別任用ノ規程ニ依リ在職シタル者竝ニ敎官技術官ノ在職年數ヲ除ク

第三條　敎官及技術官ハ別ニ任用ノ規程ヲ設クルモノノ外奏任官ニ在リテハ文官高等試驗委員、判任官ニ在リテハ文官普通試驗委員ノ銓衡ヲ以テ之ヲ任用ス

第四條　特別ノ學術技藝ヲ要スル行政官ハ別ニ試驗ヲ用ヰス奏任官ニ在リテハ文官高等試驗委員、判任官ニ在リテハ文官普通試驗委員ノ銓衡ヲ經テ敎官技術官ノ中若クハ試驗委員ニ於テ敎官技術官タルノ資格アリト認ムル者ノ中ヨリ之ヲ任用スルコトヲ得

第五條　滿五年以上雇員トシテ同一官廳ニ勤續シタル者ハ文官普通試驗委員ノ銓衡ヲ經テ直ニ其ノ官廳ノ判任文官ニ任用スルコトヲ得

第六條　本令第三條、第四條及第五條其ノ他特別ノ規程ニ依リ任用セラレタル者ハ文官試驗ヲ經ルニアラサレハ其ノ各條又ハ其ノ規程ニ指定シタル以外ノ文官ニ任用スルコトヲ得ス

第七條　文官任用及銓衡ニ關スル細則ハ閣令ヲ以テ之ヲ定ム

附則

第八條　本令ハ明治二十六年十一月十日ヨリ施行ス

明治二十年勅令第三十七號文官試驗試補及見習規則、同年勅令第五十八號、同年勅令第六十三號、明治二十二年勅令第百十號、同年勅令第百三十七號、明治二十三年勅令第八號、同年勅令第二百號、明治二十四年勅令第百九十一號、明治二十五年勅令第二十四號、同年勅令第三十一號、明治二十年勅令第二十三號、同年勅令第二十五號、同年閣令第二十八號、明治二十二年閣令第十號、同年閣令第二十六號ハ本令施行ノ日ヨリ廢止ス

文官高等試驗細則

明治二十七年五月閣令第二號

文官高等試驗細則左ノ通定ム

文官高等試驗細則

第一條　文官高等試驗ヲ受クント欲スル者ハ書式ニ照シ試驗願書ニ履歷書及試驗論文ヲ添ヘ公告シタル期日マテニ文官高等試驗委員長ニ差出スヘシ但明治二十六年勅令第百九十七號文官試驗規則第十二條ニ該當スル者ハ試驗論文ヲ要セス

前項ノ期日ハ文題ト共ニ一箇月前ニ官報ヲ以テ公告スヘシ

第二條　試驗論文ハ公告シタル文題ニ就キ其ノ一ヲ撰ミ漢字交リ文ヲ用ヰ自ラ楷書ヲ以テ之ヲ書スヘシ

第三條　試驗手數料ハ登記印紙ヲ用ヰ試驗願書ニ貼付スヘシ但試驗ヲ受ケサルコトアルモ之ヲ還付セス

第四條　試驗願書履歷書及論文ハ出願ノ取消ヲ求ムルモ之ヲ還付セス

第五條　論文試驗ニ合格シタル者ニハ文官高等試驗委員長ヨリ口述試驗及迅速作文試驗ヲ行フヘキコト竝ニ其ノ期日及場所ヲ二十日前ニ官報ヲ以テ公告シ仍之ヲ本人ニ通知スヘシ

第六條　本試驗ノ筆記試驗ハ二日間ニ其ノ科目及期日ヲ定メテ之ヲ行ヒ其ノ口述試驗ハ筆記試驗全ク終リタル後更ニ期日ヲ定メ之ヲ行フ

前項筆記試驗ノ期日ハ豫備試驗ニ合格シタル者及文官試驗規則第十二條ニ該當スル試驗出願者ニ通知シ口述試驗ノ期日ハ筆記試驗ニ合格シタル者ニ通知シ仍官報ヲ以テ公告スヘシ

第七條　迅速作文及筆記試驗ハ受驗人總員ヲ一室又ハ數室ニ入レ問題ヲ付シ文官高等試驗委員監視シテ之ヲ行フ但受驗人一人ナルトキハ文官高等試驗委員二人以上監視ス

答案ハ楷書又ハ行書ヲ以テ明瞭ニ記スヘシ

第八條　口述試驗ハ豫備試驗ト本試驗トニ拘ラス文官高等試驗委員三人以上列席シテ受驗人一人毎ニ試問シテ即時答辯ヲ爲サシム

第九條　受驗人ハ試驗室內ニ於テ互ニ語話シ又ハ喧騷スルコトヲ得

第十條　受驗人ハ書類其ノ他受驗ノ材料トナルヘキモノヲ携帶シテ試驗室內ニ入ルコトヲ得ス

第十一條　受驗人ハ問題ニ付質問シ又ハ試驗場ニ於テ書籍ノ借覽ヲ求ムルコトヲ得ス

第十二條　受驗人ハ文官高等試驗委員長ノ掲示其ノ他試驗委員ノ命令ヲ遵守スヘシ

第十三條　受驗人試驗期日ニ出席セス又ハ試驗半途ニ退室シタルトキハ其ノ期ノ試驗ヲ受クルコトヲ得ス

第十四條　文官高等試驗委員長ハ文官高等試驗委員會議表決ノ數ニ入ラス但可否同數ナルトキハ文官高等試驗委員長之ヲ決ス

第十五條　文官高等試驗委員試驗ノ成績ヲ査定シタルトキハ之ヲ文官試驗委員長ニ報告スヘシ其ノ報告期限ハ文官高等試驗委員長傳メ之ヲ定ム

第十六條　文官高等試驗合格者ノ氏名ハ官報ヲ以テ公告ス

第十七條　文官高等試驗ニ關シ必要ナル手續ハ文官高等試驗委員長之ヲ定ム

（文官高等試驗出願書式略之）

雇員ヲ判任文官ニ任用方

明治二十六年十月勅令第百八十五號

朕雇員ヲ判任文官ニ任用スルノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

本年勅令第百八十三號文官任用令施行五箇月前ヨリ各官廳ニ於テ雇員トシテ引續キ事務ヲ執リタル者ハ文官任用令施行ノ後三箇月間ニ限リ文官普通試驗委員ノ銓衡ヲ經テ直ニ其ノ官廳ノ判任文官ニ任用スルコトヲ得但其ノ任用ノ際支給スヘキ俸給額ハ文官任用令施行ノ際ニ受ケタル俸給現額ヲ超ユルコトヲ得ス

文官試補及見習規程

明治二十六年十月勅令第百八十六號

朕文官試補及見習規程ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

文官試補及見習規程

第一條　本年勅令第百八十三號文官任用令及同年勅令第百八十四號ニ依リ奏任文官ニ任用セラルヘキ資格ヲ有スル者ハ試補トシ本年勅令第百八十三號文官任用令ニ依リ判任文官ニ任用セラルヘキ資格ヲ有スル者ハ見習トシテ各官廳ノ事務ヲ練習セシムルコトヲ得

第二條　試補ハ奏任官見習ハ判任官ノ待遇トス但俸給ヲ支給セス

附則

第三條　本令ハ明治二十六年十月十日ヨリ施行ス

明治二十年勅令第五十七號及明治二十一年閣令第二號ハ本令施行ノ日ヨリ廢止ス

◉外交官領事官及書記生任用令

明治二十六年十月勅令第百八十七號

朕外交官領事官及書記生任用令ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

外交官領事官及書記生任用令

第一條　外交官及領事官ハ外交官及領事官試驗ニ合格シタル者ニアラサレハ任用スルコトヲ得ス

第二條　本令ニ依リ初メテ外交官又ハ領事官ニ任用セラルヽ者ハ外交官補又ハ領事官補トス

第三條　外交官補及領事官補ハ滿二年以上外國ニ在勤シタル後ニアラサレハ其ノ他ノ外交官又ハ領事官ニ任用スルコトヲ得ス

第四條　本令ニ依リ任用シタル外交官及領事官ニシテ在職滿四年以上ノ者ハ外務省高等官ニ外務省高等官ニシテ在職滿四年以上ノ者ハ外交官又ハ領事官ニ任用スルコトヲ得

前項ニ依リ外交官又ハ領事官ニ任用スル者ニハ本令第二條ヲ適用セス

第五條　公使館書記生及領事館書記生ハ公使館書記生及領事館書記生試驗ニ合格シタル者ニアラサレハ任用スルコトヲ得ス

第六條　本令ニ依リ任用シタル公使館書記生又ハ領事館書記生ニシテ在職滿二年以上ノ者ハ外務省判任官ニ外務省判任官ニシテ在職滿二年以上ノ者ハ公使館書記生又ハ領事館書記生ニ任用スルコトヲ得

第七條　外交官及領事官試驗規則ハ別ニ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

公使館書記生及領事館書記生試驗規則ハ外務大臣之ヲ定ム

第八條　特命全權公使、辨理公使ハ本令ノ規程ニ拘ラス之ヲ任用スルコトヲ得

第九條　外務省留學生ハ別ニ試驗ヲ要セス公使館書記生又ハ領事館書記生ニ任用スルコトヲ得

外務省留學生ニ關スル規程ハ外務大臣之ヲ定ム

第十條　本令施行ノ際外務省高等官、外交官又ハ領事官ノ職ニ在ル者ハ第四條ノ制限ニ拘ラス任用スルコトヲ得

第十一條　本令施行ノ際外務省試補タル者又ハ試補ニ採用セラルヘキ資格ヲ有シテ公使館書記生又ハ領事館書記生タル者ハ別ニ試驗ヲ要セス

第十二條　本令施行ノ際外務省判任官、公使館書記生又ハ領事館書記生タル者ハ第六條ノ制限ニ拘ラス任用スルコトヲ得

附　則

第十三條　公使館又ハ領事館ニ雇員トシテ現ニ在勤スル者ハ本令施行ノ後三箇月間ニ限リ別ニ試驗ヲ要セス公使館書記生又ハ領事館書記生ニ任用スルコトヲ得

第十四條　本令ハ貿易事務官ニ適用ス

第十五條　本令ハ明治二十六年十一月十日ヨリ施行ス

明治二十二年閣令第五號ハ本令施行ノ日ヨリ廢止ス

◉領事官特別任用令

明治二十六年十月勅令第百八十八號

朕領事官特別任用令ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

領事官特別任用令

第一條　領事館書記生ニシテ滿五年以上領事館ニ勤務シ三級以上ノ俸給ヲ受ル者ハ外交官及領事官試驗委員ノ銓衡ヲ經テ二等領事ニ任用スルコトヲ得

第二條　前條ニ依リ任用シタル者ハ一等領事ニ任用スルコトヲ得

第三條　本令ニ依リ任用シタル一等領事及二等領事ハ他ノ高等官ニ轉任スルコトヲ得ス

附　則

第四條　本令ハ明治二十六年十一月十日ヨリ施行ス

明治二十五年勅令第十三號ハ本令施行ノ日ヨリ廢止ス

◉外交官領事官臨時特別任用令

明治二十六年十月勅令第百八十九號

朕外交官領事官ノ臨時特別任用ニ關スル件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

第一條　明治二十六年勅令第百二十四號外交官及領事官官制施行ノ際現ニ在職スル公使館書記官、領事、交際官試補及副領事ハ其ノ在職年數ニ拘ラス本令第二條ニ依リ該官制ニ定ムル所ノ外交官又ハ領事官ニ任スルコトヲ得

第二條　公使館書記官ニシテ四級俸ヲ受クル者及領事ハ五等官相當ノ外交官又ハ領事官ニ任シ其ノ官等ニ叙スルコトヲ得

交際官試補及副領事ニシテ二級俸ヲ受クル者ハ六等官相當ノ外交官又ハ領事官ニ任シ其ノ官等ニ叙スルコトヲ得

附　則

第三條　本令ハ明治二十六年十一月十日ヨリ施行ス

◉外交官及領事官試驗規則

明治二十六年十一月勅令第二百十三號

朕外交官及領事官試驗規則ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

外交官及領事官試驗規則

第一條　外交官及領事官試驗ハ須要ニ應シ外務省ニ於テ外交官及領事官試驗委員之ヲ行フ

第二條　外交官及領事官試驗ヲ行フヘキ期日ハ豫メ官報ヲ以テ之ヲ公告ス

第三條　年齡滿二十年以上ノ男子ニシテ左ノ諸項ノ一ニ該當セサル者ハ外交官及領事官試驗ヲ受クルコトヲ得

一　重罪ヲ犯シタル者但國事犯ニシテ復權シタル者ハ此ノ限ニアラス

二　定役ニ服スヘキ輕罪ヲ犯シタル者

三　破産者クハ家資分散ノ宣告ヲ受ク復權セサル者又ハ身代限ノ處分ヲ受ケ債務ノ辨償ヲ終ヘサル者

第四條　外交官及領事官試驗ヲ受ケント欲スル者ハ其ノ出願書ニ履歷書及論文竝ニ之ヲ英文、佛文又ハ獨逸文ニ譯譯シタルモノヲ添ヘ之ヲ試驗委員ニ差出スヘシ

前項ノ書類ハ總テ出願人ノ自筆タルヘシ

第五條　外交官及領事官試驗ハ前條ノ履歷書及論文竝ニ其ノ譯文ニ就キ試驗ヲ受クルニ足ルヘキ者ト試驗委員ニ於テ認メタル者ヲ召集シテ之ヲ行フ

第六條　外交官及領事官試驗ヲ分チテ第一次試驗及第二次試驗トス第一次試驗ニ合格シタル者ニアラサレハ第二次試驗ヲ受クルコトヲ得ス

第七條　第一次試驗ハ左ノ科目ヲ用ヰテ之ヲ行ヒ仍體格ヲ檢査ス

一　作文（邦文竝ニ第四條ノ譯文ニ用ヰタル外國文）

二　外國語（第四條ノ譯文ニ用ヰタル國語）

三　公文摘要（邦文）

四　口述要領筆記（邦文）

第八條　第二次試驗ハ左ノ科目ヲ用ヰテ之ヲ行フ

一　憲法

二　行政法

三　經濟學

四　國際公法

五　國際私法

以上ノ科目ハ試驗ノ際選擇取捨スルコトヲ得ス

一　刑法

二　民法

三　財政學

四　商法

五　刑事訴訟法

六　民事訴訟法

七　外交史

以上ノ科目ハ受驗者ヲシテ其ノ中ニ就キ豫メ一科目ヲ選擇セシメ之

ヲ試驗ス

第九條　第二次試驗ハ分チテ筆記試驗及口述試驗トス筆記試驗ニ合格シタル者ニアラサレハ口述試驗ヲ受クルコトヲ得ス

第十條　出願人ノ願ニ依リ英語、佛語又ハ獨逸語ノ外仍他ノ外國語ヲ試驗スルコトアルヘシ

前項ノ試驗ヲ受ケント欲スル者ハ其ノ旨豫メ出願書ニ記載スヘシ

第十一條　外交官及領事官試驗ヲ出願スル者ニハ手數料トシテ金十圓ヲ納メシム

第十二條　不正ノ方法ニ因リ試驗ヲ受ケント企テタル者及試驗ニ關スル規程ニ違背シタル者ハ其ノ期ノ試驗ヲ受クルコトヲ得ス試驗合格ノ後是等ノ事實發覺シタルトキハ其ノ合格ヲ無効トス

第十三條　試驗合格者ヲ定ムル方法ハ試驗委員ノ議定スル所ニ依ル

試驗合格ノ有効期限ハ合格後外交官又ハ領事官ニ任用セラレタル者ヲ除ク外一箇月間トス

第十四條　外交官及領事官試驗ニ關スル細則ハ外務大臣之ヲ定ム

◎通譯生ニ領事官特別任用令ヲ適用スルノ件

明治二十八年六月
勅令第八十五號

朕通譯生ニ領事官特別任用令ヲ適用スルノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

明治二十六年勅令第百八十八號領事官特別任用令ハ公使館通譯生、領事館通譯生、貿易事務館通譯生ニモ之ヲ適用ス

◎通譯官及通譯生任用ノ件

明治二十八年六月勅令第八十六號

朕通譯官及通譯生任用ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

第一條　公使館一等通譯官、公使館二等通譯官ハ外交官及領事官試驗委員ノ銓衡ヲ經テ之ヲ任用シ公使館通譯生、領事館通譯生、貿易事務館通譯生ハ公使館書記生又ハ領事館書記生タルヘキ資格ヲ有スル者ヨリ之ヲ任用ス

第二條　明治二十六年勅令第百八十七號外交官領事官及書記生任用令第六條ハ公使館通譯生、領事館通譯生、貿易事務館通譯生ニモ之ヲ適用ス

◎島司特別任用令

明治二十六年十月
勅令第百九十二號

朕島司特別任用ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

島司ノ任用ニ付テハ明治二十三年勅令第九號ヲ適用ス

◎稅關監吏及監吏補任用方

明治二十六年十月勅令第百九十一號

朕稅關監吏及監吏補適用ニ關スル明治二十三年勅令第百四十四號ノ改正ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

第一條　稅關監吏及監吏補ハ大藏大臣定ムル所ノ試驗規則ニ依リ之ヲ任用スルコトヲ得

第二條　前條ニ依リ任用シタル稅關監吏及監吏補ハ文官普通試驗ヲ要セス稅關廳ニ任スルコトヲ得

附　則

第三條　本令ハ明治二十六年十一月十日ヨリ施行ス

◎陸軍監獄官特別任用令

明治二十六年十月勅令第百九十二號

朕陸軍監獄官特別任用令ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

陸軍監獄官特別任用令

第一條　陸軍監獄長ハ理事、陸軍尉官又ハ陸軍監督補ヨリ之ヲ撰任ス

第二條　陸軍監獄書記ニシテ滿五年以上一級俸ヲ受ケ學識經驗アル者ハ文官高等試驗委員ノ銓衡ヲ經テ陸軍監獄書記又ハ陸軍監獄看守長ニ任スルコトヲ得

第三條　陸軍監獄看守長ハ陸軍監獄長ニ任スルコトヲ得

陸軍監獄書記及陸軍監獄看守長ハ陸軍下士文官採用規則ニ定ムル所ノ資格アル者又ハ錄事ヨリ之ヲ選任ス

第四條　陸軍監獄看守ニシテ滿五年以上其ノ職ヲ奉シ學識經驗アル者ハ文官普通試驗委員ノ銓衡ヲ經テ陸軍監獄書記又ハ陸軍監獄看守長ニ任スルコトヲ得

第五條　陸軍監獄看守ノ採用規則ハ陸軍大臣之ヲ定ム

附　則

第六條　陸軍監獄書記及陸軍監獄看守長ハ本年勅令第四十二號陸軍監獄官官制施行ノ際ニ限リ第三條ノ規程ニ拘ラス從來陸軍監獄ニ職ヲ奉スル下士ニシテ獄務ニ經驗アル者及ヒ其ノ他ノ判任官ヨリ選任スルコトヲ得

第七條　本令ハ明治二十六年十一月十日ヨリ施行ス

◎府縣立師範學校長特別任用令

明治二十六年十月勅令第百九十三號

朕府縣立師範學校長特別任用令ノ改正ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

府縣立師範學校長特別任用令

府縣立師範學校長ハ高等師範學校ノ卒業證書ヲ有スル者又ハ學位若クハ學士ノ稱號ヲ有シ一箇年以上教育ニ關スル公務ニ從事シタル者又ハ三箇年以上教育ニ關スル公務ニ從事シ現ニ三十圓以上ノ月俸ヲ受クル判任官又ハ判任官待遇ノ者ニ限リ試驗ヲ要セス文官高等試驗委員ノ銓衡ヲ經テ任用スルコトヲ得

◎文部省直轄諸學校舍監特別任用令

明治二十七年十一月
勅令第百九十五號

朕文部省直轄諸學校長舍監特別任用令ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

文部省直轄諸學校長舍監ハ三箇年以上奏任教官ノ職ニ在リタル者ニ限リ試驗ヲ要セス文官高等試驗委員ノ銓衡ヲ經テ任用スルコトヲ得

◎營林主事補及森林監守任用令

明治二十六年十月勅令第百九十四號

朕營林主事補及森林監守任用令ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

營林主事補及森林監守任用令

第一條　營林主事補及森林監守ハ農商務大臣定ムル所ノ規則ニ依リ之ヲ任用スルコトヲ得

滿四年以上營林主事補ノ職ニ在リタル者ハ文官普通試驗ヲ要セス山林事務ニ關スル判任官ニ任用スルコトヲ得

滿二年以上森林監守ノ職ニ在リタル者ハ營林主事補ニ任用スルコトヲ得

第二條　本令施行ノ際營林主事補又ハ森林監守タル者ニシテ引續キ其ノ職ニ在ル者ハ文官普通試驗ヲ要セス大小林區署ノ判任官ニ任用スルコトヲ得

附　則

第三條　本令ハ明治二十六年十一月十日ヨリ施行ス

明治二十年勅令第八十二號ハ本令施行ノ日ヨリ廢止ス

◎判事檢事登用試驗規則

明治二十四年五月司法省令第三號

第一章　試驗委員

文官高等試驗委員ノ銓衡ヲ經テ陸軍監獄長ニ任スルコトヲ得

第三條　陸軍監獄書記及陸軍監獄看守長ハ陸軍下士文官採用規則ニ定ムル所ノ資格アル者又ハ錄事ヨリ之ヲ選任ス

第四條　陸軍監獄看守ニシテ滿五年以上其ノ職ヲ奉シ學識經驗アル者ハ文官普通試驗委員ノ銓衡ヲ經テ陸軍監獄書記又ハ陸軍監獄看守長ニ任スルコトヲ得

第五條　陸軍監獄看守ノ採用規則ハ陸軍大臣之ヲ定ム

附　則

第六條　陸軍監獄書記及陸軍監獄看守長ハ本年勅令第四十二號陸軍監獄官官制施行ノ際ニ限リ第三條ノ規程ニ拘ラス從來陸軍監獄ニ職ヲ奉スル下士ニシテ獄務ニ經驗アル者及ヒ其ノ他ノ判任官ヨリ選任スルコトヲ得

第七條　本令ハ明治二十六年十一月十日ヨリ施行ス

◎府縣立師範學校長特別任用令

明治二十六年十月勅令第百九十三號

朕府縣立師範學校長特別任用令ノ改正ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

府縣立師範學校長特別任用令

府縣立師範學校長ハ高等師範學校ノ卒業證書ヲ有スル者又ハ學位若クハ學士ノ稱號ヲ有シ一箇年以上教育ニ關スル公務ニ從事シタル者又ハ三箇年以上教育ニ關スル公務ニ從事シ現ニ三十圓以上ノ月俸ヲ受クル判任官又ハ判任官待遇ノ者ニ限リ試驗ヲ要セス文官高等試驗委員ノ銓衡ヲ經テ任用スルコトヲ得

◎文部省直轄諸學校舍監特別任用令

明治二十七年十一月
勅令第百九十五號

朕文部省直轄諸學校長舍監特別任用令ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

文部省直轄諸學校長舍監ハ三箇年以上奏任教官ノ職ニ在リタル者ニ限リ試驗ヲ要セス文官高等試驗委員ノ銓衡ヲ經テ任用スルコトヲ得

◎營林主事補及森林監守任用令

明治二十六年十月勅令第百九十四號

朕營林主事補及森林監守任用令ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

營林主事補及森林監守任用令

第一條　營林主事補及森林監守ハ農商務大臣定ムル所ノ規則ニ依リ之ヲ任用スルコトヲ得

滿四年以上營林主事補ノ職ニ在リタル者ハ文官普通試驗ヲ要セス山林事務ニ關スル判任官ニ任用スルコトヲ得

滿二年以上森林監守ノ職ニ在リタル者ハ營林主事補ニ任用スルコトヲ得

第二條　本令施行ノ際營林主事補又ハ森林監守タル者ニシテ引續キ其ノ職ニ在ル者ハ文官普通試驗ヲ要セス大小林區署ノ判任官ニ任用スルコトヲ得

附　則

第三條　本令ハ明治二十六年十一月十日ヨリ施行ス

明治二十年勅令第八十二號ハ本令施行ノ日ヨリ廢止ス

◎判事檢事登用試驗規則

明治二十四年五月司法省令第三號

第一章　試驗委員

第一條　判事檢事登用試驗委員ハ委員長一名委員數名ヲ以テ之ヲ組織ス

第二條　判事檢事登用試驗委員長及委員ハ大審院控訴院ノ判事檢事司法省高等官ノ中ヨリ試驗擧行毎ニ司法大臣之ヲ命ス

第三條　判事檢事登用試驗委員長ハ委員ヲ監督シ試驗ニ關スル一切ノ事務ヲ總理ス

第四條　試驗委員附屬ノ書記ハ司法屬又ハ裁判所書記ノ中ヨリ試驗擧行毎ニ司法大臣之ヲ命ス

第二章　受驗資格

第五條　判事檢事登用試驗ヲ受クルコトヲ得ル者ハ成年以上ノ男子ニシテ左ニ記載シタル者ニ限ル（二十六年十月司法省令第十六號ニテ本條改正）

一　官立學校及司法大臣ニ於テ指定シタル公私立ノ學校ニ於テ三年以上法律學ヲ脩メ卒業證書ヲ有スル者

二　外國ノ大學校又ハ之ト同等ナル學校ニ於テ法律學ヲ修メ卒業證書ヲ有スル者

第六條　裁判所構成法第六十六條ニ該ル者ハ試驗ヲ受クルコトヲ得ス

第三章　第一回試驗

第七條　第一回試驗ハ司法省ニ於テ之ヲ行フ試驗ノ期日ハ試驗委員長之ヲ定メ官報ヲ以テ公告ス

第八條　試驗志願者ハ其志願書ニ左ノ證書ヲ添ヘ之ヲ試驗委員長ニ差出スヘシ

一　履歴書

二　身分年齢及兵役ニ關スル證明書

三　第五條ニ定メタル要件ノ證明書

試驗志願者ハ試驗手數料トシテ金拾圓ヲ納ムヘシ但其手數料ハ登記印紙ニ用井之ヲ志願書ニ貼付スヘシ（同令ニテ本項及次項追加）

手數料ハ志願書ヲ取下ケ又ハ試驗ヲ受ケサルトキト雖モ之ヲ還付セス

第九條　試驗ハ受驗者ノ學識ヲ試驗スルヲ以テ目的トシ筆記口述ノ二樣トス

第十條　筆記試驗ハ民法商法刑法民事訴訟法刑事訴訟法ノ各法ニ就キ之ヲ施行ス

第十一條　試驗委員筆記答案ヲ調査シタル後口述試驗ヲ爲スニ足ルヘキモノト認メタルトキハ口述試驗ノ爲メ志願者ヲ呼出スヘシ

第十二條　口述試驗ハ民法商法刑法民事訴訟法刑事訴訟法ノ中少クトモ三科目ニ就キ之ヲ施行ス

第十三條　受驗者ノ及第落第及及第者ノ優劣ハ筆記試驗口述試驗ノ成績ニ對スル委員過半數ノ意見ニ從テ之ヲ決ス

及第落第ニ付テノ意見數相半スルトキハ落第ト見做スヘシ

第十四條　志願者口述試驗ニ闕席シタルトキハ試驗ハ成立タサルモノトス

第十五條　試驗委員長ハ及第者ノ氏名及其試驗ノ成績ヲ司法大臣ニ報告スヘシ

第十六條　帝國大學法律科卒業生ニシテ司法官ノ任用ヲ望ム者ハ第八條ノ規程ヲ準用シ志願書ヲ司法大臣ニ差出スヘシ

第四章　實地修習

第十七條　試補ハ區裁判所及地方裁判所並其檢事局ニ於テ一名若ハ數名ノ判事又ハ檢事ニ附屬シテ事務ヲ修習スヘシ

第十八條　修習事務直接ノ指揮監督ハ地方裁判所長之ヲ爲ス檢事ノ事務ヲ修習スルトキハ檢事正之ヲ爲ス」裁所所長若ハ檢事正ハ毎年末ニ試補ノ職務上及職務外ノ行狀並執務ニ關ル成績ノ證明書ヲ作リ控訴院長檢事長ヲ經由シテ之ヲ司法大臣ニ差出スヘシ

第十九條　試補ハ修習目錄ヲ作リ其取扱ヒタル事件ヲ記載スヘシ

此目錄ハ毎月直接指揮監督者ニ差出シ檢閲ヲ受クヘシ

第二十條　試補ノ疾病又ハ兵役履行ノ爲メ修習ヲ缺キタル日數一箇年間一箇月以内ハ修習日數ニ算入ス

賜暇其他ノ原因ニ由リ修習ヲ缺キタル日數一箇年間一箇月以内亦同シ

第一項第二項ノ場合併起スルトキハ通計シテ二箇月以内ニ非サレハ算入スルコトヲ得ス

第二十一條　試補ノ直接指揮監督者ハ試補職務上ノ義務ヲ怠リ又ハ職務上若ハ職務外ニ於テ其身分ニ適セサル行狀アルトキハ之ヲ諭告スヘシ此場合ニ於テハ指揮監督者ハ諭告ヲ爲シタルコトヲ試補ノ履歴ニ記入スヘシ

第二十二條　試補職務上若ハ職務上ノ行狀其職務ヲ執ルニ不適當ナルカ又ハ其修習ノ進歩不十分ニシテ第二回試驗ニ及第ノ見込ナキトキハ直接指揮監督者ハ控訴院長檢事長ヲ經由シテ之ヲ司法大臣ニ報告スヘシ

司法大臣前項ノ報告ヲ受ケタルトキハ試補ヲ免スルコトアルヘシ

第五章　第二回試驗

第二十三條　第二回試驗ハ控訴院ニ於テ之ヲ行フ

試驗ノ場所ハ司法大臣之ヲ定メ試驗ノ期日ハ試驗委員長之ヲ定ム

第二十四條　試補第二回試驗ヲ受クルニハ直接指揮監督者ヲ經由シテ志願書ヲ司法大臣ニ差出スヘシ

志願書ニハ修習目錄ト陸海軍ノ現役ヲ終ヘ又ハ之ヲ免セラレタルコトヲ證明スル書面トヲ添フヘシ

第二十五條　司法大臣ハ第二回試驗ヲ受クヘキ試補ノ氏名ヲ試驗委員長ニ通知シ試驗ヲ行ハシム

第二十六條　第二回試驗ハ受驗者ノ實務ニ習熟シタル

ヤ否ヲ試驗スルヲ以テ主タル目的トシ筆記口述ノ二樣トス

第二十七條　試驗委員ハ試補ニ筆記試驗ノ爲メ二件以上ノ訴訟記錄ヲ付與スヘシ

第二十八條　受驗者ハ付與セラレタル訴訟記錄ニ就キ事實及理由ヲ詳示シタル判決案ヲ答案トシテ差出スヘシ

答案ハ二十日ノ期間內ニ之ヲ差出スヘシ若シ此期間內ニ答案ヲ差出サヽルトキハ試驗ハ成立タサルモノトス

第二十九條　口述試驗ハ民法商法刑法民事訴訟法刑事訴訟法ノ中少クトモ三科目ニ就キ之ヲ施行ス

又訴訟記錄ニ就キ問ヲ發シ之ヲ答ヘシムヘシ其記錄ハ試驗期日ノ三日前ニ之ヲ付與ス

第三十條　左ノ場合ニ於テハ司法大臣ハ試驗委員長ノ報告ニ因リ試補ヲ免ス

一　第二回試驗ニ及第セサルトキ

二　第二回試驗ノ成立タサルトキ

第三十一條　前條第二ノ場合ニ於テ試補已ムヲ得サル事故アリシコトヲ證明シ試驗委員之ヲ正當ト認メタルトキハ其旨ヲ司法大臣ニ報告スヘシ

司法大臣前項ノ報告ヲ受ケタルトキハ其試補ニ一回ヲ限リ次期ノ試驗マテ引續キ修習ヲ爲サシムルコトアルヘシ

第三十二條　第一回試驗ニ關ル第十一條及第十三條乃至第十五條ノ規程ハ第二回試驗ニ之亦之ヲ適用ス

高等試驗及實務練習ヲ要セス司法官ニ任スルノ件

明治二十年七月閣令第十九號

四箇年以上裁判官檢察官ノ職ヲ奉シ他ニ轉官シ又ハ四箇年以上司法省ノ民事局長刑事局長ノ職ヲ奉シタル者四箇年以上司法省ノ民事局長刑事局長又ハ參事官ノ職ヲ奉シタル者及代言人試驗ニ及第シ五箇年以上代言人タル者ハ當分ノ內高等試驗及實務練習ヲ要セスシテ司法官ニ任スルコトヲ得

裁判所書記登用試驗規則

明治二十四年五月司法省令第四號

裁判所書記登用試驗規則左ノ通相定ム

裁判所書記登用試驗規則

第一章　試驗

第一條　裁判所書記登用試驗ハ文官試驗ニ關ル勅令ノ外本則ノ規程ニ從フ

第二條　試驗ハ各控訴院ニ於テ之ヲ行フ

第三條　試驗委員ハ控訴院判事檢事書記長又ハ其管內地方裁判所ノ判事檢事ノ中ヨリ司法大臣之ヲ命ス

試驗委員長ハ委員中官等最モ高キ者ヲ以テ之ニ充ツ

第四條　試驗ハ作文筆記書取算術簿記ノ外民法商法刑法民事訴訟法刑事訴訟法ノ中ニ掲キ之ヲ施行ス

第五條　試驗委員長ハ受驗者ノ中立アルトキハ地方裁判所ニ於テ筆記試驗ヲ受クシムルコトヲ得其場合ニ於テ試驗問題ノ答案ハ其裁判所ノ官吏ニ管シテ之ヲ作ラシム

第六條　試驗委員筆記答案ヲ調査シタル後口述試驗ヲ爲スニ足ルヘキモノト認メタルトキハ口述試驗ノ爲メ受驗者ヲ呼出スヘシ

第七條　受驗者口述試驗ニ與席シタルトキハ試驗ハ成立タサルモノトス

第八條　試驗ニ及第シタル者ニハ試驗委員長及試驗委員ノ連署シタル及第證書ヲ授與ス

第九條　試驗委員長ハ及第者ノ氏名及其試驗ノ成績ヲ司法大臣ニ報告スヘシ

第二章　實地修習

第十條　試驗ニ及第シタル者ハ裁判所書記見習ヲ命セラルルコトヲ得裁判所書記見習ハ區裁判所及地方裁判所竝其檢事局ニ於テ實地修習ヲ爲スヘシ

第十一條　實地修習ノ順序ハ控訴院檢事長協議シテ之ヲ定ム

第十二條　實地修習ノ指揮監督ハ地方裁判所長若ハ檢事正又ハ區裁判所ノ一人ノ判事若ハ監督判事若ハ檢事之ヲ爲ス

指揮監督者ハ修習ノ事務ヲ直接ニ指示スヘキ官吏ヲ定ムヘシ

第十三條　裁判所書記見習職務上ノ義務ヲ怠リ又ハ職務上若ハ職務外ニ於テ其身分ニ適セサル行狀アルトキハ指揮監督者之ヲ報告スヘシ

第十四條　裁判所書記見習職務上若ハ職務外ノ行狀非職務ヲ執ルニ不適當ナルカ又ハ其修習ノ進歩不十分ナリト認ムルトキハ指揮監督者ハ控訴院長檢事長ニ之ヲ報告スヘシ

第十五條　指揮監督者ハ裁判所書記見習其指揮監督ニ係ル修習ヲ終リタルトキハ修習ニ關ル證明書ヲ作リ修習ノ成績竝職務上及職務外ノ行狀若シ行狀ニ就キ報告シタルコトアルトキハ其旨ヲ證明書ニ附記スヘシ

控訴院長檢事長ハ證明書ニ意見ヲ附シ之ヲ司法大臣ニ差出スヘシ

第十六條　本章ノ規程ハ試驗ヲ經スシテ裁判所書記見習トナリタル者ノ實地修習ニモ亦之ヲ適用ス

執達吏登用規則

明治二十三年八月司法省令第二號

明治二十三年(二月)法律第六號裁判所構成法第九十五條及第九十九條ニ依リ執達吏登用規則左ノ通相定ム

執達吏登用規則

第一條　執達吏ニ任セラルルニハ左ノ諸件ヲ具備スルコトヲ要ス

第一　年齡滿二十五歲以上ナルコト

第二　陸海軍ノ現役ヲ終ヘ又ハ之ヲ免セラレタルコト

第三　身體健全ナルコト

第四　家計ノ整理シタルコト

第五　品行方正ナルコト

第六　試驗ニ及第シタルコト

第二條　左ニ掲クル者ハ執達吏ニ任セラルルコトヲ得ス

第一　重罪ヲ犯シタル者但國事犯ニシテ復權シタル者ハ此限ニ非ス

第二　定役ニ服スヘキ輕罪ヲ犯シタル者

第三　身代限ノ處分ヲ受ケ負債ノ義務ヲ免カレサル者

第四　懲戒ノ處分ニ由リ免職セラレタル者

第三條　執達吏ノ試驗ヲ受ケントスル者ハ少クトモ六箇月間區裁判所ニ於テ主トシテ執達吏ノ職務ヲ修習シ傍ラ書記ノ職務ヲ修習スルコトヲ要ス

職務ノ修習ヲ爲ス者ハ職務上ノ秘密ヲ漏洩スヘカラス

第四條　職務修習ヲ願フニハ願書ニ兵役ニ關ル證書及刑歷書ヲ添付シ之ヲ控訴院長ニ差出シ其許可ヲ受クヘシ

第五條　職務修習ノ許可ヲ爲シタルトキハ控訴院長ハ修習者ノ屬スヘキ區裁判所ヲ指定スヘシ

區裁判所ノ一人ノ判事若ハ監督判事ハ授業ヲ擔當スヘキ執達吏及裁判所書記ヲ選定シ職務ノ講習ヲ爲サシムヘシ

第六條　控訴院長ハ修習者ノ行狀執達吏トナルニ不適當ナリト認ムルトキハ其修習ヲ止ムルコトヲ得

第七條　職務修習者試驗ヲ受ケントスルニハ第一條第一乃至第五ノ諸件ヲ具備シタルコト及第二條ノ諸件ニ觸レサルコトヲ證明シ並修習ノ日數ヲ記入シタル願書ヲ區裁判所ノ一人ノ判事若ハ監督判事ヲ經由シテ控訴院長ニ差出スヘシ

區裁判所ノ一人ノ判事若ハ監督判事ハ前項ノ願書ニ意見ヲ付スヘシ

控訴院長ハ書類ヲ調査シ試驗ノ許否ヲ定ムヘシ

第八條　試驗ハ地方裁判所ニ於テ毎年一回之ヲ行フ

第九條　試驗委員長及試驗委員ハ地方裁判所及區裁判所ノ判事檢事ノ中ヨリ試驗擧行毎ニ司法大臣之ヲ命ス

第十條　控訴院長ハ試驗ヲ受クヘキ修習者ノ名簿ヲ試驗委員長ニ送付スヘシ

前項ノ送付アリタルトキハ試驗委員長ハ試驗期日ヲ定メ之ヲ修習者ニ告知スヘシ

第十一條　試驗ハ筆記口述ノ二樣トス

口述試驗ハ筆記試驗ニ及第シタル者ニ之ヲ行フ

第十二條　試驗ハ左ノ科目ニ就キ之ヲ行フ

第一　民事訴訟法及治罪法ノ中書類送達及執行ニ關ル規程

第二　執達吏ニ關ル諸規則

第三　算術（加減乘除分數比例）

第四　讀書筆寫

第十三條　筆記試驗問題ノ答案ハ裁判所ノ官吏監督シテ之ヲ作ラシム試驗委員長ハ受驗者ノ中立アルトキハ區裁判所ニ於テ筆記試驗問題ノ答案ヲ作ラシムルコトヲ得

第十四條　受驗者ノ及第落第及及第者ノ優劣ハ筆記試驗口述試驗ノ成績ニ對スル委員過半數ノ意見ニ從テ之ヲ決ス

及第落第ニ付テノ意見相半スルトキハ落第ト看做スヘシ

第十五條　試驗ニ及第シタル者ニハ試驗委員長及試驗委員ノ連署シタル及第證書ヲ授與ス

第十六條　試驗ニ落第シタル者ハ更ニ三箇月以上修習ヲ爲スニ非サレハ再ヒ試驗ヲ受クルコトヲ得ス

第十七條　不正ノ方法ヲ以テ及第ヲ企テタル者ハ再ヒ試驗ヲ受クルコトヲ得ス其及第シタル者ハ及第ノ效ナキモノトス

第十八條　試驗委員ハ試驗ノ問題及成績ヲ記錄ニ記載スヘシ

第十九條　試驗委員長ハ及第者ノ氏名及其試驗成績ヲ控訴院長ニ報告スヘシ

第二十條　左ニ揭クル者ハ試驗ヲ要セス執達吏ニ任セラルルコトヲ得

第一　官立府縣立中學校又ハ之ト同等ナル官立府縣立學校、司法舊法學校又ハ帝國大學ノ監督ヲ受ケタル舊私立法學校及文部大臣ノ認可ヲ經タル學則ニ依リ法律學ヲ教授スル私立學校ノ卒業證書ヲ有スル者

第二　裁判所書記ノ登用試驗ニ及第シタル者

第三　判任官以上ノ職ヲ現ニ率シ又ハ曾テ率シタル者

第四　陸軍下士ニシテ文官率職ヲ請願スルコトヲ得ル者

第二十一條　第三條乃至第六條ノ規程ハ前條ニ揭ケタル者ニモ亦之ヲ適用ス

前條第四ニ該ル者ハ職務修習ノ願書ニ修習ヲ爲サントスル區裁判所ヲ記載シ陸軍大臣ヲ經由シテ司法大臣ニ差出スヘシ司法大臣ハ願書ヲ管轄控訴院長ニ送付スヘシ

區裁判所書記ハ職務修習ヲ要セス執達吏ニ任セラルルコトヲ得（二十四年司法省令第六號ヲ以テ本項ヲ追加ス）

第二十二條　試驗及第者及第二十條ニ揭ケタル者ニシテ職務修習ヲ經タル者竝ニ區裁判所書記ヨリ轉任スル者ノ任補ハ執達吏ノ缺員アルヲ待テ控訴院長之ヲ擇行ス（同上令第六號ヲ以テ本條改正）

第二十三條　執達吏ニ任セラレタル者ハ任補ノ日ヨリ三十日內ニ保證金ヲ管轄地方裁判所ニ納ムヘシ若シ其期間內ニ保證金ヲ差出ササルトキハ職務ヲ罷免ス

保證金ハ五百圓以下ニ於テ土地ノ情況ニ從ヒ控訴院長之ヲ定ム

保證金ハ相當ノ價格アル公債證書若ハ日本銀行株券ヲ以テ之ニ代ユルコトヲ得

第二十四條　執達吏保證金ノ納メタルトキハ裁判所ハ官印ヲ交付ス執達吏ハ官印ノ交付ヲ得タル後ニ非サレハ職務ヲ行フコトヲ得ス

第二十五條　本則實施ノ際ハ職務修習ヲ要セス試驗及任補ヲ行フコトヲ得

附則

◎遞信省鐵道書記補郵便電信書記補及郵便爲替貯金書記補任用令

明治二十六年十月勅令第百九十五號

朕遞信省鐵道書記補郵便電信書記補及郵便爲替貯金書記補任用ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

遞信省鐵道書記補郵便電信書記補及郵便爲替貯金書記補任用令

第一條　遞信省鐵道書記補、郵便電信書記補及郵便爲替貯金書記補ハ遞信大臣定ムル所ノ試驗規則ニ依リ任用スルコトヲ得

第二條　前條ニ依リ任用シタル判任官ニシテ滿四年以上其ノ職ニ在リタル者ハ文官普通試驗ヲ要セス遞信部內ノ判任官ニ任用スルコトヲ得

第三條　本令施行ノ際鐵道驛長又ハ郵便及電信局書記補、郵便爲替貯金管理所書記補ノ職ニ在ル者ハ遞信省鐵道書記又ハ郵便電信書記、郵便爲替貯金書記ニ任用スルコトヲ得

附則

第四條　本令ハ明治二十六年十一月十日ヨリ施行ス

明治二十三年勅令第百三十號ハ本令施行ノ日ヨリ廢止ス

◎警視廳北海道廳府縣及集治監判任官中月俸十二圓未滿ノ者特別任用ノ件

明治二十六年十月勅令第百九十六號

朕警視廳北海道廳府縣及集治監判任官中月俸十二圓未滿ノ者特別任用ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

第一條　警視廳、北海道廳、府縣（島嶼郡區ヲ包含ス）及集治監判任官中月俸十二圓未滿ノ者ハ試驗ヲ要セス文官普通試驗委員ノ銓衡ヲ經テ任用スルヿヲ得

第二條　前條ニ依リ任用シタル判任官ニシテ滿五年以上勤續シ現ニ其ノ職ヲ奉スル者ハ月俸十二圓以上ノ其ノ廳判任官ニ任用スルコトヲ得

附則

第三條　本令ハ明治二十六年十一月十日ヨリ施行ス

◎外務省試補任用方

明治二十六年十一月勅令第二百一號

朕明治二十五年勅令第三十一號ニ依レル外務省試補任用ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

明治二十五年勅令第三十一號ニ依リ外務省試補タルノ資格ヲ有シ現ニ同省試補タル者ハ別ニ試驗ヲ用ヰス同省高等官ニ任用スルコトヲ得

◎理事主理任用令

明治二十七年二月勅令第十三號

朕理事主理任用令ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

理事主理任用令

第一條　理事ハ理事試補、主理ハ主理試補ヨリ任用ス

滿三年以上理事又ハ主理ノ職ニ在リタル者ハ直ニ之ヲ本官ニ任用スルコトヲ得

第二條　理事試補及主理試補ハ司法官試補タルノ資格ヲ有スル者ヨリ採用ス

第三條　理事試補ハ陸軍省若クハ陸軍軍法會議、主理試補ハ海軍省若ク

ハ海軍軍法會議ニ於テ一箇年半以上實務ヲ修習シ實務修習試驗ニ合格シタル者ニアラサレハ本官ニ任用スルコトヲ得ス

第四條　滿三年以上理事又ハ主理ノ職ニ在ル者及其ノ職ニ在リタル者ハ明治二十六年勅令第百八十三號文官任用令第一條判事檢事ノ例ニ依リ他ノ奏任文官ニ任用スルコトヲ得

第五條　左ノ諸項ノ一ニ該當スル者ハ理事及主理ニ任用スルコトヲ得ス

一　重罪ヲ犯シタル者但國事犯ニシテ復權シタル者ハ此ノ限ニアラス

二　定役ニ服スヘキ輕罪ヲ犯シタル者

三　破産若クハ家資分散ノ宣告ヲ受ケ復權セサル者又ハ身代限ノ處分ヲ受ケ債務ノ辨償ヲ終ヘサル者

第六條　理事試補及主理試補ハ奏任官ノ待遇トス

第七條　實務修習及實務修習試驗ニ關スル規則ハ理事試補ニ係ルモノハ陸軍大臣、主理試補ニ係ルモノハ海軍大臣之ヲ定ム

第八條　勅任理事及勅任主理ハ本令ノ規定ニ拘ラス之ヲ任用スルコトヲ得

附則

第九條　明治二十一年勅令第十號ニ依リ理事試補主理試補タルノ資格ヲ有シ本令施行ノ際現ニ理事試補又ハ主理試補タル者ハ別ニ試驗ヲ用ヰス直ニ之ヲ本官ニ任用スルコトヲ得

第十條　司法官試補タルノ資格ヲ有シ判事檢事及他ノ高等文官ノ職ニ在ル者及在リタル者ハ本令施行後三年間ハ直ニ理事又ハ主理ニ任用スルコトヲ得

第十一條　明治二十一年勅令第十號ハ本令施行ノ日ヨリ廢止ス

◎戰時又ハ事變ノ際ニ理事及主理任用ノ件

明治二十八年二月勅令第十四號

朕戰時又ハ事變ニ際シ理事及主理任用ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

戰時又ハ事變ニ際シ理事若クハ主理ノ增員又ハ補闕ノ必要アルトキハ理事主理任用令ニ定ムル所ノ實務修習ノ期限ニ拘ラス且實務修習試驗ヲ用ヰス理事試補若クハ主理試補ヲ本官ニ任用スルコトヲ得

本令ハ發布ノ日ヨリ施行ス

◎占領地民政部高等文官及判任文官任用ノ件

明治二十八年四月勅令第五十六號

朕占領地民政部高等文官及判任文官任用ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

占領地民政部高等文官及判任文官ハ明治二十六年勅令第百八十三號文官任用令ノ規定ニ依ラス高等文官ニ在リテハ文官高等試驗委員判任文官ニ在リテハ文官普通試驗委員ノ銓衡ヲ經テ任用スルコトヲ得

◎陸軍下士文官採用規則

明治二十年十二月勅令第八十三號

朕陸軍下士文官採用規則ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

陸軍下士文官採用規則

第一條　陸軍下士ニシテ左ニ掲クル者ハ文官奉職ヲ請願スルコトヲ得（二十三年勅令第八十六號ヲ以テ各項共改正）

一　戰役若クハ公務上ノ傷痍疾病ニ因リ免官シ尚文官ノ勤務ニ堪ヘ且伎倆證明書ヲ所持スル者

二　現役七箇年以上服役滿期ノ下士ニシテ伎倆證明書ヲ所持スル者

第二條　陸軍下士ハ本人ノ請願ニ因リ前條恰當ノ者ハ試驗ヲ要セスシテ判任官トナルコトヲ得（同上法令ヲ以テ本條改正）

第三條　海軍省ヲ除クノ外各官廳ニ於テ判任官ヲ任用スルニハ少クモ五人ニ付一人ハ陸軍下士ノ文官請願者ヲ以テス可キモノトス

第四條　文官タランコトヲ望ム者ハ服役滿期前一箇月間又滿期若クハ免役後三箇月間ニ之ヲ請願ス可シ（同上）

第五條　請願者ニ於テ教官技術官タランコトヲ望ム者アルトキハ之ヲ採用セントスル官廳ニ於テ相當ノ試驗ヲ施行スルコトヲ得

第六條　請願者ノ名簿ハ本人請願ノ順序ニ從テ調製シ之ヲ陸軍省ニ備置ク可シ

第七條　請願者ノ採用ハ其同年內ニ係ルモノハ第一條各項ノ順序ニ從ヒ其同項內ニ於テハ服役期日ノ多キ者ヨリ採用シ其服役時日ノ同シキ者ハ請願期日ノ順序ニ從ヒ採用ス可シ

本人ノ伎倆及任務ノ必要ニ依リテハ前項ノ順序ニ拘ハラス採用スルコトアルヘシ（同上法令ヲ以テ本項追加）

第八條　各官廳ニ於テ請願者ヲ採用スルトキハ陸軍省ニ照會シ直ニ本人ヲ其廳ニ呼出ス可シ

第九條　陸軍省ニ於テハ前條ノ照會ニ依リ第七條ニ照シ請願者ノ氏名及履歷書ヲ其官廳ニ交付ス可シ

第十條　請願者ニ於テ其請願ヲ取消サント欲スルトキハ陸軍省ニ屆出可シ

第十一條　本則施行ニ要スル細則及技倆證明書ノ規定ハ陸軍大臣之ヲ定ム可シ（同上法令ニテ本條改正）

◎陸地測量官任用規則

明治二十三年三月勅令第三十五號

朕陸地測量官任用規則ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

第一條　陸地測量師ハ陸地測量手中其任ニ適スル者ヲ選ミ陸地測量部修技所ニ於テ二箇年以上高等ノ學科ヲ修業セシメ卒業シタル者ヲ以テ之ニ任ス

第二條　陸地測量手ハ陸地測量部修技所生徒ノ卒業シタル者ヲ以テ之ニ任ス

第三條　本則ニ依リ陸地測量官ニ任セラレタル者他ノ技術官ニ轉任セントスルトキハ技術官任用ノ例規ニ依ル但他ノ技術官ヨリ轉任シタル者ハ此限ニアラス

第四條　本則第一條第二條ニ掲クルモノヽ外技術官其他學術技藝優等ノ者ニシテ陸地測量部ニ於テ實地試業ノ上適當ト認ムルトキハ陸地測量官ニ轉任セシメ若クハ任用スルコトヲ得

第五條　本則施行ノ前陸地測量部ニ出仕スル技術官陸軍屬又ハ官員ニシテ陸地測量事業ニ從事シ學術技藝優等ナル者ハ陸地測量官ニ轉任セシメ若クハ任用スルコトヲ得

◎陸軍武官進級令

明治二十二年五月勅令第六十一號

朕陸軍武官進級條例ヲ廢止シ陸軍武官進級令制定ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

陸軍武官進級令

第一條　陸軍武官ノ進級ハ級ヲ逐テ歷進セシム又缺員ナキトキハ補除スルコトナシ

第二條　陸軍武官ハ實役停年最下期限ヲ超ユルニアラサレハ進級スルコトヲ得ス

第三條　實役停年最下期限ヲ定ムルコト左ノ如シ

二等軍曹ヨリ一等軍曹ニ進ムハ實役停年半年一等軍曹ヨリ曹長ニ進ムハ實役停年一年曹長ヨリ少尉ニ進ムハ實役停年二年

少尉ヨリ中尉ニ中尉ヨリ大尉ニ進ムハ實役停年各二年大尉ヨリ少佐ニ進ムハ實役停年四年

少佐ヨリ中佐ニ進ムハ實役停年三年中佐ヨリ大佐ニ大佐ヨリ少將ニ進ムハ實役停年各二年

少將ヨリ中將ニ進ムハ實役停年三年

中將ノ大將ニ進ムハ歴戦者ニ就キ特旨ヲ以テ親任スルヲ例トシ最下期限ヲ定ムルコトナシ

第四條　戦時ニ在テハ各官ノ實役停年ヲ其半ニ減スルコトヲ得

第五條　休職停職ノ年月ハ實役停年ニ算入セス但敵ノ捕虜トナリ休職ニ入ル者正當ノ理由アルトキハ其年月ヲ實役停年ニ算入スルコトヲ得

第六條　陸軍武官進級ノ法二アリ一ヲ停年補除トシ一ヲ拔擢補除トス

第七條　停年補除トハ實役停年最下期限ヲ超ヘタル順次ニ依リ進級セシムルヲ云ヒ拔擢補除トハ實役停年最下期限ヲ超ヘタル者ニ就キ拔擢進級セシムルヲ云フ其區別左ノ如シ

二等軍曹ヨリ一等軍曹ニ一等軍曹ヨリ曹長ニ進ムハ皆拔擢トス

少尉ヨリ中尉ニ進ムハ停年三分二拔擢三分一トス

中尉ヨリ大尉ニ進ムハ停年拔擢相半ス

戦時若クハ事變ニ際シ動員ヲ行ヒタル各部隊ニ屬スル中少尉ノ進級ハ皆拔擢トス（二十七年九月勅令第百六十五號ニテ本項追加）

大尉ヨリ少佐ニ少佐ヨリ中佐ニ中佐ヨリ大佐ニ進ムハ皆拔擢トス

第八條　將校ハ職權ニ依テ部下ヲ拔擢スルノ權ヲ有ス但直屬長官アル者ハ其監督ノ下ニ在テ之ヲ行フ

第九條　將官ノ進級及將官ニ進級スルハ上裁ニ出ルト雖モ先ツ内旨ヲ陸軍大臣ニ諭スヲ例トス

第十條　曹長ノ少尉ニ進級スルハ特例トス此選ニ當ルヲ得ル者ハ功績拔群ニシテ士官タルノ學力ヲ有スルモノニ限ル

第十一條　陸軍大臣ハ毎年將校ノ實役停年名簿ヲ作リ之ヲ奏上スヘシ

第十二條　將校ノ拔擢進級候補ハ上裁ニ出ルモノトス陸軍大臣ハ上旨ヲ奉シテ決定候補名簿ヲ調製スヘシ

第十三條　下士ノ進級候補ハ師團長及之ト同等以上ノ權アル長官竝ニ會計局長醫務局長之ヲ裁決シテ決定候補名簿ヲ調製スヘシ

第十四條　決定候補名簿ハ其調製ノ日ヨリ次年決定候補名簿調製ノ日迄之ヲ用ユヘシ

第十五條　左ノ場合ニ在テハ前諸條ノ例ニ依ラス進級セシムルコトヲ得

一　敵前ニ在テ殊勲ヲ奏シ首將之ヲ全軍ニ布告セシ者

二　敵前ノ軍隊ニ在テ人員缺乏シ補除定規ヲ履ム能ハサルトキ

第十六條　與軍ノ日ニ方リテ戦地ニ臨ムノ首將ニハ特ニ進級補除ノ權ヲ假スコトアルヘシ

第十七條　將校相當官竝軍吏部衛生部軍樂部ノ下士及諸工下長ノ進級ハ本令ヲ適用ス

砲工兵監護ノ砲工兵上等監護ニ進ミ軍樂次長ノ二等軍樂長ニ進ムハ下士進級ノ例ニ同シ但實役停年ヲ二年トス

二等軍樂長ノ一等軍樂長ニ進級スルハ實役停年五年以上ニシテ隊長ノ職ヲ奉シ功勞顯著ナル者ニ就キ進級セシム（明治二十三年勅令第百三十七號ヲ以テ改正）

◉陸軍豫備後備武官進級令

明治二十七年九月勅令第百六十二號

朕陸軍豫備後備武官進級令ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

陸軍豫備後備武官進級令

第一條　戦時若クハ事變ノ際ニ召集シ又ハ平時特ニ進級ノ爲ニスル勤務演習ニ召集シタル陸軍豫備後備武官ハ本令ノ規程ニ依リ進級セシムルコトヲ得

第二條　陸軍豫備後備武官ノ進級ハ級ヲ逐テ歴進セシム

第三條　陸軍豫備後備武官ノ進級ハ拔擢トス

第四條　陸軍豫備後備武官ニシテ現役武官ノ進級停年ニ等シキ年數ヲ超ヘタルトキハ其ノ中ニ就キ特ニ選拔シ之ヲ進級ノ爲ニスル勤務演習ニ服セシメ實地ノ技能ヲ査閲シ及第ノ者ヲ進級セシム

戦時若クハ事變ニ際シ召集中ハ缺員ニ應シ拔擢シテ進級セシムルコトヲ得

第五條　戦時ニ在テハ前條進級停年ヲ其ノ半ニ減スルコトヲ得

第六條　將校ハ職權ニ依テ部下ヲ拔擢スルノ權ヲ有ス但直屬長官アル者ハ其ノ監督ノ下ニ在テ之ヲ行フ

第七條　豫備後備特務曹長ノ少尉ニ進級スルハ特例トス此ノ選ニ當ルヲ得ル者ハ功績拔群ニシテ士官タルノ學力ヲ有スル者ニ限ル

第八條　左ニ掲クル場合ニ在テハ前諸條ノ例ニ依ラス進級セシムルコトヲ得

一　敵前ニ在テ殊勲ヲ奏シ首將之ヲ全軍ニ布告セシ者

二　敵前ノ軍隊ニ在テ人員缺乏シ補除定規ヲ履ム能ハサルトキ

第九條　與軍ノ日ニ方リテ戦地ニ臨ムノ首將ニハ特ニ進級補除ノ權ヲ假スコトアルヘシ

第十條　豫備後備將校准士官下士ノ進級除任ハ現役將校准士官下士ノ例ニ依ル

師團長、屯田兵司令官ハ戦時若クハ事變ニ際シ聯隊長若クハ之ト同等以上ノ權アル團隊長ニ直ニ下士任官ノ權ヲ委任スルコトヲ得

第十一條　大本營ニ軍事内局ヲ置キ將校同相當官ノ人事ヲ取扱フトキハ其ノ取扱ニ係ルモノニ付テハ前條ヲ適用セス

第十二條　陸軍豫備後備將校相當官竝衛生部、軍吏部ノ下士及諸工下長ノ進級ニモ本令ヲ適用ス

◉志願軍吏獸醫生ヲ陸軍軍吏部竝獸醫部豫備士官ニ補任方

明治二十三年九月勅令第百九十五號

朕志願軍吏生志願獸醫生ヲ陸軍軍吏部竝獸醫部豫備士官ニ補任スルノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

一　志願軍吏生ニシテ陸軍豫備後備將校補充條例第六條ニ依リ實地ノ試驗ニ及第シタル者ハ當該監督部長本人所屬隊ノ軍吏ヨリ其勤務勉勵品行方正學識適當ノ者ニシテ軍吏部士官タルヲ得ヘキ保證書ヲ出サシメ且自ラ是認シタル後其意見書ヲ添ヘ三等軍吏ニ補任ノコトヲ會計局長ニ稟申ス會計局長ハ之ヲ審査シ意見ヲ附シ陸軍大臣ニ進達スヘシ監督部長之ヲ否認シタルトキハ其事由ヲ悉シ會計局長ニ稟申シ會計局長ハ更ニ理由ヲ具ヘ陸軍大臣ニ進達シ大臣ニ於テ見習士官ノ分限ヲ除クコトヲ裁定ス此裁定ヲ受ケタル者ハ一等書記ニ任シ豫備役ニ編入ス

二　志願獸醫生ニシテ陸軍豫備後備將校補充條例第六條ニ依リ實地ノ試驗ニ及第シタル者ヲ獸醫部豫備士官ニ補任スルハ陸軍獸醫部現役獸醫ノ上申ニ在テ殊勲ヲ奏シ首將之ヲ全軍ニ布告セシ者

第九條　與軍ノ日ニ方リテ戦地ニ臨ムノ首將ニハ特ニ進級補除ノ權ヲ假スコトアルヘシ

第十條　豫備後備將校准士官下士ノ進級除任ハ現役將校准士官下士ノ例ニ依ル

師團長、屯田兵司令官ハ戦時若クハ事變ニ際シ聯隊長若クハ之ト同等以上ノ權アル團隊長ニ直ニ下士任官ノ權ヲ委任スルコトヲ得

第十一條　大本營ニ軍事内局ヲ置キ將校同相當官ノ人事ヲ取扱フトキハ其ノ取扱ニ係ルモノニ付テハ前條ヲ適用セス

第十二條　陸軍豫備後備將校相當官竝衛生部、軍吏部ノ下士及諸工下長ノ進級ニモ本令ヲ適用ス

役士官補充條例第十五條ニ依ル但シ獸醫部士官タルノ資格ナシト認ムルヲノハ獸醫長ヨリ其事由ヲ具シテ軍務局獸醫課長ニ呈シ獸醫課長ハ之ヲ審査シテ軍務局長ニ上申シ軍務局長ハ之ヲ陸軍大臣ニ進達シ大臣ニ於テ見習士官ノ分限ヲ除クコトヲ裁定ス此裁定ヲ受クタル者ハ蹄鐵工長ニ任シ豫備役ニ編入ス

◎海軍准士官並服役滿期下士判任文官ニ任用方

明治二十年十二月勅令第六十五號

朕海軍准士官並服役滿期下士判任文官ニ任用ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

海軍准士官並服役滿期ノ下士ハ普通試驗ヲ要セス海軍省遞信省鐵道局ノ判任文官ニ任用スルコトヲ得

◎海軍高等武官進級條例

明治二十四年八月勅令第百七十八號

朕海軍高等武官進級條例改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

海軍高等武官進級條例

第一條　海軍高等武官トハ海軍少尉以上及其相當官ヲ云フ

第二條　高等武官ノ進級ハ超級ノ陞進ヲ許サス而シテ左ニ掲クル實役停年海上勤務ヲ經タル者ニアラサレハ陞進セシメス又缺員ナキトキハ除任ヲ行ハス但戰時若クハ事變ニ際シテハ試驗ヲ用ヰス海軍高等武官候補生

規則第十二條ノ報告ニ依リ審査ノ上本官ニ任用スヘキ者ニ就キ候補名簿ヲ作ルコトヲ得（二十八年一月勅令第二號ニテ但書追加）

官名		實役停年中海上勤務最下期限
少將	少機關士 少技士 少軍醫少藥劑官	三年
大將	大機關士 大技士 大軍醫大藥劑官	五年
少佐	機關少監 少技監 軍醫少監 主計少監	三年
大佐	機關大監 大技監 軍醫大監 主計大監	四年
少將		三年

海上勤務トハ航行シ得ル艦船ニ乘組ミ服務スルヲ云フ但機關大監軍醫大監軍醫少監主計大監主計少監大技監少技監大技士少技士及大藥劑官少藥劑官ハ海上勤務ヲ要セス

大軍醫大主計ノ海上勤務最下期限ハ各一年半トシ少軍醫少主計ノ海上勤務最下期限ハ各一年トス（二十六年六月勅令第六十一號ヲ以テ追加）

實役停年最下期限ヲ終フルモ海上勤務日數ハ其最下期限外ニ足ラサルコトアルニ當リ前官ニ於テ其海上勤務最下期限外ニ上官ノ職ヲ奉シタル海上勤務日數アルトキハ之ヲ其不足日數ニ併算スルコトヲ得

第三條　中將ノ大將ニ進ムハ歷職者或ハ遠征ニ從事シタル者ニ就キ特旨ヲ以テ親任セラルヽヲ例トス

第二條但書ニ依リ調製スル候補名簿ノ列序ハ候補生ノ席次ニ依ル（同上）

第四條　海上勤務ノ者ニシテ公務ニ原因セサル傷痍疾病其他公務ニ非サル事故ニ依リ陸上ニ在ルノ日數ハ海上勤務ニ算入セス

第五條　休職停職收禁及處刑中ノ日數ハ實役停年ニ算入セス

第六條　敵ノ捕虜ト爲ルモ正當ノ理由アル者ハ其年月ヲ實役停年ニ算入スルコトヲ得

第七條　戰時ニ在テハ各官ノ實役停年海上勤務最下期限ヲ其半ニ減スルコトヲ得

第八條　進級ハ總テ拔擢ヲ以テス但停職中ノ者ハ進級セシメス

第九條　將官ノ進級並ニ大佐及相當官ノ少將及相當官ニ進ムハ上裁ヲ以テ除任セラルヽヲ例トス

第十條　海軍大臣ハ上長官士官進級順序ヲ定ムル爲メ各所管長官ヲシテ候補名簿ヲ出サシメ須要ニ應シ之ヲ進級會議ノ調査ニ附シ決定候補名簿ヲ作ルモノトス但戰時若クハ事變ニ際シテハ其ノ調査ニ附セサルコトヲ得（二十七年八月勅令第百五十號ニテ但書追加）

決定候補名簿ヲ作ルノ法ハ候補名簿中ヨリ進級セシムヘキ者ヲ撰拔シ其順序ニ依リ列序ヲ定ム

進級會議ハ各司令長官將官會議議員及軍醫總監主計總監ヲ以テ編制ス

決定候補名簿ハ其調製ノ日ヨリ次年決定候補名簿調製ノ日マテ之ヲ用ユヘシ

第十一條　海軍高等武官決定候補名簿ハ海軍大臣ヨリ奏上シ置キ補欠ヲ要スル毎ニ其順序ニ從ヒ欠任ノ事ヲ奏上スヘシ

第十二條　左ノ場合ニ在テハ定規ニ依ラス候補生ヲ本官ニ任用スルコトヲ得（同上法令ニテ本條ヲ追加シ以下漸次ニ繰下ヲ爲セリ）

一　敵前ニ在テ殊勳ヲ奏シ首將之ヲ全軍ニ布告セシ者

二　戰地ニ在テ人員缺乏シ補除定規ヲ履ム能ハサルトキ

第十三條　與軍ノ日ニ方リ戰地ニ臨ムノ首將ニハ候補生ヲ本官ニ任用スルノ權ヲ假スコトアルヘシ

第十四條　准士官ハ士官ニ進級スルヲ得サルヲ例トスト雖モ志操確實士官タルニ堪ヘ且學術技藝拔群ノ者ハ臨時檢査ノ上士官ニ進級セシムルコトヲ得

第十五條　戰役ニ於テ功勞アル者若クハ多年軍務ニ從事シ進級資格ヲ備ヘタル者ニシテ海軍將校分限令第六條第一項第二項第四項第五項及第七條第八條ニ依リ現役ヲ退クトキハ其際特ニ進級セシムルコトヲ得但恩級ヲ受クル資格ニ在テハ前官ニ依ル

第十六條　左ノ場合ニ在テハ定規ニ依ラス進級セシムルコトヲ得

一　敵前ニ在テ殊勳ヲ奏シ首將之ヲ全軍ニ布告セシ

者

二　戰地ニ在テ人員缺乏シ補除定規ヲ履ム能ハサルトキ

第十七條　與軍ノ日ニ方リ戰地ニ臨ムノ首將ニハ進級補除ノ權ヲ假スコトアルヘシ

◎戰時又ハ事變ノ際ニ於ケル海軍高等武官任用ニ關スル件

明治二十八年五月勅令第六十三號

朕戰時若クハ事變ニ際シ海軍高等武官任用ニ關スル件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

戰時若クハ事變ニ際シ海軍高等武官ノ增員又ハ補充ヲ要スル場合ニ於テ海軍高等武官任用條例ニ依リ任用スルモ猶不足ヲ生スルトキ若クハ該條例ニ依リ任用シ難キトキハ左ノ者ニ限リ試驗ヲ用ヰス審査ノ上海軍少尉若クハ其ノ相當官ニ任用スルコトヲ得

一　海軍ノ官費生徒ト爲リ外國ニ留學シ海軍高等武官ニ必要ノ學術ヲ修得シタル證明書ヲ有スル者

二　私費ヲ以テ外國ニ留學シ海軍高等武官ニ必要ノ學術ヲ修得シ卒業證書若クハ其ノ證明書ヲ有スル者

前項第二ノ者ニシテ海軍高等武官任用條例第九條ニ掲クル事項ノ一ニ該ルトキハ之ヲ任用スルコトヲ得ス

◎陸海軍將校同等官名譽進級方

明治二十三年三月勅令第二十四號

朕陸海軍將校及同相當官退役ノ際名譽進級ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

陸海軍將校及同相當官現役中多年軍務ニ從事シ且ツ戰役ニ於テ功勞アル者ニシテ陸海軍將校分限令第五條第一項第二項第四項第五項及第六條第七條ニ依リ現役ヲ退クトキハ特ニ官等ヲ進ムルコトヲ得但恩給ヲ受クル資格ニ在テハ前官等ニ依ル

◎陸海軍豫備後備將校及同相當官名譽進級ノ件

明治二十八年六月勅令第九十一號

朕陸海軍豫備後備將校及同相當官名譽進級ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

陸海軍豫備後備將校及同相當官ニシテ戰時若クハ事變ニ際シ召集中功勞アリタル者ニハ召集ヲ解キタルトキ特ニ官等ヲ進ムルコトヲ得

◎海軍豫備後備武官進級任用條例

明治二十七年十二月勅令第百九十九號

朕海軍豫備後備武官進級任用條例ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

海軍豫備後備武官進級任用條例

第一條　戰時若クハ事變ニ際シテハ左ノ場合ニ限リ海軍高等武官進級條例及海軍下士任用進級條例ニ準據シ召集中ノ豫備後備軍人ヲ進級任用スルコトヲ得

一　現役武官ニ缺員ヲ生シタル場合ニ於テ現役武官ヨリ進級セシメ其ノ補充ヲ爲ス能ハサルトキ

二　海軍高等武官進級條例第十四條及海軍下士任用進級條例第十八條ニ該當シタルトキ

第二條　召集中ノ勤務日數ハ現役中ノ勤務日數ニ通算ス

〔參照〕

勅令第百七十八號海軍高等武官進級條例（明治二十四年八月十九日官報）抄錄

第十四條　左ノ場合ニ在テハ定規ニ依ラス進級セシムルコトヲ得

一　敵前ニ在テ殊勳ヲ奏シ首將之ヲ全軍ニ布告セシ者

二　戰地ニ在テ人員缺乏シ補除定規ヲ履ム能ハサルトキ

勅令第百五十二號海軍下士任用進級條例（明治二十三年七月三十一日官報）抄錄

第十八條　左ノ場合ニ在テハ前諸條ノ例ニ依ルコトナク任用シ又ハ進級セシムルコトヲ得

一　敵前ニ在テ殊勳ヲ奏セシ者アル時

二　戰地ニ在テ人員多ク缺乏シ補欠定規ヲ履ム能ハサル時

◎海軍下士任用進級條例

明治二十三年勅令第百五十二號

朕海軍下士任用進級條例ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

海軍下士任用進級條例

第一條　海軍下士ハ三等ヲ初任トシ海上勤務一箇年半以上若クハ陸上勤務二箇年以上ノ實役停年ヲ經タル一等卒中ヨリ左ノ區別ニ從ヒ任用ス

一　三等兵曹ハ砲術練習艦若クハ水雷術練習艦卒業ノ一等水兵若クハ兵曹適任證書ヲ有スル一等水兵又ハ學術檢査ニ合格シタル一等水兵ヨリ任用シ三等信號手ハ信號卒業證書ヲ有スル一等信號兵又ハ學術檢査ニ合格シタル一等信號兵ヨリ任用ス（二十四年三月勅令第三十一號ニテ改正）

二　三等機關手ハ機關學校卒業ノ一等火夫又ハ水雷術練習艦ニ於テ水雷教程ヲ卒業シタル一等火夫一等鍛冶ヨリ任用ス

三　三等軍樂手ハ一等軍樂生中三等船匠手ハ一等木工中三等鍛冶手ハ一等鍛冶中三等主帳ハ一等廚夫中海軍大臣ノ定ムル所ノ教育規則ニ依リ卒業シタル者ヨリ任用ス

四　三等看護手ハ學術檢査ニ合格シタル一等看病夫ヨリ任用ス

技工ハ前項ニ依ラス造船工學校卒業ノ生徒又ハ海軍大臣ノ定ムル任用試驗ニ及第シタル者ヨリ任用ス

第二條　年齡二十年未滿ノ者ハ下士ニ任用スルコトヲ得ス（上同）

第三條　進級ハ超級ノ陸進ヲ許スコトナク缺員アルニアラサレハ進級セシムルコトナシ又機關學校ヲ卒業シタル機關手特別教育規則ニ依リ卒業シタル主帳ノ外ハ學術檢査ニ合格シタル者ニアラサレハ進級セシムルコトヲ得ス

第四條　三等下士ニシテ海上勤務一箇年半以上若クハ陸上勤務二箇年以上二等下士ニシテ海上勤務二箇年以上若クハ陸上勤務二箇年八箇月以上一等下士ニシテ海上勤務三箇年以上若クハ陸上勤務四箇年以上ノ實役停年ヲ經タル者ハ各其上級ノ官ニ進級セシムルコトヲ得

第五條　戰時ニ在テハ實役停年最下期限ヲ其半ニ減スルコトヲ得

第六條　敵ノ捕虜トナリ正當ノ理由アル者ハ其年月ヲ實役停年ニ算入スルコトヲ得

第七條　取禁處刑及歸休中ノ日數ハ實役停年ニ算入セス

第八條　停年ヲ算スルニハ三月一日ヲ以テ終期トス

第九條　海上勤務ト稱スルハ軍艦ニ乘組ミ服務スルヲ云フ

第十條　公務ニ原因セサル傷痍疾病ニ依リ上陸療養ノ日數ハ海上勤務ニ算入セス

第十一條　海上勤務ヨリ陸上勤務ニ轉シタル者ノ停年ハ海上勤務日數ノ三分一ヲ加算シ陸上勤務ヨリ海上勤務ニ轉シタル者ノ停年ハ陸上勤務日數ノ四分一ヲ減算スルモノトス

第十二條　下士ノ任用進級ハ海兵團在籍ノ區別ニ從ヒ各鎮守府司令長官之ヲ行フモノトス但艦隊ニ屬スル下士ノ任用進級ハ艦隊司令長官之ヲ行ヒ一等下士ノ進級及造兵廠火藥工廠水路部ニ勤務セシムル技工ノ任用進級ハ海軍大臣之ヲ行フモノトス

第十三條　艦團隊長各廳長ハ每年學術檢査終ルノ後部下ノ下士及一等卒中進級セシムヘキ者ヲ選拔シ下士任用進級候補名簿ヲ調製シ所屬ノ鎮守府司令長官艦隊司令長官ニ出ス可シ但練習生タル下士ノ進級候補名簿ハ在籍海兵團ヲ管スル鎮守府司令長官ニ出スヘシ

鎮守府ニ屬セサル艦長艦長ノ調製セル下士任用進級候補名簿ハ候補者ノ在籍海兵團ヲ管スル鎮守府司令長官ニ出ス可シ但技工ノ候補名簿ハ海軍大臣ニ出ス可シ

第十四條　兵曹機關手ノ任用進級候補名簿技工ノ進級候補名簿ハ左ノ如ク區別ス可シ

甲　兵曹

一　掌砲ノ職ニ充ツ可キ者
二　掌水雷ノ職ニ充ツ可キ者
三　掌帆ノ職ニ充ツ可キ者
四　按針ノ職ニ充ツ可キ者（上同）

乙　機關手

一　汽關部員ノ職ニ充ツ可キ者
二　水雷工ノ職ニ充ツ可キ者

丙　技工

一　造船ノ職ニ充ツ可キ者
二　汽機汽罐製造ノ職ニ充ツ可キ者
三　造兵ノ職ニ充ツ可キ者
四　火藥製造ノ職ニ充ツ可キ者
五　水路測量ノ職ニ充ツ可キ者

第十五條　鎮守府司令長官ハ部下ノ軍港司令官參謀長軍港内ニ在ル部下艦隊隊長ヲ會同シ艦隊司令長官ハ部下ノ司令官參謀長同港ニ在ル部下ノ艦長ヲ會同シ下士任用進級候補名簿ニ就キ候補者ノ技能ノ優劣ニ依リ順序ヲ定メ下士任用進級決定候補名簿ヲ調製シ海軍大臣ニ出ス可シ

艦隊司令長官決定候補名簿ヲ調製スルニハ軍艦ノ本管ニ依リ鎮守府毎ニ區別ス可シ鎮守府司令長官他鎮守府本管ノ艦ヲ管轄スルコトアルトキ亦同シ

第十六條　決定候補名簿ノ効ハ次回ノ決定候補名簿調製迄ノモノトス決定候補名簿ニ登載ノ後任用進級セシムル能ハサル事由ヲ生シタル者ハ之ヲ除名ス可シ

第十七條　定員外ノ下士ハ陞進ノ順次ニ當ルト雖モ定員ニ充テタル後ニ非サレハ敍任スルコトヲ得ス

練習生ハ豫備艦非役艦ノ定員ニ充ツ可キ現員不足アルトキニ進級セシムルコトヲ得

第十八條　左ノ場合ニ在テハ前諸條ノ例ニ依ルコトナク任用シ又ハ進級セシムルコトヲ得

一　敵前ニ在テ殊勳ヲ奏セシ者アル時
二　戰地ニ在テ人員多ク缺乏シ補敍定規ヲ履ム能ハサル時

第十九條　鎮守府司令長官艦隊司令長官司令官ハ興軍ノ日ニ方リ戰地ニ派遣スル艦長ニ下士任用進級ノ權ヲ假スコトヲ得

◎望樓長望樓手ノ任用

明治二十七年七月勅令第八十號

朕望樓長望樓手ノ任用ニ關スル件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

第一條　望樓長及望樓手ハ海軍大臣ノ定ムル所ノ試驗規則ニ依リ任用ス

望樓長、望樓手試驗委員ハ海軍大臣之ヲ命ス

第二條　豫備、後備海軍准士官若クハ豫備役、後備役海軍下士卒及滿一年以上電信ノ業務ニ從事シタル者ハ試驗ヲ用ヰス望樓長、望樓手試驗委員ノ銓衡ヲ經テ之ヲ任用スルコトヲ得

第三條　戰時若クハ事變ニ際シテハ現役海軍准士官下士卒ヲシテ望樓長、望樓手ノ職務ヲ執ラシムルコトヲ得

◎三等郵便局長任用方

明治二十年十二月勅令第六十六號

朕三等郵便局長任用ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

三等郵便局長ハ其地ニ在住シ相當ノ資產アル者ヲ選任スルノ必要アルヲ以テ遞信大臣別ニ採用規則ヲ定メテ之ヲ選任スヘシ但該規則ニ依リ選任シタル三等郵便局長ハ他ノ判任官ニ任スルコトヲ得ス

◎北海道廳管下三等郵便局長採用方

明治二十二年四月遞信省令第五號

北海道廳管下ノ三等郵便局長ハ當分ノ内三等郵便局長採用規則第一條第二款ノ制限ニ滿タサル者ト雖採用スルコトアルヘシ

◎三等郵便局長採用ニ關シ郡區長戶長處辨方

明治二十一年五月遞信省訓令第三號

三等郵便局長ノ採用ニ關シ郡區長戶長ハ遞信管理局長ノ照會又ハ依托ニ應シ便宜處辨候樣樣メ郡區長戶長ニ達示スヘシ

◎三等郵便局長採用手續

明治二十一年五月遞信省訓令第四號

三等郵便局長ヲ採用スルトキハ左ノ手續ニ依リ之ヲ執行スヘシ

第一條　三等郵便局長ノ採用ヲ要スルトキ遞信管理局長ハ三等郵便局長採用規則ニ合格スルモノヽ中ニ就キ郵便事務ニ適當ナリト認ル者ヲ選出シ被選人ノ諾否及身元引受人ノ有無ヲ取調履歷書（書式一號）ヲ添ヘテ之ヲ推薦スヘシ

但辭職出願者又ハ死亡者若クハ犯罪ニ依リ官職ヲ失ヒタル者アルトキ後任ヲ要スル場合ヲ除ク外ハ本大臣ノ指揮ヲ待テ後選出スヘシ

第二條　遞信管理局長ハ時宜ニ依リ三等郵便局長ノ選出ヲ郡區長ニ囑托スルコトヲ得

第三條　遞信管理局長ニ於テ三等郵便局長ノ任官辭令書ヲ傳達スルトキハ受書（書式二號）及身元引受證書（書式三號）本人非戶主ナルトキハ戶主ノ保證（書式四號）ヲ差出サシメ之ヲ本大臣ニ報告シ且採用ノ旨ヲ其地方長官及郡（區）長ニ通知スヘシ其免官ノトキ亦同シ

第四條　三等郵便局長ヲシテ爲替又ハ貯金ヲ取扱ハシムルトキハ遞信管理局長ニ於テ別ニ定ムル規程ノ保證品ヲ徵收スヘシ

第五條　被選人ヨリ差出シタル書類及前條ノ保證品ハ遞信管理局ニ保管スヘシ

（書式ハ略ス）

◎三等電信局長選任及手當方

明治二十一年六月勅令第四十五號

朕三等電信局長ノ選任及手當ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

三等電信局長ハ三等郵便局長ノ例ニ依リテ選任シ手當ヲ支給スヘシ

◎東京郵便電信學校卒業生任用方

明治二十四年九月勅令第百九十二號

朕東京郵便電信學校卒業生任用ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

東京郵便電信學校ノ卒業證書ヲ有スル者ハ文官普通試驗及事務練習ヲ要セス直ニ郵便電信ニ關スル判任官ニ任用スルコトヲ得但本令ニ依リ任用セラレタルモノハ普通試驗ヲ經ルニアラサレハ他ノ判任官ニ任スルコトヲ得ス

◎東京電信學校ノ卒業證書ヲ有スル者遞信技手ニ任用方

明治二十一年五月閣令第八號

東京電信學校ノ卒業證書ヲ有スル者ハ事務練習ヲ要セス直ニ遞信技手ニ任スルコトヲ得

◎會計檢査官任用資格

明治二十二年六月勅令第八十號

朕會計檢査官資格ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

會計檢査院法第六條ニ依リ會計檢査官ハ左ノ資格ヲ具フル者ヲ以テ之ニ任ス

第一　年齢滿三十歲以上ノ者

第二　五年以上檢査官補又ハ五年以上他ノ高等行政官タル者但試補勤務年數ハ之ヲ算ス

◉會計檢査官補特別任用

明治二十五年七月勅令第六十一號

朕檢査官補特別任用ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

第一條　會計檢査院屬ニシテ五年以上檢査院ニ奉職シ現ニ三級以上ノ俸給ヲ受ケ功績顯著ナル者ハ高等試驗ヲ要セス高等試驗委員ノ銓衡ヲ經テ檢査官補ニ任用スルコトヲ得

第二條　本令ニ依リ任用シタル檢査官補ハ高等試驗ヲ經ルニアラサレハ檢査官及他ノ高等官ニ轉任スルコトヲ得ス

◉北海道郡區長試驗ヲ要セス判任官ヨリ任用方

明治二十二年一月閣令第三號

北海道廳ノ郡區長ハ當分ノ內三箇年以上北海道廳ノ官務ニ從事シ判任官五等以上ニ叙セラレ現ニ在官セル者ニ限リ試驗ヲ要セス郡區長試驗委員ノ銓衡ヲ經テ郡區長ニ任スルコトヲ得

◉北海道集治監分監長及北海道廳典獄特別任用方

明治二十四年七月勅令第百十三號

朕北海道集治監分監長及北海道廳典獄特別任用ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

第一條　北海道集治監分監長及北海道廳典獄ハ五箇年以上官務ニ從事シ現ニ判任官六級以上ノ俸給ヲ受クル者ニ限リ當分ノ內試驗ヲ要セス文官高等試驗委員ノ銓衡ヲ經テ任用スルコトヲ得

第二條　前條ニ依リ文官高等試驗委員ノ銓衡ヲ經テ任用シタル北海道集治監分監長及北海道廳典獄ハ高等試驗ヲ經ルニ非サレハ他ノ高等官ニ轉任スルコトヲ得ス

附則

第三條　本令ハ明治二十四年八月十六日ヨリ施行ス

◉警視廳典獄特別任用ノ件

明治二十八年七月勅令第百一號

朕警視廳典獄特別任用ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

警視廳典獄ノ任用ニ就テハ明治二十三年勅令第二百二十七號及明治二十四年勅令第二百三十七號ヲ適用ス

◉集治監典獄特別任用ノ件

明治二十八年七月勅令第百二號

朕集治監典獄特別任用ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

集治監典獄ハ滿三年以上廳府縣典獄若クハ集治監分監長ノ職ヲ奉シ現ニ其ノ職ニ在ル者ニ限リ當分ノ內試驗ヲ要セス文官高等試驗委員ノ銓衡ヲ經テ任用スルコトヲ得

◉府縣參事官及典獄特別任用令

明治二十三年十月勅令第二百三十七號

朕府縣參事官及典獄特別任用令ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

府縣參事官典獄特別任用

第一條　府縣參事官並典獄ハ五箇年以上官務ニ從事シ判任官「三等以上」ノ現職ニ在ル者ニ限リ當分ノ內試驗ヲ要セス高等試驗委員ノ銓衡ヲ經テ任用スルコトヲ得ス

第二條　前條ニ依リ高等試驗委員ノ銓衡ヲ經テ任用シタル府縣參事官並典獄ハ高等試驗ヲ經ルニ非サレハ各地ノ高等官ニ轉任スルコトヲ得ス

◉郡區長ハ當分內務大臣ノ指定科目ニ依リ試驗ス

明治二十年七月閣令第二十號

地方現今ノ情況ニ依リ郡區長ノ試驗ハ學術ニ偏セス實務ヲ旨トシテ專ラ其地ノ狀勢民情及利害ニ通曉スル者ヲ選任スヘキ必要アルヲ以テ郡區長ノ試驗科目ハ當分ノ內地方ノ實況ヲ斟酌シテ內務大臣ノ指定スル所ニ依ル但郡區長ハ他ノ高等試驗ヲ經タル者ニ非レハ高等官ニ轉任スルコトヲ得ス

◉郡區長試驗條規

明治二十年十二月內務省令第五號

郡區長ノ試驗ニ關シ左ノ條規ヲ定ム

第一條　郡區長ノ試驗ハ左ノ科目ヲ以テ內務省ニ於テ之ヲ行フ

一　就職スヘキ地方ノ風土慣例及物產

一　郡區長職務ニ必要ナル法令

第二條　郡區長職務ニ關スル公文ノ立案

郡區長ノ試驗ヲ受クルハ滿三十年以上ノ者タルヘシ但該地方ニ於テ五箇年以上奏任官又ハ郡區長ノ職ヲ奉シタル者ハ此限ニアラス

第三條　試驗出願者ハ願書ニ就職スヘキ地名ヲ記入シ履歷書ヲ取添ヘ北海道廳又ハ府縣廳ヲ經テ試驗委員長ニ差出スヘシ

第四條　試驗委員ハ內務大臣內務省ノ高等官若クハ他官廳ノ高等官ヨリ選テ之ヲ命シ又ハ囑託シ內務省「總務局長」ヲ以テ委員長トス

第五條　試驗委員ハ必要アル場合ニ於テハ問題ヲ選定シテ北海道廳長官府縣知事ニ送付シ該地方高等官三名以上ノ列席ニ於テ其應答ヲ爲サシムルコトヲ得

第六條　試驗ノ手續ニ關スル細目ハ試驗委員長ノ定ムル所ニ依ル

◉郡區長特別任用方

明治二十三年二月勅令第九號

朕郡區長任用ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

第一條　郡區長ハ五箇年以上官務ニ從事シ判任官五等以上ノ現職ニ在ルモノニ限リ當分ノ內試驗ヲ要セス

郡區長試驗委員長ノ銓衡ヲ經テ任用スルコトヲ得

第二條　郡區長試驗委員長ノ銓衡ヲ經テ郡區長ニ任用シタル者他ノ道廳府縣ノ郡區長ニ轉任スルトキハ更ニ郡區長試驗委員長ノ銓衡ヲ經ヘシ

第三條　郡區長試驗委員長ノ銓衡ヲ經テ任用シタル郡區長ハ高等試驗ヲ經ルニアラサレハ他ノ高等官ニ轉任スルコトヲ得ス

◉警視特別任用令

明治二十四年四月勅令第三十七號

朕警察署長ニ補スヘキ警視特別任用ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

第一條　警察署長ニ補スヘキ警視ハ五箇年以上警部ニ奉職シ判任官「三

等以上」ノ現職ニ在ル者ニ限リ當分ノ内試驗ヲ要セス高等試驗委員ノ銓衡ヲ經テ任用スルコトヲ得

第二條　前條ニ依リ任用シタル警視ハ高等試驗ヲ經ルニ非サレハ他ノ高等官ニ轉任スルコトヲ得ス

◎巡査現職ノ者警部同補ニ任用方

明治二十三年二月勅令第十號

朕巡査奉職滿五年以上ノ者ヲ警部警部補ニ任用スル件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

巡査奉職滿五年以上ニシテ精勤證書ヲ有シ現ニ其職ヲ奉スル者ハ文官試驗試補及見習規則第二條ノ規定ニ據ラス文官普通試驗委員長ノ銓衡ヲ經ヲ警部警部補ニ任用スルコトヲ得但試驗ヲ經スシテ任用シタル警部警部補ハ普通試驗ヲ經ルニアラサレハ他ノ判任官ニ轉スルコトヲ得ス

◎看守現職者看守長（看守副長）ニ任用法

明治二十三年七月勅令第百四十六號

朕看守奉職滿五年以上ノ者ヲ看守長（看守副長）ニ任用スル件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

看守奉職滿五年以上ニシテ精勤證書ヲ有シ現ニ其職ヲ奉スル者ハ文官試驗試補及見習規則第二條ノ規定ニ據ラス文官普通試驗委員長ノ銓衡ヲ經テ看守長看守副長ニ任用スルコトヲ得但試驗ヲ經スシテ任用シタル看守長看守副長ハ普通試驗ヲ經ルニアラサレハ他ノ判任官ニ轉スルコトヲ得ス

◎皇宮警手採用規則

明治十九年六月皇宮警察署長達

第一條　皇宮警手ハ志願ノ者ヨリ檢査合格ノ上採用スヘシ其格ハ左ノ如シ

一　年齡、二十年以上滿三十五年以下ニシテ徵兵ニ相當セサル者

一　身幹、曲尺五尺以上ノ者

一　體質、强壯ニシテ其職務上ニ害アル疾病ナキ者

一　讀書、普通ノ文書ヲ讀得ル者

一　作文、通俗往復文ヲ綴リ得ル者

第二條　身幹曲尺五尺以上ノ者ニシテ嘗テ巡査看守又ハ陸軍海軍兵役ニアリ性質强壯警手ニ適スル見込アル者ハ例ニ照シ試驗ノ上特別採用具申スル者トス

第三條　二十年未滿三十五年以上ト雖モ體質强壯職務ニ堪ユル見込アル者ハ例ニ照シ特別ニ試驗ノ上採用具申スルヿモアルヘシ但十八年未滿ハ此限ニアラス

第四條　當省奉職ノ者警手ヘ轉用スルトキハ例ニ照シ試驗ヲナスモノトス但前ニ試驗ヲ經タル者ハ此限ニアラス

第五條　前條合格ノ者ト雖モ左ノ事故アル者ハ採用スヘカラス

一　公權剝奪停止ニ係ルハ勿論皇室ニ對スル輕罪其他羞恥ヲ破リシ罪ヲ以テ處刑セラレタル者但復權若クハ期滿免刑ノ者ト雖モ尚採用ヲナサス

懲戒ニヨリ免職後二箇年ヲ經サル者

一　當省元門部消防手警視廳并各府縣巡査或ハ等外雇吏奉職誓約年限ノ内外ヲ問ハス職務怠惰又ハ不都合等アリテ諭旨解職ニ係ル者

一　皇宮警手ニシテ正當ノ事由ナク奉職年期内ニ退職シ未タ二年ヲ經サル者

一　酒癖アル者

一　身代限リノ處分ヲ受ケ其義務ヲ終ヘサル者

第六條　皇宮警手志願ノ者ハ該願書ニ誓約書履歷書身分證書ヲ添ヘ直チニ皇宮警察本署ニ出願セシム

第七條　身元引受人ハ東京在籍并寄留ニシテ相當ノ資財所有者二名トス

第八條　左ニ掲クルモノハ身元引受人タルヲ得セシメス

一　陸海軍下士兵卒及ヒ巡査警手奉職中ノ者

一　止宿同居及ヒ他ノ陸軍ニアル者但判任（陸海軍下士ヲ除ク）以上奉職中ノ者ハ此限ニアラス

一　公權剝奪及公權停止中ノ者

一　年齡二十年未滿ノ者

身元引受人タル者前項ニ該當セルトキハ更ニ引受人ヲ立テシム

第九條　當省警手契約年限中ト雖モ不得止情實アリ證據確明ニシテ辭職ヲ聽サレシ者ハ尚二箇年ヲ經スト雖モ採用スルヿアルヘシ

第十條　後備軍豫備軍中ト雖モ東京鎮臺所管ノ者ニ限リ照會ノ上差閊ナキ者ハ採用ス

第十一條　皇宮警手ハ薦舉手續ニ依リ皇宮警部ニ於テ薦舉スヘシ

第十二條　試驗官ハ其時々警察長ニ於テ警部警部補ノ内ヨリ選定スヘシ

第十三條　體格ノ强弱并疾病ノ有無等ハ醫員ニ於テシ其他ハ其試驗官ニ於テ檢査スヘシ

第十四條　試驗官ハ右ニ掲クル所ノ外本人ノ志向及ヒ從來ノ經歷又ハ技術學術等精細調査シ合格ノ者ハ試驗表ヲ製シ皇宮警察長ニ具申シ警察長ハ意見ヲ付シテ主殿頭ニ上申スヘシ

試驗法科目

第一條　警手志願人試驗科目試驗法其優劣概子左ノ例ニ因リ上中下ノ三等ニ別テ其等差ヲ定ム下等ノ部ハ再驗スルヿアルヘシ其他ハ等トス

第二條　讀書ハ有點ノ漢文普通假名交リ文等ヲ差支ナク誦讀シ作文ハ問題ニ適シ字體法ヲ得文意明瞭ナル者ヲ上等ノ部トス

第三條　讀書ハ有點ノ漢文ヲ讀得スト雖モ普通假名交リ文等ヲ讀得作文ハ稍字體法ヲ得文意問題ニ適スル者ヲ中等ノ部トス

第四條　讀書普通假名交リ文等誦讀不審多ク作文ハ稍問題ニ適スト雖モ文意明瞭ナラス運筆尤モ遲ナル者ヲ下等トス但書籍ハ試驗ニ臨ミ貸與ス自己携フルヲ許サス有點ノ漢文ハ日本外史等假名交リ文ハ規則逢等（警吏須知、警察主眼等ノ如キ者）ヲ用ユ作文ノ紙料ハ半紙部ヲ用ユ問題ハ警手ニ管スル事件即席ニ之ヲ與フ（火ノ元取締法、失火消防、惡漢捕縛等ノ如キ者）概子半救ヨリ少カラス綴ラシメ三十分間ヲ限リトス

第五條　疾病ノ輕重虛實ヲ診斷センカ爲メニ可及的綿密ノ檢査ヲ遂ク可シ

第六條　前諸條ニ基キ身體ヲ檢査シ其合不合ヲ判決スヘキモ殊ニ年齡身長力量視官聽官ノ感覺及胸廓ノ構造ハ左格ニ適スルモノヲ選フヘシ

一　年齡ハ二十歲以上三十五歲以下ノ者

一　身長ハ五尺以上ノ者

一　力量ハ左右ノ手各檢力器二十五（キログラム）以上ヲ示ス者

一　視官ノ感覺ハ二十尺ノ距離ニ於テ「スチルレン」氏試視力表ノ二十號ヲ明視シ得ル者

一　聽官ノ感覺ハ六尺ノ距離ニ於テ低語ヲ聽取シ得ル者

一　胸廓ノ構造ハ靜息時ニ於テ其周圍身長ノ半ヨリ大ニシテ呼吸縮張ノ差一寸五分以上ノ者又「フッチンソン」氏『スピロメートル』ヲ用フルニ於テハ二千五百立方（センチメートル）以上ノ者

◎巡査採用規則

明治二十四年九月内務省訓令第二十一號

第一條　巡査ハ試驗ノ上採用スヘキモノトス但シ左ニ記載シタル者ハ此限リニアラス（明治二十八年五月内務省訓令第八號ニテ本條改正）

一　警部警部補ノ職ヲ奉シタル者

二　巡査精勤證書ヲ有スル者

三　陸海軍現役滿期下士以上ノ者

四　陸軍兵卒ニシテ現役滿期トナリ又ハ戰時召集ヲ解除セラレ下士適任證書ヲ有スル者

第二條　巡査志願者ハ品行方正年齡二十三年以上四十年未滿ニシテ徵兵ニ相當セス且ツ左ノ諸項ニ抵觸セサル者タルヘシ

一　重罪ノ刑又ハ重錮禁ノ刑ニ處セラレ若クハ同上ノ刑ニ處セラルヘキ罪ヲ犯シ單ニ監視ニ附セラ

レタル者及輕禁錮ノ刑ニ處セラレ滿期後五年ヲ經過セサル者但舊法ニ依リ施體ノ刑ニ處セラレタル者ハ總テ本文ノ權衡ニ準ス

二　賭博犯處分規則ニ依リ懲罰ニ處セラレタル者

三　巡査懲罰例又ハ官吏懲戒例ニ依リ免職セラレ若クハ故ナク巡査ヲ辭職シ二年ヲ經過セサル者

四　身分不相應ノ負債アル者又ハ家資分散者タルノ宣告ヲ受ケ未タ復權ヲ得サル者又ハ身代限ノ處分ヲ受ケ未タ辨償ノ義務ヲ終ヘサル者（二十四年十月內務省訓令第二十三號ニテ改正）

五　酒癖アル者又ハ暴行ノ癖アル者

第三條　巡査體格ノ檢査ハ左ノ諸項ニ適合スル者ヲ以テ合格トス

一　體質善良ナル者即チ左ニ記載スル等ノ缺所ナキ者

四肢完具セサル者但執筆把握ニ差支サル指ノ萎小彎屈强直等ノ類ハ此限リニアラス

胸腔機關及腹內臟器若クハ皮膚病較著ノ疾病アル者但較著ノ疾病ニアラサルモ全身諸機關ノ機能減衰ノ者亦同シ

服裝又ハ運動ニ不便ナル者

贅生物畸形等容貌體勢醜惡ナル者

二　身幹五尺一寸以上ニシテ胸圍大約身長ノ半ニ等シク呼吸縮長ノ差一寸以上ノ者

三　兩眼共視力三分ノ二以上ニシテ辨色力完全ノ者

四　聽力六尺ノ距離ニ於テ低語ヲ聽識シ得ル者

五　言語應答明瞭ニシテ充分ノ發聲ニ堪ユル者

六　精神完全ナル者即チ精神病及神經病（鬱憂癲狂癡獃又舞踏病癲癇等ノ病）ナキ者

第四條　巡査技藝ノ試驗ハ左ノ諸項ニ適合スル者ヲ以テ合格トス

一　刑法刑事訴訟法警察法規等ノ大要ニ通スル者

二　本邦歷史及地理ノ大略ニ通スル者

三　假名交リノ論文及普通往復文ヲ作リ得ル者

四　算術加減乘除ヲ爲シ得ル者

五　普通ニ楷書又ハ行書ヲ書キ得ル者

第五條　巡査ノ試驗ハ廳府縣巡査教習所ニ於テ警部二名以上立合ノ上巡査教習所長之ヲ施行スヘシ

第六條　試驗ノ上巡査ニ採用スヘシト定リタル者ハ警視廳ニ於テハ巡査本部長北海道廳及府縣ニ於テハ警部長親ク左ノ諸件ヲ宣告シ誓書ヲ徵シタル上採用ス可シ

一　巡査タル者ハ官吏服務紀律ヲ恪守スヘキハ言ヲ俟タス常ニ上官ノ命令ヲ遵守シ勤務中ハ勿論勤務ニ服セサルトキト雖モ猥ニ政治ノ是非得失ヲ論評スルカ如キコト決シテアルマシキ事

一　巡査タル者ハ常ニ人民ノ保護者タルコトヲ記憶シ之ニ對シ丁寧親切ヲ旨トシ而モ之ト相狎識スルカ如キコトナク職務上ニ於テ負擔スル百般ノ責務ハ最モ嚴正忠實ニ之ヲ踐行スヘキ事

一　巡査タル者ハ一端奉職ノ上ハ他念ナク職務ニ從事シ五箇年未滿ニシテ一身ノ故ヲ以辭職スルカ如キコト決シテアルマシキ事

一　巡査タル者ハ自身ハ勿論家族ニ至ル迄專ラ品行ヲ正シクシ警察官吏タリ又其家族タル體面ヲ汚損スルカ如キ所業決シテアルマシキ事

第七條　巡査タルヘキ者ヨリ呈セシムヘキ誓文ハ左ノ如シ但前條各官ノ面前ニ於テ本人ヲシテ自書捺印セシム可シ

誓文

今般何（廳府縣）巡査志願仕候ニ付御採用ヲ被ルニ於テハ官吏服務紀律ヲ恪守仕ルヘキハ勿論人民ニ對シテハ丁寧親切ニ職務ヲ執行シ且ツ總テノ法律命令ヲ遵守シ職任上百般ノ責務ハ嚴正忠實ニ踐行仕ルヘク又奉職五箇年ニ滿タスシテ一身ノ故ヲ以テ自ラ職務御免相願候樣ノ儀決シテ無之且ツ自身ハ勿論家族ニ至ル迄品行方正ニ相保チ警察官吏タリ又其ノ家族タル體面ヲ汚損致シ候樣ノ所業決シテ仕マシク依テ誓文如件

明治　年　月　日　府縣國郡市町村番地身分　何　某　實印

第八條　新ニ採用スル巡査ハ先ツ三級俸ヲ給スヘシ其陸軍現役滿期ノ下士及巡査精勤證書ヲ有スル者ニ係ルトキハ直ニ二級俸ヲ給スルコトヲ得但陸軍現役滿期ノ下士ニシテ士官適任證書ヲ有スル者ハ特ニ一級俸ヲ給スルコトヲ得

◎貴族院及衆議院守衛長守衛番長特別任用方（明治二十六年十一月勅令第二百九號）

陛貴族院並ニ衆議院守衛長及守衛番長特別任用ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

貴族院並ニ衆議院ノ守衛奉職滿五年以上ニシテ現ニ其職ニ在ル者ハ試驗ヲ要セス文官普通試驗委員ノ銓衡ヲ經テ貴族院又ハ衆議院ノ守衛長若クハ守衛番長ニ任用スルコトヲ得

第一回帝國議會會期前又ハ其ノ會期中ニ貴族院又ハ衆議院ノ守衛ヲ命セラレ引續キ其ノ職ニ在ル者ハ其ノ奉職年數ニ拘ラス前項ニ依ルコトヲ得

◎看守採用規則（明治二十六年十二月內務省訓令第二十六號）

看守採用規則左ノ通相定ム

看守採用規則

第一條　看守ハ必ス試驗ノ上採用スヘキモノトス但看

守精勤證書ヲ有スル者竝ニ曾テ看守長タリシ者ニシテ看守ヲ志願スル者ハ此限ニアラス

第二條　看守志願者ハ品行方正年齢二十一年以上四十年未滿ニシテ徵兵ニ相當セス且ツ左ノ諸項ニ抵觸セサルモノタルヘシ

一　重罪ノ刑又ハ重禁錮ノ刑ニ處セラレ若クハ同上ノ刑ニ處セラルヘキ罪ヲ犯シ單ニ監視ニ付セラレタル者及輕禁錮ノ刑ニ處セラレ滿期後五年ヲ經過セサル者但舊法ニ依リ處刑セラレタル者亦之ニ準ス

二　賭博犯處分規則ニ依リ懲罰ニ處セラレタル者

三　看守巡査懲罰例又ハ官吏懲戒例ニ依リ免職セラレ若クハ自己ノ便宜ニ依リ看守ヲ辭職シ二年ヲ經過セサル者

四　身分不相應ノ負債アル者又ハ家資分散者タルノ宣告ヲ受ケ未タ復權ヲ得サル者又ハ從前身代限ノ處分ヲ受ケ未タ辨償ノ義務ヲ終ヘサル者

五　酒癖アル者又ハ暴行ノ癖アル者

第三條　看守體格ノ檢査ハ左ノ諸項ニ適合スル者ヲ以テ合格トス

一　體質善良ナル者即チ左ニ記載スル等ノ缺所ナキ者

四肢完具セサル者但執筆把握ニ差支サル指ノ萎小變屈强直ノ類ハ此限ニアラス

胸腔機關及腹內臟器若クハ皮膚病較著ノ疾病アル者但較著ノ疾病ニアラサルモ全身諸機關ノ機能減衰ノ者亦同シ

服裝又ハ運動ニ不便ナル者

發生物畸形等容貌體勢醜惡ナル者

二　身幹五尺一寸以上ニシテ胸圍大約身長ノ半ニ等シク呼吸縮長ノ差一寸以上ノ者

三　兩眼共視力三分ノ二以上ニシテ辨色力完全ノ者

四　聽力六尺ノ距離ニ於テ低語ヲ聽識シ得ル者

五　言語應答明瞭ニシテ充分ノ發聲ニ堪ユル者

六　精神完全ナル者即チ精神病及神經病（鬱憂癲狂癡獃及舞踏病癲癇等ノ病）ナキ者

第四條　看守技藝ノ試驗ハ左ノ諸項ニ適合スル者ヲ以テ合格トス

一　刑法、刑事訴訟法、裁判所構成法、監獄則、監獄則施行細則等ノ大要ニ通スル者

二　普通往復文及申告書ヲ作リ得ル者

三　加減乘除ヲ爲シ得ル者

四　普通ニ楷書又ハ行書ヲ書キ得ル者

第五條　看守ノ試驗ハ看守長竝ニ監獄書記二名以上立合ノ上第二課長之ヲ施行スルモノトス

第六條　試驗ニ合格セシ者一年內ハ其合格ヲ有效トス但體格ハ此限ニアラス

第七條　試驗ノ上看守ニ採用スヘシト定リタル者ハ典

獄親ク左ノ諸件ヲ宣告シ誓書ヲ徵シタル上採用スヘシ

一　看守タル者ハ官吏服務紀律ヲ恪守スヘキハ言ヲ俟タス常ニ上官ノ命令ヲ遵守シ勤務中ハ勿論勤務ニ服セサルトキト雖政治ノ是非得失ヲ論評スルカ如キコト決シテアルマシキ事

一　看守タル者ハ在監人ト相狎昵スルカ如キコトナク職務上ニ於テ負擔スル百般ノ責務ハ最モ嚴正忠實ニ之ヲ踐行スヘキ事

一　看守タル者ハ一旦奉職ノ上ハ他念ナク職務ニ從事シ一身ノ故ヲ以テ辭職スルカ如キコト決シテアルマシキ事

一　看守タル者ハ自身ハ勿論家族ニ至ル迄專ラ品行ヲ正シクシ監獄官吏タリ又其家族タル體面ヲ汚損スルカ如キ所業決シテアルマシキ事

第八條　看守タルヘキ者ヨリ呈セシムヘキ誓文ハ左ノ如シ但典獄ノ面前ニ於テ本人ヲシテ自書捺印セシムヘシ

誓文

某儀

今般何（縣廳府縣集治監）看守志願仕候ニ付御採用ヲ被ルニ於テハ官吏服務紀律ヲ恪守仕ルヘキハ勿論在監人ニ對シテ決シテ相狎昵スルカ如キコトナク總テノ法律命令ヲ遵守シ職任上百般ノ責務ハ嚴正忠實ニ踐行仕ルヘク又一身ノ故ヲ以テ自ラ職務御免相願候樣ノ儀決シテ無之且ツ自身ハ勿論家族ニ至ル迄品行方正ニ相保チ監獄官吏タリ又其家族タル體面ヲ汚損致シ候樣ノ所業決シテ仕ルマシク依テ誓文如件

府縣國郡市町村番地身分

明治　年　月　日　　何　某　實印

第九條　本則ヲ施行スル方法細目ハ警視總監北海道廳長官府縣知事之ヲ定メ內務大臣ニ報告スヘシ

◎海軍高等武官任用條例

明治二十六年十二月勅令第二百五十號

朕海軍高等武官任用條例ノ改正ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

海軍高等武官任用條例

第一條　海軍高等武官ハ各其ノ武官候補生ヨリ任用ス

第二條　候補生ハ一箇年以上實務練習ノ後學術及實務試驗ヲ行ヒ合格シタル者ニ付キ候補名簿ヲ作リ本官ニ缺員アル每ニ候補名簿ノ列序ニ從ヒ本官ニ任用ス

第三條　候補名簿ノ列序ハ學術及實務試驗ノ成績順序ニ依リ之ヲ定ム

第四條　海軍ノ官費生徒ト爲リ外國ニ留學シ適當ノ卒業證書ヲ得タル者ハ其ノ成績ニ應シ相當ノ本官ニ任用スルコトヲ得

私費ヲ以テ外國ニ留學シ相當ノ學術ヲ修メ卒業ノ後海軍出身志願ノ者ハ試驗ヲ行ヒ其ノ成績ニ應シ特ニ其ノ學科相當ノ本官ニ任用スルコトアルヘシ

前二項ノ場合ニ於テモ初メテ海軍高等武官ニ任用スルハ少尉若クハ其ノ相當官ニ限ル

第五條　海軍少軍醫ハ必要ノ場合ニ於テ帝國大學醫科大學卒業ノ者ニ付キ身體檢査學術試驗ヲ行ヒ合格シタル者ヨリ任用スルコトヲ得

第六條　海軍少主計ハ必要ノ場合ニ於テ文官高等試驗ヲ經テ其ノ合格證書ヲ有スル者ニ付キ身體檢査ヲ行ヒ合格シタル者ヨリ任用スルコトヲ得

第七條　海軍高等武官ニシテ特別ノ學術技能ヲ有シ且事績顯著ナル者ハ其ノ學術技能ヲ要スル他ノ海軍高等武官ニ轉任セシムルコトヲ得此ノ場合ニ於テ其ノ實役停年ハ前後通算ス

第八條　海軍少軍醫及海軍少主計タランコトヲ欲スル者ハ海軍大臣ノ告示ニ從ヒ出願スヘシ

第九條　第四條第二項及第五條ノ者ニシテ左ニ掲クル事項ノ一ニ該ルトキハ之ヲ任用スルコトヲ得ス

一　年齡二十年未滿及滿二十八年以上ノ者

二　禁錮以上ノ刑ヲ受ケタル者又ハ賭博犯ノ處分ヲ受ケタル者

三　復權ヲ得サル家資分散者、破産者及身代限ノ處分ヲ受ケ辨償ノ義務ヲ終ヘサル者若クハ其ノ相續人

第十條　身體檢査及學術試驗ニ關スル規定ハ海軍大臣之ヲ定ム

第十一條　身體檢査委員並ニ學術試驗委員ハ海軍大臣之ヲ命ス

附則

第十二條　明治二十八年マテハ少尉候補生ヲ少機關士ニ任用スルコトヲ得

第十三條　海軍少技士ハ當分ノ內帝國大學工科大學卒業ノ者及其ノ他相當ノ學術ヲ修メタル者ニ就キ身體檢査學術試驗ヲ行ヒ合格シタル者ヨリ任用スルコトヲ得

第九條ノ規定ハ前項ニ掲クル者ニモ適用ス

◉海軍高等武官候補生規則

明治二十六年十二月勅令第二百五十一號

朕海軍高等武官候補生規則ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

海軍高等武官候補生規則

第一條　海軍高等武官候補生ハ海軍少尉候補生、海軍少機關士候補生、海軍少技士候補生、海軍少軍醫候補生、海軍少藥劑官候補生、海軍少主計候補生トス

第二條　海軍少尉候補生ハ海軍兵學校ノ全學科ヲ卒業シタル者ヨリ採用ス

海軍少機關士候補生ハ海軍機關學校ノ全學科ヲ卒業シタル者ヨリ採用ス

第三條　海軍少軍醫候補生ハ醫術開業免狀ヲ有スル者ニ就キ身體檢査學術試驗ヲ行ヒ合格シタル者ヨリ其ノ成績順序ニ從ヒ採用ス

第四條　海軍少藥劑官候補生ハ藥劑師免狀ヲ有スル者ニ就キ身體檢査學術試驗ヲ行ヒ合格シタル者ヨリ其ノ成績順序ニ從ヒ採用ス

第五條　海軍少主計候補生ハ官立公立尋常中學校若クハ海軍大臣ニ於テ之ト同等以上ト認ムル學校ノ卒業證書ヲ有シ且法律及經濟學ヲ教授スル學校ニ於テ三年以上ノ課程ヲ終ヘタル者ニ就キ身體檢査學術試驗ヲ行ヒ合格シタル者ヨリ其ノ成績順序ニ從ヒ採用ス

第六條　海軍少軍醫候補生、海軍少藥劑官候補生又ハ海軍少主計候補生タランコトヲ欲スル者ハ海軍大臣ノ告示ニ從ヒ出願スヘシ

第七條　海軍ノ官費生徒ト爲リ外國ニ留學シ相當ノ卒業證書ヲ得タル者ハ其ノ成績ニ應シ相當ノ候補生ニ採用スルコトヲ得

私費ヲ以テ外國ニ留學シ相當ノ學術ヲ修メ卒業ノ後海軍出身志願ノ者ハ試驗ヲ行ヒ其ノ成績ニ應シ特ニ其ノ學科相當ノ候補生ニ採用スルコトアルヘシ

第八條　海軍少軍醫候補生、海軍少藥劑官候補生、海軍少主計候補生及前條第二項ノ者ニシテ左ニ掲クル事項ノ一ニ該ルトキハ候補生ニ採用スルコトヲ得ス

一　年齡二十年未滿及滿二十五年以上ノ者

二　有妻ノ者

三　禁錮以上ノ刑ヲ受ケタル者及ハ賭博犯ノ處分ヲ受ケタル者

四　復權ヲ得サル家資分散者、破産者及身代限ノ處分ヲ受ケ辨償ノ義務ヲ終ヘサル者若クハ其ノ相續人

第九條　候補生ハ現役海軍軍人トシ其ノ身分ハ奏任官ノ待遇トス

第十條　候補生ハ情願ヲ以テ辭スルコトヲ得ス

第十一條　候補生ハ各其ノ本官ノ實務ヲ練習スルモノトス

第十二條　候補生ヲ直轄スル各長官ハ一箇年以上實務ヲ練習シタル各候補生ノ材能、品行、勤惰、傷痍、疾病等ノ事實ヲ詳記シ之ニ意見ヲ附シ所管長官ニ差出シ所管長官ハ之ニ意見ヲ附シ每年一回海軍大臣ニ報告スヘシ

第十三條　海軍大臣ハ候補生ノ品行不正或ハ傷痍疾病等ノ故ヲ以テ高等武官ニ適セスト認ムルトキハ之ヲ免ス

第十四條　候補生海軍高等武官任用條例第二條ノ學術試驗ニ合格セサルトキハ六箇月ノ後再試驗ヲ行ヒ仍不合格ノ者ハ之ヲ免ス

第十五條　身體檢査學術及實務試驗ニ關スル規程ハ海軍大臣之ヲ定ム

第十六條　各候補生ノ身體檢査委員並ニ學術試驗委員

ハ海軍大臣之ヲ命ス

附則

第十七條　本令施行ノ際海軍軍醫學校ニ在ル生徒ハ全學科卒業ノトキ海軍少軍醫候補生ニ採用ス

第十八條　海軍少技士候補生ハ當分ノ內帝國大學工科大學卒業ノ者及其他相當ノ學術ヲ修メタル者ニ就キ身體檢査學術試驗ヲ行ヒ合格シタル者ヨリ採用スルコトヲ得

第八條ノ規定ハ前項ニ揭クル者ニモ適用ス

第十九條　明治二十二年勅令第十八號ハ本令施行ノ日ヨリ廢止ス

◎海軍大佐大尉及各相當官進等ノ件

明治二十六年四月勅令第二十四號

陸海軍大佐海軍大尉及各相當官進等ノ件ヲ裁可ス

高等官四等ニ叙セラレタル海軍大佐及相當官並七等ニ叙セラレタル海軍大尉及相當官ハ海軍高等武官進級條例第二條ニ揭クル實役停年最下期限ノ半數ヲ經ルニアラサレハ進等セシムルコトヲ得ス但休職停職收禁及處刑中ノ日數ハ實役停年ニ算入セス

◎帝國大學及文部省直轄學校ニ於テ雇外國人ヲ教官ニ任用方

明治二十六年九月勅令第九十六號

朕帝國大學及文部省直轄學校雇外國人ニ關スル件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

帝國大學及文部省直轄諸學校ニ於テ學科教授ノ必要アルトキハ帝國大學總長及直轄諸學校長ハ文部大臣ノ許可ヲ受ケ雇外國人ヲシテ教官ノ職務ニ當ラシムルコトヲ得

◎市町村立小學校教員任用令

明治二十六年十二月勅令第二百六十號

朕市町村立小學校教員任用令ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

市町村立小學校教員任用令

第一條　市町村立小學校教員ハ市長又ハ郡長ノ薦舉ニ由リ小學校教員銓衡委員ノ銓衡ヲ經テ府縣知事之ヲ任ス

第二條　小學校教員銓衡委員ハ府縣知事ノ指命スル所ノ府縣高等官及判任官各一人尋常師範學校長及其ノ教員二人ヲ以テ組織ス

第三條　明治二十三年勅令第二百十五號小學校令第五十九號第一項第二項第三項ハ刪除ス

◎華族ヲ判任以下ニ採用ノ件

明治九年三月宮內省華第二號達

華族之嗣判任官以下並傅等ニ採用之節ハ差支有無當省ノ伺ヲ經候上其管轄廳ヘ徵狀可差出此旨相達候事

但東京府下寄留ノ者ハ明治八年一月第十六號御達府縣往復規程第二條ノ通可取計事

◎華族ノ子弟ヲ判任以下ニ採用ノ件

明治十二年五月宮內省乙第二號達

華族之嗣判任官以下並傅等ニ採用之節ハ差支有無當省ノ伺ヲ經候樣明治九年三月華第二號ヲ以相達置候處自今無位ノ子弟採用之節ハ伺出ニ不及候此旨相達候事

但戶主並有位ノ嗣ハ從前之通可相心得事

第二節　罷免

◎官吏非職條例

明治十七年一月太政官達第三號

官吏非職條例左ノ通相定候條此旨相達候事

官吏非職條例

第一條　官吏（判任官以上竝ニ出仕御用掛モ之ニ準ス）其他疾病等ノ事故ニ因リ本屬長官ハ其僚屬ノ官吏ニ非職ヲ命スルコトヲ得但勅任官ノ非職ハ上裁ニ依リ奏任官ハ太政大臣ノ認可ヲ經テ之ヲ命ス（十七年四月太政官達第三十九號ヲ以テ本條中削除スル所アリタリ）

第二條　非職員ハ其本官ヲ奉シテ常ニ其職務ニ從事セス其他總テ在職官吏ニ異ナルコトナシ

第三條　本屬長官ハ事務ノ都合ニ依リ何時ニテモ非職員ヲシテ更ニ其職務ニ從事セシムルコトヲ得非職員復職スルトキ勅任官ハ上裁ニ依リ奏任官ハ太政大臣ノ認可ヲ經テ之ヲ命ス

第四條　非職ハ三年ヲ一期トス期滿レハ其官ヲ免ス

第五條（二十四年三月勅令第二十三號ヲ以テ本條ヲ削除ス）

第六條　廢廳廢官ノ際御用滯在ヲ命スル者アルトキハ本條例ニ準據ス（十七年四月太政官達第三十九號ヲ以テ本條ヲ追加ス）

第七條　非職員ハ特ニ本屬長官ノ許可ヲ得テ市町村及學校病院會社其他法人ノ業務ニ從事シ其役員ト爲ルコトヲ得（同上法令ヲ以テ本條ヲ追加シ二十二年七月勅令第百一號ヲ以テ改正ヲ施ス）非職員ハ特ニ本屬長官ノ許可ヲ得テ地方病院學校及農工商陸海運輸等會社ノ業務ニ從事シ其役員ト爲リ又ハ商業ヲ營ムコトヲ得但此場合ニ於テハ第五條ノ俸給ヲ支給セス（十七年九月太政官達第七十七號ヲ以テ本項ヲ追加シ二十三年七月勅令第百三十九號ヲ以テ改正ヲ加フ）

第八條（同上ヲ以テ本條ヲ削除ス）

◎官吏非職給改正

明治二十四年三月勅令第二十三號

朕官吏非職條例中削除ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム本令ハ明治二十四年四月一日ヨリ施行スヘキコトヲ命ス

官吏非職條例第五條ヲ削除ス但シ明治二十四年四月一日現在ノ非職員ニハ其非職年限內仍ホ現俸四分ノ一ヲ支給ス

◎非職官吏俸給下渡轉居及商業許可

明治十九年二月閣令第一號

非職官吏ノ俸給下渡、住居移轉及商業ニ關シ左ノ通之ヲ定ム

第一條　凡ソ非職官吏ノ俸給ハ大藏省ニ於テ下渡スヘシ

第二條　本屬長官ハ非職官吏ノ官等俸給氏名住所及非職ノ年月日等ヲ大藏大臣ニ通知スヘシ

第三條　非職官吏ハ本屬長官ニ屆出テ本屬官廳所在ノ地ノ外ニ住居スルコトヲ得

第四條　本屬長官前條ノ届出ヲ受ケタルトキハ大藏大臣ニ通知シ大藏大臣之ヲ地方官ニ通知シ該廳ヲ經由シテ俸給ノ下渡ヲ爲スヘシ

第五條　非職官吏移轉地ニ到着シタルトキハ其住所ヲ本屬長官及地方官ニ届出ヘシ嗣後更ニ其住所ヲ移轉スルトキモ亦同シ

第六條　非職官吏ハ本屬長官ノ許可ヲ得テ商業ヲ營ムコトヲ得

◉非職官吏俸給支給方

明治二十年三月大藏省令第五號

奏任官以上ニシテ月俸ノ者ハ十二箇月分ヲ積算シ年俸ニ準ス

客年當省令第十七號ハ本月限リ廢止シ非職官吏俸給及ヒ第二十號高等官及ヒ判任官俸給支給細則ニヨリ支給ス

但非職俸給渡日ハ高等官ハ一箇年ヲ四期ニ分チ毎期中ノ月四日（當日休暇ナル時ハ順延）判任官ハ毎月十五日ヨリ五日以内ト定ム

◉非職官吏年限滿期届出

明治二十年一月大藏省訓令第四號

非職官吏ハ年限滿期ノ日ニ於テ本官自ラ消滅スヘキ筈ニ付其滿期本官消滅ノ者ハ十九年閣令第一號第二條ニ服準シ其旨當省ヘ届出ヘシ

◉技術官ノ休職免職非職條例

明治二十三年十二月勅令第二百八十六號

朕技術官ノ休職ニ關スル件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

第一條　技術官ノ休職ハ一年ヲ一期トス期滿レハ其官ヲ免ス

第二條　技術官ノ休職ニ關シ特別ノ規定ナキモノハ總テ官吏非職ノ例ニ依ル

第三條　本令ハ明治二十四年二月一日ヨリ施行ス現ニ休職中ノ者ノ休職期限モ亦同日ヨリ起算ス

◉海軍武官待命休職條例

明治二十四年七月海軍省達第百四十六號

海軍武官待命休職條例左ノ通定ム

海軍武官待命休職條例

第一條　將官竝ニ相當官ノ待命及休職者ハ直ニ海軍大臣ニ隷シ上長官以下ノ待命及休職者ハ第一局長ノ所轄トス

第二條　待命及休職者ハ東京府下ニ住居スルモノトス但休職者ハ海軍大臣ノ許可ヲ受ケ鎮守府所在ノ地ニ住居スルコトヲ得

第三條　待命及休職者ノ旅行其他住所届出手續等ハ一般ノ定規ニ依ルヘシ

第四條　待命及休職者傷痍疾病ニ罹リ服役ニ堪ヘ難キトキハ醫員ノ診斷書ヲ添ヘ速ニ届出ツヘシ

第五條　本條例ハ停職者ニ適用ス

◉陸海軍軍人現役定限年齡

明治二十三年六月勅令第九十九號

朕陸海軍軍人現役定限年齡ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

第一條　陸海軍軍人左ニ掲クル定限ノ年齡ニ達スルトキハ現役ヲ退クヘシ

陸軍		
中將	定限年齡	七十年
少將　監督長　軍醫總監	同	六十五年
少將　機技總監　軍醫總監　主計總監	定限年齡	六十年
大佐　機關大監　大技監　軍醫大監　主計大監	同	五十五年
少佐　機關少監　少技監　軍醫少監　藥劑監　主計少監	同	五十年
上等兵曹　軍樂師　機關師　上等技工　船匠師		
大尉　大機關士　大技士　大軍醫　大藥劑官　大主計　下士	同	四十五年
少尉　少機關士　少技士　少軍醫　少藥劑官　少主計　卒	同	四十年

第二條　陸海軍軍人定限ノ年齡ニ達スルモ他人ヲ以テ代フヘカラサル職ニ在ルトキハ留任ヲ命スルコトアルヘシ

第三條　陸海軍軍人定限ノ年齡ニ達セサルモ現役十一年以上ニシテ現役ニ堪ヘサルトキハ將官ハ上諭ニ依リ上長官士官ハ陸海軍大臣准士官ハ所管長官旨ヲ聽シテ現役ヲ退カシムルコトアルヘシ

一等監督　軍醫監　憲兵屯田兵大中佐　二三等監督　一二等軍醫正　藥劑監　獸醫監	定限年齡	六十年
歩騎砲工輜重兵大中佐　憲兵屯田兵少佐　監督補　一等軍吏　一等軍醫　一等藥劑官　一等獸醫	同	五十七年
歩騎砲工輜重兵少佐　憲兵屯田兵大尉　二等軍吏　二等軍醫　二等藥劑官　二等獸醫	同	五十四年
一等軍樂長　砲工兵上等監護　歩騎砲工輜重兵大尉　憲兵屯田兵中少尉　三等軍吏　三等軍醫　三等藥劑官　三等獸醫　二等軍樂長　砲工兵監護　諸工長	同	五十一年
歩騎砲工輜重兵中少尉　憲兵屯田兵下士　軍吏部下士　衛生部下士　軍樂部下士　諸工下長	同	四十八年
歩騎砲工輜重兵下士　憲兵屯田兵卒　看護手　樂手補　雜卒　諸卒	同	四十五年
歩騎砲工輜重兵卒	同	四十年
中將　海軍	同	三十五年
定限年齡		六十五年

少將　機技總監　軍醫總監　主計總監	定限年齡	六十年
大佐　機關大監　大技監　軍醫大監　主計大監	同	五十五年
少佐　機關少監　少技監　軍醫少監　藥劑監　主計少監　上等兵曹　軍樂師　機關師　上等技工　船匠師	同	五十年
大尉　大機關士　大技士　大軍醫　大藥劑官　大主計　下士	同	四十五年
少尉　少機關士　少技士　少軍醫　少藥劑官　少主計　卒	同	四十年

第四款　服務紀律

◉官吏服務紀律

明治二十年七月勅令第三十九號

朕官吏服務紀律ノ改正ヲ裁可シ茲ニ之ヲ施行セシム

官吏服務紀律

第一條　凡ソ官吏ハ天皇陛下及天皇陛下ノ政府ニ對シ忠順勤勉ヲ主トシ法律命令ニ從ヒ各其職務ヲ盡スヘシ

第二條　官吏ハ其職務ニ付本屬長官ノ命令ヲ遵守スヘシ但其命令ニ對シ意見ヲ述ルコトヲ得

第三條　官吏ハ職務ノ内外ヲ問ハス廉耻ヲ重シ貪汚ノ所爲アルヘカラス

官吏ハ職務ノ内外ヲ問ハス威權ヲ濫用セス謹愼懇切ナルコトヲ務ムヘシ

第四條　官吏ハ己ノ職務ニ關スルト又ハ他ノ官吏ヨリ聞知シタルトヲ問ハス官ノ機密ヲ漏洩スルコトヲ禁ス其職ヲ退ク後ニ於テモ又同樣トス

裁判所ノ召喚ニ依リ證人又ハ鑑定人ト爲リ職務上ノ秘密ニ就キ訊問ヲ受クルトキハ本屬長官ノ許可ヲ得タル件ニ限リ供述スルコトヲ得

第五條　官吏ハ私ニ職務上未發ノ文書ヲ關係人ニ漏示スルコトヲ禁ス

第六條　官吏ハ本屬長官ノ許可ナクシテ擅ニ職務ヲ離レ及職務上居住ノ地ヲ離ルヽコトヲ得ス

第七條　官吏ハ本屬長官ノ許可ヲ得ルニ非サレハ營業會社ノ社長又ハ役員トナルコトヲ得ス

第八條　官吏ハ本屬長官ノ許可ヲ得ルニ非サレハ其職務ニ關シ慰勞又ハ謝儀又ハ何等ノ名義ヲ以テスルモ直接ト間接トヲ問ハス總テ他人ノ贈遺ヲ受ルコトヲ得ス

官吏外國ノ君主又ハ政府ヨリ授與セントスル所ノ勳章榮賜俸給並贈遺ヲ受クルニハ天皇陛下ノ裁可ヲ要ス

第九條　左ニ揭ケタル者ト直接ニ關係ノ職務ニ居ル官吏ハ其饗燕ヲ受クルコトヲ得ス

一　官廳ノ工事ヲ受負フ者

一　官廳ノ爲替方又ハ出納ヲ引受クル者

一　官廳ノ補助金ヲ受クル起業者

一　官廳ノ用品ヲ調達スル者

一　官廳ト諸般ノ契約ヲ結フ者

第十條　凡ソ上官タル者ハ職務ノ内外ヲ問ハス所屬官吏ヨリ贈遺ヲ受クルコトヲ得ス

第十一條　官吏並ニ其家族ハ本屬長官ノ許可ヲ得ルニ非サレハ直接ト間接トヲ問ハス商業ヲ營ムコトヲ得ス

第十二條　官吏ハ取引相場會社ノ社員タルコトヲ得ス及間接ニ相場商業ニ關係スルコトヲ得ス

第十三條　官吏ハ本屬長官ノ許可ヲ得ルニ非サレハ本職ノ外ニ給料ヲ得テ他ノ事務ヲ行フコトヲ得ス

第十四條　浪費シテ產ヲ破リ其分ニ應セサル負債ヲ爲ス者ハ過失ノ一タルヘシ

第十五條　官吏ハ私立郵船會社又ハ私立鐵道會社ヨリ無賃乘船無賃乘車切符ヲ受クルコトヲ得ス

第十六條　凡ソ局長所長其他一部ノ長ハ各所屬官吏ヲ監督シ其過失若シ懲戒處分ヲ行フノ區域ノ内ニ在ラサル者ハ之ヲ訓告スルコトヲ務ムヘシ若シ懲戒處分ヲ要スト認ルトキハ事狀ヲ具ヘテ之ヲ本屬長官ニ稟告スヘシ其情ヲ知リ隱蔽シテ稟告セサル者亦過失タルコトヲ免レス

第十七條　本紀律ハ高等官判任官及俸給ヲ得テ公務ヲ奉スル者ニ適用ス

◎官吏商業區分

明治八年四月太政官達第六十五號

官吏商賈ノ營業不相成ハ勿論ニ候處其區分判然タラサルニ付自今左ノ通被定候條此旨相達候事

但從前ノ指令之レニ抵觸スルモノハ廢止ト可心得事

第一條

一　凡ソ官吏タル者ノ幷ニ其家族トモ他ノ物品ヲ買入レ之ヲ餘人ニ賣ト雖トモ其人會社ニ直接關係アル者株主タルハ不都合ニ候條右等ノ職無之樣取締可致此旨及内達候也

◎官吏會社ノ株主トナルヲ得ルノ區分

明治十四年五月太政官達第三十七號

官吏商業區分ノ儀ニ付テハ兼テ相達候趣モ有之候處自今道路河港ノ修築海陸ノ運輸土地ノ開墾及ヒ殖產ノ事業ヲ以テ目的ト爲シ設立スル會社ノ株主トナルハ不苦候條此旨相達候事

◎官吏職務上直接關係アル會社ノ株主ト爲ルノ禁止

明治十四年五月內達

官吏ノ儀ハ濫リニ商社ニ加入等不相成ハ勿論今般第三十七號部內ノ會社ト雖トモ其人會社ニ直接關係アル者株主タルハ不都合ニ候條右等ノ職無之樣取締可致此旨及內達候也

◎官地官林不用物品公賣ノ節其官廳ニ屬スル官吏投票ヲ禁ス

明治八年八月太政官達

官地官林及ヒ不用ノ物品等公ノ入札法ヲ以テ拂下ケ候節其官廳ニ屬スル官員ニ限リ本人ハ勿論其代理人ト雖トモ投票爲致候儀不相成候條此旨相達候事

◎官吏公衆ニ對シ政事上學術上

一　田地家屋ヲ貸シテ地代宿賃ヲ受ル事

一　金銀ヲ貸シテ利息ヲ獲ル事

一　所有地ヨリ生スル物產ニ製作ヲ加ヘ賣拂事

ノ意見演述ノ件　明治二十二年一月内閣訓令

凡ソ官吏タル者ハ自今其職務外ト雖モ公衆ニ對シ政事上又ハ學術上ノ意見ヲ演説シ又ハ之ヲ敍述スルコトヲ得但各長官ノ監督ニ從屬スヘシ法律規則ヲ以テ特ニ制限セラレタル官吏ハ前項ノ限ニ在ラス

◎官吏懲戒例　明治九年四月太政官達第三十四號

今般官吏懲戒例左ノ通相定候條此旨相達候事

官吏懲戒例

第一條　自今私罪ヲ除クノ外ハ官吏職務上ノ過失ハ本屬長官ニ於テ懲戒ノ權ヲ有スヘシ

第二條　懲戒ノ法三種トス第一譴責第二罰俸第三免職

第三條　譴責ハ懲戒ノ輕キモノトシテ本屬長官ヨリ譴責書ヲ付ス

第四條　罰俸ハ一月分拾分ノ壹ヨリ少カラス三月分ヨリ多カラサルノ俸ヲ奪フ

俸ヲ追スルノ法其一月給俸半額以下ハ一月俸中ニテ追フシ其以上ハ毎月給俸ノ半額ヲ大藏省ニ送付ス（十三年一月太政官達第四號ヲ以テ本條ヲ改正ス十九年三月閣令第三號ニ依リテ第二項ノ内ニ消滅スルモノアリタリ）

第五條　懲戒ヲ以テ免職スル者ハ本屬長官ノ意見ニ從ヒ其奏任ハ具狀奏請シテ之ヲ免シ位記ヲ返上セシム但懲戒ニ由ルニアラスシテ免職スル者ハ長官旨ヲ諭シ本人ヨリ辭職ノ願ヲ差出サシメ然後ニ免許ス

第六條　諸省長官ハ所屬奏判任官ヲ懲戒ス（十九年五月勅令第四十二號及同年七月勅令第五十四號ニ依リテ消滅ス）

第七條　四等以下ノ判事ハ「司法卿」之ヲ懲戒ス府縣官判事ヲ兼ル者ノ其所屬判任官ニ於ケルハ他ノ奏任以上府縣官ノ協議ヲ得タル後之ヲ懲戒ス

第八條　府縣長官警視長官其所屬判任官ヲ懲戒スルニ其譴責ヲ專行スルヿヲ得ルヲ除クノ外其罰俸免職ヲ行フハ便宜處分シテ速ニ「内務卿」ニ屆出ツヘシ府縣官判事ヲ兼ル者其所屬判任官ノ罰俸免職ヲ行フハ便宜處分シテ速ニ「司法卿」ニ屆出ツヘシ

第九條　其有心故造私罪ニ入ル者ハ職務上ノ罪ト雖モ之ヲ司法官ニ移シ本屬長官專ニ處分スルコトヲ得ス

第十條　

◎神官竝准官吏等外等懲戒方　明治九年六月太政官達番外

本年四月第三十四號達官吏懲戒例ノ儀ニ付尚又左ノ通相達候事

一　準官吏竝ニ等外吏ハ本例ニ照シテ處分シ傭其他種々ノ名義ヲ以テ公事ニ關スル者ハ本屬長官ノ見込ヲ以テ適宜處分スヘシ（本項ノ次ニ一項アルモ必要ナキヲ以テ略セリ）

一　（十三年第二十三號達ヲ以テ本項廢止）

一　巡査及ヒ學校其他諸工場等ノ如キ別ニ懲罰規則有之分ハ本例ノ限ニアラス

一　地方税ヲ以テ俸給ニ充ル者ノ罰俸ハ各其地方税ニ割戻スヘシ（此項ハ十一年七月太政官布告第十九號ヲ以テ改正セルモノニ依リテ改ム）

◎長官懲戒處分心得　明治九年四月太政官達番外

今般官吏懲戒令相定候ニ付テハ各長官ニ於テ懲戒處分左ノ通可相心得此旨内達候事

一　各長官ハ平生其所屬官ヲ監督シ若シ過失アレハ懲戒令ニ依リ處分スヘシ

一　過失トハ過誤失錯不注意ニ出ル者ヲ云其意情ニ出ル者亦過失トス其素行修マラスシテ官吏ノ体面ヲ汚ス者亦過失ニ準シテ懲戒ヲ加フヘシ

一　過失ノ事ニ害アル者ハ重キニ從テ論ス其事ニ害アリト云トモ猶ホ改正スヘキ者及ヒ事ニ害ナキ者ハ輕キニ從テ論ス但シ其情狀ニ從ヒ輕重ヲ酌量スルハ專ラ本屬長官ノ所見ニ任ス

一　同僚ノ官吏共同シテ過失ヲ犯ス者ハ主任ノ上官（省務ハ省長官司務ハ司長總務ハ總長一科一局一掛ノ事務ハ各々其主任長）其責ニ任スヘシ而シテ次官以下遞ニ從テ以テ論ス下官其造意ヲ以テ處行シ猶ホ上官ノ許可ヲ得タル者ハ上下官共ニ均ク其責ニ任スヘシ下官職權内ノ事ヲ以テ處行シタル者ハ上官其責ニ任セス若シ下官其職權ヲ超エ專斷處行シタル者ハ重ニ從テ論ス

一　所屬官自ラ過失ヲ發舉シ進退伺ヲ捧クルトキハ本屬長官之ヲ推糾シ其過失ニ止マル者ハ例ニ依リ處分ス其有心故造ニ渉リ司法官ニ付スヘシ（司法「卿」若クハ檢事其檢事ヲ置カサル地方ニ於テハ判事）若シ司法官其有心故造ニ非ス又律ニ觸レサルコトヲ判スルトキハ之ヲ本屬長官ニ還付シ長官ハ仍ホ懲戒例ニ依リ處分スルコトヲ得

一　懲戒ニ依リ免職スル者ハ二ヶ年以上ヲ經ルノ後ニ非レハ再タヒ收用スルコトヲ許サス

一　懲戒ニ依ルト否トヲ論セス凡ソ免職スル者ヲ他ノ官廳ヨリ收用セントスルトキハ必ス舊本屬長官ニ通牒シテ其意見ヲ問ヒ答復ヲ得ヘシ

一　過失ニ由ラスシテ免職スル者ハ長官ヨリ旨ヲ諭シ辭表ヲ捧ケシム其旨ニ違ヒ辭表ヲ捧ケサル者ハ直チニ免職スルコトヲ得

一　薦任中過失アル者轉任ノ後發覺若クハ自ラ免舉スル者ハ薦任本屬長官ト通牒シテ新任本屬長官ヨリ之ヲ懲戒スヘシ

◎戸長職務上ノ過失懲戒方　明治十八年二月内務省達第四號

戸長職務取扱上過失アルトキハ總テ官吏懲戒例ニ依リ處分スヘシ但明治十一年乙第八十號達第五項ハ廢止ス

右相達候事

◎有心故造私罪ニ入ル職務上ノ犯罪者處分方　明治九年四月司法省達第十四號

官吏懲戒例第十條ニ其有心故造私罪ニ入ル者ハ職務上ト雖モ之ヲ司法官ニ移シ云々ト有之ニ付テハ以來右等ノ者ハ司法「卿」若クハ檢事直ニ之ヲ受ケ司法「卿」若クハ檢事ニ於テ其有心故造ニアラス又律ニ觸レサルコトヲ判スルトキハ之ヲ本屬長官ニ還付シテ其處分ニ任スヘキ儀ト可相心得此旨相達候事

◎陸軍懲罰令　明治十四年十二月陸軍省乙第七十三號達

陸軍懲罰令別冊ノ通相定候條此旨相達候事

陸軍懲罰令（別冊）

第一章　法例

第一條　此令ハ軍人ノ故意疎漏怠慢過失ノ輕犯ニシテ刑法ニ該ラサル者及ヒ業行修マラス軍人ノ體面ヲ汚ス者アル時上官之ヲ懲戒スルノ罰典

トス但他ノ法律規則ニ依テ論スル可キ者ハ各其法律規則ニ從フ

第三條　各所管ノ長官軍團長師團長旅團長及ヒ衛戍司令官ハ部下ノ軍人ニ命令ヲ犯ス者アル時之ヲ罰ス可シ（十八年八月陸軍省達乙第百二十一號及二十一年勅令第六十三號ヲ以テ本項中改正追加セラレタルモノアリシ）

第三條　各軍隊ノ隊長ハ左ノ區別ニ從テ處分スヘシ

一　聯隊長ハ部下ノ軍人三十日以內ノ謹慎營倉

二　大隊長ハ部下ノ士官十日以內ノ謹慎下士二十日以內ノ營倉兵卒三十日以內ノ營倉

三　中隊長ハ部下ノ下士十日以內ノ營倉兵卒二十日以內ノ營倉

獨立若クハ分屯ノ大隊長及憲兵隊長ハ第一項ニ獨立若クハ分屯ノ中隊長及分遣隊長タル中少尉並ニ憲兵分隊長ハ第二項ニ軍樂隊長ハ第三項ニ同シ（十八年八月陸軍省達乙第百二十一號及二十一年八月勅令第三十三號及二十二年四月勅令第五十九號ヲ以テ本項ヲ改正ス）

第四條　參謀本部各局長陸軍大學校長砲工學校長陸地測量部長士官學校長砲兵會議長工兵會議長乘馬學校長砲兵射的學校長幼年學校長要塞砲兵幹部練習所長大隊區司令官警備隊司令官軍吏學舍長軍醫學校長近衛軍醫長師團軍醫長ハ前條第一項ニ軍馬育成所長蹄鐵學舍長輜重廠長武庫主管タル將官警備砲兵隊長監獄長重症病馬治療所長ハ同第三項ニ準シテ其處分ヲ爲スコトヲ得（十八年八月陸軍省達乙第百二十一號及二十一年八月勅令第百十八號ヲ以テ本條中改正追加スルモノアリタリ）

數官ニシテ部隊ヲ率ヰ他方ニ出ツルトキ其最高級ノ者懲罰ノ處分ヲ爲スコトヲ得其權限大中佐ハ前條第一項ニ少佐ハ第二項ニ大尉ハ第三項ニ準ス（二十二年四月勅令第五十九號ヲ以テ本項ヲ追加ス）

第五條　前二條ニ因リ處分ヲ爲シタル時ハ各秩序ニ從ヒ其屬スル所ノ上官ニ申報ス可シ若シ其犯行權限外ノ日數ニ該ル者ト認ル時ハ雖モ先ツ其權限ニ從テ之ヲ處分シ認見ヲ附シテ申報ス可シ（十八年八月陸軍省達乙第百二十一號ヲ以テ本條ヲ改正ス）

申報ヲ受ケタル隊長長官官ハ各權限ニ從ヒ其罰ヲ變更シ若クハ日數ヲ增加スルコトヲ得（二十一年八月勅令第六十三號ヲ以テ本條ヲ刪除ス）

第六條　甲所ニ於テ此令ニ掲クル犯行アル者未タ處分ヲ經スシテ乙所ニ轉スル時ハ甲乙互ニ通牒シ乙所ニ於テ處分ス可シ

第七條　此令ニ掲クル所ノ犯行二箇以上俱ニ發スルトキハ各其罰ヲ科ス但一所爲二箇以上ノ犯行ニ關ル時ハ其一ヲ科ス

第八條　軍屬及陸軍所屬ノ諸生徒此令ヲ犯ス者アルトキハ軍人ト同ク處分ス可シ但軍屬高等官ハ將校ニ準シ同官ハ下士ニ諸生徒其他ノ者ハ諸卒ニ準シテ處分ス（同上法令ヲ以テ本條ヲ改正ス）

第九條　軍屬ノ諸生徒ノ犯行ニ關シ其一ヲ科ス

第十條　戰時若クハ事變ノ際ニ在テハ第三條ノ諸官ハ處罰中ノ者ニ戴冠ノ儀服務ヲ命スルコトヲ得但此場合ニ於テハ服務中ノ期日ヲ處罰日數ニ通算ス（二十七年七月勅令第九十三號ヲ以テ本條ヲ追加シ以下繰下ク）

第十一條　戰罰服務中特ニ功績若クハ勤勞アル者ハ第三條ノ諸官其處罰ヲ免シ若クハ之ヲ輕減スルコトヲ得（同上）

第二章　罰令

第十二條　將校及ヒ同等官ニ科ス可キ罰目

一　重謹慎

二　輕謹慎

第十三條　下士ニ科ス可キ罰目

一　重營倉

二　輕營倉

第十四條　諸卒ニ科ス可キ罰目

一　重營倉

二　輕營倉

第十五條　謹慎ハ勤務ヲ停メ他出及ヒ外人ト接見通信スルコトヲ禁ス但日數ハ一日以上三十日以下トス

重謹慎ハ俸給ノ半額ヲ減シ輕謹慎ハ其四分ノ一ヲ減ス

第十六條　謹慎限內疾病アレハ期ヲ延クルヲ許シ水火等ノ災害アル時ハ

防禦還從スルコトヲ許ス

第十七條　下士上等兵應第十一條第十二條ノ處分ヲ受ケ仍ホ悛改ノ狀ナク部下ノ儀表ニ堪ヘサル者ハ其官職ヲ免ス但兵役ハ之ヲ免セス其官職ヲ免シタル者悛改ノ効アルトキハ之ヲ免シタル日ヨリ六月ノ後之ヲ復スルコトヲ得（同上法令ヲ以テ本條ヲ改正ス）

官職ヲ免シ又ハ之ヲ復スルハ近衛都督師團長若クハ之ト同等以上ノ權アル長官ニ於テ之ヲ爲ス

第十八條　重營倉ハ演習ノ外勤務ヲ停メ營倉ニ錮シ寢具ヲ貸與スルコトナク唯飯及ヒ水鹽ヲ給ス其日數ハ一日以上三十日以下トス但七十二時ノ內ニ二十四時間ハ輕營倉ニ移ス可シ（十八年八月陸軍省達乙第百二十一號ヲ以テ本條中改正スルモノアリタリ）

第十九條　輕營倉ハ演習ノ外勤務ヲ停メ營倉ニ錮ス其日數ハ一日以上三十日以下トス

第二十條　營外居住ノ者ヲ營倉ニ處スル時ハ囚獄ノ監倉ニ於テ之ヲ行フ

第二十一條　重營倉ニ處スル時營內居住ノ者ハ俸給十分ノ八ヲ減シ營外居住ノ者ハ其半額ヲ減ス

輕營倉ニ處スル時營內居住ノ者ハ俸給十分ノ六ヲ減シ營外居住ノ者ハ其四分ノ一ヲ減ス

第二十二條　第二十五條ニ掲クル所ノ犯行疎懈怠若クハ過失ニ係ル者ハ輕謹慎輕營倉ニ處シ其故意ニ係ル者ハ重謹慎重營倉ニ處ス

第二十三條　營倉ニ處ス可キ者下士上等卒諸生徒及ヒ營外居住ノ者ナル時ハ禁足ニ在營兵卒ナル時ハ苦役ニ換フルコトヲ得

禁足苦役ニ處スル時其日數ハ重營倉ノ一日ヲ三日ニ輕營倉ノ一日ヲ二日ニ折算ス

第二十四條　禁足苦役ニ處スル時營內居住ノ者ハ其俸給十分ノ二ヲ減ス

營外居住ノ者ハ勤務演習ノ外營外ニ出ルコトヲ禁ス

第二十五條　苦役ハ勤務演習ノ外營外ニ出ルコトヲ禁シ雜役ヲ執ラシムニ在ラス

第二十六條　諸卒ハ犯行ノ情狀ニ因リ罰限滿ルノ後三十日以內仍ホ其保劍ヲ禁スルヲ得

第三章　犯行

第二十七條　犯行ノ缺目左ノ如シ

一　職務ノ權限ヲ誤ル者

二　訓導ノ道ヲ失フ者

三　上申下達其他定期アル時日ヲ稽緩スル者

四　文書計算ヲ誤ル者

五　命令ヲ誤リ若クハ之ヲ誤リ傳フル者

六　物件ノ調製貯藏運搬支給ヲ誤ル者

七　職役若クハ屯營本隊ヲ離ル、者

八　他方ニ赴キ歸著ノ期ニ後ル、者

九　行軍ニ際シ發程及ヒ乘艦ノ期ニ後ル、者

十　召集ノ期ニ後ル、者

十一　受寄ノ財物若クハ借用物ヲ典却スル者

十二　官物ヲ擅用スル者

十三　法則命令ヲ違犯セス若クハ之ヲ誹謗スル者

十四　罵詈侮慢若クハ鬪爭スル者

十五　暴行脅迫スル者

十六　猥リニ劍ヲ拔ク者

十七　酩酊シテ事ヲ省セサル者

十八　背部所爲非僞ニ渉ル者

十九　疾病事故ニ託シ勤務演習ヲ免レントスル者

二十　抗言特祖從順ノ道ヲ失フ者

二十一　犯罪アルヲ知テ之ヲ曲庇スル者

二十二　勤務演習集合ノ期ニ後レ若クハ之ヲ缺キ若クハ之ヲ懈ル者

二十三　服裝法ニ違フ者

二十四　敬禮ヲ闕ク者（二十一年八月勅令第六十三號ヲ以テ本項ヲ改正ス）

二十五　官給ノ物件措置扶拂法ニ違フ者

二十六　物件ヲ誤毀遺失若クハ汚損スル者

二十七　失言過誤若クハ應答ノ事理ヲ誤ル者
二十八　軍人ノ體度ヲ失フ者
二十九　上ニ掲クル犯目ノ外素行修マラサル者

海軍懲罰令

明治二十二年十二月勅令第百三十四號

朕海軍懲罰令ノ改正ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

海軍懲罰令

第一條　本令ハ軍人ノ故意疎漏懈怠過失等ノ所爲ニシテ刑法ニ該ラサル者及ヒ素行修マラス軍人ノ體面ヲ汚ス者ヲ懲戒スルノ罰典トス但他ノ法律規則ニ依テ論ス可キ者ハ各其法律規則ニ從フ

第二條　長官ト稱スルハ海軍大臣海軍軍令部長各司令長官獨立司令官ヲ謂フ（二十八年四月勅令第四十九號ニテ本條改正）

第三條　艦隊隊長ト稱スルハ海軍全般ノ艦船團隊ノ長ヲ謂フ

第四條　各艦長ト稱スルハ長官ニ直屬スル各艦ノ長參謀長部長及ヒ其他ノ長ヲ謂フ（同上）

第五條　（同上法令ニテ本條削除）

第六條　長官艦團隊長及ヒ各艦長ハ部下軍人ノ本令ヲ犯シタル者ヲ處分ス（同上法令ニテ本條改正）

第七條　艦隊隊副長機關工練習所長及ヒ技手練習所長ハ部下ノ准士官十日以内ノ謹慎下士二十日以内ノ禁足卒三十日以内ノ禁足ニ該ル者ヲ處分ス（同上）

分隊長及ヒ分隊長ニ同シキ職權ヲ有スル者ハ部下ノ下士十日以内ノ禁足卒二十日以内ノ禁足ニ該ル者ヲ處分ス

第八條　懲罰權ノ全部ヲ有セサル各官部下軍人ノ犯行權限外ノ日數ニ該ルト認ムルトキハ意見ヲ附シテ上官ニ具申シ其處分ヲ請フ可シ

第九條　候補生及軍屬本令ヲ犯シタルトキハ軍人ト同シク處分ス海軍所屬生徒乘艦中本令ヲ犯シタルトキ亦同シ但奏任官及候補生ハ將校ト同シク處分シ判任官ハ准士官ト同シク處分シ生徒ハ下士ト同シク處分シ其他ノ軍屬ハ卒ト同シク處分ス（二十五年六月勅令第五十號ヲ以テ本條ヲ改正ス）

第十條　罰目左ノ如シ

一　謹慎
二　禁足

謹慎ハ准士官以上ニ科スル罰トシ禁足ハ下士以下ニ科スル罰トス

第十一條　謹慎ハ居宅又ハ艦團隊校内ニ於テス

居宅ニ於テスル者ハ他出及ヒ外人ト接見通信スルヲ禁ス但疾病アレハ醫ヲ延クコトヲ得

艦團隊校内ニ於テスル者ハ外出及ヒ他人ト會集通信スルヲ禁ス

謹慎ハ一日以上三十日以下トス

第十二條　禁足ハ勤務及ヒ演習ノ外艦團隊校若クハ居宅ヲ出ツルコトヲ禁ス

禁足ハ一日以上三十日以下トス

第十三條　軍中合圍ノ地若クハ艦團隊校内ニ在テハ謹慎ニ處セラレタル者ヲシテ勤務ニ服セシムルコトヲ得其勤務日數ハ謹慎日數ニ算入ス

第十一條ノ規則ハ前項ノ場合ニ於テ亦之ヲ適用ス但其勤務ニ關シテハ此限ニ在ラス

第十四條　犯行二個以上俱ニ發スルトキハ各其罰ヲ科ス但一所爲二個以上ノ犯行ニ觸ルトキハ其一ヲ科ス

第十五條　本令ニ依リ處分シタル軍屬ノ犯行ハ官吏服務規律ニ觸ルヽ懲戒處分ヲナスコトナシ

第十六條　甲所ニ於テ本令ヲ犯シ未タ處分ヲ受スシテ乙所ニ轉シタルモノハ甲所其罰ヲ擬定シ乙所之ヲ處罰ス（同上）

第十七條　本令ヲ犯シタル者未タ處分ヲ受スシテ囚役ヲ離レ若クハ非職ト爲リ若クハ海軍ノ名籍ヲ除カレタルトキハ其罰ヲ科セス

第十八條　犯行ノ科目左ノ如シ

一　擅ニ艦船團隊校ヲ離レ若クハ職役ヲ離レ又ハ勤務ヲ缺キ若クハ之ヲ解リタル者
二　職務ノ儀眼ヲ侵シ若クハ之ヲ誤リタル者
三　成規ニ違ヒタル處置ヲ爲シ若クハ命令ヲ忘リ若クハ之ヲ誤リ若クハ之ヲ誤リ傳ヘタル者
四　祕密ノ事件ヲ漏洩シタル者
五　上申下達其他定期アル事件ヲ稽延シタル者
六　服順ノ道ヲ失ヒタル者
七　演習集合ノ期ニ後レ若クハ之ニ會セサル者
八　徵召ノ命ヲ受ケ故ナク到著ノ期限ニ後レタル者
九　允許ヲ得テ他方ニ赴キ故ナク歸著ノ期限ニ後レタル者
十　言語所爲詐僞ニ涉ル者
十一　暴行脅迫シタル者
十二　濫ニ銃砲ヲ發シ又ハ劍ヲ拔キタル者
十三　罵詈侮慢若クハ鬪爭シタル者
十四　犯罪アルコトヲ知テ之ヲ隱匿シタル者
十五　人ヲ懲罰ニ陷ル爲メ申告ヲ爲シタル者
十六　疎漏懈怠過失ニ因テ官ノ文書若クハ器具物品ヲ毀損亡失若クハ汚シタル者
十七　圖書計算ヲ誤リタル者
十八　各自擔當ノ鎖鑰ヲ怠リタル者
十九　兵器彈藥器械船具種倘其他物品ノ調製貯藏運搬若クハ支給ノ法ニ違ヒ若クハ之ヲ誤リタル者
二十　故ラニ糧食分配ノ不平均ヲ致シタル者
二十一　官物ヲ濫用若クハ浪費シタル者
二十二　兵器其他物品ノ配置保存法ニ違ヒタル者
二十三　允許ヲ得スシテ官給其他渡付ノ物品ヲ貸借シタル者
二十四　受寄ノ財物若クハ借用物ヲ典却シタル者
二十五　下士卒定數ノ被服ヲ所持セサル者
二十六　守兵ニ對シ濫ニ談話ヲ爲シ又ハ之ニ戲レタル者
二十七　醜面シテ事ヲ省セサル者
二十八　軍人其體度ヲ失シタル者
二十九　禮節式ニ違ヒタル者
三十　服製式ニ違ヒ又ハ制規外若クハ命令外ノ服ヲ着シタル者
三十一　法則命令ヲ誹謗シ若クハ之ニ違ヒタル者
三十二　素行修マラサル者
三十三　疎漏懈怠過失ニ因リ艦船若クハ其他ノ物件ヲ毀損シ或ハ艦船ヲ擱岸坐礁其他危險ニ付シタル者
三十四　艦船ノ乘員不能ニ因リ其艦船ヲ擱岸坐礁其他危險ニ付シ若クハ之ヲ毀損シタル者
三十五　允許ヲ得サル物品ヲ艦船ニ積載シタル者
三十六　砲具其他凭ル可ラサル場所ニ凭リタル者
三十七　艦船團隊校内ニ於テ巡檢後故ナク發所ヲ離レタル者
三十八　艦船團隊校内ニ於テ濫ニ他人ノ室ニ入リタル者
三十九　艦船團隊校内ニ於テ濫ニ庖廚ニ入リタル者
四十　艦船團隊校内ニ於テ允許ヲ得スシテ火藥其他破裂スヘキ物品ヲ携帶シタル者
四十一　艦船團隊校内ニ於テ定所外ヨリ物品ヲ出入若クハ投棄シタル者
四十二　艦船團隊校若クハ工場内ニ於テ醜行ヲ爲シタル者
四十三　舷側柵塀牆壁等ニ貼紙又ハ樂書シタル者
四十四　允許ヲ得スシテ艦船團隊校内ニ酒類ヲ入レ又ハ艦船團隊校内ニ於テ酒類ヲ授受若クハ賣買シ又ハ工場内ニ於テ飲酒シタル者
四十五　擅ニ艦船團隊校内ニ於テ鳥獸類ヲ畜ヒ又ハ工場内ニ於テ濫ニ菓實貝藻ヲ採取シ若クハ樹木花卉ヲ折採シ又ハ魚鳥ヲ捕ル者
四十六　艦船團隊校内ニ於テ濫ニ定所外ニ睡眠シ又ハ工場内ニ於テ就業時間中睡眠シタル者
四十七　濫ニ砲門ヨリ艦内ニ出入シ又ハ柵塀牆壁等ヲ踰越シテ團隊校工場構内ニ出入シタル者
四十八　濫ニ團隊校工場構内ニ立入リ故ナク踏方ヲ徘徊シ又ハ構内海岸ヘ碇船シタル者
四十九　艦船團隊校内ニ於テ定所外ニ飲食シ又ハ工場内ニ於テ就業時

五十　間中喫飯若クハ喫飯ノ準備ヲ爲シタル者
五十一　艦船團隊校工場内ニ於テ定時限ノ外又ハ禁制ノ場所ニ於テ燈火其他ノ火ヲ用ヒ又ハ火ノ取扱ヲ疎ニシ若クハ吸烟シタル者
五十二　艦船團隊校若クハ工場内ニ於テ定所外ニ屎尿シタル者
五十三　艦ニ裸體ト爲リタル者
五十四　工場内ニ於テ酒ニ禁止ノ場所ニ立入リタル者
五十五　工場内ニ於テ火ノ始末ヲ爲サスシテ退散シ又ハ酒ニ焚火シタル者
五十六　工場内ニ於テ酒ニ遊戲放歌シ又ハ高聲ヲ發シタル者
五十七　工場内ニ於テ賭勝負及ヒ之ニ類スル所爲ヲ爲シタル者
五十八　工場内ニ在テ碁將棋雙六骨牌等ノ戲具ヲ携帶スル者
五十九　就業時間中私用ノ物品ヲ製造シ若クハ他人ノ依頼ニ應シ之ヲ製造スル者又ハ之ヲ依頼シ及ヒ依頼ヲ紹介シタル者
六十　就業時間中酒ニ他ノ工場ニ至リ若クハ他人ノ工業ヲ妨害シ若クハ自己ノ工業ヲ休止シタル者
六十一　工場内ニ於テ各自使用スヘキ器具材料ヲ整頓セスシテ散亂セシメタル者
六十二　工場内ニ於テ掲示標札其他諸報告傍標等ヲ毀損シタル者
六十三　工場内ニ於テ瓦礫等ヲ拋チタル者
六十四　工場内ニ於テ故ラニ職札ヲ毀損シ或ハ紛失セシメ又ハ札場ニ於テ投擲シタル者
六十五　工場内ニ於テ職札ノ掛ケ外シヲ他人ニ依頼シタル者及ヒ之ヲ承諾シテ掛ケ外シヲ爲シタル者

第十九條　練習所病院監獄ニ於テ犯行ノ者ハ艦團校内ニ於ケル犯行ト同シク處分ス

判事懲戒法

明治二十三年八月法律第六十八號

陸判事懲戒法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

第一章　總則

第一條　凡ソ判事ヲ懲戒スルハ左ノ場合ニ於テ懲戒裁判所ノ裁判ヲ以テスヘシ

第一　職務上ノ義務ニ違背シ又ハ職務ヲ怠リタルトキ

第二　官職上ノ威嚴又ハ信用ヲ失フヘキ所爲アリタルトキ

第二章　懲罰

第二條　懲罰ハ左ノ如シ

第一　譴責
第二　減俸
第三　轉所
第四　停職
第五　免職

第三條　前條何レノ懲罰ヲ適用スヘキヤ否ハ所犯ノ輕重ニ從ヒ懲戒裁判所之ヲ定ムヘシ懲戒裁判所ハ懲罰ノ適用ヲ定ムルニ當リ平生ノ行狀ヲ斟酌スルコトヲ得

第四條　減俸ハ一月以上一年以下年俸月割額ノ三分ノ一以内ヲ減ス

第五條　轉所ハ他ノ裁判所若ハ他ノ職ニ轉セシム但シ情狀ニ因リ減俸ヲ併セ科スルコトヲ得

第六條　停職ハ三月以上一年以下職務ノ執行ヲ停止ス

停止中ハ俸給ヲ給セス

第七條　免職ノ言渡ヲ受クタル者ハ現任ノ官ヲ失ヒ及恩給ヲ受クルノ權ヲ失フ

第三章　懲戒裁判所

第八條　懲戒裁判所ハ各控訴院及大審院ニ之ヲ置ク

第九條　控訴院ニ於ケル懲戒裁判所ハ控訴院長ヲ加ヘ其ノ院ノ判事五人ヲ以テ組立テ院長ヲ以テ長トス大審院ニ於ケル懲戒裁判所ハ大審院長ヲ加ヘ其ノ院ノ判事七人ヲ以テ組立テ院長ヲ以テ長トス

第十條　控訴院長及大審院長ハ毎年部長ト協議シ前以テ懲戒裁判所ノ判事ヲ定メ並ニ裁判所長判事差支アルトキハ代理順序ヲ定ム

第十一條　懲戒裁判所ノ判事ノ忌避回避ニ付テハ治罪法ノ規程ヲ準用ス

第十二條　控訴院ニ於ケル懲戒裁判所ノ檢事ノ職務ハ檢事長之ヲ行ヒ大審院ニ於ケル懲戒裁判所ノ檢事ノ職務ハ檢事總長之ヲ行フ

第十三條　控訴院ニ於ケル懲戒裁判所長ハ其ノ院ノ裁判所書記ノ中ヨリ懲戒裁判所ノ書記ヲ命シ大審院ニ於ケル懲戒裁判所長ハ其ノ院ノ裁判所書記ノ中ヨリ懲戒裁判所ノ書記ヲ命ス

第十四條　控訴院ニ於ケル懲戒裁判所ハ院長及部長ヲ除ク外其ノ院ノ判事及其ノ管轄區域内ノ總テノ下級裁判所ノ判事ニ對スル懲戒事件ヲ管轄ス

第十五條　大審院ニ於ケル懲戒裁判所ハ左ノ事件ヲ管轄ス

第一　第一審ニシテ終審トシテ大審院ノ判事、控訴院長及控訴院部長ニ對スル懲戒事件

第二　控訴院ニ於ケル懲戒裁判所ノ裁判ニ對スル抗告及控訴

第十六條　懲戒裁判所ノ管轄ハ所犯ノ地ニ拘ラス裁判手續開始ノトキ判事ノ奉職スル裁判所ニ依テ定マルモノトス

第四章　裁判手續

第十七條　懲戒裁判所ハ檢事ノ申立ニ因リ又ハ職權ヲ以テ懲戒裁判ヲ開始スヘキヤ否ヲ決定ス但シ職權ヲ以テスル場合ニ於テハ檢事ノ意見ヲ聽クヘシ

第十八條　檢事ハ裁判手續ノ開始ヲ拒ミタル懲戒裁判所ノ決定ニ對シテハ七日ノ期間内ニ抗告裁判所ニ抗告ヲ爲スコトヲ得

第十九條　抗告裁判所ハ檢事ノ意見ヲ聽キタル後抗告ヲ裁判ス若シ抗告ヲ正當ナリト認メタルトキハ裁判手續開始ノ決定ヲ爲シ管轄懲戒裁判所ヲシテ其ノ後ノ手續ヲ爲サシムヘシ

第二十條　開始決定ニハ懲戒スヘキ所爲及證據ヲ開示スヘシ

第二十一條　開始決定ハ檢事及被告ニ送達スヘシ

第二十二條　懲戒裁判所ニ於テ下調ヲ必要ナリト決定

スルトキハ懲戒裁判所長ハ懲戒裁判ヲ開始シタル院ノ判事若ハ管轄區域内ノ地方裁判所ノ判事ニ下調ヲ命スヘシ

第二十三條　下調ノ命ヲ受ケタル判事ハ必要ナル證據ヲ集取スヘシ

受命判事ハ被告ヲ呼出シテ事實ヲ陳述セシムルコトヲ得

被告ハ代理人ヲシテ代理セシムルコトヲ得

證人ハ治罪法ノ規程ニ從ヒ之ヲ訊問スヘシ

第二十四條　受命判事ハ證人訊問其ノ他證據集取ヲ他ノ裁判所ノ判事ニ囑託スルコトヲ得

第二十五條　受命判事ハ下調結了ノ後調書及一切ノ證據ヲ懲戒裁判所長ニ差出シ裁判所長ハ二十四時内ニ檢事ニ之ヲ送付スヘシ

第二十六條　檢事ハ三日内ニ意見ヲ付シ記錄ヲ懲戒裁判所長ニ還付スヘシ

第二十七條　懲戒裁判所ハ下調ヲ十分ナリト思料スルトキハ口頭辯論ヲ爲スノ決定ヲ爲シ又ハ免訴ノ判決ヲ爲スヘシ

免訴ノ理由ナキモ現時裁判ニ著手スルコトヲ得サルトキハ訴追停止ノ決定ヲ爲スヘシ

第二十八條　前條ノ裁判ハ檢事及被告ニ送達スヘシ

第二十九條　懲戒裁判所長ハ口頭辯論ノ期日ヲ定メ被告ヲ呼出スヘシ

第三十條　辯論ハ之ヲ公行セス

第三十一條　口頭辯論ハ裁判所書記開始決定ヲ朗讀スルヲ以テ始マルモノトス

裁判長ハ先ツ被告ヲ審訊シ次テ證據調ヲ爲シ檢事及被告ヲシテ證據ノ結果ニ付辯論ヲ爲サシメ被告ニ最終ノ發言ヲ許スヘシ

第三十二條　懲戒裁判所ハ被告若ハ檢事ノ申立ニ因リ又ハ職權ヲ以テ更ニ證據ヲ提出セシムルコトヲ適當ナリトスルトキハ之カ爲必要ナル命令ヲ發シ且辯論ヲ他日ニ延期スルコトヲ得

第三十三條　被告ハ他人ヲシテ辯護セシメ又ハ代理人ヲ用ヰルコトヲ得

第三十四條　懲戒裁判所ハ事件ノ辯論既ニ十分ナリトスルトキハ之ヲ終結シ評議判決スヘシ

第三十五條　判決ハ即時ニ之ヲ言渡ス若シ即時ニ之ヲ言渡スコト能ハサルトキハ七日内ニ判決ヲ被告及檢事ニ送達スヘシ

第三十六條　被告又ハ代理人辯論期日ニ出頭セスト雖判決ヲ言渡スコトヲ得

第三十七條　評議及言渡ニ關シテハ裁判所構成法ノ規程ニ從ヒ證據ノ判斷ニ關シテハ治罪法ノ規程ニ從フ

第三十八條　被告及檢事ハ十四日ノ期間内ニ控訴ノ申立ヲ爲スコトヲ得但シ其ノ期間ハ判決言渡ヨリ起算ス若シ被告出頭セサルトキハ判決ノ送達アリタルヨリ起算ス

第三十九條　控訴ノ申立ハ判決ヲ受ケタル懲戒裁判所ニ之ヲ爲スヘシ

控訴狀ハ控訴ノ申立ヲ爲シタルヨリ十四日ノ期間内ニ之ヲ差出スヘシ

第四十條　懲戒裁判所ハ控訴ノ申立及控訴狀ノ謄本ヲ對手人ニ送達スヘシ

對手人ハ送達ヲ受ケタルヨリ十四日ノ期間内ニ答辯書ヲ差出スコトヲ得

第四十一條　懲戒裁判所ハ前號ノ期間經過シタル後其ノ書類ヲ控訴裁判所ニ送付スヘシ控訴裁判所長ハ口頭辯論ノ期日ヲ定メ被告ヲ呼出スヘシ

第四十二條　控訴裁判所ハ第一審ニ於テ申出テサル證據ヲ提出シタルトキハ之ヲ取調フヘシ若シ第一審ニ於テ訊問シタル證人ノ再訊問ヲ申立テタルトキハ其ノ重要ノ點ニ於テ陳述ヲ異ニシ又ハ新ナル重要ノ事實ヲ證言セントノ推測十分ナルトキニ限リ之ヲ許ス

職權ヲ以テスル訊問ハ何時ニテモ之ヲ爲スコトヲ得

第四十三條　第二審ニ於クル裁判手續ハ第三十條乃至第三十七條ノ規程ヲ適用ス

第四十四條　控訴ヲ理由ナシトスルトキハ判決ヲ以テ之ヲ棄却シ其ノ費用ヲ控訴人ニ負擔セシムヘシ

控訴ヲ理由アリトスルトキハ第一審判決言渡ヲ取消シ控訴裁判所更ニ判決ヲ爲シ且其ノ費用ニ付裁判ヲ爲スヘシ

控訴完結ノ後其ノ記錄ハ第二審ニ於テ爲シタル判決ノ認證アル謄本ト共ニ原裁判所ニ之ヲ還付スヘシ

第四十五條　調書ノ調製期間ノ計算及書類ノ送達ニ付テハ治罪法ノ規程ニ從フ

懲戒裁判手續ノ費用ハ刑事裁判費用ニ關ル規程ニ從フ

第四十六條　懲戒裁判所ノ裁判ハ確定ノ後ニ非サレハ之ヲ執行スルコトヲ得ス

第四十七條　懲戒裁判確定シタルトキハ懲戒裁判所長ハ司法大臣ニ事件ノ情況ヲ報告シ且判決ノ謄本ヲ差出スヘシ

第四十八條　懲戒裁判所減俸轉所若ハ停職ノ裁判ヲ言渡シタルトキハ司法大臣其ノ執行ノ手續ヲ爲ス

第五章　職務停止

第四十九條　判事ハ左ノ場合ニ於テハ當然職務ヲ停止セラルルモノトス

第一　刑事裁判手續ニ於テ拘留セラレタルトキ

第二　刑事裁判ニ於テ官職ノ喪失ニ該ル刑ノ言渡ヲ受ケタルトキ

第三　懲戒裁判ニ於テ免職ノ言渡ヲ受ケタルトキ

第五十條　刑事裁判ニ依テ拘留ノ刑ノ確定裁判ヲ受ケタルトキハ其ノ刑期ノ終ルマテ當然職務ヲ停止セラ

ルルモノトス

第五十一條　懲戒裁判所ハ懲戒事件ノ轉所停職若ハ免職ニ該當スルモノト思料スルトキハ何時ニヲモ職權ヲ以テ又ハ檢事ノ申立ニ因リ懲戒裁判手續結了ニ至ルマテ被告ノ職務ヲ停止スルコトヲ決定スルヲ得但シ職權ヲ以テ決定ヲ爲ストキハ檢事ノ意見ヲ聽クヘシ

刑事裁判手續中何レノ場合ニ於テモ懲戒裁判所ハ其ノ手續結了ニ至ルマテ被告ノ職務ヲ停止スルコトヲ決定スルヲ得

第五十二條　懲戒裁判所ノ決定ニ因リ又ハ當然職務ヲ停止セラレタル後其ノ判事ノ爲シタル職務上ノ行爲ハ無効トス

第五十三條　被告ハ職務停止ノ決定ニ對シ上訴ヲ爲スコトヲ得ス

第六章　懲戒裁判手續ト刑事裁判手續トノ關係

第五十四條　刑事裁判手續中ハ同事件ニ付被告ニ對シ懲戒裁判手續ヲ開始スルコトヲ得ス

懲戒裁判所ニ於テ判決ノ言渡前同事件ニ付被告ニ對シ刑事訴追ノ始マリタルトキハ其ノ事件ノ判決ヲ終ルマテ懲戒裁判手續ヲ停止スヘシ

第五十五條　刑事裁判ニ依テ法律ニ觸レサルニ因リ免訴又ハ無罪ノ言渡ヲ受ケタルトキト雖同一ノ所爲ニ付懲戒裁判手續ニ於テ仍ホ訴追スルヲ妨ケス

刑事裁判ニ依テ官職ノ喪失ヲ起ササル刑ノ言渡ヲ受ケタルトキハ懲戒裁判手續ニ於テ仍ホ訴追スルコトヲ得

第七章　補則

第五十六條　懲戒スヘキ所爲ハ本法實施前ニ關ルモノト雖本法ニ從ヒ之ヲ訴追ス

第五十七條　此法律ハ明治二十三年十一月一日ヨリ施行ス

◎稅關監吏補賞罰規則

明治二十三年十月勅令第二百十八號

朕稅關監吏補賞罰規則ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

稅關監吏補賞罰規則

第一條　監吏補其職務上勤勞アル者ハ事ノ大小難易ニ由リ每事五圓以下ノ賞ヲ與フ

第二條　監吏補其職務上怠慢過失アル者ハ情狀ニ由リ左ノ懲罰ニ處ス

第一　譴責

第二　罰俸

第三　免職

第三條　罰俸ハ月俸額百分ノ一以上一箇月以下トス

第四條　罰俸ハ每月俸給ヲ以テ納付セシム但月俸額三分ノ一ヲ超ルコトヲ得ス

第五條　罰俸ニ處セラレタル者罰俸完納前退官免職又ハ死去スルトキハ之ヲ追徵セス

第六條　大藏大臣ハ本規則ノ執行ヲ稅關長ニ委任スルコトヲ得

◎巡査懲罰例

明治九年八月內務省乙第九十二號達

巡査懲罰例別紙ノ通改正候條此旨相達候事

巡査懲罰例（別紙）

第一條　凡職務ノ規則ニ違背シ及ヒ怠慢失誤アル者ハ其情狀ヲ審案シ俸給二ヶ月百分ノ一ヨリ少カラス一ヶ月ヨリ多カラサル罰金ヲ科シ輕キ者ハ呵責ニ止ム

第二條　凡犯狀ノ職務ヲ避カシムルニ係ル者ハ免職ス

第三條　凡罰金未タ完納セサル中免職死亡等ニ係ル者ハ追徵スルコトヲ免ス

第四條　凡罰金ハ每月ノ俸金ヲ控除シテ完納セシム

但月俸ノ三分一ヲ過クルコトヲ得ス

第五條　凡官物ヲ遺失及ヒ毀損スル者ハ相當ノ罰金ヲ科シ尙其代價ヲ賠償セシム

◎看守懲罰ノ件

明治十六年四月內務省乙第十七號達

看守懲罰ノ儀ハ自今巡査懲罰例ニ準據スヘシ此旨相達候事

◎貴族院竝衆議院守衞懲罰準據

明治二十四年十二月勅令第二百三十九號

朕貴族院竝衆議院守衞懲罰ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

貴族院竝衆議院守衞ノ懲罰ハ巡査懲罰令ニ依ル

第三類　地方制度

第一章　府縣郡

◉府縣制 明治二十三年五月法律第三十五號

朕府縣制ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

府縣制

第一章　總則

第一條　府縣ノ廢置分合及府縣境界ノ變更ハ法律ヲ以テ之ヲ定ム

府縣境界ニ當ル郡市町村ノ境界ヲ變更スルトキハ府縣境界モ亦自ラ變更スルモノトス

本條ノ處分ニ付其財産處分ヲ要スルトキハ內務大臣之ヲ定ム但特ニ法律ノ規定アルモノハ此限ニ在ラス

第二章　府縣會

第二條　府縣會ハ府縣內郡市ニ於テ選擧シタル議員ヲ以テ之ヲ組織ス

郡市ニ於テ選擧スベキ府縣會議員ノ定數ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム但各郡市ヲシテ少クトモ一人ノ議員ヲ選擧セシムヘシ

第三條　府縣會議員ノ選擧ハ市ニ在テハ市會及市參事會會同シ市長ヲ會長トシ郡ニ在テハ郡會及郡參事會會同シ郡長ヲ會長トシ左ノ規定ニ依リ之ヲ行フヘシ

但會長ハ投票ニ加ハラサルモノトス

一　投票ハ選擧人自ラ會長ノ面前ニ於テ之ヲ投票函ニ投入ス

投票ハ匿名トス

二　左ノ投票ハ之ヲ無効トス

一　記載セル人名ノ讀ミ難キモノ

二　被選人ノ何人タルヲ確認シ難キモノ

三　被選權ナキ人名ヲ記載スルモノ

四　被選人氏名ノ外他ノ文字ヲ記入スルモノ但爵位職業身分住所又ハ敬稱ハ此限ニ在ラス

本項一ヨリ三ニ至ルノ場合ニ於テ票中他ニ列記ノ被選人ニ付テハ仍其効アリトス

三　有効投票ノ多數ヲ得タル者ヲ以テ當選トス投票ノ數相同キモノハ年長者ヲ取リ年齡相同キトキハ會長自ラ抽籤シテ其當選ヲ定ム

第四條　府縣內市町村ノ公民中選擧權ヲ有シ其府縣ニ於テ一年以來直接國稅十圓以上ヲ納ムル者ハ府縣會ノ被選權ヲ有ス

住居ヲ移シタル爲市町村ノ公民權ヲ失ヒタル者其住居同府縣內ニ在リ且他ノ要件ヲ失ハサルトキハ仍府縣會ノ被選權ヲ有ス

其府縣ノ官吏及有給吏員神官諸宗ノ僧侶及教師ハ府縣會議員タルコトヲ得ス（東京府ハ警視總監トモ）

前項ノ外ノ官吏ニシテ當選シ之ニ應セントスルトキハ本屬長官ノ許可ヲ受クヘシ

府縣會議員ハ衆議院議員ト相兼ヌルコトヲ得ス

第五條　府縣會議員ハ名譽職トス其任期ハ四年トシ每二年其半數ヲ改選ス若其員數二分シ難キトキハ初會ニ於テ多數ノ一半ヲ解任セシム初會ニ於テ解任スヘキ者ハ府縣會議長府縣會ニ於テ自ラ抽籤シテ之ヲ定ム

解任ノ議員ハ再選セラルヽコトヲ得

第六條　議員中闕員アルトキハ遲クトモ六箇月以內ニ補闕選擧ヲ行フヘシ

補闕議員ハ其前任者ノ殘任期間在職スルモノトス

第七條　府縣會議員ノ選擧ハ府縣知事ノ告示ニ依リ之ヲ行フヘシ其告示ハ遲クトモ選擧ノ日ヨリ十四日前ニ之ヲ發スヘシ

第八條　選擧ヲ終リ當選人ノ定マリタルトキハ郡長市長ハ直ニ當選人ニ通知シ及府縣知事ニ報告スヘシ

當選人其當選ノ通知ヲ受ケタルトキハ五日以內ニ其當選ヲ承諾スルヤ否ヲ府縣知事ニ屆出ヘシ

一人ニシテ數箇所ノ選擧ニ當リタルトキハ同期限內ニ何レノ選擧ニ應スヘキコトヲ府縣知事ニ屆出ヘシ

前二項ノ屆出ヲ其期限內ニ爲サヽルトキハ總テ選擧ヲ辭スル者ト視做スヘシ

第九條　當選人其當選ヲ辭シ又ハ承諾ノ屆出ヲ爲サヽルトキハ府縣知事ハ其郡市ヲシテ十日以內ニ更ニ選擧ヲ行ハシムヘシ

第十條　選擧人確定シタルトキハ府縣知事ハ直ニ當選證書ヲ付與シ及管內ニ告示スヘシ

第十一條　當選人選擧ノ効力ニ關シテ訴願セントスルトキハ選擧ノ日ヨリ十四日以內ニ之ヲ府縣知事ニ申立ルコトヲ得

第十二條　當選人其當選ノ際資格ノ要件ヲ有セサリシコト發覺スルトキハ其當選ヲ無効トス

當選人當選後資格ノ要件ヲ失フトキハ議員ノ職ヲ失フモノトス

第十三條　府縣會ニ於テ其議員中議員ノ資格ヲ有セサル者アルコトヲ發見スルトキハ其議決ヲ以テ之ヲ府縣知事ニ通知スヘシ

第十四條　府縣會議員被選權ノ有無及選擧ノ効力ハ府縣參事會之ヲ裁決ス

府縣參事會ノ裁決ニ不服ナル者ハ行政裁判所ニ出訴スルコトヲ得

第十五條　府縣會ノ議決スヘキ事件左ノ如シ

一　府縣ノ歲入出豫算ヲ定ムル事

二　決算報告ヲ認定スル事

三　府縣稅ノ賦課徵收方法ヲ定ムル事

四　府縣有不動產ノ賣買交換讓渡讓受並ニ質入書入ノ事

五　歳入出豫算ヲ以テ定ムルモノヲ除ク外新ニ義務ノ負擔ヲ爲シ及權利ノ棄却ヲ爲ス事

六　府縣有財産ノ管理及營造物ノ維持方法ヲ定ムル事

其他法律命令ニ依リ府縣會ノ權限ニ屬スル事項ヲ議決ス

第十六條　府縣會ハ其權限ニ屬スル事件ヲ府縣參事會ニ委任スルコトヲ得

第十七條　府縣會ハ官廳ノ諮問アルトキハ意見ヲ陳述スヘシ

府縣會ハ其府縣ノ全部又ハ一部ノ公益ニ關スル事件ニ付府縣知事又ハ內務大臣ニ建議スルコトヲ得

第十八條　府縣會議員ハ選擧人ノ指示若ハ委囑ヲ受タカラサルモノトス

第十九條　府縣會ハ改選後ノ初會ニ於テ議長及副議長各一名ヲ互選スヘシ其任期ハ議員ノ任期ニ從フ

議長副議長共ニ故障アルトキハ臨時議長ヲ互選スヘシ

第二十條　府縣知事若ハ特ニ知事ノ委任ヲ受ケタル府縣ノ官吏若ハ吏員ハ府縣會ノ議事ニ參與スルコトヲ得但議決ニ加ハルコトヲ得ス

前項ノ列席者ニ於テ發言ヲ求ムルトキハ議長ハ何時ニテモ之ヲ許スヘシ

第二十一條　府縣會ハ毎年一回秋季ニ於テ通常會ヲ開ク通常會ノ會期ハ三十日以內トス其他必要アルトキハ其事件ニ限リ七日以內ヲ會期トシテ臨時會ヲ開クコトヲ得

府縣會ハ府縣知事之ヲ招集ス其招集ハ開會ノ日ヨリ十四日前迄ニ告示スヘシ但急施ヲ要スル場合ハ此限ニ在ラス

府縣會ハ府縣知事之ヲ開閉ス

第二十二條　府縣會ハ議員三分ノ二以上出席スルニ非サレハ會議ヲ開キ議決ヲ爲スコトヲ得ス

第二十三條　府縣會ノ議決ハ過半數ニ依ル可否同數ナルトキハ議長ノ決スル所ニ依ル

第二十四條　議員ハ自己及其父母兄弟若ハ妻子ノ一身上ニ關スル事件ニ付テハ會議ノ承諾ヲ經ルニ非サレハ府縣會ノ議事ニ參與シ及議決ニ加ハルコトヲ得ス

第二十五條　府縣會ニ於テ選擧ヲ行フトキハ第三條ノ規定ニ依ルヘシ

第二十六條　府縣會ノ會議ハ公開ス但左ノ場合ハ此限ニ在ラス

一　府縣知事ヨリ傍聽禁止ノ要求ヲ受ケタルトキ

二　議長又ハ議員五名以上ノ發議ニ由リ傍聽禁止ヲ可決シタルトキ

議長又ハ議員ノ發議ハ討論ヲ用ヰスシテ其可否ヲ決スヘシ

第二十七條　東京府京都府大坂府府會ノ職權ニ屬スル事件ニシテ專ラ東京市京都市大坂市ニ關スルモノト專ラ其他ノ部分ニ關スルモノト分別スルコトヲ要スルモノアルトキハ府會ノ議決ニ依リ之ヲ分別スルコトヲ得（二十五年六月法律第七號ヲ以テ本條ニ追加スル所アリタリ）

前項ノ分別ニ依リ專ラ東京市京都市大坂市ニ關スルモノハ其郡部議員ニ於テ其事件ノ議事ニ參與シ及議決ニ加ハルコトヲ得ス其他ノ部分ニ關スルモノハ市部議員ニ於テ其事件ノ議事ニ參與シ及議決ニ加ハルコトヲ得ス此場合ニ於テハ郡部議員市部議員ニ於テ各臨時議長ヲ互選スヘシ

此法律中東京府京都府大坂府府會ノ市部議員トアルハ東京市京都市大坂市市會ニ於テ選擧シタル議員ヲ云ヒ郡部議員トアルハ東京市京都市大坂市ヲ除キ其他ノ部分ニ於テ選擧シタル議員ヲ云フ

市部會郡部會ヲ置キタル縣ニ於テ縣會ノ職權ニ屬スル事件ニシテ專ラ市ニ關スルモノト專ラ其他ノ部分ニ關スルモノト分別スルコトヲ要スルモノアルトキハ縣會ノ議決ニ依リ之ヲ分別スルコトヲ得但分別シタル縣ニ於テハ此法律中特ニ東京府京都府大坂府ニ關シ定メタル各條項ハ之ヲ適用ス

第二十八條　議長ハ議事ノ順序ヲ定メ會議及選擧ノ事ヲ總理シ其日ノ會議ヲ開閉シ並ニ延會シ議場ノ秩序ヲ保持ス

第二十九條　議員ハ會議中無禮ノ語ヲ用ヰ及他人ノ身上ニ涉リ言論スルコトヲ得ス

第三十條　會議中此法律若ハ議事規則ニ違ヒ其他議場ノ秩序ヲ紊ル議員アルトキハ議長ハ之ヲ警戒シ又ハ制止シ又ハ發言ヲ取消サシム命ニ從ハサルトキハ議長ハ當日ノ會議ヲ終ルマテ發言ヲ禁止シ又ハ議場ノ外ニ退去セシムヘシ若强抗ニ涉ル者アルトキハ警察官ニ命シテ之ヲ退去セシムルコトヲ得議場騷擾ニシテ整理シ難キトキハ議長ハ當日ノ會議ヲ中止シ又ハ之ヲ閉ツルコトヲ得

第三十一條　議員中議場ノ秩序ヲ紊ルコト二回以上ニ及ブ者アルトキハ議長又ハ議員ノ發議ニ依リ議會ノ議決ヲ以テ七日以內其出席ヲ停止スルコトヲ得

第三十二條　會議ノ傍聽人公然可否ヲ表シ又ハ喧騷ニ涉リ其他議事ノ妨害ヲ爲ス者アルトキハ議長ハ之ヲ制止シ若命ニ從ハサルトキハ警察官ニ命シテ之ヲ退場セシムルコトヲ得

傍聽席騷擾ナルトキハ議長ハ總テノ傍聽人ヲ退場セシムルコトヲ得

第三十三條　府縣知事若ハ特ニ其委任ヲ受ケタル官吏若ハ吏員及議員ハ議場ノ秩序ヲ紊リ又ハ議場ノ妨害ヲ爲ス者アルトキハ議長ノ注意ヲ喚起スルコトヲ得

第三十四條　第三十條、第三十二條ニ依リ議長ノ命ニ應セシムル爲府縣知事（東京府ハ警視總監）ハ毎會期警察官ニ議場掛專務ヲ命スヘシ

第三十五條　府縣會ニ書記ヲ置キ議長ニ隷屬シテ庶務ヲ掌理セシム

書記ハ議長之ヲ選任ス

第三十六條　府縣會ハ書記ヲシテ議事錄ヲ製シ議決及選擧ノ顚末竝ニ出席議員ノ氏名ヲ記錄セシムヘシ議事錄ハ議長及議員二名以上之ニ署名スヘシ其議員ハ會議ノ前議會ニ方テ豫メ之ヲ定メ議事錄中ニ其氏名ヲ記載シ置クヘシ

第三十七條　府縣會ハ議事規則及傍聽人取締規則ヲ設ケ內務大臣ノ認可ヲ受ケ之ヲ施行スヘシ

第三章　府縣參事會吏員及委員

第三十八條　府縣ニ府縣參事會ヲ置キ府縣知事高等官二名及名譽職參事會員ヲ以テ之ヲ組織ス

府ノ名譽職參事會員ハ八名トス郡部議員ニ於テ其議員中ヨリ四名ヲ互選シ市部議員ニ於テ其議員中ヨリ四名ヲ互選スヘシ

縣ノ名譽職參事會員ハ四名トス縣會ニ於テ其議員中ヨリ之ヲ互選スヘシ

第三十九條　府縣參事會員タル高等官ハ府縣廳ニ奉職ノ高等官中ヨリ內務大臣之ヲ命ス

第四十條　府縣參事會ハ府縣知事ヲ以テ議長トス議長故障アルトキハ高等官會員之ヲ代理ス

第四十一條　府縣會ハ每通常會ニ於テ名譽職參事會員ノ補充員府ハ八名縣ハ四名ヲ互選シ其名譽職參事會員ノ闕員アルトキハ府縣知事ニ於テ補充員中投票多數ノ順次ニ依リ之ヲ補充スヘシ但其既ニ補充シタル者ハ前任者ノ任期中在職スルモノトス

第四十二條　名譽職參事會員ノ任期ハ議員ノ任期ニ從フ但任期滿限ノ後ト雖後任者就職ノ日マテ在職スルモノトス

名譽職參事會員ハ補充員ヲ以テ其闕員ヲ補充シ仍闕員ヲ生シタル場合ニ於テハ二箇月以內ニ臨時其選擧ヲ行フヘシ

第四十三條　府縣參事會ノ職務權限左ノ如シ

一　府縣會ノ權限ニ屬スル事件ニシテ其委任ヲ受ケタルモノヲ議決スル事

二　府縣會ノ權限ニ屬スル事件ニシテ臨時急施ヲ要シ府縣知事ニ於テ府縣會ヲ招集スルノ暇ナシト認ムルトキ府縣會ニ代テ議決ヲ爲ス事

三　府縣會ノ定メタル方法ノ範圍內ニ於テ府縣有財產ノ管理又ハ營造物ノ維持ニ關シ必要ナル事件ニ付議決ヲ爲ス事

四　府縣ノ費用ヲ以テ支辨スル工事ノ次第順序其他必要ナル事件ニ付議決ヲ爲ス事

五　府縣知事其他官廳ノ諮問ニ對シ意見ヲ述フル事

六　府縣知事ヨリ發スル府縣會議案ニ付府縣知事ニ意見ヲ述ヘ及會議ニ報告スル事

七　臨時必要アルトキ府縣ノ出納ヲ檢査スル事

其他法律命令ニ依リ府縣參事會ノ權限ニ屬スル事務ヲ處理ス

第四十四條　府縣參事會ハ府縣知事之ヲ招集ス

會員半數以上ノ請求アルトキハ府縣知事ハ府縣參事會ヲ招集スヘシ

第四十五條　府縣參事會ノ會議ハ傍聽ヲ許サス

第四十六條　府縣參事會ハ議長又ハ其代理者及名譽職會員半數以上出席スルニ非サレハ會議ヲ開キ議決ヲ爲スコトヲ得ス但第四十三條第二ノ議決ヲ爲ストキハ高等官會員ハ其議決ニ加ハラサルモノトス

府縣參事會ノ議決ハ過半數ニ依ル可否同數ナルトキハ議長ノ決スル所ニ依ル

議決ノ事件ハ之ヲ議事錄ニ登記シ議長及名譽職參事會員二名以上之ニ署名スヘシ

第四十七條　府縣參事會員ハ自己及其父母兄弟若ハ妻子ノ一身上ニ關スル事件ニ付府縣參事會ノ議事ニ參與シ及議決ニ加ハルコトヲ得ス

前項規定ノ爲出席ノ參事會員減少シテ前條第一項ノ數ヲ得サルトキハ府縣知事ハ補充員ヲ以テ臨時之ニ充テ仍其數ヲ得サルトキハ府縣會議員ニシテ該事件ニ關係ナキ者ノ內ヨリ臨時ニ指名シ名譽職參事會員ノ不足ヲ補充シテ第三十八條ノ定數ニ滿タシムヘシ

第四十八條　市制町村制ノ規定ニ依リ府縣參事會ノ權限ニ屬スル事件ニシテ二府縣以上ノ郡市町村ニ交涉スルモノアルトキハ其府縣知事ノ具狀ニ依リ內務大臣ニ於テ其事件ヲ管轄スヘキ府縣參事會ヲ指定スヘシ

第四十九條　東京府京都府大阪府參事會ノ職權ニ屬スル事件ニシテ專ラ東京市京都市大阪市ニ關スルモノハ其郡部名譽職參事會員ニ於テ其事件ノ議事ニ參與シ及議決ニ加ハルコトヲ得ス其東京市京都市大阪市外ノ市町村若ハ郡ニ關スルモノハ市部名譽職參事會員ニ於テ其事件ノ議事ニ參與シ及議決ニ加ハルコトヲ得ス

此法律中東京府京都府大阪府會ノ市部名譽職參事會員トアルハ市部議員ニ於テ選擧シタル名譽職參事會員ヲ云ヒ郡部名譽職參事會員トアルハ郡部議員ニ於テ選擧シタル名譽職參事會員ヲ云フ

第五十條　府縣知事ハ府縣會及府縣參事會ノ議決ヲ施行シ及府縣有財產及營造物ヲ管理シ並ニ府縣ノ費用ヲ以テ支辨スル工事ヲ執行ス

府縣ニ於テ他人ニ對シ義務ヲ負擔スヘキ證書及委任狀ニハ知事ノ外名譽職參事會員二名以上之ニ署名捺印スヘシ

前項ノ文書中府縣會又ハ參事會ノ職權ニ屬スル事件ニシテ其議決ヲ經タルモノハ總テ其旨ヲ記入スヘシ

第五十一條　府縣會ニ於テ名譽職參事會員ヲ選擧セス又ハ參事會成立セス又ハ招集ニ應セサルトキハ參事

會成立シ又ハ招集ニ應スル迄府縣知事ハ府縣參事會ノ權限ニ屬スル事件ヲ專決處分スルコトヲ得

非常事變ニ際シ府縣參事會ヲ招集スルノ暇ナク又ハ名譽職參事會員ノ出席半數以上ニ至ラサルトキハ府縣知事ハ府縣參事會ノ權限ニ屬スル事件ヲ專決處分スルコトヲ得

本條ノ處分ハ次回ノ府縣會會議ニ於テ之ヲ報告スヘシ

第五十二條　府縣知事ハ府縣會ノ議決ニ依リ府縣ノ費用ヲ以テ府縣有財產又ハ營造物ノ管理若ハ土木工事ニ必要ナル有給ノ府縣吏員ヲ置クヿヲ得但府縣吏員ハ府縣知事ニ於テ之ヲ任免監督ス

府縣吏員ノ給料手當退隱料等ハ府縣會ノ議決スル所ニ依ル其身元保證金ヲ要スルトキ其金額ヲ定ムルモ亦同シ

第五十三條　府縣知事ハ府縣會ノ議決ヲ經テ臨時又ハ常設ノ委員ヲ置キ府縣事務ノ一部ヲ調査セシメ又ハ府縣有財產及營造物ノ一部ヲ管理セシムルコトヲ得其選擧又ハ選任ノ方法及任期ハ府縣會ノ議決スル所ニ依ル

委員ハ名譽職トス

第四章　府縣ノ會計

第五十四條　府縣有財產及營造物管理ノ費用府縣會府縣參事會及委員ノ費用府縣吏員ノ給料退隱料其他諸給與及從來法律命令若ハ慣例ニ依リ並ニ將來法律命令ニ依リ府縣ノ負擔ト定ムル事件ノ費用ハ府縣ニ於テ之ヲ支辨スヘシ

第五十五條　名譽職參事會員及委員ニハ旅費滯在手當及出務日當ヲ給スルコトヲ得府縣會議員ニハ旅費及滯在手當ニ限リ之ヲ給スルコトヲ得但滯在手當出務日當ヲ併セ一日一圓五十錢ヲ超ユルコトヲ得ス

第五十六條　府縣ノ支出ハ府縣稅其他府縣ノ收入ヲ以テ之ニ充ツ

第五十七條　府縣稅目及其賦課徵收方法ニ關スル規定ハ此法律ニ依リ變更シタルモノヲ除クノ外從前地方稅ニ關スル規定ニ依ル

第五十八條　府縣知事ハ府縣會ノ議決ニ依リ內務大臣及大藏大臣ノ許可ヲ受ケ其府縣ノ全部若ハ市制施行ノ地ニ家屋稅ヲ賦課スルコトヲ得但家屋稅賦課ノ地ニ於テハ戶數割ヲ賦課スルコトヲ得ス

第五十九條　府縣內ニ土地家屋ヲ所有シ又ハ店舗ヲ定メテ營業ヲ爲ス者ハ其土地家屋營業ニ對シテ賦課スル府縣稅ヲ納ムル者トス其法人タルトキモ亦同シ但郵便電信及官設鐵道ノ業ハ此限ニ在ラス

府縣內ニ一戶ヲ構ヘ三箇月以上ニ及フ者ハ其戶數ニ對シテ府縣稅ヲ納ムルモノトス但其課稅ハ一戶ヲ構ヘタル初ニ遡リ徵收スヘシ

第六十條　府縣ノ賦課ニ付テハ納稅者其府縣外ニ於テ店舗ヲ定メタル營業ノ收入ヲ其標準ニ算入スルコトヲ得ス

第六十一條　府縣會ハ各市町村內ニ於テ徵收スル府縣稅賦課ノ細目ニ係ル事項ヲ關係市町村會ノ議決ニ付スルコトヲ得

前項市町村會ノ議決ハ法律命令又ハ府縣會ノ議決ニ牴觸スルコトヲ得ス

市町村會ニ於テ府縣會ノ指定シタル期限內ニ其議決ヲ爲サヽルトキハ府縣參事會之ヲ議決スヘシ

第六十二條　營業ノ狀況又ハ收入ヲ標準トシテ賦課スル府縣稅ニ付テハ府縣知事ハ府縣會ノ議決ヲ經テ賦課額調査ノ爲其府縣內郡市ニ調査委員ヲ置クコトヲ得

第六十三條　府縣稅ノ免除ハ市町村稅免除ノ規定ニ依ル

第六十四條　府縣會ハ府縣內郡市町村ノ土木工事又ハ府縣內ノ敎育衞生勸業及慈善ノ事業若ハ營造物ニ對シ補助金ヲ與フルコトヲ議決スルコトヲ得

第六十五條　府縣會ハ家屋稅又ハ戶數割ノ全部又ハ一部ノ代納トシテ府縣ノ費用ヲ以テ支辨スル事業ニ對シ夫役又ハ現品ヲ出スヲ許スコトヲ議決スルコトヲ得

第六十六條　府縣稅ハ納稅義務ノ起リタル翌月ノ初ヨリ免稅理由ノ生シタル月ノ終迄月割ヲ以テ之ヲ徵收スヘシ但日割ヲ以テ徵收スルモノハ此限ニ在ラス

納稅義務消滅シ又ハ變更スルトキハ納稅者ヨリ之ヲ當該官廳ニ屆出ヘシ其屆出ヲ爲シタル月ノ終迄ハ從前ノ稅ヲ徵收スヘシ

物件ヲ目的トシ納期ヲ定メテ一定ノ額ヲ賦課スル府縣稅ハ其納期ニ於テ納稅義務ヲ負フ者其額ヲ納ムヘシ

府縣稅ノ前納ニ係ルモノハ其義務ノ消滅シ又ハ他人ニ移轉シタル場合ト雖之ヲ還付セス但其義務ノ移轉ヲ受ケタル者ハ其前納期限ノ終迄納稅セサルモノトス

第六十七條　府縣稅ハ法律命令ヲ以テ別段ノ規定ヲ設クルモノヲ除クノ外各市町村長ニ於テ市町村稅徵收ノ手續ニ依リ之ヲ徵收スヘシ

第六十八條　府縣稅ノ課賦ニ對シ錯誤アルコトヲ發見シタル者ハ徵稅傳令書ノ交付後三箇月以內ニ之ヲ其傳令書ヲ發シタル廳ニ申立ルコトヲ得但申立ノ爲其納稅ヲ拒ムコトヲ得ス

第六十九條　前條ノ申立ヲ爲シタル後二十一日以內ニ其更正ヲ得サルトキ又ハ其更正ヲ得ルモ之ニ不服ナルトキハ十四日以內ニ郡參事會ニ訴願シ郡參事會ノ裁決ニ不服ナルトキハ其裁決書ヲ交付シ又ハ之ヲ告知シタル日ヨリ十四日以內ニ府縣參事會ニ訴願シ府縣參事會ノ裁決ニ不服ナルトキハ行政裁判所ニ出訴

スルコトヲ得

第七十條　府縣稅ノ免稅若ハ納稅延期ハ特別ノ事情アルモノニ限リ府縣知事ニ於テ府縣參事會ノ議決ヲ經テ之ヲ許スコトヲ得

府縣稅ノ滯納處分ハ國稅滯納處分法ニ依ル

第七十一條　東京府京都府大坂府ニ在テハ府ノ支出ニ充ツヘキ府稅ヲ市部及郡部ニ分賦ス其分賦ノ割合ハ府會ニ於テ之ヲ議決シ內務大臣ノ認可ヲ受ケテ施行スヘシ

前項市部ノ分賦額ハ市ニ於テ之ヲ市ノ豫算ニ編入シ市稅トシテ徵收シ其總額ヲ府金庫ニ納ムヘシ郡部ノ分賦額ハ此法律ノ規定ニ依リ之ヲ徵收ス但市部議員ハ其徵收ニ關スル議事ニ參與シ及議決ニ加ハラサルモノトス此場合ニ於テ若議長副議長市部議員ナルトキハ郡部議員ニ於テ臨時議長ヲ互選スヘシ

第七十二條　市制施行ノ府縣ニ在テハ郡廳舍建築修繕費郡吏員給料旅費及廳費ハ市ヲ除キ其他ノ部分ノミヲシテ其負擔ニ任セシムヘシ

前項ノ府縣ニ在テハ其府縣ノ支出費目中市ト其他ノ部分ト利害ノ厚薄ヲ異ニシ均一ノ負擔ニ任セシムルコトヲ得サルモノアルトキハ其費目ニ限リ其一方ノ負擔ヲ增加スルコトヲ得但負擔ノ割合ハ府縣會ニ於テ之ヲ議決シ內務大臣ノ許可ヲ受クヘシ若之ヲ許可スヘカラスト認ムルトキハ內務大臣之ヲ確定ス

第一項ノ負擔ニ任セシメ及第二項ニ依リ一方ノ負擔ヲ增加スルハ賦課ノ稅率ヲ增加スルニ止メ其會計ヲ異ニスルコトヲ得ス但東京府京都府大坂府ニ在テハ前條ニ依ル

前項ニ依リ稅率ヲ增加スヘキ稅目ハ府縣會ノ議決スル所ニ依ル

第七十三條　府縣內ノ或ル部分ニ對シ特ニ利益アル土木事業ヲ起ストキハ府縣會ノ議決ニ依リ該部分ニ對シ通常府縣稅賦課ノ外其利益ノ厚薄ニ應シ特ニ夫役現品ヲ增課スルコトヲ得

第七十四條　府縣ハ其債債元額ヲ償還スル爲又ハ天災事變ノ爲已ムヲ得サル支出又ハ府縣ノ永久ノ利益ト爲ルヘキ支出ヲ要スルニ方リ通常ノ歲入ヲ增加スルトキハ府縣ノ負擔ニ堪ヘサルノ場合ニ限リ勅令ノ定ムル所ニ依リ府縣會ノ議決ヲ以テ府縣債ヲ起スコトヲ得

府縣債ヲ起スノ議決ヲ爲ストキハ併セテ起債ノ方法利息ノ定率及償還ノ方法ヲ定ムヘシ

府縣債償還ノ初期ハ三年以內ト爲シ年々ノ償還步合ヲ定メ起債ノ時ヨリ三十年以內ニ還了スヘシ

歲入出豫算內ノ支出ヲ爲スカ爲必要ナル一時ノ借入金ニシテ其年度內ノ收入ヲ以テ償還スヘキモノハ本條ノ例ニ依ルノ限ニ在ラス但府縣參事會ノ議決ヲ經ルコトヲ要ス

第七十五條　府縣知事ハ每年其翌年度ニ係ル歲入出豫算ヲ調製スヘシ但府縣ノ會計年度ハ政府ノ會計年度ニ同シ

豫算ハ府縣會ノ議決ニ付スルノ前府縣參事會ノ審査ニ付スヘシ若府縣知事ト府縣參事會ト意見ヲ異ニスルトキハ知事ハ參事會ノ意見ヲ豫算ニ添ヘ府縣會ニ提出スヘシ追加又ハ臨時ノ豫算ニ付テモ亦同シ

內務大臣ハ省令ヲ以テ豫算調製ノ式ヲ定メ並ニ費目流用ニ關スル規定ヲ設クルコトヲ得

第七十六條　豫算ハ每年府縣會ノ議決ヲ取リ之ヲ內務大臣ニ報告シ並ニ府縣ノ公告式ニ依リ其要領ヲ告示スヘシ追加又ハ臨時ノ豫算ヲ議決シタル場合ニ於テモ亦同シ

府縣ノ費用ヲ以テ支辨スル事業ニシテ數年ヲ期シ施行スヘキモノ又ハ數年ヲ期シテ其費用ヲ支出スヘキモノハ府縣會ノ議決ヲ以テ其年期間各年度ノ支出額ヲ定メ繼續費ト爲スコトヲ得

豫算ヲ府縣會ニ提出スルトキハ府縣知事ハ併セテ其府縣有財產表ヲ提出スヘシ

第七十七條　歲入出豫算中ニ豫備費ヲ設クヘシ豫備費ハ府縣知事ニ於テ府縣參事會ノ議決ヲ經テ已ムヲ得サル豫算外ノ支出又ハ豫算超過ノ支出ニ充ツルコトヲ得但府縣會ノ否決シタル費途ニ充ツルコトヲ得ス

第七十八條　府縣ノ收支命令ハ府縣知事之ヲ發スヘシ

第七十九條　會計事務ヲ管理スル官吏ハ前條ノ命令アルニ非サレハ支拂ヲ爲スコトヲ得ス及其命令アルモ支出ノ豫算ナキカ又ハ豫備費支出及費目流用ノ規定ニ依ラサルトキハ支拂ヲ爲スコトヲ得ス

第八十條　決算ハ會計事務ヲ管理スル官吏ニ於テ會計年度後三箇月以內ニ之ヲ府縣知事ニ提出シ府縣知事ハ府縣參事會ヲシテ之ヲ檢査セシメ次回ノ通常府縣會ノ認定ニ付スヘシ

決算報告書並ニ之ニ關スル府縣會ノ議決ハ府縣知事ヨリ之ヲ內務大臣ニ報告シ並ニ決算ハ府縣ノ公告式ニ依リ其要領ヲ告示スヘシ

第五章　監督

第八十一條　府縣ノ行政ハ內務大臣之ヲ監督ス

第八十二條　府縣ノ行政ニ關スル訴願ハ其事件ノ處分若ハ裁決ヲ受ケタル日ヨリ二十一日以內ニ其理由ヲ具シテ內務大臣ニ提出スヘシ

此法律ニ指定スル場合ニ於テ府縣知事ノ處分又ハ府縣參事會ノ裁決ニ不服アリテ行政裁判所ニ出訴セントスル者ハ裁決ヲ受ケタル日ヨリ二十一日以內ニ出訴スヘシ

行政裁判所ニ出訴スルコトヲ得ヘキ場合ニ於テハ內務大臣ニ訴願スルコトヲ得ス

第八十三條　內務大臣ハ府縣行政ノ法律命令ニ背戾セサルヤ其事務錯亂滯滯セサルヤ否ヲ監視スヘシ內務

大臣ハ之カ爲行政事務ニ關シテ報告ヲ爲サシメ豫算及決算等ノ書類帳簿ヲ徵シ並ニ實地ニ就テ事務ノ現況ヲ視察シ出納ヲ檢閲スルノ權ヲ有ス

第八十四條　府縣會又ハ府縣參事會ノ議決公益ヲ害スト認ムルトキハ府縣知事ハ理由ヲ示シテ議決ノ執行ヲ停止シ之ヲ再議セシメ猶其議決ヲ改メサルトキハ直ニ內務大臣ニ具狀シテ指揮ヲ請フヘシ

府縣會又ハ府縣參事會ノ議決其權限ヲ超エ又ハ法律命令ニ背クト認ムルトキハ府縣知事ハ其議決ヲ取消スヘシ此場合ニ於テ府縣知事ノ處分ニ不服ナルトキハ行政裁判所ニ出訴スルコトヲ得

第八十五條　府縣會又ハ府縣參事會ニ於テ法律命令又ハ慣行ニ依テ府縣ノ負擔ニ屬スル行政上又ハ公益上必要ノ費用ヲ否決シ又ハ議決スト雖必要ノ給需ヲ缺クトキハ府縣知事ハ內務大臣ニ具狀シ其指揮ヲ請ヒ原案ヲ執行スルコトヲ得但內務大臣ハ原案金額ヲ不相當ト認ムルトキハ原案金額以內ニ於テ適當ノ金額ヲ定メ指揮スルコトヲ得

第八十六條　府縣會招集ニ應セス又ハ成立セサルトキハ府縣知事ハ內務大臣ノ指揮ヲ請ヒ處分スルコトヲ得

前項ノ處分ハ次回ノ會議ニ於テ之ヲ報告スヘシ

第八十七條　府縣會又ハ府縣參事會ニ於テ其議決スヘキ議案ヲ議決セス又ハ府縣會ニ於テ招集前正當ノ手續ヲ以テ告知セラレタル議案ヲ第二十一條第一項ニ定メタル期限內ニ議了セサル場合ニ於テ其事緊急ヲ要スルトキハ府縣知事ハ內務大臣ニ具狀シ其指揮ヲ請ヒ原案ヲ執行スルコトヲ得但其議決セス又ハ議了セサル議案歲入出豫算ニ係リ內務大臣ニ於テ原案金額ヲ不相當ト認ムルトキハ原案金額以內ニ於テ適當ノ金額ヲ定メ指揮スルコトヲ得

第八十八條　內務大臣ハ府縣ノ歲入出豫算中不適當ノ支出ト認ムル費目アルトキハ之ヲ削除シ及其府縣ノ資力ニ比シ不急ノ支出ト認ムル費目アルトキハ之ヲ削除若ハ減殺スルコトヲ得此場合ニ於テハ收入科目中ニ就キ之ニ相當スル收入額ヲ減殺スヘシ

第八十九條　府縣會ノ解散ハ勅令ヲ以テス此場合ニ於テハ三箇月以內ニ議員ヲ改選スヘシ

前項解散ノ場合ニ於テハ名譽職參事會員モ亦解職スルモノトス

府縣會解散ノ後改選結了ニ至ル迄ノ間急施ヲ要スル事件アルトキハ府縣知事ハ專決處分スルコトヲ得

前項ノ處分ハ次回ノ會議ニ於テ之ヲ報告スヘシ

第九十條　左ノ事件ニ關スル府縣會ノ議決ハ內務大臣及大藏大臣ノ認可ヲ受クルコトヲ要ス

一　新ニ府縣債ヲ起シ又ハ其額ヲ增加シ若ハ償還ノ方法ヲ變更スル事

二　地租四分ノ一ヲ超過スル府縣稅ヲ土地ニ賦課スル事

三　法律勅令ノ規定ニ依リ官廳ヨリ下渡ス步合金ニ對シ支出金額ヲ定ムル事

第九十一條　左ノ事件ニ關スル府縣會ノ議決ハ內務大臣ノ認可ヲ受クルコトヲ要ス

一　府縣有不動產ノ賣却讓渡並ニ質入書入ノ事

二　第七十二條第二項ニ依リ市若ハ其他ノ部分ノ負擔ヲ增加スル事

三　第七十三條ニ依リ府縣內ノ或ル部分ニ對シ特ニ夫役現品ヲ增課スル事

四　第七十六條第二項ニ依リ繼續費ヲ定メ及其年期內ニ議決ヲ變更スル事

第六章　附則

第九十二條　行政裁判所ヲ開設スル迄ノ間此法律ニ依リ行政裁判所ニ屬スル職務ハ現行ノ行政裁判手續ニ從ヒ控訴院ニ於テ之ヲ行フヘシ

第九十三條　市制町村制施行ノ爲定ムル直接稅ノ種類ハ此法律ノ施行ニ付テモ亦之ヲ適用ス

市制町村制郡制及此法律施行ノ爲將來ノ諸稅ニ付直接稅ト爲スヘキモノハ內務大臣及大藏大臣之ヲ告示スヘシ

第九十四條　此法律ハ郡制市制ヲ施行シタル各府縣ニ施行スルモノトス其施行ノ時期ハ府縣知事ノ具申ニ依リ內務大臣之ヲ定ム

第九十五條　此法律施行ノ後ハ市制第百二十二條第三ニ定ムル附加稅徵收ノ許可ハ東京市京都市大坂市ニ在テハ地租七分ノ三、二五(二十八分ノ十三)其他ノ市ニ在テハ其七分ノ一、五(十四分ノ三)ヲ超過スルトキ之ヲ要スルモノトス

第九十六條　府縣內ニ在ル島嶼ノ其本地ニ對スル關係ニ付テハ勅令ヲ以テ特例ヲ設ク

郡制ヲ施行セサル島嶼ヨリ選出スヘキ府縣會議員ノ選擧ニ關シテハ別ニ勅令ヲ以テ其制ヲ定ム

第九十七條　明治十三年四月第十五號布告府縣會規則明治十四年二月第八號布告區郡部會規則明治二十二年二月法律第六號府縣會議員選擧規則其他此法律ニ牴觸スル成規ハ此法律施行ノ府縣ニ於テ其施行ノ時期ヨリ總テ之ヲ廢止ス

第九十八條　內務大臣ハ此法律施行ノ責ニ任シ之カ爲必要ナル命令ヲ發布スヘシ

府縣會議員定數規則

明治二十四年六月勅令第五十九號

朕府縣會議員定數規則ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

府縣會議員定數規則

第一條　府縣制第二條ニ依リ府縣會議員ノ數ヲ定ムルコト左ノ如シ

管內ノ人口七十萬迄ハ議員三十人ヲ以テ定員トシ七十萬以上百萬迄ハ五萬ヲ加フル每ニ一人ヲ增シ百萬以上ハ七萬ヲ加フル每ニ一人ヲ增ス

第二條　前條定ムル所ノ議員ハ人口ニ應シテ每郡市ニ割當選擧スルモノトス

第三條　人口增減ノ爲メ議員ノ定數又ハ郡市ノ割當ニ異動ヲ生スルトキハ其改選期ヲ待テ之ヲ增減スル可シ

第四條　府縣制第二十七條ニ依リ府縣會ノ職權ニ屬スル事件ヲ市郡ニ分別シタル府縣ニ於テ本規則ニ依リ市若クハ郡ヨリ選出スヘキ議員ノ數十名ニ滿タサルトキハ其定數ヲ十名ト爲スヘシ（廿五年九月勅令第七十六號ヲ以テ本條追加）

◎府縣會議員定數規則ニ關スル人口計算方心得

明治二十四年六月內務省訓令第十號

本年六月勅令第五十九號ニ掲クル人口ハ每年十二月末日ノ現在人口ヲ云フ但在營在經ノ現役軍人ハ其營所又ハ定繫港所在地ノ人口ニ算入セス其本籍地ノ人口ニ加フヘキ儀ト心得ラルヘシ

◎府縣制郡制施行ニ際シ衆議院議員並府縣會議員ノ選擧區域等ニ關スル件

明治二十三年九月法律第八十五號

朕府縣制郡制施行ニ際シ衆議院議員竝府縣會議員ノ選擧區域地方稅收支豫算地方稅財產備荒儲蓄金處分方郡費支辨方法及府縣ノ急施事業ニ關スル諸件ヲ裁可シ玆ニ之ヲ公布セシム

第一條　郡制施行ニ付郡ノ廢置分合若ハ郡市ノ境界ヲ變更スルコトアルモ衆議院議員ノ選擧ハ仍ホ從前ノ區域ニ依ル

第二條　郡制施行ニ際シ郡ノ廢置分合若ハ郡市ノ境界ヲ變更スルコトアルモ府縣會議員ハ次回ノ定期改選ニ至ルマテ之ヲ改選セス又其ノ定數ヲ增減セス其ノ補缺選擧ヲ行フヘキトキハ仍ホ從前ノ區域ニ依ル

第三條　府縣制施行前府縣會ニ於テ議定シタル歲入出豫算中府縣制施行ニ至リ法律命令ノ結果ニ依リ異動ヲ生シ更正ヲ要スルモノアルトキハ新ニ組織スル府縣會ニ於テ之ヲ更正スヘシ其ノ他ハ總テ從前府縣會議決ノ効ヲ存ス

第四條　東京府京都府大坂府ヲ除キ其ノ他ノ縣ニ在テ從來郡市地方稅ノ經濟ヲ異ニシ其ノ地方稅經濟ニ屬スル財產ヲ郡市ニ分屬セルモノハ府縣制施行ノ日ヨリ之ヲ共同ノ縣有財產トス

第五條　東京府京都府大坂府ヲ除キ其ノ他ノ縣ニ在テ從來備荒儲蓄金ヲ郡市ニ分別セルモノハ府縣制施行ノ日ヨリ之ヲ共同ノ備荒儲蓄金トス

第六條　郡制施行ノ後郡費ヲ收入スルニ至ルノ間必要ナル郡ノ支出ハ郡長ニ於テ概算ヲ設ケ府縣知事ノ認可ヲ得テ假ニ地方稅ヲ以テ支辨シ追テ郡費ヲ以テ償還スヘシ

第七條　府縣制郡制施行ノ後府縣參事會郡參事會就職ニ至ルマテノ間其ノ職務ニ屬スル事項ニシテ急施ヲ要スルモノアルトキハ府縣參事會ノ職務ハ府縣知事郡參事會ノ職務ハ郡長代テ之ヲ執行スヘシ

◎國郡區境堺ノ變更及町村字名ノ分合改稱等報告方

明治二十四年八月遞信省訓令第八號

來九月一日ヨリ國郡區境堺ノ變更及町村字名ノ分合改稱等有之時ハ管內ヘノ告示相添ヘ速ニ當省ヘ報告スヘシ

◎東京府及神奈川縣境域變更ニ關スル件

明治二十六年三月法律第十二號

朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル東京府及神奈川縣境域變更ニ關スル法律ヲ裁可シ玆ニ之ヲ公布セシム

第一條　神奈川縣下武藏國西多摩郡北多摩郡南多摩郡ヲ東京府ニ移ス

第二條　衆議院議員選擧區神奈川縣第三區ハ本法ニ依レル府縣境域ノ變更ノ爲ニ東京府選擧區第十三區トシテ東京府ニ移リタルモノトス

第三條　神奈川縣選出ノ現任衆議院議員ハ本法ニ依レル府縣境域ノ變更ノ爲ニ其ノ議員タル資格ヲ失フコトナシ

第四條　衆議院議員選擧區東京府第十三區ハ其ノ東京府ニ移リタルカ爲ニ新ニ區員ヲ選擧スルコトナシ

第五條　貴族院多額納稅者議員衆議院議員及府縣會議員ノ選擧及被選擧資格中其ノ年限ニ關ルモノハ本法ニ依レル府縣境域ノ變更ノ爲ニ中斷セラルヽコトナシ

第六條　此ノ法律ハ明治二十六年四月一日ヨリ施行ス

◎神奈川縣下西北南ノ三多摩郡ヲ東京府ノ境域ニ移サレタルニ付地方稅備荒儲蓄ノ分割及府縣會議員ニ關スル手續

明治二十六年三月內務省令第二號

本年（三月）法律第十二號ヲ以テ神奈川縣下武藏國西多摩郡北多摩郡南多摩郡ヲ東京府ノ境域ニ移サレタルニ付テハ地方稅備荒儲蓄ノ分割及府縣會議員ニ關スル手續左ノ通之ヲ定ム

第一條　神奈川縣ニ於テ二十五年度地方稅收支決算ニ至リ殘餘金アルトキハ其年度實收入ノ割合ニ依リ分割シ東京府ヘ引繼ヘシ若シ不足アルトキハ其年度實收入ノ割合各其府縣ニ於テ分擔スヘシ

第二條　地方稅及備荒儲蓄經濟中土地建物等ハ總テ其物件所在ノ府縣ニ屬スルモノトス

第三條　神奈川縣ニ於テ備荒儲蓄金穀ハ明治二十三年（二月）法律第五號備荒儲蓄法改正前迄ニ徵收シタル金額ノ割合ニ依リ之ヲ分割シ東京府ヘ引繼クヘシ但地租貸與金ニ屬スルモノハ將來其所屬ノ府縣ニ收入スルモノトシ其額ハ現金分割ノ內ニ算入シテ差引ヲ爲スヘシ

第四條　神奈川縣東京府縣會議員及正副議長常置委員ハ改選ヲ要セス但神奈川縣西多摩郡北多摩郡南多摩郡縣會議員ハ本年（三月）法律第十二號施行ノ日ヨリ當然其職ヲ解キ東京府ニ於テハ右三郡ニ於テ其府既定ノ選出法ニ依リ每郡ノ人員ヲ定メ更ニ府會議員ヲ選擧セシムヘシ

第五條　囚人ハ犯罪地逮捕地等土地ニ依リ其裁判管轄ヲ定ムルモノハ其土地所屬ノ地其他ノ囚人竝ニ懲治人ハ其裁判ヲ言渡シタル地ニ依リ之ヲ分割スヘシ

◎東京府埼玉縣千葉縣茨城縣境界變更法

明治二十八年三月法律第二十四號

朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル東京府埼玉縣千葉縣茨城縣境界變更法ヲ裁可シ玆ニ之ヲ公布セシム

東京府埼玉縣千葉縣茨城縣境界變更法

第一條　東京府埼玉縣千葉縣及茨城縣ノ境界ヲ變更スルコト左ノ如シ

一　東京府南葛飾郡篠崎村大字伊勢屋ノ內大字上鎌田ノ內江戶川以東ハ千葉縣東葛飾郡行德町ニ編入ス

一　埼玉縣中葛飾郡金杉村大字金杉ノ內江戶川以東ハ千葉縣東葛飾郡旭村ニ編入ス

一　埼玉縣北葛飾郡早稻田村大字岩野木ノ內江戶川以東ハ千葉縣東葛飾郡流山町ニ編入ス

一　埼玉縣北葛飾郡八木郷村大字大膳ノ內大字一本木ノ內江戶川以東ハ千葉縣東葛飾郡馬橋村ニ大字樋野口ノ內大字德島ノ內大字小向ノ內江戶川以東ハ千葉縣東葛飾郡明村ニ編入ス

一　千葉縣東葛飾郡關宿町大字向下河岸及大字內町ノ內大字江戶町ノ內江戶川以西ハ埼玉縣中葛飾郡豐岡村ニ大字江戶町ノ內樋現當川以北ハ茨城縣西葛飾郡五霞村ニ編入ス

一　千葉縣東葛飾郡梅郷村大字今上ノ內江戶川以西ハ埼玉縣北葛飾郡

旭村ニ編入ス

一　千葉縣東葛飾郡新川村大字深井新田ノ内大字平方村新田ノ内大字中野久木ノ内大字北ノ内大字小屋ノ内大字上新宿新田ノ内大字南ノ内江戸川以西ハ埼玉縣北葛飾郡三輪野江村ニ編入ス

一　千葉縣東葛飾郡流山町大字三輪野山ノ内江戸川以西ハ埼玉縣北葛飾郡三輪野江村ニ大字加ノ内大字流山ノ内江戸川以西ハ埼玉縣北葛飾郡早稲田村ニ編入ス

一　千葉縣東葛飾郡馬橋村大字外河原ノ内江戸川以西ハ埼玉縣北葛飾郡八木郷村ニ編入ス

一　千葉縣東葛飾郡明村大字古ヶ崎ノ内江戸川以西ハ埼玉縣北葛飾郡八木郷村ニ編入ス

一　千葉縣東葛飾郡行徳町大字大和田ノ内大字本行徳ノ内江戸川以西ハ東京府南葛飾郡篠崎村ニ編入ス

一　千葉縣東葛飾郡南行徳村大字欠真間ノ内字前野及字妙見島ハ東京府南葛飾郡瑞穂村ニ編入ス

一　千葉縣東葛飾郡浦安村大字堀江ノ内江戸川以西ハ東京府南葛飾郡葛西村ニ編入ス

第二條　此ノ法律施行ノ爲府縣ノ財産處分ヲ要スルトキハ關係府縣會ノ意見ヲ聞キ内務大臣之ヲ定メ町村ノ財産處分ヲ要スルトキハ關係町村會ノ意見ヲ聞キ其ノ關係府縣知事協議ノ上之ヲ定ムヘシ若協議整ハサルトキハ内務大臣ノ裁定ヲ請フヘシ

第三條　衆議院議員及府縣會議員ノ選擧及被選擧資格中其ノ年限ニ關スルモノハ此ノ法律ニ依レル府縣境界ノ變更ノ爲ニ中斷セラルヽコトナシ

第四條　此ノ法律ハ明治二十八年四月一日ヨリ施行ス

府縣會規則

明治十三年四月布告第十五號

明治十一年(七月)第十八號布告府縣會規則左ノ通改正候條此旨布告候事

(此規則ハ府縣制第九十七條ノ規定ニヨリ府縣ノ施行ト共ニ廢止セラルヘキモノトス)

第一章　總則

第一條　府縣會ハ地方税ヲ以テ支辨スヘキ經費ノ豫算及ヒ其徴收方法ヲ議定ス

第二條　府縣會ハ通常會ト臨時會トノ二類ニ分ツ其定例ニ於テ開ク者ヲ通常會トナシ臨時ニ開ク者ヲ臨時會トナス

第三條　通常會臨時會ヲ論セス會議ノ議案ハ總テ府知事「縣令」ヨリ之ヲ發ス

第四條　臨時會ハ其特ニ會議ヲ要スル事件ニ限リ其他ノ事件ヲ議スルヲ得ス

第五條　府縣會ノ議決ハ府知事「縣令」認可ノ上之ヲ施行スヘキ者トス若シ知府事「縣令」其議決ヲ認可スヘカラスト思慮スルトキハ其事由ヲ「内務卿」ニ具狀シテ指揮ヲ請フヘシ

前項ノ場合ニ於テ府知事「縣令」ハ時宜ニ依リ之ヲ再議ニ付スルヲ得再議ノ後猶其議決ヲ認可スヘカラスト思慮スルトキハ「内務卿」ノ指揮ヲ請フコト前項ニ同シ(十四年第四號布告ヲ以テ本項ヲ追加ス)

第六條　府縣會ハ毎年通常會議ノ初メニ於テ地方税ニ係ル前年度ノ出納決算ノ報告書ヲ受ケ府知事「縣令」ニ説明ヲ求ムルコトヲ得若シ異見アルトキハ議長ノ名ヲ以テ直チニ「内務大藏兩卿」ニ上申スルコトヲ得出納決算ノ報告書ニ付府縣會ヨリ説明ヲ求ムルトキハ府知事「縣令」若シクハ其代理人之ヲ説明スヘシ(十五年第六十八號布告ヲ以テ本項ヲ追加ス)

第七條　通常會期中議員ノ内二人以上ノ發議ヲ以テ其府縣内ノ利害ニ關スル事件ニ付建議ヲナサントスル者アラハ先ツ議會ノ許可ヲ得テ之ヲ會議ニ付シ可決スルトキハ其會ノ所見トシ議長ノ名ヲ以テ直チニ「内務卿」ニ建議シ又ハ府知事「縣令」ニ建議スルヲ得(十五年第十號布告ヲ以テ本項ヲ改正シ且ツ但書ヲ追加ス)

但臨時會ニ於テハ其會議ヲ要シタル事件ニ限リ建議スルヲ得

第八條　府縣會ハ府知事「縣令」ヨリ其府縣内ニ施行スヘキ事件ニ付會議ノ意見ヲ問フコトアルトキハ之ヲ議ス

第九條　府縣會ハ議事ノ細則ヲ議定シ府知事「縣令」ノ認可ヲ得テ之ヲ施行スルコトヲ得

府縣會ハ議員ノ内召集ニ應セス又ハ事故ヲ告ケスシテ參會セサル者ヲ審査シ其退職者タルヲ決スルヲ得

府知事「縣令」ト府縣會トノ間ニ於テ法律ノ見解ヲ異ニシ又ハ權限ヲ爭フコトアルトキハ雙方ヨリ其事由ヲ具狀シ政府ノ裁定ヲ請フヘシ此場合ニ於テ府知事「縣令」ハ其議事若クハ會議ヲ中止スルコトヲ得(十四年第四號布告ヲ以テ本項ヲ追加ス)

第二章　選擧

第十條　府縣會ノ議員ハ郡區ノ大小ニ依リ每郡區ニ五人以下ヲ選フ每郡區議員定數ノ外補闕員トシテ十人以下ヲ增選スルヲ得(十五年第十號布告ヲ以テ本項ヲ追加ス)

第十一條　議長副議長ハ議員中ヨリ公選シ之ヲ府知事「縣令」ニ報告シ府知事「縣令」ハ之ヲ「内務卿」ニ報告スヘシ

議長副議長及ヒ議員ハ俸給ナシ但會期中滯在日當及ヒ往復旅費ヲ給ス其額ハ會議ノ議決ヲ以テ之ヲ定ム

第十二條　書記ハ議長之ヲ選ヒ庶務ヲ整理セシム其俸給ハ會費ノ中ヨリ之ヲ支給ス

第十三條　府縣ノ議員タルコトヲ得ヘキ者ハ滿二十五歳以上ノ男子ニシテ其府縣内ニ本籍ヲ定メ滿三年以上住居シ其府縣内ニ於テ地租拾圓以上ヲ納ムル者ニ限ル但左ノ各款ニ觸ルヽ者ハ議員タルコトヲ得ス

第一款　瘋癲白痴ノ者

第二款　苟法ニ依リ一年以上懲役及國事犯禁獄ノ刑ニ處セラレ滿期後五年ヲ經サル者(十五年第十號布告ヲ以テ本項改正)

新法ニ依リ公權ヲ剝奪及停止セラレタル者又ハ一年以上輕重禁錮ノ刑ニ處セラレ主刑滿期後五年ヲ經サル者(同上)

第三款　身代限ノ處分ヲ受ケ負債ノ辨償ヲ終ヘサル者

第四款　官吏「教導職」及陸海軍諸卒現役ノ者(同上而シテ十七年第十九號布達ヲ以テ神佛教導職ヲ廢ス)

第五款　府縣會ニ於テ退職者トセラレタル後四年ヲ經サル者

第十四條　議員ヲ選擧スルヲ得ヘキ者ハ滿二十歳以上ノ男子ニシテ其郡區内ニ本籍ヲ定メ其府縣内ニ於テ地租五圓以上ヲ納ムル者ニ限ルヘシ

但前條ノ第一款第二款第三款第五款ニ觸ルヽ者及陸海軍人現役ノ者ハ選擧人タルコトヲ得ス(同上布告ヲ以テ但書ヲ改正ス)

第十五條　(二十二年法律第六號ヲ以テ本條ヲ廢止ス)

第十六條　選擧ノ投票ハ豫定ノ日ニ郡區廳ニ於テ之ヲ爲シ郡區長之ヲ調査シ選擧會中ノ取締ヲ爲スヘシ但便宜ニ因リ郡區廳外ニ於テ選擧會ヲ開クコトヲ得

第十七條　(同上)

第十八條　(同上)

第十九條　(同上)

第二十條　一人ニシテ數郡區ノ選ニ當ルトキハ其何レノ郡區ニ屬スヘキハ當人ノ好ニ任スヘシ

第二十一條　議員ノ任期ハ四年トシ二年每ニ全數ノ半ヲ改選ス第一回二年期ノ改選ヲ爲スハ抽籤法ヲ以テ其退任ノ人ヲ定ム

第二十二條　議長副議長ノ任期ハ二年トシ議員ノ改選每ニ之ヲ公選スヘシ

第二十三條　前二條ノ場合ニ於テハ前任ノ者ヲ再選スルコトヲ得

第二十四條　議員中第十三條ニ掲クル諸款ノ場合ニ遭遇スルカ其府縣外ニ轉籍スルカ其他總テ闕員アルトキハ更ニ之ニ代ル者ヲ選擧ス(十五年第十號布告ヲ以テ『轉籍』ヲ『轉住』ト改ム)

但補缺員アルトキハ順次投票ノ多數ヲ以テ之ヲ取リ尚缺員アルトキハ本條末文ノ手續ニ據ル(同上布告ヲ以テ但書ヲ追加ス)

第三章　議則

第二十五條　議員半數以上出席セサレハ當日ノ會議ヲ開クヲ得ス

第二十六條　會議ハ過半數ニ依テ決ス可否同數ナルトキハ議長ノ可否スル所ニ依ル

第二十七條　府知事「縣令」若クハ其代理人ハ會議ニ於テ議案ノ趣旨ヲ辨明スルヲ得但決議ノ數ニ入ルコトヲ得ス

第二十八條　會議ハ傍聽ヲ許ス但府知事「縣令」ノ要メニ依リ又ハ議長ノ意見ヲ以テ傍聽ヲ禁スルヲ得

第二十九條　議員ハ會議ニ方リ充分討論ノ權ヲ有ス然レトモ人身上ニ付テ褒貶毀譽ニ渉ルコトヲ得ス

第三十條　議場ヲ整理スルハ議長ノ職掌トス若シ規則ニ背キ議長之ヲ制止シテ其命ニ順ハサル者アルトキハ議長ハ之ヲ議場外ニ退去セシムルヲ得其強暴ニ渉ル者ハ警察官吏ノ處分ヲ求ムルヲ得

第四章　開閉

第三十一條　府縣會ハ毎年一度十一月ニ於テ之ヲ開閉ス府知事「縣令」ヨリ之ヲ命ス會期ハ三十日以内トス但區部郡部會ヲ開ク地方ニ於テハ七日以内延期スルコトヲ得（十五年第六十八號布告ヲ以テ本條ヲ改正シ十七年第二十八號布告ヲ以テ『三月』ヲ『十一月』ト改メ十八年十一月ヨリ施行ス）

第三十二條　通常會期ノ外會議ニ付スヘキ事件アルトキ府知事「縣令」ハ臨時會ヲ開クコトヲ得其會期ハ七日以内トス但該會ヲ要スル事由ヲ直ニ「内務卿」ニ報告スヘシ（十五年第六十八號布告ヲ以テ本條改正）

第三十三條　會議ノ論既國ノ安寧ヲ害シ或ハ法律又ハ規則ヲ犯スコトアリト認ムルトキハ府知事「縣令」ハ會議ヲ中止セシメ「内務卿」ニ具狀シテ其指揮ヲ請フヘシ

府縣會ニ於テ若シ法律上議定スヘキ議案ヲ議決シ終ラサルトキハ府知事「縣令」ハ更ニ其議定ヲ要セス「内務卿」ニ具狀シテ認可ヲ得テ之ヲ施行スルコトヲ得（十四年第四號布告ヲ以テ本項ヲ追加シ十五年第六十八號布告ヲ以テ更ニ改正ヲ爲ス）

議員招集ニ應セサル者半數ヲ過キ議會ヲ開クヲ得サルコトアルトキハ府知事「縣令」ハ其事由ヲ「内務卿」ニ具狀シ指揮ヲ請フヘシ（十四年第四號布告ヲ以テ本項ヲ追加ス）

第一項ノ場合ニ於テ「内務卿」ハ府縣會ヲ停止スルコトヲ得而シテ更ニ開會ヲ命スル迄ノ間ハ府知事「縣令」ニ於テ地方税ノ經費豫算及徴收方法ヲ定メ「内務卿」ノ認可ヲ得テ之ヲ施行スルコトヲ得（十五年第六十八號布告ヲ以テ本項ヲ追加ス）

第三十四條　會議中國ノ安寧ヲ害シ或ハ法律又ハ規則ヲ犯スコトアリト認ムルトキハ「内務卿」ハ何レノ時ヲ問ハス議員解散ヲ命スルコトヲ得（十四年第四號布告ヲ以テ刪ル所アリタリ）

前項ノ場合ニ於テ前議員ノ未タ議定セサル議案アルトキハ後任議員ヲシテ之ヲ議定セシムヘシ（十四年第四號布告ヲ以テ本項ヲ追加ス）

第三十五條　「内務卿」ヨリ解散ヲ命シタルトキハ其解散ヲ命シタル日ヨリ九十日以内ニ更ニ議員ヲ改選スヘシ

第五章　常置委員（十三年第四十九號布告ヲ以テ本章ヲ追加ス）

第三十六條　府縣會ハ其議員中五人以上七人以下ノ常置委員ヲ選任スヘシ

常置委員定數ノ外數名ヲ增選シ缺員アルトキハ順次投票ノ多數ヲ以テ之ヲ補充スルヲ得（十五年第十號布告ヲ以テ本項ヲ追加ス）

區部郡部會ヲ開設シタル府縣ニ在テハ區郡各部ニ之ヲ選任スヘシ（十五年第十號布告ヲ以テ本項ヲ追加ス）

第三十七條　常置委員ハ府縣會ノ議定ニ依リ事業ヲ執行スルノ方法順序及豫備費ノ支出ニ付府知事「縣令」ヨリ諮問アルトキハ其意見ヲ述フ（十五年第六十八號布告ヲ以テ本項改正）

常置委員ハ地方税ヲ以テ支辨スヘキ事業ニシテ臨時急施ヲ要スル場合ニ於テハ其經費ノ豫算及徴收方法ヲ議決シ追テ府縣會ニ報告スルヲ得（十五年第六十八號布告ヲ以テ本項ヲ追加ス）

第三十八條　常置委員ハ通常府縣會議ノ初ノ委員會議ニ於テ議決シタル事件ノ要領ヲ報告シ且通常會ト臨時會トヲ論セス府知事「縣令」ヨリ發スヘキ議案ヲ前以テ請取リ會議ニ向テ其意見ヲ報告スヘシ

第三十九條　常置委員會議所ハ府縣廳内ニ置キ定日ニ會議スヘシ（十五年第十號布告ヲ以テ『常置委員』ノ下ニ『諮問』ノ二字ヲ加フ）

第四十條　常置委員ノ諮問會議ハ別ニ議案書ヲ用ユルヲ要セス

第四十一條　諮問會ハ府知事「縣令」ヲ以テ議長トナシ其他ノ會議ハ委員中ヨリ之ヲ選擧スヘシ（同上布告ヲ以テ本條改正）

第四十二條　常置委員ハ半數以上出席セサレハ當日ノ會議ヲ開クヲ得ス會議ハ過半數ニ依テ決ス可否同數ナルトキハ議長ノ可否スル所ニ依ル

第四十三條　常置委員會議ノ議事ハ書記ヲシテ筆記セシムヘシ

第四十四條　府知事「縣令」ハ主務ノ僚屬ヲ委員議會ニ出シ其會議ニ係ル事件ニ付辯明ヲ爲サシムルヲ得

第四十五條　常置委員會議ハ傍聽ヲ許サス

第四十六條　常置委員ノ任期ハ二ケ年トシ議員ノ改選毎ニ之ヲ改選ス但期限ニ至リ再選スルヲ得（同上布告ヲ以テ『二ケ年トシ』ノ下ニ『議員』ニ云々ノ十三字ヲ加フ）

第四十七條　常置委員會議所ノ書記ハ府縣ノ屬官中ヨリ府知事「縣令」之ヲ選任ス（同上布告ヲ以テ『議長』ヲ『府知事「縣令」』ト改ム）

第四十八條　常置委員ハ三拾圓以上八拾圓以下ノ月手當及ヒ往復旅費ヲ給ス其額ハ府縣會ノ議決ヲ以テ定ム

第四十九條　常置委員ノ月手當旅費其他委員會議所ノ費用ハ地方税ヨリ支給ス

◎府縣會ニテ議定スヘキ事件ノ細目ヲ區町村會等ノ議決ニ付スルヲ得（明治十四年二月布告第六號）

府縣會ハ其議定スヘキ事件中細目ニ係ル事項ヲ以テ區町村會若クハ水利土功會ノ議決ニ付スルヲ得ヘシ此旨布告候事

◎府縣會議員聯合集會等ヲ爲スヲ禁止スル法令廢止ノ件（明治二十八年二月法律第二號）

朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル明治十五年第七十號布告廢止法律ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

明治十五年第七十號布告ヲ廢ス

◎府縣會開會中ハ議員建議書携帶上京等ヲ許サス（明治十五年二月太政官達第十一號）

府縣會規則第七條ニ依リ内務卿ニ建議スルノ場合ニ於テ開會中議員自ラ其建議書ヲ携帶上京等ノ儀ハ不相成筋ニ候條此旨相達候事

但本文ノ趣府縣會ヘ相達シ置クヘシ

◎府縣會規則第十三條第十四條ノ地租納額計算方（二十三年一月内務省訓令第二十七號）

府縣會規則第十三條第十四條ノ地租納額ヲ計査スルニ數人共有地ノ地租ハ其共有人員ニ平分シ之ヲ各自ノ納額ト見做シ算入スヘキモノトス尤モ土地臺帳又ハ其附屬連名簿ニ各自所有權ノ歩合又ハ納租額ノ割合アルモノハ其額ニ依ル可キ儀ト心得ラルヘシ

但市町村制ニ就テモ本文同樣ト心得ラルヘシ

◎府縣會規則第廿一條ニ據リ議員改選ノ上就職交替手續（明治十四年七月内務省布達甲第四號）

府縣會規則第二十一條ニ據リ議員改選之上其就職交替ノ手續ハ豫メ府縣

合ニ於テ議定セシメ府知事縣令認可ノ上施行可致此旨布達候事（本布達ハ府縣制第九十七條ノ規定ニ依リテ府縣會規則ノ消滅スルトキハ其影響ヲ受ケテ消滅スヘキモノナリ）

但常置委員ノ儀モ本文同樣可取計事

◎府縣會規則心得條件

明治十三年十二月內務省達乙第四十八號

本年第四十九號ヲ以テ府縣會規則追加公布相成候ニ付左ノ條件爲心得相達候事（本達ハ府縣制第九十七條ノ規定ニ依リテ府縣會規則ノ消滅スル迄ハ其影響ヲ受ケテ消滅スヘキモノナリ）

一　常置委員ハ來十四年通常會開會前ニ於テ選任スヘシ（同年乙第五十三號省達ヲ以テ第一項ヲ取消シ本項以下二項ヲ加フ）

十三年度中常置委員ノ月手當及往復旅費ハ委員ヲ撰擧セシムル臨時會ニ於テ議定セシムヘシ

一　郡區經濟ヲ異ニスル府縣ニ在テハ定員內ニ於テ其郡區選出ノ人員ヲ定ムルコトヲ得

一　常置委員補欠ノ爲相當ノ豫備員ヲ撰ビ置クモ妨ケナシ

一　第四十一條ニ據リ議長ハ府知事縣令之ヲ勸ムト雖モ本務ノ都合ニ依リ書記官之レカ代理ヲ爲スヲ得

一　第四十六條ノ通委員ノ任期ハ二ヶ年タルヘシト雖モ若シ議員本分ノ任期ヲ終ヘタルモノハ其本分ノ任期ト共ニ委員ノ任期モ終リタルモノトス

一　常置委員會議ノ細則ハ該會ニ於テ議決シ府知事縣令認可ノ上施行スヘキモノトス

◎府縣會審理事務手續

明治十四年十月太政官達第九十一號

今般參事院ヲ被置候ニ付本年（二月）第六號達審理局ヲ廢止事務手續左ノ通被定候條此旨相達候事但本文ノ儀ハ府縣會ニ達シ置クヘシ

第一條　本年第四號布告府縣會規則第九條追加ニ依リ府知事縣令及ヒ府縣會ヨリ裁定ヲ請フノ具狀書ハ府知事縣令ニ於テ之ヲ取纏メ法制局長官ニ當テ差出スヘシ（十八年十二月太政官達第七十八號ヲ以テ『參事院議長』ヲ『法制局長官』ト改ム）

第二條　裁定ヲ要スル事件具狀書ヲ以テ悉サヽルコトアルトキハ府知事縣令若クハ其代理人及ヒ府縣會總代自ラ法制局ニ出頭シテ之ヲ辯明シ又ハ法制局ヨリ之ヲ召喚シテ尋問スルコトアルヘシ（同上達ヲ以テ『參事院』ヲ『法制局』ト改ム）

但府縣會總代ハ其議員タル者ニ限ル

第三條　裁定書ハ其議決ノ理由ヲ詳記シ審理委員連署シテ之ヲ發付スヘシ

◎府縣會議員選擧規則

明治二十二年二月法律第六號

朕府縣會議員選擧規則ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム（本規則ハ府縣制第九十七條ノ規定ニヨリテ府縣制施行ノ日ヨリ廢止セラルヘキモノトス）

府縣會議員選擧規則

第一條　戶長ハ毎年九月十五日ヲ期トシ其役場管內ノ選擧人名原簿ヲ調査シ其副本ヲ十月一日迄ニ郡長ニ差出スヘシ

選擧人名原簿ニハ選擧人ノ氏名、住所、生年月、納ムル所ノ地租ノ總額幷ニ其納稅地ヲ記載スヘシ

第二條　郡長ハ戶長ヨリ差出ス所ノ原簿ヲ調査シ毎年十月十五日ヲ期トシ其役所管內ノ選擧人名簿ヲ調製スヘシ

第三條　區長ハ毎年九月十五日ヲ期トシ其役所管內ノ選擧人名原簿ヲ調製シ十月十五日ヲ期トシ選擧人名簿ヲ調製スヘシ

選擧人名原簿ニ記載スヘキ事項ハ第一條第二項ニ同シ

第四條　府縣會規則第十三條ノ年齡及ヒ年限ヲ算スルハ選擧人名簿調製ノ期日ヲ以テ限界ト爲シ其地租納額ヲ算スルハ原簿調製ノ期日ヨリ前一年以上之ヲ納メ稅引續キ納ムル者ニ限ルヘシ但家督ニ依リ財產ヲ相

續シタル者ハ前財產主ノ納稅額ヲ以テ其者ノ納稅額ニ算入スヘシ

第五條　選擧人其住居スル區町村ノ外ニ於テ地租ヲ納ムルトキハ其納稅地區戶長ノ證狀ヲ添ヘ選擧人名原簿調製ノ期日迄ニ其住居地ノ區戶長ニ屆出ヘシ

前項ノ屆出ヲ爲サヽル納稅額ハ選擧及ヒ被選擧ノ資格ニ算入スルコトヲ得ス

第六條　郡區長ハ十月二十日ヨリ十五日間其役所管內ノ選擧人名原簿及ヒ選擧人名簿ノ寫ヲ其郡區役所ニ於テ縱覽セシムヘシ但關係者ノ請求アルトキハ戶長役場ニ於テモ其調製シタル原簿ノ寫ヲ示スヘシ

第七條　選擧資格アル者選擧人名簿ニ於テ脫漏又ハ誤載アルコトヲ發見シタルトキハ其縱覽期限內ニ之ヲ郡區長ニ申立ヘシ

第八條　郡區長ニ於テ脫漏又ハ誤載ノ申立ヲ受ケタルトキハ十日以內ニ之ヲ審査判定シ其申立正當ナルトキハ直ニ其人名ヲ記入又ハ削除シ其由ヲ管內ニ告示スヘシ但郡ニ在テハ仍ホ當人住居地ノ戶長ニ通知スヘシ

第九條　前條審査ノ爲メ必要アル場合ニ於テハ申立人又ハ當人ヲ召喚審問スルコトヲ得

第十條　申立人又ハ當人ニ於テ郡區長ノ判定ニ不服アルトキハ判定ノ日ヨリ七日以內ニ始審裁判所ニ出訴スルコトヲ得但其判定ハ出訴ノ爲メ停止セサルモノトス

第十一條　始審裁判所ニ於テ前條ノ訴訟ヲ受取リタルトキハ他ノ訴訟ノ順序ニ拘ハラス速ニ其裁判ヲ爲スヘシ

第十二條　前條始審裁判所ノ裁判ハ上告スルコトヲ得ト雖モ控訴スルコトヲ許サス但其裁判ハ上告ノ爲メ停止セサルモノトス

第十三條　選擧人名簿ハ十一月十五日ヲ以テ確定期限トシ次年ノ改正期日迄之ヲ据置クモノトス但裁判言渡ニ依リ訂正スヘキモノハ郡區長ニ於テ其言渡ヲ受ケタルトキヨリ二十四時間以內ニ之ヲ訂正シ其由ヲ管內ニ告示スヘシ但郡ニ在テハ仍ホ當人住居地ノ戶長ニ通知スヘシ

前項ノ外次年ノ改正期日前ト雖モ選擧ヲ行フ前ニ於テ選擧權ヲ失ヒ若シクハ選擧權ヲ有セサリシコトヲ發見シタル場合ニ於テハ郡區長ハ其人名ヲ削除スヘシ

毎年確定ノ選擧人名簿ハ臨時ノ補闕選擧ニモ之ヲ使用スルモノトス

第十四條　選擧投票ハ通常二月若クハ三月ニ於テ之ヲ行フヘシ但解散及ヒ補闕選擧ノ場合ハ此限ニ在ラス

前項ノ時期ハ府縣ノ情況ニ依リ府縣知事ニ於テ府縣會ノ議決ヲ取リ內務大臣ノ認可ヲ經テ之ヲ變更スルコトヲ得

第十五條　議員ヲ選擧スヘキトキハ少クトモ一箇月前ニ府縣知事ヨリ其月日、選擧開會並ニ投票函閉鎖ノ時刻、選擧ヲ行フヘキ郡區ノ名及ヒ選擧スヘキ議員ノ數ヲ記シ之ヲ管內ニ告示スヘシ若シ正議員ノ外補闕選擧開會ヨリ投票函閉鎖迄ノ時間ハ四時間以上十時間以內タルヘシ

第十六條　前條ノ告示アリタルトキハ郡區長ハ前條各事項並ニ選擧開會ノ場所ヲ管內ニ告示スヘシ

第十七條　郡區長ハ其管內ノ選擧人中ヨリ立會人五名ヲ定メ遲クトモ選擧ノ期日ヨリ五日以前ニ之ヲ本人ニ通知シ選擧ノ當日選擧會場ニ參會セシムヘシ

選擧分會ヲ設ケタル場合ニ於テハ本會分會トモ各其會場所屬ノ選擧人ニ就キ前項ニ依リ立會人ヲ定ムヘシ

立會人ハ正當ノ事故ナクシテ其職ヲ辭スルコトヲ得ス立會人若シ選擧開會ノ時刻ニ至リ出頭セサルトキハ參會ノ選擧人中最多額ノ地租ヲ納ムル者ヲ以テ假ニ其闕ヲ補フヘシ

第十八條　郡區長ハ選擧會長トナリ選擧會場ヲ管理スヘシ郡區長事故アルトキハ代理書記ヲ以テ之ニ充ツヘシ

選擧會書記ハ郡區長ニ於テ郡區書記中ヨリ之ヲ命スヘシ

第十九條　選擧人ハ選擧開會ノ時刻ヨリ投票函閉鎖ノ時刻ニ至ル迄何時タリトモ到着ノ順序ニ從ヒ投票スルコトヲ得

第二十條　選擧會場ニハ錠ヲ付シタル投票函及ヒ選擧錄並ニ筆墨ヲ備ヘ置クヘシ

投票函ハ投票ニ先チ參集シタル選擧人ノ面前ニ於テ之ヲ開キ其空虛ナルコトヲ示スヘシ

第二十一條　投票用紙ハ府縣知事ノ定ムル所ニ依リ各郡區ニ於テ一定ノ式ヲ用ヰ投票ノ當日選擧會場ニ備ヘ置キ選擧會長又ハ書記ヨリ之ヲ各選擧人ニ交付スヘシ

用紙ハ正議員ノ外補闕員ノ增選ヲ要スル場合ニ於テハ之ヲ甲乙二種ニ分チ甲種ハ正議員ノ爲メノ用紙ト爲シ乙種ハ補闕員ノ爲メノ用紙ト爲スヘシ

第二十二條　選擧人ハ自ラ投票ヲ行フヘシ代人ニ託スルコトヲ得ス

第二十三條　選擧人ハ選擧會場ニ於テ投票用紙ニ被選擧人並ニ自己ノ氏名ヲ記シ捺印スヘシ但氏名ノ外住所若クハ位階勳等其他敬稱ノ類ヲ記スルハ妨ナシ

第二十四條　選擧人投票ヲ爲サントスルトキハ選擧會長ハ其住所氏名ヲ選擧人名簿ニ照シ名簿ニ消印ヲ捺シ選擧人ヲシテ自ラ之ヲ投票函ニ投入セシムヘシ

第二十五條　選擧人ニシテ文字ヲ書スルコト能ハサル由ヲ申立ルトキハ選擧會長ハ書記ヲシテ代書セシメ之ヲ本人ニ讀聞セ並ニ立會人ニ示シタル後捺印投票セシム

第二十六條　選擧ニ關スル吏員及ヒ選擧人ノ外何人タリトモ選擧會場ニ入ルコトヲ得ス但會場臨視ノ職權アル官吏ハ此限ニ在ラス

第二十七條　選擧人名簿ニ記載セラレタル者ノ外投票スルコトヲ得ス但記載セラルヘキ裁判言渡書ヲ所持シテ參會スル者ハ此限ニ在ラス

第二十八條　選擧人ハ會場ニ於テ演說討論ヲ爲シ若クハ喧噪ニ涉リ又ハ互ニ投票ヲ勸誘スルコトヲ得ス

第二十九條　選擧會場ニ於テ秩序ヲ紊ル者アルトキハ選擧會長ハ之ヲ警戒シ其命ニ從ハサルトキハ之ヲ會場外ニ退出セシムヘシ但其投票ヲ爲サシムル爲メ再ヒ之ヲ呼入ルヽコトヲ得

選擧會長ハ會場取締ノ爲メ必要ト認ムルトキハ警察官ノ助力ヲ求ムルコトヲ得

第三十條　選擧權ナク又ハ他人ノ氏名ヲ詐稱シテ投票セントスル者アルトキハ選擧會長ハ其投票ヲ取上クヘシ

第三十一條　投票函閉鎖ノ時刻ニ至ルトキハ選擧會長ハ其由ヲ宣告シ書記ヲシテ一時選擧會場ノ入口ヲ鎖サシメ參會者ニ問フニ未タ投票セサリシ者ナキヤヲ以テシ若シ之アルニ於テハ直ニ投票セシメタル後投票函ヲ閉鎖スヘシ

第三十二條　選擧會場ニハ點數簿二冊ヲ備ヘ書記二人ヲシテ各一冊ヲ擔任セシムヘシ

第三十三條　投票函閉鎖後十分時間ヲ經過スレハ選擧會長ハ立會人ノ面前ニ於テ投票函ヲ開キ逐次投票ヲ取出シ披封點檢シテ之ヲ書記ニ付シ選擧人被選擧人ノ氏名ヲ朗讀セシメ點數簿擔任ノ書記ヲシテ被選擧人ノ得點ヲ點數簿ニ記入セシムヘシ前項ノ點檢中若シ無効ノ投票ヲ發見シタルトキハ之ニ抹線ヲ加ヘ一部分無効ノモノハ其部分ニ抹線ヲ加フヘシ

第三十四條　選擧人ハ投票點檢ノ際之ヲ參觀スルコトヲ得

第三十五條　投票點數ノ記入ヲ終リタルトキハ選擧會長ハ書記ヲシテ各被選擧人得點ノ合計ヲ點數簿ニ記入シテ之ヲ朗讀セシムヘシ

第三十六條　點數記入並ニ計算其他書記ノ事務ハ總テ選擧會長並ニ立會人ノ面前ニ於テ之ヲ爲スヘシ

第三十七條　點數ノ合計ヲ記入シ終リタルトキハ選擧會長ハ立會人ノ面前ニ於テ多數ヲ得タル者ヨリ順次ニ其被選擧權ノ有無ヲ査定シ同數ハ年長ヲ取リ同年ハ抽籤ヲ用ヰ其當選ヲ定ムヘシ但即時ニ其當選ニ必要ナル事實ヲ確知シ得サルトキハ調査ニ必要ナル時日ノ間其査定ヲ延ハスコトヲ得

分會ヲ設ケタル場合ニ於テハ第五十條ニ依リ當選ヲ定ムルモノトス

當選タルヘキ多數ヲ得タル者ノ被選擧權ヲ有セサルコトヲ發見シタルトキハ順次其次點者ヲ以テ當選ト爲スヘシ此場合ニ於テハ郡區長ハ當選者ノ氏名ト共ニ其事由ヲ告示スヘシ

當選タルヘキ多數ヲ得タル被選擧人他郡區ノ人ニシテ直ニ其當選ヲ定メ難キトキハ第四十一條ニ依リ之ヲ定ムヘシ

第三十八條　點檢濟ノ投票ハ之ヲ取纏メ封緘ノ上選擧會長立會人並ニ書記之ニ捺印スヘシ

前項ノ投票ハ封印ノ儘附屬書類ト共ニ一年間郡區役所ニ保存スヘシ若シ選擧ニ關シ訟訴又ハ告訴告發アルトキハ一年ヲ過クルモ其裁判確定ニ至ルマテ之ヲ保存スヘシ

第三十九條　左ノ事項ハ之ヲ選擧錄中ニ記入スヘシ

一　選擧閉會ノ月日並ニ時刻
二　選擧會長及ヒ書記ノ氏名
三　立會人ノ住所氏名
四　第二十七條但書ニ依リ投票セシメタルトキハ其顚末
五　第三十條ノ處分ヲ爲シタルトキハ其顚末
六　投票函閉鎖ノ時刻
七　各被選擧人ノ得點數
八　當選人ノ住所氏名若シ直ニ當選ヲ定メ難キトキハ其事由
九　選擧閉會ノ時刻
十　右ノ外選擧會長ニ於テ緊要ト認ムル事項

當選ノ査定ヲ延シタルトキハ其結果ヲ追記スヘシ

第四十條　選擧錄ニハ選擧會長立會人並ニ書記之ニ署名捺印スヘシ

第四十一條　當選タルヘキ多數ヲ得タル被選擧人他郡區ノ人ナルトキハ郡區長ハ其本籍地ノ郡區長ニ照會シ被選擧權ヲ有スルヤ否ヤノ證明ヲ求ムヘシ若シ其權ヲ有セサルトキハ第三十七條第三項ノ例ニ依ル

第四十二條　左ノ投票ハ無効トス

一　選擧人名簿ニ記載ナキ者ノ投票但裁判言渡書ヲ所持シタルニ依リ投票シタル者ハ此限ニ在ラス
二　成規ノ用紙ヲ用ヰサルモノ
三　選擧人又ハ被選擧人ノ氏名ヲ記載セサルモノ
四　選擧人ノ氏名ノ讀ミ難キモノ又ハ何人タルヲ知ルヘカラサルモノ
五　選擧人被選擧人ノ住所氏名ノ外餘事ヲ記入スルモノ但位階勳等其他敬稱ノ類ヲ記入スルモノハ餘事ト見做スノ限ニ在ラス
六　被選擧人ノ氏名ノ讀ミ難キモノ又ハ其何人タルヲ知ルヘカラサルモノ但列記ノ被選擧人ニ付テハ仍ホ其効アリトス
七　被選擧權ナキ者ヲ記載シタルモノ但列記ノ被選擧人ニ付テハ仍ホ其効アリトス

第四十三條　投票ニ記載ノ被選擧人其選擧スヘキ定數ニ足ラサルモ之ヲ無効トセス又定數ニ過クルトキハ前條第六第七ニ觸ルヽモノアルト否トヲ問ハス末尾ヨリ其過數ヲ順次ニ棄却スヘシ一人ノ氏名ヲ複記シタルモノハ一人トシテ計算スヘシ

第四十四條　選擧人又ハ被選擧人ノ住所氏名ニ誤字脫字アリ又ハ假名字ヲ用ユルモ其何人ノ何人ヲ選擧シタルコト明瞭ナルトキハ其投票ヲ有効トスヘシ

第四十五條　投票効力ノ有無ニ付疑義アルトキハ立會人ノ意見ヲ問キ選擧會長之ヲ決定スヘシ其決定ニ對シテハ選擧會場ニ於テ異議ヲ申立ツルコトヲ得ス

第四十六條　郡區ノ區域廣濶ニ過クルカ又ハ郡區內島嶼ノ地アリテ選擧人ノ參會ニ不便ナル爲メ已ムヲ得サル場合ニ於テハ郡區長ハ府縣知事ノ指揮ニ依リ又ハ府縣知事ノ許可ヲ得テ選擧分會ヲ設クルコトヲ得

分會ノ爲メ特ニ選擧人名簿ヲ調製スルヲ要セスト雖モ選擧人名簿中ニ各選擧人所屬ノ會場ヲ區別シ豫メ分會場所屬ノ區域並ニ會場ヲ管內ニ告示スヘシ

第四十七條　分會ハ本會ト同日時ニ之ヲ開キ投票時間モ亦本會ト同一タルヘシ其他選擧ノ手續會場ノ取締選擧錄ノ記載等ハ總テ本會ニ準スヘシ但島嶼其他遠隔ノ地ニ限リ府縣知事ニ於テ適宜其投票ノ期日ヲ異ニシ選擧本會ノ投票期日迄ニ其投票函ヲ送致セシムルコトヲ得

第四十八條　分會選擧會長ハ上席郡區書記ヲ以テ之ニ充ツヘシ

分會書記ハ郡區長ニ於テ其郡區書記又ハ其地ノ戶長又ハ戶長役場吏員中ヨリ之ヲ命スヘシ

第四十九條　分會ニ於テ投票函ヲ閉鎖シタルトキハ之ニ封印シ選擧會長及ヒ書記ノ中少クトモ一名付添直ニ本會場ニ送付スヘシ若シ立會人又ハ他ノ選擧人中同行ヲ望ム者アルトキハ之ヲ許スヘシ

第五十條　分會ヲ設ケタルトキハ本會場ニ於テハ投票函閉鎖ノ後分會投票函ノ到着ヲ待チ第三十三條ノ手續ヲ爲シ合算ノ上總數ヲ以テ當選ヲ定ムヘシ

第五十一條　當選者ノ定マリタルトキハ郡區長ハ直ニ其旨ヲ當選者ニ通

知スヘシ

當選者當選ノ通知ヲ受ケタルトキハ五日以内ニ當選承諾ノ屆出ヲ爲スヘシ若シ當選ノ通知ヲ爲シタル日ヨリ十日以内ニ承諾ノ屆出ヲ爲サヽルトキハ當選ヲ辭シタルモノト見做スヘシ當選ヲ辭シタル者アルトキハ郡區長ハ次點者ヲ以テ當選者ト爲スヘシ

第五十二條　選擧ノ結果ハ郡區長ヨリ之ヲ府縣知事ニ報告スヘシ

第五十三條　當選者ノ住所氏名ハ府縣知事ニ於テ之ヲ管内ニ告示スヘシ

第五十四條　府縣會規則第十條第二項ニ依リ補闕員ヲ增選スルトキハ其選擧ハ正議員選擧ト同會ニ於テ同時ニ之ヲ行フ但其投票函ハ正議員ノ投票函ト異ニスヘシ

第五十五條　一人ニシテ正議員補闕員ノ選ニ併セ當ルトキハ之ヲ正議員ト爲シ其次點者ヲ以テ補闕員當選ト爲スヘシ

第五十六條　當選ノ査定ニ不服アル關係者ハ當選者ノ氏名告示ヨリ十日以内ニ府縣知事ニ其更正又ハ選擧取消ノ申立ヲ爲スコトヲ得府縣知事ノ判定ニ服セサル者ハ二十日以内ニ控訴院ニ出訴スルコトヲ得但其判決ハ終審トス

第五十七條　當選者確定ノ後其當選者ノ被選擧權ヲ有セサリシコトヲ發見スルトキハ府縣知事ハ其當選ヲ取消シ其次點者ヲ以テ當選ト爲スヘシ但此場合ニ於テハ其事由ヲ管内ニ告示スヘシ

第五十八條　選擧全會ヲ取消シ更ニ選擧ヲ命スルハ其選擧ノ選擧規定ニ違フ場合ニ限ル但規定ニ違フ所アルモ其事輕微ニシテ選擧ノ結果ニ異動ヲ生セス又ハ其事ノ更正シ得ヘキモノハ取消ノ限ニ在ラス

選擧全會ノ取消ハ府縣知事ヨリ内務大臣ニ具狀シ其認可ヲ經テ之ヲ爲スヘシ但其事由ヲ管内ニ告示スヘシ

第五十九條　納稅額年齡其他選擧資格ニ必要ナル事項ヲ詐稱シ選擧人名簿ニ記載セラレタル者ハ二圓以上二十圓以下ノ罰金ニ處ス其被選擧資格ニ必要ナル事項ヲ詐稱シテ當選者ト爲リタル者又ハ其資格ヲ有セサルモ其事ヲ告ケスシテ當選者トナリタル者ハ十圓以上百圓以下ノ罰金ニ處ス

第六十條　投票ヲ得又ハ他人ニ投票ヲ得セシメ若クハ他人ノ爲メニ投票ヲ爲スコトヲ抑止スルノ目的ヲ以テ直接又ハ間接ニ金錢物品ヲ授與シ又ハ授與スルコトヲ約束シタル者ハ五圓以上五十圓以下ノ罰金ニ處ス

其授與又ハ約束ヲ受クタル者モ亦同シ

直接又ハ間接ニ金錢物品ヲ授與シ又ハ授與スルコトヲ約束シテ投票ヲ得又ハ他人ニ投票ヲ得セシメ若クハ他人ノ爲メニ投票ヲ爲スコトヲ抑止シタル者ハ刑法第二百三十四條ノ例ヲ以テ論ス其授與又ハ約束ヲ受ケテ投票ヲ爲シ又ハ投票ヲ爲サヽル者モ亦同シ

第六十一條　戎器又ハ兇器ヲ携帶シテ選擧會場ニ入リタル者ハ二圓以上二十圓以下ノ罰金ニ處ス

第六十二條　投票ヲ得又ハ他人ニ投票ヲ得セシメ若クハ他人ノ爲メニ投票ヲ爲スコトヲ抑止スルノ目的ヲ以テ選擧人ニ暴行ヲ加ヘタル者ハ十五日以上三月以下ノ輕禁錮ニ處シ二圓以上二十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第六十三條　投票ヲ妨害スルノ目的ヲ以テ途中又ハ其他ニ於テ選擧人ニ暴行ヲ加ヘ又ハ選擧人ヲ恐嚇スル者又ハ選擧ニ關スル吏員若クハ立會人ニ暴行ヲ加ヘ又ハ暴行ヲ以テ選擧會場ヲ騷擾シ又ハ投票函ヲ抑留毀壞若クハ刼奪シタル者ハ二月以上一年以下ノ輕禁錮ニ處シ五圓以上五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第六十四條　多衆ヲ嘯集シテ前條ノ罪ヲ犯シタル者ハ六月以上二年以下ノ重禁錮ニ處ス其情ヲ知リ嘯集ニ應シタル者ハ一月以上六月以下ノ輕禁錮ニ處ス

第六十五條　當選者第五十九條乃至第六十四條ノ刑ニ處セラレタルトキハ其當選ハ無効トス

第六十六條　選擧權ナク又ハ他人ノ氏名ヲ詐稱シテ投票ヲ爲サントシ又ハ投票ヲ爲シタル者ハ二圓以上二十圓以下ノ罰金ニ處ス

第六十七條　選擧ニ關スル犯罪ハ六箇月ヲ以テ期滿免除トス

第六十八條　府縣會規則第十五條第十七條第十八條第十九條其他本規則ニ抵觸スル規定ハ總テ之ヲ廢止ス

附　則

明治二十二年ニ於テハ府縣知事ハ本規則規定ノ時期ニ拘ハラス選擧人名原簿及ヒ人名簿ヲ調製セシメ規定ノ時期ニ至ル仍ホ之ヲ訂正セシムヘシ

前項ノ名簿調製前議員ノ選擧ヲ要スル府縣ニ於テハ舊名簿ヲ用ユルコトヲ得ト雖モ其他ハ總テ本規則ニ依ルヘシ

島司ヲ置キタル地ニ於テハ郡長ノ事務ハ島司ニ於テ之ヲ行フヘシ

◎府縣會議員選擧ニ衆議院議員選擧法罰則補則ヲ適用スルノ件

明治二十三年五月
法律第四十一號

朕府縣會議員選擧ニ衆議院議員選擧法罰則補則ヲ適用スルノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

明治二十二年二月法律第六號府縣會議員選擧規則ニ依ル選擧ニハ府縣制ヲ施行スル迄ノ間衆議院議員選擧法罰則補則ヲ適用ス但其ノ第二條第一項ニ衆議院議員選擧法第九十二條ヲ適用スル場合ニ於テハ府縣會議員選擧規則第六十二條其ノ第二條第二項ニ衆議院議員選擧法第九十三條ヲ適用スル場合ニ於テハ府縣會議員選擧規則第六十三條ヲ適用スルモノトス

府縣會議員選擧規則中此ノ法律ニ矛盾スルモノハ効力ヲ有セス

◎市制施行地ニ係ル府縣會議員選擧及市公民資格

明治二十二年二月法律第七號

朕市制施行ニ付府縣會議員ノ選擧及市公民ノ資格ニ關スル件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

第一條　市制ヲ施行スルモ府縣會議員ハ之ヲ改選セス

第二條　郡部ト經濟ヲ異ニスル區ニ市制ヲ施行スルモ府縣會議員選擧ノ區域及區部會郡部會ニ係ル規定竝區部議員ノ數ハ總テ從前ノ通タルヘシ但區部ハ改テ市部ト稱スヘシ

區ノ區域ヲ變更シテ市ト爲スニ因リ議員ノ數ヲ增減スヘキトキハ府縣會ノ議決ヲ以テ之ヲ增減スルコトヲ得此場合ニ於テ其退職スヘキ議員ハ抽籤ヲ以テ定メ其增加スヘキ議員ハ新ニ選擧スヘシ

第三條　郡内ノ市街ニ市制ヲ施行スル場合ニ於テモ府縣會議員選擧ノ區域ハ之ヲ變更セス其選擧事務ハ郡長ニ於テ之ヲ管理シ選擧ニ關スル費用ハ郡役所經費ヲ以テ支辨スヘシ

第四條　郡部ト經濟ヲ異ニスル區ニ於テ從來地方稅ヲ以テ支辨シタル事業ニシテ市ノ事業ニ屬スヘキモノハ府縣會ノ議決ヲ以テ市ニ引繼クヘシ

第五條　郡部ト經濟ヲ異ニセサル區ニ市制ヲ施行シ又ハ町村ニ市制ヲ施行シ若クハ町村ヲ區ニ合併シテ市制ヲ施行スル場合ニ於テハ其區費又ハ町村費ヲ二年以來納メタル者ヲ市制第七條ノ市ノ負擔分任者ト看做スヘシ

郡部ト經濟ヲ異ニスル區ニ市制ヲ施行スル場合ニ於テハ府縣會ノ議決ヲ以テ區部地方稅中專ラ區ノ費用ニ支出シタルモノヲ區分シ其區分シタル稅金ヲ二年以來納メタル者ヲ市制第七條ノ市ノ負擔分任者ト看做スヘシ其區分シタル稅金ノ外區費ヲ納メタル者アルトキハ其金額ヲ併算スヘシ

◎郡區町村編制法

明治十一年七月
布告第十七號

郡區町村編制法左ノ通被定候條此旨布告候事（二十三年五月十七日法律第三十六號ヲ以テ郡制ヲ發布シ郡制施行ノ地ハ施行ノ日ヨリ此條例ヲ廢ス）

第一條　地方ヲ畫シテ府縣ノ下郡區町村トス

第二條　郡區村ノ區域名稱ハ總テ舊ニ依ル

第三條　郡ノ區域廣濶ニ過キ施政ニ不便ナル者ハ一郡ヲ畫シテ數郡トナス（東西南北上中下某郡ト云カ如シ）

第四條　〔三府五港其他人民輻湊ノ地ハ別ニ一區トナ

シ其廣濶ナル者ハ區分シテ數區トナス」（市制町村制ニ依リ市町村制施行ノ地方ハ本條ヲ廢ス）

第五條　毎郡ニ郡長各一員ヲ置キ毎區ニ區長各一員ヲ置ク郡ノ狹小ナルモノハ數郡ニ一員ヲ置クコトヲ得

第六條〔毎町村ニ戸長各一員ヲ置ク又數町村ニ一員ヲ置クコトヲ得〕

〔但區内ノ町村ハ區長ヲ以テ戸長ノ事務ヲ兼ヌルコトヲ得〕（同上）

第七條　此編制法ヲ施行シ難キ島嶼ハ其制ヲ異ニスルヲ得（十三年五月第十四號布告ヲ以テ本條追加ス）

第八條　地方ノ便益若クハ人民ノ請願ニ由リ止ムヲ得サル理由アルモノハ郡區町村ノ區域名稱ヲ變更スルコトヲ得（同上）

第九條〔第三條等四條第七條第八條ノ施行ヲ要スルトキハ府知事縣令ヨリ内務卿ニ具狀シ政府ノ裁可ヲ受クヘシ〕

〔但町村區域名稱ノ變更ハ内務卿ノ認可ヲ受クヘシ〕（同上而シテ市制町村制ノ規定ニヨリ同制施行ノ地ハ本條全躰ノ適用ヲ廢ス）

◎郡制

明治廿三年五月　法律第三十六號

朕郡制ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

郡制

第一章　總則

第一條　郡ノ廢置分合及郡界ノ變更ハ法律ヲ以テ之ヲ定ム

郡界ニ當ル市町村境界ヲ變更スルトキハ郡界モ亦自ラ變更スルモノトス

第二條　郡内ノ町村ヲ變シテ市ト爲シ若ハ市ヲ變シテ郡内ノ町村ト爲スハ其市會町村會ノ申請ニ依リ内務大臣之ヲ定ム

第三條　第一條第二條ノ處分ニ付其財産處分ヲ要スルトキハ府縣參事會之ヲ議決スヘシ但特ニ法律ノ規定アルモノハ此限ニアラス

第二章　郡會

第四條　郡會ハ郡内町村ニ於テ選擧シタル議員及大地主ニ於テ選擧シタル議員ヲ以テ之ヲ組織ス

第五條　町村ニ於テ選擧スヘキ郡會議員ノ數ハ毎町村各一名トス

郡會議員ノ數二十名以上ニ及フトキハ二十名ヲ以テ制限トス此場合ニ於テ議員配當法ハ首トシテ人口ヲ標準トシ郡會ニ於テ議決シ府縣知事ノ認可ヲ受クヘシ

郡會議員ノ數十名ニ滿タサルトキハ郡會ノ議決ニ依リ府縣知事ノ認可ヲ經其數ヲ增シテ十名ニ至ルヿヲ得其配當法ハ首トシテ人口ヲ標準トシ郡會ニ於テ議決シ府縣知事ノ認可ヲ受クヘシ

本條議員配當法ハ郡内ノ町村數ニ增減アリタル場合ノ外初回ハ三年間爾後ハ十二年以上ニ至リ町村ノ人口ニ著シキ增減アルニ非サレハ改正セサルモノトス

議員配當法ヲ改正スルトキハ議員全數ヲ改選スヘシ

第六條　一町村ニ於テ一名以上ノ議員ヲ選擧スルハ其町村會之ヲ行ヒ數町村ニ於テ一名若ハ一名以上ノ議員ヲ選擧スルハ其各町村會會同シテ之ヲ行フヘシ

第七條　町村組合ニシテ組合會ヲ設ケ其町村一切ノ事務ヲ共同處分スルモノハ第四條乃至第六條ノ規定ニ關シテハ之ヲ一町村ト同視シ其組合會ニ於テ議員選擧ヲ行フヘシ

第八條　大地主ハ町村ニ於テ選擧スヘキ議員定數ノ外其定數ノ三分ノ一ヲ互選スルモノトス若端數ヲ生スルトキハ之ヲ棄却スヘシ

選擧ヲ行フコトヲ得ヘキ大地主ニシテ其員數町村ニ於テ選擧スヘキ議員定數ノ三分ノ一以下ナルトキハ其大地主ハ選擧ニ依ラスシテ郡會議員タルモノトス但定期改選ノ期限内ニ於テハ大地主ノ員數減シテ三分ノ一以下ニ至ルト雖モ解散ノ爲改選スル場合ヲ除クノ外ハ本項ヲ適用スルノ限ニ在ラス

第九條　大地主トハ郡内ニ於テ町村税ノ賦課ヲ受クル所有地ニシテ地價總計一萬圓以上ヲ有スル地主ヲ云フ

第十條　郡内町村公民ニシテ町村會ノ選擧ニ參與スルコトヲ得ヘキ者及大地主中自ラ選擧ニ加ハルコトヲ得ヘキ者ハ總テ郡會ノ被選權ヲ有ス

住居ヲ移シタル爲町村ノ公民權ヲ失ヒタル者其住居同郡内ニ在リ且他ノ要件ヲ失ハサルトキハ仍郡會ノ被選權ヲ有ス

左ニ掲クル者ハ選擧ニ係ルト否トヲ問ハス郡會議員タルコトヲ得ス

一　所屬府（東京府ハ警視廳トモ）縣竝ニ其郡ノ官吏

二　其郡ノ有給吏員

三　神官及諸宗ノ僧侶又ハ教師

四　小學校教員

前項ノ外ノ官吏ニシテ常選ニ應シ又ハ第八條第二項ノ權利ヲ行ハントスルトキハ本屬長官ノ許可ヲ受クヘシ

第十一條　大地主ニシテ選擧權ヲ有スルハ帝國臣民ニシテ公權ヲ有スル男子ニ限ル

年齡二十歲未滿ノ者及治産ノ禁ヲ受ケタル者ハ選擧權ヲ有セサルモノトス

大地主ノ選擧權ハ身代限處分中又ハ租税滯納處分中又ハ公權ノ剝奪若ハ停止ヲ附加スヘキ重輕罪ノ爲裁判上ノ訊問若ハ勾留中ハ之ヲ停止ス

本條ノ規定ハ選擧ニ依ラスシテ郡會議員タル者ニモ適用ス

第十二條　選擧權ヲ有スル大地主ハ代人ヲ以テ選擧ヲ行フコトヲ得

陸海軍ノ現役ニ服スル者ハ代人ヲ以テスルニ非サレハ選擧ヲ行フコトヲ得ス

代人ハ帝國臣民ニシテ公權ヲ有シ町村制ニ定メタル獨立ノ男子ニ限ル但一人ニシテ數人ノ代理ヲ爲スコトヲ得ス且代人ハ委任狀ヲ以テ代理ノ證トスヘシ

本條ノ規定ハ第八條第二項ノ權利ヲ行フ場合ニモ適用スルモノトス但其代人ハ郡會ニ被選權ヲ有スル者ニシテ郡會議員タラサル者ニ限ル

第十三條　郡會議員ハ名譽職トス

町村ニ於テ選擧シタル議員ノ任期ハ六年トシ毎三年其半數ヲ改選ス若其員數二分シ難キトキハ初回ニ於テ多數ノ一半ヲ解任セシム初回ニ於テ解任スヘキ者ハ郡會議長郡會ニ於テ自ラ抽籤シテ之ヲ定ム

大地主ニ於テ選擧シタル議員ノ任期ハ三年トシ毎三年其全數ヲ改選ス解任ノ議員ハ再選セラルルコトヲ得

第十四條　議員中闕員アルトキハ遲クトモ六箇月以内ニ補闕選擧ヲ行フヘシ

補闕議員ハ其前任者ノ殘任期間在職スルモノトス

第十五條　郡長ハ郡會議員改選前選擧權アル大地主ノ名簿ヲ製シ之ニ其資格ヲ記載シ其氏名ヲ告示スヘシ

關係者ニ於テ大地主名簿ノ正否ニ關シ異議アルトキハ告示後二十一日以内ニ郡長ニ申立テ其郡長ノ裁決ニ不服ナル者ハ府縣參事會ニ訴願シ其府縣參事會ノ裁決ニ不服ナル者ハ行政裁判所ニ出訴スルコトヲ得

大地主名簿ニ登錄セラレサル者ハ選擧ニ參與シ及第八條第二項ニ依リ郡會議員タルコトヲ得ス

大地主名簿ハ次ノ定期改選前ニ行フヘキ補闕選擧ニモ亦適用スルモノトス但大地主ノ資格ヲ失ヒ又ハ選擧權ノ要件ヲ失ヒタル者ハ之ヲ削除シ其氏名ヲ告示スヘシ其處分ニ對シ異議アルトキハ本條第二項ノ例ニ依ル

定期改選ノ期限内新ニ選擧權ヲ得又ハ選擧ニ依ラスシテ郡會議員タルノ權利ヲ得タル者ハ解散ノ爲改選スル場合ヲ除ク外期限内ニ於テ其名簿ニ登錄セサルモノトス

第十六條　郡會議員ノ選擧ハ郡長ノ告示ニ依リ之ヲ行フヘシ其告示ハ遲クトモ選擧ノ日ヨリ七日前ニ之ヲ發スヘシ

第十七條　選擧ノ順序ハ先ツ町村之ヲ行ヒ次ニ大地主之ヲ行フヘシ
町村ニ於テ行フ選擧ハ町村制第四十六條ノ規定ニ從フヘシ但數町村會
會同シテ行フ選擧ハ郡長又ハ郡長ノ指定スル町村長ヲ選擧會長トシテ
之ヲ行フヘシ
大地主ニ於テ行フ選擧ハ郡長ヲ選擧會長トシテ之ヲ行フヘシ

第十八條　大地主ニ於テ選擧ヲ行フトキハ左ノ規定ニ依ルヘシ
一　郡長ハ遅クトモ選擧ノ日ヨリ七日前選擧人ニ招集狀ヲ發シ選擧ノ
場所日時ヲ告知スヘシ
二　選擧掛ハ選擧會長ニ於テ臨時ニ選擧人中ヨリ選任シタル立會人二
名若ハ四名及選擧會長ヲ以テ之ヲ組織ス
三　選擧掛ハ選擧會長ハ選擧會ヲ開閉シ其會場ノ取締ニ任ス
四　投票ハ選擧人自ラ選擧會長ノ面前ニ於テ之ヲ投票函ニ投入ス
五　投票ハ之ヲ無効トス
一　記載セル人名ノ讀ミ難キモノ
二　被選人ノ何人タルヲ確認シ難キモノ
三　被選權ナキ人名ヲ記載スルモノ
四　但爵位職業身分住所又
被選人氏名ノ外他ノ文字ヲ記入スルモノ
ハ敬稱ハ此限ニ在ラス本項一ヨリ三ニ至ルノ場合ニ於テ票中他
ニ列記ノ被選人ニ付テハ仍其効アリトス
投票ノ受理並ニ効力ニ關スル事項ハ選擧掛假ニ之ヲ議決ス可否同
數ナルトキハ選擧會長之ヲ決ス
六　有効投票ノ多數ヲ得タル者ヲ以テ當選トス投票ノ數相同キモノハ
年長者ヲ取リ年齡相同キトキハ選擧會長自ラ抽籤シテ其當選ヲ定
ム
七　選擧掛ハ選擧錄ヲ製シテ選擧ノ顚末ヲ記錄シ選擧ヲ終リタル後之
ヲ則讀シテ署名スヘシ
八　投票ハ選擧ノ効力確定スル迄之ヲ保存スヘシ

第十九條　選擧ヲ終リ當選人定マリタルトキハ町村會ニ於テ行フ選擧ニ
在テハ町村長數町村會會同シテ行フ選擧及大地主ニ於テ行フ選擧ニ在
テハ選擧會長直ニ當選人ニ通知シ町村長ハ之ヲ郡長ニ報告スヘシ
當選人當選ノ通知ヲ受ケタルトキハ五日以內ニ其當選ヲ承諾スルヤ否
ヲ郡長ニ屆出ヘシ
一人ニシテ數箇所ノ選擧ニ當リタルトキハ同期限內ニ何レノ選擧ニ應
スヘキコト及選擧ニ依ラスシテ郡會議員タルヘキ大地主ニシテ町村ノ
選擧ニ當選シタルトキハ其選擧ニ應スルコト又ハ應セサルコトヲ同期
限內ニ郡長ニ屆出ヘシ
前二項ノ屆出ヲ其期限內ニ爲サヽルトキハ選擧ヲ辭スル者ト視做スヘ
シ
町村ノ選擧ニ應スル大地主ハ第八條第二項ノ權利ヲ有スル者ト雖モ二
重ニ其權ヲ行フコトヲ得サルモノトス

第二十條　議員ノ當選ヲ辭シ又ハ承諾ノ屆出ヲ爲サヽル者アルトキハ郡
長ハ七日以內ニ更ニ選擧ヲ行ヒ又ハ町村長ニ命シテ更ニ選擧ヲ行ハシ
ムヘシ

第二十一條　當選人確定シタルトキハ郡長ハ直ニ當選證書ヲ付與シ及管
內ニ告示スヘシ

第二十二條　選擧人選擧ノ効力ニ關シテ訴願セントスルトキハ選擧ノ日
ヨリ十四日以內ニ之ヲ郡長ニ申立ツルコトヲ得

第二十三條　當選人其當選ノ際資格ノ要件ヲ有セサリシコト發覺スルト
キハ其當選ハ無効トス
當選人當選後資格ノ要件ヲ失フトキハ議員ノ職ヲ失フモノトス

第二十四條　郡會ニ於テ其議員中議員ノ資格ヲ有セサル者アルコトヲ發
見スルトキハ其議決ヲ以テ之ヲ郡長ニ通知スヘシ

第二十五條　郡會議員被選權ノ有無及選擧ノ効力ハ郡參事會之ヲ裁決
ス
郡參事會ノ裁決ニ不服ナル者ハ府縣參事會ニ訴願シ其府縣參事會ノ裁
決ニ不服ナル者ハ行政裁判所ニ出訴スルコトヲ得

第二十六條　郡會ノ議決スヘキ事件左ノ如シ
一　郡ノ歲入出豫算ヲ定ムル事

二　決算報告ヲ認定スル事
三　郡有不動產ノ賣買交換讓渡讓受並ニ賃入書入ノ事
四　歲入出豫算ヲ以テ定ムルモノヲ除ク外新ニ義務ノ負擔ヲ爲シ及權
利ノ棄却ヲ爲ス事
五　郡有財產ノ管理及營造物ノ維持方法ヲ定ムル事
其他法律命令ニ依リ郡會ノ權限ニ屬スル事項ヲ議決ス

第二十七條　郡會ハ其權限ニ屬スル事件ヲ郡參事會ニ委任スルコトヲ得

第二十八條　郡會ハ其郡ノ全部又ハ一部ノ公益ニ關スル事件ニ付郡長又ハ府縣知事
ニ建議スルコトヲ得

第二十九條　郡會議員ハ選擧人ノ指示者ハ委囑ヲ受クヘカラサルモノトス

第三十條　郡會ハ郡長ヲ以テ議長トス
郡會ハ改選後ノ初會ニ於テ議長代理者一名ヲ互選スヘシ
議長及議長代理者共ニ故障アルトキハ臨時議長代理ヲ互選スヘシ

第三十一條　郡長若ハ特ニ郡長ノ委任ヲ受ケタル郡吏員ハ郡會ノ議事ニ
參與スルコトヲ得但議決ニ加ハルコトヲ得ス
前項ノ列席者ニ於テ發言ヲ求ムルトキハ議長ハ何時ニテモ之ヲ許スヘ
シ

第三十二條　郡會ハ每年一回通常會ヲ開クヘシ其他必要アルトキハ其事
件ニ限リ臨時會ヲ開クコトヲ得
郡會ハ郡長之ヲ招集ス若議員三分ノ一以上ニ於テ臨時ノ招集ヲ請求ス
ルトキハ之ヲ招集スヘシ招集ハ開會ノ日ヨリ十四日前迄ニ告示スヘシ
但急施ヲ要スル場合ハ此限ニ在ラス
郡會ハ郡長之ヲ開閉ス

第三十三條　郡會ハ議員半數以上出席スルニ非サレハ會議ヲ開キ議決ヲ
爲スコトヲ得但同一ノ議事ニ付開會再回ニ至ルモ議員猶其半數ニ滿
タサルトキハ此限ニ在ラス

第三十四條　郡會ノ議決ハ過半數ニ依ル可否同數ナルトキハ議長ノ決ス
ル所ニ依ル

第三十五條　議員ハ自己及其父母兄弟若ハ妻子ノ一身上ニ關スル事件ニ
付テハ會議ノ承諾ヲ經ルニ非サレハ郡會ノ議事ニ參與シ及議決ニ加ハ
ルコトヲ得ス

第三十六條　郡會ニ於テ選擧ヲ行フトキハ第十八條四ヨリ六ニ至ル規定
ニ依ルヘシ

第三十七條　郡會ノ會議ハ公開ス但左ノ場合ハ此限ニ在ラス
一　郡長ヨリ傍聽禁止ノ要求ヲ受ケタルトキ
二　議長又ハ議員三名以上ノ發議ニ由リ傍聽禁止ヲ可決シタルトキ
議長又ハ議員ノ發議ハ討論ヲ用ヰスシテ其可否ヲ決スヘシ

第三十八條　議長ハ議事ノ順序ヲ定メ會議及選擧ノ事ヲ總理シ其日ノ會
議ヲ開閉シ並ニ延會シ議場ノ秩序ヲ保持ス

第三十九條　議員ハ會議中無禮ノ語ヲ用ヰ及他人ノ身上ニ涉リ言論スル
コトヲ得ス

第四十條　會議中此法律若ハ議事規則ニ違ヒ其他議場ノ秩序ヲ紊ル議員
アルトキハ議長ハ之ヲ警戒シ又ハ制止シ又ハ發言ヲ取消サシム命ニ從
ハサルトキハ議長ハ當日ノ會議ヲ終ルマテ發言ヲ禁止シ又ハ議場ノ外
ニ退去セシムヘシ若强抗ニ涉ル者アルトキハ警察官ノ處分ヲ求ムルコ
トヲ得
議場騷擾ニシテ整理シ難キトキハ議長ハ當日ノ會議ヲ中止シ又ハ之ヲ
閉ツルコトヲ得

第四十一條　會議ノ傍聽人公然可否ヲ表シ又ハ喧騷ニ涉リ其他議事ノ妨
害ヲ爲ス者アルトキハ議長ハ之ヲ制止シ若命ニ從ハサルトキハ之ヲ退
場セシメ必要ナル場合ニ於テハ警察官ノ處分ヲ求ムルコトヲ得

第四十二條　郡長若ハ特ニ其委任ヲ受ケタル吏員及議員ハ議場ノ秩序ヲ
紊リ又ハ議場ノ妨害ヲ爲ス者アルトキハ議長ノ注意ヲ喚起スルコトヲ
得

第四十三條　郡會ニ書記ヲ置キ議長ニ隸屬シテ庶務ヲ掌理セシム
書記ハ議長之ヲ選任ス但郡吏員ヲシテ之ヲ兼シムルコトヲ得

第四十四條　郡會ハ書記ヲシテ議事錄ヲ製シ議決及選擧ノ顚末並ニ出席

議員ノ氏名ヲ記錄セシムヘシ
議事錄ハ議長及議員二名以上之ニ署名スヘシ其議員ハ會議ノ前郡會ニ於テ豫メ之ヲ定ム議事錄中ニ其氏名ヲ記載シ置クヘシ
第四十五條　郡會ハ議事規則及傍聽人取締規則ヲ設ケ府縣知事ノ認可ヲ受ケテ之ヲ施行スヘシ

第三章　郡參事會、吏員及委員

第四十六條　郡ニ郡參事會ヲ置キ郡長及名譽職參事會員四名ヲ以テ之ヲ組織ス
名譽職參事會員中三名ハ郡會ニ於テ其議員中ヨリ互選シ一名ハ府縣知事ニ於テ郡會議員若ハ郡內町村ノ公民中ヨリ選任スヘシ
第四十七條　郡參事會ハ郡長ヲ以テ議長トス議長故障アルトキハ會員ニ於テ臨時議長代理ヲ互選スヘシ
第四十八條　郡會ハ每通常會ニ於テ郡會ノ互選シタル名譽職參事會員ノ補充員三名ヲ互選シ其名譽職參事會員ノ闕員アルトキハ郡長ニ於テ補充員中投票多數ノ順次ニ依リ之ヲ補充スヘシ但其既ニ補充シタル者ハ前任者ノ任期中在職スルモノトス
第四十九條　名譽職參事會員ノ任期ハ議員ノ任期ニ從フ但任期滿限ノ後ト雖後任者就職ノ日迄在職スルモノトス
郡會ノ互選シタル名譽職參事會員ハ補充員ヲ以テ其闕員ヲ補充シ仍闕員ヲ生シタル場合ニ於テハ二箇月以內ニ臨時其選擧ヲ行フヘシ
第五十條　郡參事會ノ職務權限左ノ如シ
一　郡會ノ權限ニ屬スル事件ニシテ其委任ヲ受ケタルモノヲ議決スル事
二　郡會ノ權限ニ屬スル事件ニシテ臨時急施ヲ要シ郡長ニ於テ郡會ヲ招集スルノ暇ナシト認ルトキ郡會ニ代テ議決ヲ爲ス事
三　郡會ノ定メタル方法ノ範圍內ニ於テ郡有財產ノ管理又ハ營造物ノ維持ニ關シ必要ナル事件ニ付議決ヲ爲ス事
四　郡ノ費用ヲ以テ支辨スル工事ノ次第順序其他必要ナル事件ニ付議決ヲ爲ス事
五　郡長其他官廳ノ諮問ニ對シ意見ヲ述フル事
六　郡長ヨリ發スル郡會議案ニ付郡長ニ意見ヲ述ヘ及會議ニ報告スル事
七　臨時必要アルトキ郡ノ出納ヲ檢査スル事
其他法律命令ニ依リ郡參事會ノ權限ニ屬スル事務ヲ處理ス
第五十一條　郡參事會ハ郡長之ヲ招集ス
會員半數以上ノ請求アルトキハ郡長ハ郡參事會ヲ招集スヘシ
第五十二條　郡參事會ノ會議ハ傍聽ヲ許サス
第五十三條　郡參事會ハ議長又ハ其代理者及會員半數以上出席スルニ非サレハ會議ヲ開キ議決ヲ爲スコトヲ得ス
郡參事會ノ議決ハ過半數ニ依ル可否同數ナルトキハ議長ノ決スル所ニ依ル
議決ノ事件ハ之ヲ議事錄ニ登記シ議長及名譽職參事會員二名以上之ニ署名スヘシ
第五十四條　郡參事會員ハ自己及其父母兄弟若ハ妻子ノ一身上ニ關スル事件ニ付郡參事會ノ議事ニ參與シ及議決ニ加ハルコトヲ得ス
前項ノ規定ノ爲出席ノ參事會員減少シテ前條第一項ノ數ヲ得サルトキハ郡長ハ補充員ヲ以テ臨時之ニ充テ仍其數ヲ得サルトキハ郡會議員ニシテ該事件ニ關係ナキ者ノ內ヨリ臨時ニ指名シ名譽職參事會員ノ不足ヲ補充シテ第四十六條ノ定數ニ滿タシムヘシ
第五十五條　町村制ノ規定ニ依リ郡參事會ノ權限ニ屬スル事件ニシテ二郡以上ノ町村ニ交涉スルモノアルトキハ其郡長ノ具狀ニ依リ府縣知事ニ於テ其事件ヲ管理スヘキ郡參事會ヲ指定スヘシ二府縣以上ノ町村ニ交涉スルモノアルトキハ其府知事ノ具狀ニ依リ內務大臣ニ於テ之ヲ指定スヘシ
第五十六條　郡長ハ郡會及郡參事會ノ議決ヲ施行シ及郡有ノ財產及營造物ヲ管理シ並ニ郡ノ費用ヲ以テ支辨スル工事ヲ執行ス
郡ニ於テ他人ニ對シ義務ヲ負擔スヘキ證書及委任狀ニハ郡長ノ外名譽職參事會員二名以上之ニ署名捺印スヘシ
前項ノ文書中郡會又ハ參事會ノ權限ニ屬スル事件ニシテ其議決ヲ經タル者ハ其旨ヲ記入スヘシ

第五十七條　郡會ニ於テ名譽職參事會員ヲ選擧セス又ハ參事會成立セス又ハ招集ニ應セサルトキハ參事會成立シ又ハ招集ニ應スル迄郡長ハ郡非常參事會ノ權限ニ屬スル事件ヲ專決處分スルコトヲ得
郡非常參事會ヲ招集スルノ暇ナク又ハ名譽職參事會員ノ出席半數以上ニ至ラサルトキハ郡長ハ郡參事會ノ權限ニ屬スル事件ヲ專決處分スルコトヲ得
本條ノ處分ハ次回ノ郡會會議ニ於テ之ヲ報告スヘシ
第五十八條　郡ハ府縣稅ヲ以テ支辨スル郡吏員ノ外郡會ノ議決ニ依リ郡ノ費用ヲ以テ郡有財產又ハ營造物ノ管理若ハ土木工事ニ必要ナル有給郡吏員ヲ置クコトヲ得但其郡吏員ハ他ノ郡吏員ニ準シ府縣知事ニ於テ之ヲ任免監督ス
前項郡吏員ノ給料手當退隱料等ハ郡會ノ議決スル所ニ依ル其身元保證金ヲ要スルトキハ其金額ヲ定ムルモ亦同シ
第五十九條　郡長ハ郡會ノ議決ヲ經テ臨時又ハ常設ノ委員ヲ置キ郡事務ノ一部ヲ調查セシメ又ハ郡有財產及營造物ノ一部ヲ管理セシムルコトヲ得
委員ハ郡會ニ於テ之ヲ選擧ス其選擧ノ方法及任期ハ郡會ノ議決スル所ニ依ル
委員ハ名譽職トス

第四章　郡ノ會計

第六十條　郡有財產及營造物管理ノ費用郡會郡參事會及委員ノ費用第五十八條ノ郡吏員ノ給料退隱料其他諸給與及法律勅令ニ依リ郡ノ負擔ト定ムル事件ノ費用ハ其郡ニ於テ之ヲ支辨スヘシ
第六十一條　郡會議員名譽職參事會員及委員ニハ旅費及日當ヲ給スルコトヲ得但日當ハ一日五十錢ヲ超ユルコトヲ得ス
第六十二條　郡ノ支出ニ充ツル費用ハ郡有財產ヨリ生スル收入其他雜收入ヲ以テ充ツルモノヽ外ハ郡內各町村ニ分賦ス各町村分賦ノ割合ハ各町村前年度ノ直接國稅府縣稅ノ徵收額ニ據ル
各町村分賦ノ額ハ各町村ニ於テ之ヲ町村ノ豫算ニ編入シ町村稅トシテ徵收シ其總額ヲ郡金庫ニ納ムヘシ
第六十三條　郡內ノ或ル部分ニ對シ特ニ利益アル土木事業ヲ起ストキハ郡會ノ議決ニ依リ該部分ノ町村ニ對シ通常分賦額ノ外其利益ノ厚薄ニ應シ特ニ夫役現品ヲ增課スルコトヲ得
第六十四條　郡ハ天災事變ノ爲已ムヲ得サル支出又ハ其郡ノ永久ノ利益ト爲ルヘキ支出ヲ要スルニ方リ通常ノ歲入ヲ增加スルトキハ郡內町村ノ負擔ニ堪ヘサルノ場合ニ限リ勅令ノ定ムル所ニ依リ郡會ノ議決ヲ以テ郡債ヲ起スコトヲ得
郡債ヲ起スノ議決ヲ爲ストキハ併セテ起債ノ方法利息ノ定率及償還ノ方法ヲ定ムヘシ
郡債償還ノ初期ハ三年以內ト爲シ年々ノ償還步合ヲ定メ起債ノ時ヨリ三十年以內ニ還了スヘシ
歲入出豫算內ノ支出ヲ爲スカ爲必要ナル一時ノ借入金ニシテ其年度內ノ收入ヲ以テ償還スヘキモノハ本條ノ例ニ依ルノ限ニ在ラス但郡參事會ノ議決ヲ經ルコトヲ要ス
第六十五條　郡長ハ每年其翌年度ニ係ル歲入出豫算ヲ調製スヘシ但郡會計年度ハ政府ノ會計年度ニ同シ
豫算ハ郡會ノ議決ニ付スルノ前郡參事會ノ審查ニ付スヘシ若郡長ト郡參事會ト意見ヲ異ニスルトキハ郡長ハ參事會ノ意見ヲ豫算ニ添ヘ郡會ニ提出スヘシ追加又ハ臨時ノ豫算ニ付テモ亦同シ內務大臣ハ省令ヲ以テ豫算調製ノ式ヲ定メ並ニ費目流用ニ關スル規定ヲ設クルコトヲ得
第六十六條　豫算ハ每年郡會ノ議決ヲ取リ之ヲ府縣知事ニ報告シ並ニ郡慣行ノ公告式ニ依リ其要領ヲ告示スヘシ追加又ハ臨時ノ豫算ヲ議決シタル場合ニ於テモ亦同シ
郡ノ費用ヲ以テ支辨スル事業ニシテ數年ヲ期シテ施行スヘキモノ又ハ數年ヲ期シテ其費用ヲ支出スヘキモノハ郡會ノ議決ヲ以テ其年期間各年度ノ支出額ヲ定メ繼續費ト爲スコトヲ得
豫算ヲ郡會ニ提出スルトキハ郡長ハ併セテ其郡有財產表ヲ提出スヘシ
第六十七條　歲入出豫算中ニ豫備費ヲ設クヘシ豫備費ハ郡長ニ於テ郡參事會ノ議決ヲ經テ已ムヲ得サル豫算外ノ支出又ハ豫算超過ノ支出ニ充ツルコトヲ得

但郡會ノ否決シタル費途ニ充ツルコトヲ得ス

第六十八條　郡ノ收支命令ハ郡長之ヲ發スヘシ

第六十九條　會計事務ヲ管理スル郡役所會計吏ハ前條ノ命令アルニ非サレハ支拂ヲ爲スコトヲ得ス及其命令アルモ支出ノ豫算ナキカ又ハ豫備費支出及費目流用ノ規定ニ依ラサルトキハ支拂ヲ爲スコトヲ得ス

第七十條　郡ノ出納ハ毎月例日ヲ定メテ檢査シ及毎年少クトモ一回臨時檢査ヲ爲スヘシ檢査ハ郡長又ハ其代理者之ヲ爲シ臨時檢査ニハ郡參事會員一名以上ノ立會ヲ要ス

第七十一條　決算ハ會計事務ヲ管理スル郡役所會計吏ニ於テ會計年度後三箇月以内ニ之ヲ郡長ニ提出シ郡長ハ郡參事會ヲシテ之ヲ檢査セシメ次回ノ通常郡會ノ認定ニ付スヘシ

決算報告書竝ニ之ニ關スル郡會ノ議決ハ郡長ヨリ之ヲ府縣知事ニ報告シ竝ニ決算ハ郡費行ノ公告式ニ依リ其要領ヲ告示スヘシ

第五章　監督

第七十二條　郡ノ行政ハ第一次ニ於テ府縣知事之ヲ監督シ第二次ニ於テ内務大臣之ヲ監督ス

第七十三條　此法律中別段ノ規定アル場合ヲ除クノ外郡ノ行政ニ關スル府縣知事又ハ府縣參事會ノ處分若ハ裁決ニ不服ナル者ハ内務大臣ニ訴願スルコトヲ得

郡ノ行政ニ關スル訴願ハ其事件ノ處分若ハ裁決ヲ受ケタル日ヨリ十四日以内ニ其理由ヲ具シテ之ヲ提出スヘシ

此法律ニ指定スル場合ニ於テ府縣知事ノ處分又ハ府縣參事會ノ裁決ニ不服アリテ行政裁判所ニ出訴セントスル者ハ裁決ヲ受ケタル日ヨリ二十一日以内ニ出訴スヘシ

行政裁判所ニ出訴スルコトヲ得ヘキ場合ニ於テハ内務大臣ニ訴願スルコトヲ得ス

第七十四條　監督官廳ハ郡行政ノ法律命令ニ背戻セサルヤ其事務錯亂滯澁セサルヤ否ヲ監視スヘシ監督官廳ハ之カ爲行政事務ニ關シテ報告ヲ爲サシメ豫算及決算等ノ書類帳簿ヲ徵シ竝ニ實地ニ就テ事務ノ現況ヲ視察シ出納ヲ檢閲スルノ權ヲ有ス

第七十五條　郡會又ハ郡參事會ノ議決其權限ヲ越エ法律命令ニ背キ又ハ公益ヲ害スト認ムルトキハ郡長ハ自己ノ意見ニ依リ又ハ監督官廳ノ指揮ニ依リ理由ヲ示シテ議決ノ執行ヲ停止シ之ヲ再議セシメ猶其議決ヲ更メサルトキハ直ニ府縣知事ノ裁決ヲ請フヘシ其權限ヲ越エ又ハ法律命令ニ背クニ依テ議決ノ執行ヲ停止シタル場合ニ於テ府縣知事ノ裁決ニ不服ナル者ハ行政裁判所ニ出訴スルコトヲ得

第七十六條　郡會又ハ郡參事會ニ於テ法律命令又ハ慣行ニ依テ郡ノ負擔ニ屬スル行政上又ハ公益上必要ノ費用ヲ否決シ又ハ議決スト雖必要ノ給費ヲ缺クトキハ郡長ハ府縣知事ニ具狀シ其指揮ヲ請ヒ原案ヲ執行スルコトヲ得但府縣知事ハ原案金額ヲ不相當ト認ムルトキハ原案金額以内ニ於テ適當ノ金額ヲ定メ指揮スルコトヲ得

第七十七條　郡會招集ニ應セス又ハ成立セサルトキハ郡長ハ府縣知事ノ指揮ヲ請ヒ處分スルコトヲ得前項ノ處分ハ次回ノ會議ニ於テ之ヲ報告スヘシ

第七十八條　郡會又ハ郡參事會ニ於テ其議決スヘキ原案ヲ議決セサル場合ニ於テ其事緊急ヲ要スルトキハ郡長ハ府縣知事ニ具狀シ其指揮ヲ請ヒ原案ヲ執行スルコトヲ得但其議決セサル議案歲入出豫算ニ係ハリ府縣知事ニ於テ原案金額ヲ不相當ト認ムルトキハ原案金額以内ニ於テ適當ノ金額ヲ定メ指揮スルコトヲ得

第七十九條　府縣知事ハ郡ノ歲入出豫算中不適當ノ支出ト認ムル費目アルトキハ之ヲ削除シ及其郡ノ資力ニ比シ不急ノ支出ト認ムル費目アルトキハ之ヲ削除若ハ減殺スルコトヲ得此場合ニ於テハ收入科目中ニ就キ之ニ相當スル收入額ヲ減殺スヘシ

第八十條　郡會ハ内務大臣之ヲ解散セシムルコトヲ得此場合ニ於テハ三箇月以内ニ議員ヲ改選スヘシ前項解散ノ場合ニ於テハ名譽職參事會員モ亦解職スルモノトス

郡委員ハ郡會ノ解散ニ依リ解職スルノ限ニ在ラス但改選郡會ノ議決ヲ以テ之ヲ改選スルコトヲ得

郡會解散ノ後改選結了ニ至ル迄ノ間急施ヲ要スル事件アルトキハ郡長之ヲ專決處分スルコトヲ得

前項ノ處分ハ次回ノ會議ニ於テ之ヲ報告スヘシ

第八十一條　左ノ事件ニ關スル郡會ノ議決ハ内務大臣及大藏大臣ノ認可ヲ受クルコトヲ要ス

一　新ニ郡債ヲ起シ又ハ其額ヲ增加シ若ハ償還ノ方法ヲ變更スル事

第八十二條　左ノ事件ニ關スル郡會ノ議決ハ府縣知事ノ認可ヲ受クルコトヲ要ス

一　郡有不動產ノ賣却讓渡竝ニ質入書入ノ事

二　第六十三條ニ依リ郡内ノ或ル部分ニ對シ特ニ夫役現品ヲ增課スル事

三　第六十六條第二項ニ依リ繼續費ヲ定メ及其年期内ニ議決ヲ變更スル事

第六章　附則

第八十三條　郡内總町村ノ共有ニ屬スル財產及營造物ハ郡内總町村ノ聯合又ハ組合ヲ以テ設立セル小學校ヲ除クノ外此法律施行ノ日ヨリ郡ノ所有ニ歸シ其權利義務トモ同時ニ郡ニ移ルモノトス

第八十四條　府縣參事會及行政裁判所ヲ開設スル迄ノ間此法律ニ依リ府縣參事會ニ屬スル職務ハ府縣知事、行政裁判所ニ屬スル職務ハ現行ノ行政裁判手續ニ從ヒ控訴院ニ於テ之ヲ行フヘシ

第八十五條　島司ヲ置ケル島嶼ニ於テハ別ニ勅令ヲ以テ其制ヲ定ム

第八十六條　此法律ニ依リ始メテ議員ヲ選擧スルニ付郡會及郡參事會ノ職務ハ郡長ニ於テ之ヲ行フヘシ

第八十七條　町村制施行ノ爲ニ定ムル直接稅ノ種類ハ此法律ノ施行ニ付テモ亦適用ス

第八十八條　此法律施行ノ後ハ町村制第百二十六條第三ニ定ムル附加稅徵收ノ許可ハ地租七分ノ一、五(十四分ノ三)ヲ超過スルトキ之ヲ要スルモノトス

第八十九條　此法律ハ町村制ヲ施行シタル各府縣ニ施行スルモノトス其施行ノ時期ハ府縣知事ノ具申ニ依リ内務大臣之ヲ定ム

第九十條　明治十一年七月第十七號布告郡區町村編制法其他此法律ニ抵觸スル成規ハ此法律施行ノ地ニ於テ其施行ノ時期ヨリ總テ之ヲ廢止ス

第九十一條　内務大臣ハ此法律施行ノ責ニ任シ之カ爲必要ナル命令ヲ發布スヘシ

◎郡歲入歲出豫算調製式竝費目流用規定

明治二十四年四月　内務省令第二號

郡制第六十五條第三項ニ依リ郡歲入歲出豫算調製ノ式ヲ定メ竝ニ費目流用ノ規定ヲ設ク

第一條　郡歲入歲出豫算ハ經常臨時ノ二部ニ大別シ各部中ニ於テ之ヲ款項ニ區分シ第一號ノ式ニ依リ之ヲ調製スヘシ

第二條　歲入歲出豫算ニハ郡會參考ノ爲各項ヲ各目ニ區別シ各其豫算ノ基ク所ヲ詳記シタルモノヲ添付スヘシ

第三條　數年繼續費(郡制第六十六條第二項)ノ年期及支出方法ハ第二號ノ式ニ依ルヘシ

夫役現品ヲ增課スル場合ニ在テハ第三號ノ式ニ依ルヘシ

第四條　歲入歲出中更ニ科目ヲ設クルコトヲ要スルトキ其款項ハ此書式ニ依準スルモノトス

第五條　各款ノ豫算金額ハ彼此流用スルヲ得サルモノトス

各項豫算金額ニシテ不得已流用ヲ要スルノ必用アルトキハ郡參事會ノ決議ヲ經テ之ヲ流用スルコトヲ得(廿四年八月省令第十三號ヲ以テ本條改正)

(書式ハ略ス)

第二章　市町村

◎市制町村制

明治二十一年四月　法律第一號

朕地方共同ノ利益ヲ發達セシメ衆庶臣民ノ幸福ヲ增進スルコトヲ欲シ隣保團結ノ舊慣ヲ存重シテ益之ヲ擴張シ更ニ法律ヲ以テ都市及町村ノ權義ヲ保護スルノ必要ヲ認メ茲ニ市制及町村制ヲ裁可シテ之ヲ公布セシム

市制

第一章　總則

第一歌　市及其區域

第一條　此法律ハ市街地ニシテ郡ノ區域ニ屬セス別ニ市ト爲スノ地ニ施行スルモノトス

第二條　市ハ法律上一個人ト均ク權利ヲ有シ義務ヲ負擔シ凡市ノ公共事務ハ官ノ監督ヲ受ケテ自ラ之ヲ處理スルモノトス

第三條　凡市ハ從來ノ區域ヲ存シテ之ヲ變更セス但將來其變更ヲ要スルコトアルトキハ此法律ニ準據ス可シ

第四條　市ノ境界ヲ變更シ又ハ町村ヲ市ニ合併シ及市ノ區域ヲ分割スルコトアルトキハ町村制第四條ヲ適用ス

第五條　市ノ境界ニ關スル爭論ハ府縣參事會之ヲ裁決ス其府縣參事會ノ裁決ニ不服アル者ハ行政裁判所ニ出訴スルコトヲ得

第二歌　市住民及其權利義務

第六條　凡市內ニ住居ヲ占ムル者ハ總テ其市住民トス

凡市住民タル者ハ此法律ニ從ヒ公共ノ營造物並市有財產ヲ共用スル權利ヲ有シ及市ノ負擔ヲ分任スルノ義務ヲ有スルモノトス但特ニ民法上ノ權利及義務ヲ有スル者アルトキハ此限ニ在ラス

第七條　凡帝國臣民ニシテ法權ヲ有スル獨立ノ男子二年以來(一)市ノ住民トナリ(二)其市ノ負擔ヲ分任シ及(三)其市內ニ於テ地租ヲ納メ若クハ直接國稅年額二圓以上ヲ納ムル者ハ其市公民トス其公費ヲ以テ救助ヲ受ケタル後二年ヲ經サル者ハ此限ニ在ラス但場合ニ依リ市會ノ議決ヲ以テ本條ニ定ムル二箇年ノ制限ヲ特免スルコトヲ得

此法律ニ於テ獨立ト稱スルハ滿二十五歲以上ニシテ一戶ヲ構ヘ且治產ノ禁ヲ受ケサル者ヲ云フ

第八條　凡市公民ハ市ノ選擧ニ參與シ市ノ名譽職ニ選擧セラルヽノ權利アリ又其名譽職ヲ擔任スルハ市公民ノ義務ナリトス

左ノ理由アルニ非サレハ名譽職ヲ拒辭シ又ハ任期中退職スルコトヲ得ス

一　疾病ニ罹リ公務ニ堪ヘサル者

二　營業ノ爲メニ常ニ其市內ニ居ルコトヲ得サル者

三　年齡滿六十歲以上ノ者

四　官職ノ爲メニ市ノ公務ヲ執ルコトヲ得サル者

五　四年間無給ニシテ市吏員ノ職ニ任シ爾後四年ヲ經過セサル者及六年間市會議員ノ職ニ居リ爾後六年ヲ經過セサル者

六　其他市會ノ議決ニ於テ正當ノ理由アリト認ムル者

前項ノ理由ナクシテ名譽職ヲ拒辭シ又ハ任期中退職シ若クハ無任期ノ職務ヲ少クモ三年間擔當セス又ハ其職務ヲ實際ニ執行セサル者ハ市會ノ議決ヲ以テ三年以上六年以下其市公民タルノ權ヲ停止シ且同年期間其負擔スヘキ市費ノ八分一乃至四分一ヲ增課スルコトヲ得

前項市會ノ議決ニ不服アル者ハ府縣參事會ニ訴願シ其府縣參事會ノ裁決ニ不服アル者ハ行政裁判所ニ出訴スルコトヲ得

第九條　市公民タル者第七條ニ揭載スル要件ノ一ヲ失フトキハ其公民タルノ權ヲ失フモノトス

市公民タル者公權停止中又ハ租稅滯納處分中ハ其公民タルノ權ヲ停止ス家資分散若クハ破產ノ宣告ヲ受ケタルトキハ復權ノ決定アルマテ又公權剝奪若クハ停止ヲ附加ス可キ重罪輕罪ノ爲メ公判ニ付セラレタルトキハ其裁判ノ確定ニ至ルマテ亦同シ

陸海軍ノ現役ニ服スル者ハ市ノ公務ニ參與セサル者トス現役以外ノ兵役ニ在ル者ニシテ戰時若クハ事變ニ際シ召集セラレタルトキモ亦同シ

市公民タル者ニ限リテ任ス可キ職務ニ在ル者ニシテ本條第一項乃至第三項ノ場合ニ當ルトキハ自ラ解職スルモノトス職ニ就キタルカ爲メ公民タルノ權ヲ得ヘキ職務ニ在ル者ニシテ本條第二項第三項ノ場合ニ當ルトキモ亦同シ

前項ノ職務ニ在ル市吏員ニシテ公權剝奪若クハ停止ヲ附加ス可キ重罪輕罪ノ爲メ豫審ニ付セラレタルトキハ監督官廳ハ其職ヲ停止スルコトヲ得(二十八年二月法律第六號ニテ本條ヲ改正ス)

第三歌　市條例

第十條　市ノ事務及市往民ノ權利義務ニ關シ此法律中ニ明文ナク又ハ特例ヲ設クルコトヲ許セル事項ハ各市ニ於テ特ニ條例ヲ設ケテ之ヲ規定スルコトヲ得

市ニ於テハ其市ノ設置ニ係ル營造物ニ關シ規則ヲ設クルコトヲ得

市條例及規則ハ法律命令ニ抵觸スルコトヲ得ス且之ヲ發行スルトキハ地方慣行ノ公告式ニ依ル可シ

第二章　市會

第一歌　組織及選擧

第十一條　市會議員ハ其市ノ選擧人其被選擧權アル者ヨリ之ヲ選擧ス其定員ハ人口五萬未滿ノ市ニ於テハ三十人トシ人口五萬以上ノ市ニ於テハ三十六人トス

人口十萬以上ノ市ニ於テハ人口五萬ヲ加フル毎ニ人口二十萬以上ノ市ニ於テハ人口十萬ヲ加フル毎ニ議員三人ヲ增シ六十人ヲ定限トス

議員ノ定員ハ市條例ヲ以テ特ニ之ヲ增減スルコトヲ得但定限ヲ超ユルコトヲ得ス

第十二條　市公民(第七條)ハ總テ選擧權ヲ有ス但其公民權ヲ停止セラルル者(第八條第三項第九條第二項)及第九條第三項ノ場合ニ當ル者ハ此限ニ在ラス

凡內國人ニシテ公權ヲ有シ直接市稅ヲ納ムル者其額市公民ノ最多ク納稅スル者三名中ノ一人ヨリモ多キトキハ第七條ノ要件ニ當ラスト雖モ選擧權ヲ有ス但公民權ヲ停止セラルヽ者及第九條第三項ノ場合ニ當ル者ハ此限ニ在ラス

法律ニ從テ設立シタル會社其他法人ニシテ前項ノ場合ニ當ルトキモ亦同シ(上同)

第十三條　選擧人ハ分テ三級ト爲ス

選擧人中直接市稅ノ納額最多キ者ヲ合セテ選擧人總員ノ納ムル總額ノ三分一ニ當ル可キ者ヲ一級トス

一級選擧人ノ外直接市稅ノ納額多キ者ヲ合セテ選擧人總員ノ納ムル總額ノ三分一ニ當ル可キ者ヲ二級トシ爾餘ノ選擧人ヲ三級トス

各級ノ間納稅額兩級ニ跨ル者アルトキハ上級ニ入ル可シ又兩級ノ間ニ同額ノ納稅者二名以上アルトキハ其市ニ住居スル年數ノ多キ者ヲ以テ上級ニ入ル若シ住居ノ年數ニ依リ離キトキハ年齡ヲ以テシ年齡ニモ依リ離キトキハ市長抽籤ヲ以テ之ヲ定ム可シ

選擧人每級各別ニ議員ノ三分一ヲ選擧ス其被選擧人ハ同級內ノ者ニ限ラス三級ニ通シテ選擧セラルヽコトヲ得

第十四條　區域廣濶又ハ人口稠密ナル市ニ於テハ市條例ヲ以テ選擧區ヲ設クルコトヲ得但特ニ二級若クハ三級選擧ノ爲メ之ヲ設クルモ妨ケナシ

選擧區ノ數及其區域並各選擧區ヨリ選出スル議員ノ員數ハ市條例ヲ以テ選擧人ノ員數ニ準シ之ヲ定ム可シ

選擧人ハ其住居ノ地ニ依テ其所屬ノ區ヲ定ム其市內ニ住居ナキ者ハ課稅ヲ受ケタル物件ノ所在ニ依テ之ヲ定ム若シ數選擧區ニ亘リ納稅スル者ハ課稅ノ最多キ物件ノ所在ニ依テ之ヲ定ム可シ

選擧區ヲ設クルトキハ其選擧區ニ於テ選擧人ノ等級ヲ分ツ可シ

被選擧人ハ其選擧區內ノ者ニ限ラサルモノトス

第十五條　選擧權ヲ有スル市公民(第十二條第一項)ハ總テ被選擧權ヲ有ス

左ニ揭クル者ハ市會議員タルコトヲ得ス

一　所屬府縣ノ官吏

二　有給ノ市吏員

三　檢察官及警察官吏

四　神官僧侶及其他諸宗教師

五　小學校教員

其他官吏ニシテ當選シ之ニ應セントスルトキハ所屬長官ノ許可ヲ受クヘシ

代言人ニ非スシテ他人ノ爲メニ裁判所又ハ其他ノ官廳ニ對シテ事ヲ辨スルヲ以テ業ト爲ス者ハ議員ニ選擧セラルルヿヲ得ス

父子兄弟タルノ緣故アル者ハ同時ニ市會議員タルコトヲ得ス其同時ニ選擧セラレタルトキハ投票ノ數ニ依テ其多キ者一人ヲ當選トシ若シ同數ナレハ年長者ヲ當選トス其時ヲ異ニシテ選擧セラレタル者ハ後者議員タルコトヲ得ス

市參事會員トノ間父子兄弟タルノ緣故アル者ハ之ト同時ニ市會議員タ

ルコトヲ得ス若シ議員トノ間ニ其縁故アル者市參事會員ノ任ヲ受クルトキハ其縁故アル議員ハ其職ヲ退ク可シ

第十六條　議員ハ名譽職トス其任期ハ六年トシ毎三年各級ニ於テ其半數ヲ改選ス若シ各級ノ議員二分シ難キトキハ初回ニ於テ多數ノ一半ヲ解任セシム初回ニ於テ解任ス可キ者ハ抽籤ヲ以テ之ヲ定ム

退任ノ議員ハ再選セラルヽコトヲ得

第十七條　議員中闕員アルトキハ毎三年定期改選ノ時ニ至リ同時ニ補闕選擧ヲ行フ可シ若シ定員三分ノ一以上闕員アルトキ又ハ市會、市參事會若クハ府縣知事ニ於テ臨時補闕ヲ必要ト認ムルトキハ定期前ト雖モ其補闕選擧ヲ行フ可シ

補闕議員ハ其前任者ノ殘任期間在職スルモノトス

定期改選及補闕選擧トモ前任者ノ選擧セラレタル選擧等級及選擧區ニ從テ之カ選擧ヲ行フ可シ

第十八條　市長ハ選擧ヲ行フ毎ニ其選擧前六十日ヲ限リ選擧原簿ヲ製シ各選擧人ノ資格ヲ記載シ此原簿ニ據リテ選擧人名簿ヲ製ス可シ但選擧區ヲ設クルトキハ毎區各別ニ原簿及名簿ヲ製ス可シ

選擧人名簿ハ七日間市役所又ハ其他ノ場所ニ於テ之ヲ關係者ノ縱覽ニ供ス可シ若シ關係者ニ於テ訴願セントスルコトアルトキハ同期限內ニ之ヲ市長ニ申立ツ可シ市長ハ市會ノ裁決(第三十五條第一項)ニ依リ名簿ヲ修正ス可キトキハ選擧前十日ヲ限リテ之ニ修正ヲ加ヘテ確定名簿ト爲シ之ニ登錄セラレサル者ハ何人タリトモ選擧ニ關スルコトヲ得ス本條ニ依リ確定シタル名簿ハ當選ヲ辭シ若クハ選擧ノ無効トナリタル場合ニ於テ更ニ選擧ヲ爲ストキモ亦之ヲ適用ス

第十九條　選擧ヲ執行スルトキハ市長ハ選擧ノ場所日時ヲ定メ及選擧ス可キ議員ノ數ヲ各級各區ニ分チ選擧前七日ヲ限リテ之ヲ公告ス可シ各級ニ於テ選擧ヲ行フノ順序ハ先ツ三級ノ選擧ヲ行ヒ次ニ二級ノ選擧ヲ行ヒ次ニ一級ノ選擧ヲ行フヘシ

第二十條　選擧掛ハ名譽職トシ市長ニ於テ臨時ニ選擧人中ヨリ二名若クハ四名ヲ選任シ市長若クハ其代理者ハ其掛長トナリ選擧會ヲ開閉シ其會場ノ取締ニ任ス但選擧區ヲ設クルトキハ毎區各別ニ選擧掛ヲ設ク可シ

第二十一條　選擧開會中ハ選擧人ノ外何人タリトモ選擧會場ニ入ルコトヲ得ス選擧人ハ選擧會場ニ於テ協議又ハ勸誘ヲ爲スコトヲ得ス

第二十二條　選擧ハ投票ヲ以テ之ヲ行フ投票ニハ被選擧人ノ氏名ヲ記シ封緘ノ上選擧人自ラ掛長ニ差出ス可シ但選擧人ノ氏名ハ投票ニ記入スルコトヲ得ス

選擧人投票ヲ差出ストキハ自己ノ氏名及住所ヲ掛長ニ申立テ掛長ハ選擧人名簿ニ照シテ之ヲ受ケ封緘ノ儘投票函ニ投入ス可シ但投票函ハ投票ヲ終ル迄之ヲ開クコトヲ得ス

第二十三條　投票ニ記載ノ人員其選擧ス可キ定數ニ過キ又ハ不足アルモ其投票ヲ無効トセス其定數ニ過クルモノハ末尾ニ記載シタル人名ヲ順次ニ棄却ス可シ

左ノ投票ハ之ヲ無効トス

一　人名ヲ記載セス又ハ記載セル人名ノ讀ミ難キモノ

二　被選擧人ノ何人タルヲ確認シ難キモノ

三　被選擧權ナキ人名ヲ記載スルモノ

四　被選擧人氏名ノ外他事ヲ記入スルモノ

投票ノ受理竟効力ニ關スル事項ハ選擧掛假ニ之ヲ議決ス可否同數ナルトキハ掛長之ヲ決ス

第二十四條　選擧ハ選擧人自ラ之ヲ行フ可シ他人ニ託シテ投票ヲ差出スコトヲ許サス

第十二條第二項ニ依リ選擧權ヲ有スル者ハ代人ヲ出シテ選擧ヲ行フコトヲ得若シ其獨立ノ男子ニ非サル者又ハ會社其他法人ニ係ルトキハ必ス代人ヲ以テス可シ其代人ハ內國人ニシテ公權ヲ有スル獨立ノ男子ニ限ル但一人ニシテ數人ノ代理ヲ爲スコトヲ得ス且代人委任狀ヲ選擧掛ニ示シテ代理ノ證トス可シ

第二十五條　議員ノ選擧ハ有効投票ノ多數ヲ得ル者ヲ以テ當選トス投票ノ數相同キモノハ年長者ヲ取リ同年ナルトキハ掛長自ラ抽籤シテ其當選ヲ定ム

同時ニ補闕員數名ヲ選擧スルトキハ(第十七條)投票數ノ最多キ者ヲ以テ殘任期ノ最長キ前任者ノ補闕ト爲シ其數相同キトキハ抽籤ヲ以テ其順序ヲ定ム

第二十六條　選擧掛ハ選擧錄ヲ製シテ選擧ノ顚末ヲ記錄シ選擧ヲ終リタル後之ヲ期滿シ選擧人名簿其他關係書類ヲ合綴シテ之ニ署名ス可シ

投票ハ之ヲ選擧錄ニ附屬シ選擧ヲ結了スルニ至ル迄之ヲ保存ス可シ

第二十七條　選擧ヲ終リタル後選擧掛長ハ直ニ當選者ニ其當選ノ旨ヲ告知ス可シ其當選ヲ辭セントスル者ハ五日以內ニ之ヲ市長ニ申立ツ可シ

一人ニシテ數級又ハ數區ノ選擧ニ當リタルトキハ同期限內何レノ選擧ニ應ス可キコトヲ申立ツ可シ其期限內ニ之ヲ申立テサル者ハ總テ其選擧ヲ辭スル者トナシ第八條ノ處分ヲ爲ス可シ

第二十八條　選擧人選擧ノ效力ニ關シテ訴願セントスルトキハ選擧ノ日ヨリ七日以內ニ之ヲ市長ニ申立ツルコトヲ得(第三十五條第一項)

市長ハ選擧ヲ終リタル後之ヲ府縣知事ニ報告シ府縣知事ニ於テ選擧ノ效力ニ關シ異議アルトキハ訴願ノ有無ニ拘ラス府縣參事會ニ付シテ處分ヲ行フコトヲ得

選擧ノ定規ニ違背スルコトアルトキハ其選擧ヲ取消シ又被選擧人中其資格ノ要件ヲ有セサル者アルトキハ其人ノ當選ヲ取消シ更ニ選擧ヲ行ハシム可シ

第二十九條　當選者中其資格ノ要件ヲ有セサル者アルコトヲ發見シ又ハ就職後其要件ヲ失フ者アルトキハ其人ノ當選ハ效力ヲ失フモノトス其要件ノ有無ハ市會之ヲ議決ス

第二款　職務權限及處務規程

第三十條　市會ハ其市ヲ代表シ此法律ニ準據シテ市ニ關スル一切ノ事件並從前特ニ委任セラレ又ハ將來法律勅令ニ依テ委任セラルヽ事件ヲ議決スルモノトス

第三十一條　市會ノ議決ス可キ事件ノ概目左ノ如シ

一　市條例及規則ヲ設ケ並改正スル事

二　市費ヲ以テ支辨ス可キ事業但第七十四條ニ掲クル事務ハ此限ニ在ラス

三　歲入出豫算ヲ定メ豫算外ノ支出及豫算超過ノ支出ヲ認定スル事

四　決算報告ヲ認定スル事

五　法律勅令ニ定ムルモノヲ除クノ外使用料、手數料、市稅及夫役現品ノ賦課徵收ノ法ヲ定ムル事

六　市有不動產ノ賣買交換讓受讓渡並質入書入ヲ爲ス事

七　基本財產ノ處分ニ關スル事

八　歲入出豫算ヲ以テ定ムルモノヲ除クノ外新ニ義務ノ負擔ヲ爲シ及權利ノ棄却ヲ爲ス事

九　市有ノ財產及營造物ノ管理方法ヲ定ムル事

十　市吏員ノ身元保證金ヲ徵シ並其金額ヲ定ムル事

十一　市ニ係ル訴訟及和解ニ關スル事

第三十二條　市會ハ法律勅令ニ依リ其職權ニ屬スル市吏員ノ選擧ヲ行フ可シ

第三十三條　市會ハ市ノ事務ニ關スル書類及計算書ヲ檢閱シ市長ノ報告ヲ請求シテ事務ノ管理、議決ノ施行並收入支出ノ正否ヲ監査スルノ職權ヲ有ス

市會ハ市ノ公益ニ關スル事件ニ付意見書ヲ監督官廳ニ差出スコトヲ得

第三十四條　市會ハ官廳ノ諮問アルトキハ意見ヲ陳述ス可シ

第三十五條　市住民及公民タル權利ノ有無、選擧權及被選擧權ノ有無、選擧人名簿ノ正否並其等級ノ當否、代理ヲ以テ施行スル選擧權(第十二條第二項)及市會議員選擧ノ效力(第二十八條)ニ關スル訴願ハ市會之ヲ裁決ス

市會ノ裁決ニ不服アル者ハ府縣參事會ニ訴願シ其府縣參事會ノ裁決ニ不服アル者ハ行政裁判所ニ出訴スルコトヲ得

本條ノ事件ニ付テハ市長ヨリモ亦訴願及訴訟ヲ爲スコトヲ得

本條ノ訴願及訴訟ノ爲メニ其執行ヲ停止スルコトヲ得ス但判決確定スルニ非サレハ更ニ選擧ヲ爲スコトヲ得ス

第三十六條　凡議員タル者ハ選擧人ノ指示若クハ委囑ヲ受ク可カラサルモノトス

第三十七條　市會ハ毎曆年ノ初メ一周年ヲ限リ議長及其代理者各一名ヲ

互選ス

第三十八條　會議ノ事件議長及其父母兄弟若クハ妻子ノ一身上ニ關スル事アルトキハ議長ニ故障アルモノトシテ其代理者之ニ代ル可シ議長代理者共ニ故障アルトキハ市會ハ年長ノ議員ヲ以テ議長ト爲ス可シ

第三十九條　市參事會員ハ會議ニ列席シテ議事ヲ辯明スルコトヲ得

第四十條　市會ハ會議ノ必要アル毎ニ議長之ヲ招集ス若シ議員四分ノ一以上ノ請求アルトキ又ハ市長若クハ市參事會ノ請求アルトキハ必ス之ヲ招集ス可シ其招集豈會議ノ事件ヲ告知スルハ急施ヲ要スル場合ヲ除クノ外少クモ會議ノ三日前タル可シ但市會ノ議決ヲ以テ豫メ會議日ヲ定ムルモ妨ケナシ市參事會員ヲ市會ノ會議ニ招集スルトキモ亦前項ノ例ニ依ル

第四十一條　市會ハ議員半數以上出席スルニ非サレハ議決スルコトヲ得ス但同一ノ議事ニ付招集再回ニ至ルモ議員猶半數ニ滿タサルトキハ此限ニ在ラス（二十八年二月法律第八號ニテ本條改正）

第四十二條　市會ノ議決ハ可否ノ多數ニ依リ之ヲ定ム可否同數ナルトキハ再議議決ス可シ若シ猶同數ナルトキハ議長ノ可否スル所ニ依ル

第四十三條　議員ハ自己及其父母兄弟若クハ妻子ノ一身上ニ關スル事件ニ付テハ市會ノ議決ニ加ハルコトヲ得ス

議員ノ數此除名ノ爲メニ減少シテ會議ヲ開クノ定數ニ滿タサルトキハ府縣參事會市會ニ代テ議決ス

第四十四條　市會ニ於テ市吏員ノ選擧ヲ行フトキハ其一名毎ニ匿名投票ヲ以テ之ヲ爲シ有效投票ノ過半數ヲ得ル者ヲ以テ當選トス若シ過半數ヲ得ル者ナキトキハ最多數ヲ得ル者二名ヲ取リ之ニ就テ更ニ投票セシム若シ最多數ヲ得ル者三名以上同數ナルトキハ議長自ラ抽籤シテ其二名ヲ取リ更ニ投票セシム此再投票ニ於テモ猶過半數ヲ得ル者ナキトキハ抽籤ヲ以テ當選ヲ定ム其他ハ第二十二條、第二十三條、第二十四條第一項ヲ適用ス

前項ノ選擧ニハ市會ノ議決ヲ以テ指名推選ノ法ヲ用フルコトヲ得

第四十五條　市會ノ會議ハ公開ス但議長ノ意見ヲ以テ傍聽ヲ禁スルコトヲ得

第四十六條　議長ハ各議員ニ事務ヲ分課シ會議及選擧ノ事ヲ總理シ開會閉會竝延會ヲ命シ議場ノ秩序ヲ保持ス若シ傍聽者ノ公然贊成又ハ擯斥ヲ表シ又ハ喧擾ヲ起ス者アルトキハ議長ハ之ヲ議場外ニ退出セシムルコトヲ得

第四十七條　市會ハ書記ヲシテ議事錄ヲ製シテ其議決及選擧ノ顚末竝出席議員ノ氏名ヲ記錄セシム可シ議事錄ハ會議ノ末之ヲ朗讀シ議長及議員二名以上之ニ署名ス可シ

市會ハ議事錄ノ謄寫又ハ原書ヲ以テ其議決ヲ市長ニ報告ス可シ

市會ノ書記ハ市會之ヲ選任ス

第四十八條　市會ハ其會議細則ヲ設ク可シ其細則ニ違背シタル議員ニ科ス可キ過怠金二圓以下ノ罰則ヲ設クルコトヲ得

第三章　市行政

第一款　市參事會及市吏員ノ組織選任

第四十九條　市ニ市參事會ヲ置キ左ノ吏員ヲ以テ之ヲ組織ス

一　市長　一名

二　助役　東京ハ三名京都大阪ハ各二名其他ハ一名

三　名譽職參事會員　東京ハ十二名京都大阪ハ各九名其他ハ六名

助役及名譽職參事會員ハ市條例ヲ以テ其定員ヲ增減スルコトヲ得

第五十條　市長ハ有給吏員トス其任期ハ六年トシ內務大臣市會ヲシテ候補者三名ヲ推薦セシメ上奏裁可ヲ請フ可シ若シ其裁可ヲ得サルトキハ再推薦ヲ爲サシム可シ再推薦ニシテ猶裁可ヲ得サルトキハ追テ推薦セシメ裁可ヲ得ルニ至ルノ間內務大臣ハ臨時代理者ヲ選任シ又ハ市役ヲ以テ官吏ヲ派遣シ市長ノ職務ヲ管掌セシム可シ

第五十一條　助役及名譽職參事會員ハ市會之ヲ選擧ス其選擧ハ第四十四條ニ依テ行フ可シ但投票同數ナルトキハ抽籤ノ法ニ依ラス府縣參事會之ヲ決ス可シ

第五十二條　助役ハ有給吏員トシ其任期ハ六年トス

助役ノ選擧ハ府縣知事ノ認可ヲ受クルコトヲ要ス若シ其認可ヲ得サルトキハ再選擧ヲ爲ス可シ再選擧ニシテ猶其認可ヲ得サルトキハ追テ選擧ヲ行ヒ認可ヲ得ルニ至ルノ間府縣知事ハ臨時代理者ヲ選任シ又ハ市役ヲシテ官吏ヲ派遣シ助役ノ職務ヲ管掌セシム可シ

第五十三條　市長及助役ハ其市公民タル者ニ限ラス但其任ヲ受クルトキハ其公民タルノ權ヲ得

第五十四條　名譽職參事會員ハ其市公民中年齡滿三十歲以上ニシテ選擧權ヲ有スル者ヨリ之ヲ選擧ス其任期ハ四年トス任期滿限ノ後ト雖モ後任者就職ノ日迄在職スルモノトス

名譽職參事會員ハ毎二年其半數ヲ改選ス若シ二分シ難キトキハ初回ニ於テ多數ノ一半ヲ退任セシム初回ノ退任者ハ抽籤ヲ以テ之ヲ定ム但退任者ハ再選セラルルコトヲ得

若シ闕員アルトキハ其殘任期ヲ補充スル爲メ直ニ補闕選擧ヲ爲ス可シ

第五十五條　市長及助役其他參事會員ハ第十五條第二項ニ揭載スル職ヲ兼ヌルコトヲ得ス同條第四項ニ揭載スル者ハ名譽職參事會員ニ選擧セラルルコトヲ得ス

父子兄弟タルノ緣故アル者ハ同時ニ市參事會員タルコトヲ得ス若シ其緣故アル者市長ノ任ヲ受クルトキハ其緣故アル市參事會員ハ其職ヲ退ク可シ其他ハ第十五條第五項ヲ適用ス

市長及助役ハ三箇月前ニ申立ツルトキハ隨時退職ヲ求ムルコトヲ得此場合ニ於テハ退隱料ヲ受クルノ權ヲ失フモノトス

第五十六條　市長及助役ハ他ノ有給ノ職務ヲ兼任シ又ハ株式會社ノ社長及重役トナルコトヲ得ス其他ノ營業ハ府縣知事ノ認許ヲ得ルニ非サレハ之ヲ爲スコトヲ得ス

第五十七條　名譽職參事會員ノ選擧ニ付テハ市參事會自ラ其効力ノ有無ヲ議決ス

當選者中其資格ノ要件ヲ有セサル者アルコトヲ發見シ又ハ就職後其要件ヲ失フ者アルトキハ其人ノ當選ハ効力ヲ失フモノトス其要件ノ有無ハ市參事會之ヲ議決ス其議決ニ不服アル者ハ府縣參事會ニ訴願シ其府縣參事會ノ裁決ニ不服アル者ハ行政裁判所ニ出訴スルコトヲ得其他ハ第三十五條末項ヲ適用ス

第五十八條　市ニ收入役一名ヲ置ク收入役ハ市參事會ノ推薦ニ依リ市會之ヲ選任ス

收入役ハ市參事會員ヲ兼ヌルコトヲ得ス

收入役ノ選任ハ府縣知事ノ認可ヲ受クルコトヲ要ス其他ハ第五十一條、第五十二條、第五十三條、第五十五條及第七十六條ヲ適用ス

第五十九條　市ニ書記其他必要ノ附屬員並使丁ヲ置キ相當ノ給料ヲ給ス其人員ハ市會ノ議決ヲ以テ之ヲ定メ市參事會之ヲ任用ス

第六十條　凡市ハ處務便宜ノ爲メ市參事會ノ意見ヲ以テ之ヲ數區ニ分チス但東京京都大阪ニ於テハ區長ヲ有給吏員トシ區長及其代理者ハ名譽職トス

每區區長及其代理者各一名ヲ置クコトヲ得區長及其代理者ハ名譽職トス但東京京都大阪ニ於テハ區長ヲ有給吏員トシ區長及其代理者ハ市會ニ於テ其區若クハ隣區ノ公民中選擧權ヲ有スル者ヨリ之ヲ選擧ス區會（第百十三條）ヲ設クル區ニ於テハ其區會ニ於テ之ヲ選擧ス

但東京京都大阪ニ於テハ市參事會之ヲ選任ス東京京都大阪ニ於テハ前條ニ依リ區ニ附屬員並使丁ヲ置クコトヲ得

第六十一條　市ハ市會ノ議決ニ依リ臨時又ハ常設ノ委員ヲ置クコトヲ得

其委員ハ名譽職トス

委員ハ市參事會員又ハ市會議員ヲ以テ之ニ充テ又ハ市參事會員及市會議員ヲ以テ之ヲ組織シ又ハ會員議員ト市公民中選擧權ヲ有スル者トヲ以テ之ヲ組織シ市參事會員一名ヲ以テ委員長トス

委員中市會議員ヨリ出ツル者ハ市會之ヲ選擧シ選擧權ヲ有スル公民ヨリ出ツル者ハ市參事會之ヲ選擧シ其他ノ委員ハ市長之ヲ選任ス

常設委員ノ組織ニ關シテハ市條例ヲ以テ別段ノ規定ヲ設クルコトヲ得

第六十二條　區長及委員ニハ職務取扱ノ爲メニ要スル實費辨償ノ外市會ノ議決ニ依リ勤務ニ相當スル報酬ヲ給スルコトヲ得

第六十三條　市吏員ハ任期滿限ノ後再選セラルヽコトヲ得

市吏員及使丁ハ別段ノ規定又ハ規約アルモノヲ除クノ外隨時解職スルコトヲ得

第二款　市參事會及市吏員ノ職務權限及處務規程

第六十四條　市參事會ハ其市ヲ統轄シ其行政事務ヲ擔任ス

市參事會ノ擔任スル事務ノ概目左ノ如シ

一　市會ノ議事ヲ準備シ及其議決ヲ執行スル事若シ市會ノ議決其權限ヲ越エ法律命令ニ背キ又ハ公衆ノ利益ヲ害スト認ムルトキハ市參事會ハ自己ノ意見ニ由リ又ハ監督官廳ノ指揮ニ由リ理由ヲ示シテ議決ノ執行ヲ停止シ之ヲ再議セシメ猶其議決ヲ更メサルトキハ府縣參事會ノ裁決ヲ請フ可シ其權限ヲ越エ又ハ法律勅令ニ背クニ依テ議決ノ執行ヲ停止シタル場合ニ於テ府縣參事會ノ裁決ニ不服アル者ハ行政裁判所ニ出訴スルコトヲ得

二　市ノ殷盛ニ係ル營造物ヲ管理スル事若シ特ニ之カ管理者アルトキハ其事務ヲ監督スル事

三　市ノ歳入ヲ管理シ歳入出豫算表其他市會ノ議決ニ依テ定マリタル收入支出ヲ命令シ會計及出納ヲ監視スル事

四　市ノ權利ヲ保護シ市有財産ヲ管理スル事

五　市吏員及使丁ヲ監督シ市長ヲ除クノ外其他ニ對シ懲戒處分ヲ行フ事其懲戒處分ハ罰金及十圓以下ノ過怠金トス

六　市ノ諸證書及公文書類ヲ保管スル事

七　外部ニ對シテ市ヲ代表シ市ノ名義ヲ以テ其訴訟並和解ニ關シ又ハ他廳若クハ人民ト商議スル事

八　法律勅令ニ依リ又ハ市會ノ議決ニ從テ使用料、手數料、市稅及夫役現品ヲ賦課徵收スル事

九　其他法律命令又ハ上司ノ指令ニ依テ市參事會ニ委任シタル事務ヲ處理スル事

第六十五條　市參事會ハ職長又ハ其代理者及名譽職會員定員三分ノ一以上出席スルトキハ議決ヲ爲スコトヲ得

其議決ハ可否ノ多數ニ依リ之ヲ定ム可否同數ナルトキハ議長ノ可否スル所ニ依ル

議決ノ事件ハ之ヲ議事錄ニ登記ス可シ

市參事會ノ議決其權限ヲ越エ法律命令ニ背キ又ハ公衆ノ利益ヲ害ストト認ムルトキハ市長ハ自己ノ意見ニ由リ又ハ監督官廳ノ指揮ニ由リ理由ヲ示シテ議決ノ執行ヲ停止シ府縣參事會ノ裁決ヲ請フ可シ其權限ヲ越エ又ハ法律勅令ニ背クニ依テ議決ノ執行ヲ停止シタル場合ニ於テ府縣參事會ノ裁決ニ不服アル者ハ行政裁判所ニ出訴スルコトヲ得

第六十六條　第四十三條ノ規定ハ市參事會ニモ亦之ヲ適用ス但同條ノ規定ニ從ヒ市參事會正當ノ會議ヲ開クコトヲ得サルトキハ市會之ニ代テ議決スルモノトス

第六十七條　市長ハ市政一切ノ事務ヲ指揮監督シ處務ノ滯滯ナキコトヲ務ム可シ

市長ハ市參事會ヲ召集シ之カ議長トナル市長故障アルトキハ其代理者ヲ以テ之ニ充ツ

市長ハ市參事會ノ議事ヲ準備シ其議決ヲ執行シ市參事會ノ名ヲ以テ文書ノ往復ヲ爲シ及之ニ署名ス

第六十八條　急施ヲ要スル場合ニ於テ市參事會ヲ召集スルノ暇ナキトキハ市長ハ市參事會ノ事務ヲ專決處分シ次回ノ會議ニ於テ其處分ヲ報告ス可シ

第六十九條　市參事會員ハ市長ノ職務ヲ補助シ市長故障アルトキ之ヲ代理ス

市長ハ市會ノ同意ヲ得テ市參事會員ヲシテ市行政事務ノ一部ヲ分掌セシムルコトヲ得此場合ニ於テハ名譽職會員ハ職務取扱ノ爲メニ要スル費費辨償ノ外勤務ニ相當スル報酬ヲ受クルコトヲ得

市條例ヲ以テ助役及名譽職會員ノ特別ナル職務並市長代理ノ順序ヲ規定ス可シ若シ條例ノ規定ナキトキハ府縣知事ノ定ムル所ニ從ヒ上席者之ヲ代理ス可シ

第七十條　市收入役ハ市ノ收入ヲ受領シ其費用ノ支拂ヲ爲シ其他會計事務ヲ掌ル

第七十一條　書記ハ市長ニ屬シ庶務ヲ分掌ス

第七十二條　區長及其代理者(第六十條)ハ市參事會ノ機關トナリ其指揮命令ヲ受ケテ區内ニ關スル市行政事務ヲ補助執行スルモノトス

第七十三條　委員ハ(第六十一條)市參事會ノ監督ニ屬シ市行政事務ノ一部ヲ分掌シ又ハ營造物ヲ管理シ若クハ監督シ又ハ一時ノ委託ヲ以テ事務ヲ處辨スルモノトス

市長ハ臨時委員會ニ列席シテ議決ニ加ハリ其議長タルノ權ヲ有ス常設委員ノ職務權限ニ關シテハ市條例ヲ以テ別段ノ規定ヲ設クベシ

第七十四條　市長ハ法律命令ニ從ヒ左ノ事務ヲ管掌ス

一　司法警察補助官タルノ職務及法律命令ニ依テ其管理ニ屬スル地方警察ノ事務但別ニ官署ヲ設ケテ地方警察事務ヲ管掌セシムルトキハ此限ニ在ラス

二　浦役場ノ事務

三　國ノ行政並府縣ノ行政ニシテ市ニ屬スル事務但別ニ吏員ノ設ケアルトキハ此限ニ在ラス

右三項中ノ事務ハ監督官廳ノ許可ヲ得テ之ヲ市參事會員ノ一名ニ分掌セシムルコトヲ得

本條ニ掲載スル事務ヲ執行スルカ爲メニ要スル費用ハ市ノ負擔トス

第三款　給料及給與

第七十五條　名譽職員ハ此法律中別ニ規定アルモノヲ除クノ外職務取扱ノ爲メニ要スル費費ノ辨償ヲ受クルコトヲ得

費費辨償額及報酬額ハ市會之ヲ議決ス

第七十六條　市長助役其他有給吏員及使丁ノ給料額ハ市會ノ議決ヲ以テ之ヲ定ム

市會ノ議決ヲ以テ市長ノ給料額ヲ定ムルトキハ內務大臣ノ許可ヲ受クルコトヲ要ス若シ之ヲ許可ス可カラスト認ムルトキハ內務大臣之ヲ確定ス

市會ノ議決ヲ以テ助役ノ給料額ヲ定ムルトキハ府縣知事ノ許可ヲ受クルコトヲ要ス府縣知事ニ於テ之ヲ許可ス可カラスト認ムルトキハ府縣參事會ノ議決ニ付シテ之ヲ確定ス

市長助役其他有給吏員ノ給料額ハ市條例ヲ以テ之ヲ規定スルコトヲ得

第七十七條　市條例ノ規定ヲ以テ市長其他有給吏員ノ退隱料ヲ設クルコトヲ得

第七十八條　有給吏員ノ給料、退隱料其他第七十五條ニ定ムル給與ニ關シテ異議アルトキハ關係者ノ申立ニ依リ府縣參事會之ヲ裁決ス其府縣參事會ノ裁決ニ不服アル者ハ行政裁判所ニ出訴スルコトヲ得

第七十九條　退隱料ヲ受クル者官職又ハ府縣郡市町村及公共組合ノ職務ニ就キ給料ヲ受クルトキハ其間之ヲ停止シ又ハ更ニ退隱料ヲ受クルモノノ權ヲ得ルトキ其額若退隱料ト同額以上ナルトキハ舊退隱料ハ之ヲ廢止ス

第八十條　給料、退隱料、報酬及辨償ハ越テ市ノ負擔トス

第四章　市有財産ノ管理

第一款　市有財産及市稅

第八十一條　市ハ其不動産、積立金穀等ヲ以テ基本財産ト爲シ之ヲ維持スルノ義務アリ

臨時ニ收入シタル金穀ハ基本財産ニ加入ス可シ但寄附金等寄附者其使用ノ目的ヲ定ムルモノハ此限ニ在ラス

第八十二條　凡市有財産ハ全市ノ爲メニ之ヲ管理シ及共用スルモノトス

但特ニ民法上ノ權利ヲ有スル者アルトキハ此限ニ在ラス

第八十三條　舊來ノ慣行ニ依リ市住民中特ニ其市有ノ土地物件ヲ使用スル權利ヲ有スル者アルトキハ市會ノ議決ヲ經ルニ非レハ其舊慣ヲ改ムルコトヲ得ス

第八十四條　市住民中特ニ市有ノ土地物件ヲ使用スル權利ヲ得ントスル者アルトキハ市條例ノ規定ニ依リ使用料若クハ一時ノ加入金ヲ徵收シ又ハ使用料加入金ヲ共ニ徵收シテ之ヲ許可スルコトヲ得但特ニ民法上使用ノ權利ヲ有スル者ハ此限ニ在ラス

第八十五條　使用權ヲ有スル者(第八十三條、第八十四條)ハ使用ノ多寡ニ準シテ其土地物件ニ係ル必要ナル費用ヲ分擔ス可キモノトス

第八十六條　市會ハ市ノ爲メニ必要ナル場合ニ於テハ使用權(第八十三條、第八十四條)ヲ取上ケ又ハ制限スルコトヲ得但特ニ民法上使用ノ權利ヲ有スル者ハ此限ニ在ラス

第八十七條　市有財産ノ賣却貸與又ハ建築工事及物品調達ノ請負ハ公ケノ入札ニ付ス可シ但臨時急施ヲ要スルトキ及入札ノ價額其費用ニ比シテ得失相償ハサルトキ又ハ市會ノ認可ヲ得ルトキハ此限ニ在ラス

第八十八條　市ハ其必要ナル支出及從前法律命令ニ依テ賦課セラレ又ハ將來法律勅令ニ依テ賦課セラルヽ支出ヲ負擔スルノ義務アリ

市ハ其財産ヨリ生スル收入及使用料、手數料(第八十九條)並科料、過怠

金其他法律勅令ニ依リ市ニ屬スル收入ヲ以テ前項ノ支出ニ充テ猶不足アルトキハ市稅(第九十條)及夫役現品(第百一條)ヲ賦課徵收スルコトヲ得

第八十九條　市ハ其所有物及營造物ノ使用ニ付又ハ特ニ數個人ノ爲メニスル事業ニ付使用料又ハ手數料ヲ徵收スルコトヲ得

第九十條　市稅トシテ賦課スルコトヲ得可キ目左ノ如シ

一　國稅府縣稅ノ附加稅

二　直接又ハ間接ノ特別稅

附加稅ハ直接ノ國稅又ハ府縣稅ニ附加シ均一ノ稅率ヲ以テ市ノ全部ヨリ徵收スルヲ常例トス特別稅ハ附加稅ノ外別ニ市限リ稅目ヲ起シテ課稅スルコトヲ要スルトキ賦課徵收スルモノトス

第九十一條　此法律ニ規定セル條項ヲ除クノ外使用料、手數料(第八十九條)特別稅(第九十條第一項第二)及從前ノ區町村費ニ關スル細則ハ市條例ヲ以テ之ヲ規定ス可シ其條例ニハ科料一圓九十五錢以下ノ罰則ヲ設クルコトヲ得

科料ニ處シ及之ヲ徵收スルハ市參事會之ヲ掌ル其處分ニ不服アル者ハ令狀交付後十四日以內ニ司法裁判所ニ出訴スルコトヲ得

第九十二條　三箇月以上市內ニ滯在スル者ハ其市稅ヲ納ムルモノトス但其課稅ハ滯在ノ初ニ遡リ徵收ス可シ

第九十三條　市內ニ住居ヲ構ヘス又ハ三箇月以上滯在スルコトナシト雖モ市內ニ土地家屋ヲ所有シ又ハ營業ヲ爲ス者(店舗ヲ定メサル行商ヲ除ク)ハ其土地家屋營業若クハ其所得ニ對シテ賦課スル市稅ヲ納ムルモノトス其法人タルトキモ亦同シ但郵便電信及官設鐵道ノ業ハ此限ニ在ラス

第九十四條　所得稅ニ附加稅ヲ賦課シ及市ニ於テ特別ニ所得稅ヲ賦課セントスルトキハ納稅者ノ市外ニ於ケル所有ノ土地家屋又ハ營業(店舗ヲ定メサル行商ヲ除ク)ヨリ收入スル所得ハ之ヲ控除ス可キモノトス

第九十五條　數市町村ニ住居ヲ構ヘ又ハ滯在スル者ニ前條ノ市稅ヲ賦課スルトキハ其所得ヲ各市町村ニ平分シ其一部分ニノミ課稅ス可シ但土地家屋又ハ營業ヨリ收入スル所得ハ此限ニ在ラス

第九十六條　所得稅法第三條ニ揭クル所得ハ市稅ヲ免除ス

第九十七條　左ニ揭クル物件ハ市稅ヲ免除ス

一　政府、府縣郡市町村及公共組合ニ屬シ直接ノ公用ニ供スル土地、營造物及家屋

二　社寺及官立公立ノ學校病院其他學藝、美術及慈善ノ用ニ供スル土地、營造物及家屋

三　官有ノ山林又ハ荒蕪地但官有山林又ハ荒蕪地ノ利益ニ係ル事業ヲ起シ內務大臣及大藏大臣ノ許可ヲ得テ其費用ヲ徵收スルハ此限ニ在ラス

新開地及開墾地ハ市條例ニ依リ年月ヲ限リ免稅スルコトヲ得

第九十八條　前二條ノ外市稅ヲ免除ス可キモノハ別段ノ法律勅令ニ定ムル所ニ從フ皇族ニ係ル市稅ノ賦課ハ追テ法律勅令ヲ以テ定ムル迄現今ノ例ニ依ル

第九十九條　數個人ニ於テ專ラ使用スル所ノ營造物アルトキハ其修築及保存ノ費用ハ之ヲ其關係者ニ賦課ス可シ

市內ノ一區ニ於テ專ラ使用スル營造物アルトキハ其區內ニ住居シ若クハ滯在シ又ハ土地家屋ヲ所有シ營業(店舗ヲ定メサル行商ヲ除ク)ヲ爲ス者ニ於テ其修築及保存ノ費用ヲ負擔ス可シ但其一區ノ所有財產アルトキハ其收入ヲ以テ先ツ其費用ニ充ツ可シ

第百條　市稅ハ納稅義務ノ起リタル翌月ノ初ヨリ免稅理由ノ生シタル月ノ終迄月割ヲ以テ之ヲ徵收ス可シ

會計年度中ニ於テ納稅義務消滅シ又ハ變更スルトキハ納稅者ヨリ之ヲ市長ニ屆出ツ可シ其屆出ヲ爲シタル月ノ終迄ハ從前ノ稅ヲ徵收スルコトヲ得

第百一條　市公共ノ事業ヲ起シ又ハ公共ノ安寧ヲ維持スルカ爲メニ夫役及現品ヲ以テ納稅者ニ賦課スルコトヲ得但學藝、美術及手工ニ關スル勞役ヲ課スルコトヲ得ス

夫役及現品ハ急迫ノ場合ヲ除クノ外直接市稅ヲ準率ト爲シ且之ヲ金額ニ算出シテ賦課ス可シ

夫役ヲ課セラレタル者ハ其便宜ニ從ヒ本人自ラ之ニ當リ又ハ適當ノ代人ヲ出スコトヲ得又急迫ノ場合ヲ除クノ外金錢ヲ以テ之ニ代フルコトヲ得

第百二條　市ニ於テ徵收スル使用料、手數料(第八十九條)市稅(第九十條)夫役ニ代フル金錢(第百一條)共有物使用料及加入金(第八十四條)其他市ノ收入ヲ定期內ニ納メサルトキハ市參事會ハ之ヲ督促シ猶之ヲ完納セサルトキハ國稅滯納處分法ニ依リ之ヲ徵收スヘシ其督促ヲ爲スニハ市條例ノ規定ニ依リ手數料ヲ徵收スルコトヲ得

納稅者中無資力ナル者アルトキハ市參事會ノ意見ヲ以テ會計年度內ニ限リ納稅延期ヲ許スコトヲ得其年度ヲ越ユル場合ニ於テハ市會ノ議決ニ依ル

本條ニ記載スル徵收金ノ追徵、期滿得免及先取特權ニ付テハ國稅ニ關スル規則ヲ適用ス

第百三條　地租ノ附加稅ハ地租ノ納稅者ニ賦課シ其他土地ニ對シテ賦課スル市稅ハ其所有者又ハ使用者ニ賦課スルコトヲ得

第百四條　市稅ノ賦課ニ對スル訴願ハ賦課令狀ノ交付後三箇月以內ニ之ヲ市參事會ニ申立ツ可シ此期限ヲ經過スルトキハ其年度內減稅免稅及償還ヲ請求スルノ權利ヲ失フモノトス

第百五條　市稅ノ賦課及市ノ營造物、市有財產並其所得ヲ使用スル權利ニ關スル訴願ハ市參事會之ヲ裁決ス但民法上ノ權利ニ係ルモノハ此限ニ在ラス

前項ノ裁決ニ不服アル者ハ府縣參事會ニ訴願シ其府縣參事會ノ裁決ニ不服アル者ハ行政裁判所ニ出訴スルコトヲ得

本條ノ訴願及訴訟ノ爲メニ其處分ノ執行ヲ停止スルコトヲ得ス

第百六條　市ニ於テ公債ヲ募集スルハ從前ノ公債元額ヲ償還スル爲メ又ハ天災時變等已ムヲ得サル支出若クハ市ノ永久ノ利益トナル可キ支出ヲ要スルニ方リ通常ノ歲入ヲ增加スルトキハ其市住民ノ負擔ニ堪ヘサルノ場合ニ限ルモノトス

市會ニ於テ公債募集ノ事ヲ議決スルトキハ併セテ其募集ノ方法、利息ノ定率及償還ノ方法ヲ定ム可シ償還ノ初期ハ三年以內ト爲シ年々償還ノ步合ヲ定メ募集ノ時ヨリ三十年以內ニ還了ス可シ

定額豫算內ノ支出ヲ爲スカ爲メ必要ナル一時ノ借入金ハ本條ノ例ニ依ラス其年度內ノ收入ヲ以テ償還スヘキモノトス但此場合ニ於テハ市會ノ議決ヲ要セス

第二款　市ノ歲入出豫算及決算

第百七條　市參事會ハ每會計年度收入支出ノ豫知シ得可キ金額ヲ見積リ年度前二箇月ヲ限リ歲入出豫算表ヲ調製ス可シ但市ノ會計年度ハ政府ノ會計年度ニ同シ

內務大臣ハ省令ヲ以テ豫算表調製ノ式ヲ定ムルコトヲ得

第百八條　豫算表ハ會計年度前市會ノ議決ヲ取リ之ヲ府縣知事ニ報告シ並地方慣行ノ方式ヲ以テ其要領ヲ公告ス可シ

豫算表ヲ市會ニ提出スルトキハ市參事會ハ併セテ其市ノ事務報告書及財產明細表ヲ提出ス可シ

第百九條　定額豫算外ノ費用又ハ豫算ノ不足アルトキハ市會ノ認定ヲ得テ之ヲ支出スルコトヲ得

定額豫算中臨時ノ場合ニ支出スルカ爲メニ豫備費ヲ設キ市參事會ハ豫メ市會ノ認定ヲ受ケシテ豫算外ノ費用又ハ豫算超過ノ費用ニ充ツルコトヲ得但市會ノ否決シタル費途ニ充ツルコトヲ得ス

第百十條　市會ニ於テ豫算表ヲ議決シタルトキハ市長ヨリ其謄寫ヲ以テ之ヲ收入役ニ交付ス可シ其豫算表中監督官廳若クハ參事會ノ許可ヲ受ク可キ事項アルトキハ(第百二十一條ヨリ第百二十三條ニ至ル)先ツ其許可ヲ受ク可シ

收入役ハ市參事會(第六十四條第二項第三)又ハ監督官廳ノ命令アルニ非サレハ支拂ヲ爲スコトヲ得ス又收入役ハ市參事會ノ命令ヲ受クルモ其支出豫算表中ニ豫定ナキカ又ハ其命令第百九條ノ規定ニ據ラサルトキハ支拂ヲ爲スコトヲ得ス

前項ノ規定ニ背キタル支拂ハ總テ收入役ノ責任ニ歸ス

第百十一條　市ノ出納ハ每月例日ヲ定メテ檢查シ及每年少クモ一回臨時檢查ヲ爲ス可シ例月檢查ハ市長又ハ其代理者之ヲ爲シ臨時檢查ハ市長又ハ其代理者ノ外市會ノ互選シタル議員一名以上ノ立會ヲ要ス

第百十二條　決算ハ會計年度ノ終ヨリ三箇月以內ニ之ヲ結了シ證書類ヲ併セテ收入役ヨリ之ヲ市參事會ニ提出シ市參事會ハ之ヲ審查シ意見ヲ附シテ之ヲ市會ノ認定ニ付ス可シ其市會ノ認定ヲ經タルトキハ市長ヨリ之ヲ府縣知事ニ報告ス可シ

決算報告ヲ爲ストキハ第三十八條及第四十三條ノ例ニ準シ市參事會員故障アルモノトス

第五章　特別ノ財産ヲ有スル市區ノ行政

第百十三條　市内ノ一區ニシテ特別ニ財産ヲ所有シ若クハ營造物ヲ設ケ其區限リ特ニ其費(第九十九條)ヲ負擔スルトキハ府縣參事會ハ其市會ノ意見ヲ聞キ條例ヲ發行シ財産及營造物ニ關スル事務ノ爲メ區會ヲ設クルコトヲ得其會議ハ市會ノ例ヲ適用スルコトヲ得

第百十四條　前條ニ記載スル事務ハ市ノ行政ニ關スル規則ニ依リ市參事會之ヲ管理ス可シ但區ノ出納及會計ノ事務ハ之ヲ分別ス可シ

第六章　市行政ノ監督

第百十五條　市行政ハ第一次ニ於テ府縣知事之ヲ監督シ第二次ニ於テ内務大臣之ヲ監督ス但法律ニ指定シタル場合ニ於テ府縣參事會ノ參與スルハ別段ナリトス

第百十六條　此法律中別段ノ規定アル場合ヲ除クノ外凡市ノ行政ニ關スル府縣知事若クハ府縣參事會ノ處分若クハ裁決ニ不服アル者ハ内務大臣ニ訴願スルコトヲ得

市ノ行政ニ關スル訴願ハ處分書若クハ裁決書ヲ交付シ又ハ之ヲ告知シタル日ヨリ十四日以内ニ其理由ヲ具シテ之ヲ提出ス可シ但此法律中別ニ期限ヲ定ムルモノハ此限ニ在ラス

此法律中ニ指定スル場合ニ於テ府縣知事若クハ府縣參事會ノ裁決ニ不服アリテ行政裁判所ニ出訴セントスル者ハ裁決書ヲ交付シ又ハ之ヲ告知シタル日ヨリ二十一日以内ニ出訴ス可シ

行政裁判所ニ出訴スルコトヲ許シタル場合ニ於テハ内務大臣ニ訴願スルコトヲ得ス

訴願及訴訟ヲ提出スルトキハ處分又ハ裁決ノ執行ヲ停止ス但此法律中別ニ規定アリ又ハ當該官廳ノ意見ニ依リ其停止ノ爲メニ市ノ公益ニ害アリト爲ストキハ此限ニアラス

第百十七條　監督官廳ハ市行政ノ法律命令ニ背戻セサルヤ其事務錯亂遊滯セサルヤ否ヲ監視ス可シ監督官廳ハ之カ爲メニ行政事務ニ關シテ報告ヲ爲サシメ簿算及決算等ノ書類帳簿ヲ徵シ並實地ニ就テ事務ノ現況ヲ視察シ出納ヲ檢閲スルノ權ヲ有ス

第百十八條　市ニ於テ法律勅令ニ依テ負擔シ又ハ當該官廳ノ職權ニ依テ命令スル所ノ支出ヲ定額豫算ニ載セス又ハ臨時之ヲ承認セス又ハ實行セサルトキハ府縣知事ハ理由ヲ示シテ其支出額ヲ定額豫算表ニ加ヘ又ハ臨時支出セシム可シ

市ニ於テ前項ノ處分ニ不服アルトキハ行政裁判所ニ出訴スルコトヲ得キハ府縣參事會代テ之ヲ議決ス可シ

第百十九條　凡市會又ハ市參事會ニ於テ議決ス可キ事件ヲ議決セサルトキハ府縣參事會ハ市會ヲ解散セシムルコトヲ得解散ヲ命シタル場合ニ於テハ同時ニ三箇月以内ニ議員ヲ改選ス可キコトヲ命ス可シ但改選市會ノ集會スル迄ハ府縣參事會市會ニ代テ一切ノ事件ヲ議決ス

第百二十條　内務大臣ハ市會ヲ解散シ並改正スル事

第百二十一條　左ノ事件ニ關スル市會ノ議決ハ内務大臣ノ許可ヲ受クルコトヲ要ス

一　市條例ヲ設ケ並改正スル事

二　學藝、美術ニ關シ又ハ歴史上貴重ナル物品ノ寶却讓與寶入書入交換若クハ大ナル變更ヲ爲ス事

前項第一ノ場合ニ於テハ勅裁ヲ經テ之ヲ許可ス可シ

第百二十二條　左ノ事件ニ關スル市會ノ議決ハ内務大臣及大藏大臣ノ許可ヲ受クルコトヲ要ス

一　新ニ市ノ負債ヲ起シ又ハ負債額ヲ增加シ及第百六條第二項ノ例ニ違フモノ但償還期限三年以内ノモノハ此限ニ在ラス

二　市特別税並使用料、手數料ヲ新設シ增額シ又ハ變更スル事

三　地租七分ノ一其他直接國税百分ノ五十ヲ超過スル附加税ヲ賦課スル事

四　間接國税ニ附加税ヲ賦課スル事

五　法律勅令ノ規定ニ依リ官廳ヨリ補助スル歩合金ニ對シ支出金額ヲ定ムル事

第百二十三條　左ノ事件ニ關スル市會ノ議決ハ府縣參事會ノ許可ヲ受クルコトヲ要ス

一　市ノ營造物ニ關スル規則ヲ設ケ並改正スル事

二　基本財産ノ處分ニ關スル事(第八十一條)

三　私有不動産ノ寶却讓與並寶入書入ヲ爲ス事

四　各個人特ニ使用スル私有土地使用法ノ變更ヲ爲ス事(第八十六條)

五　各種ノ保證ヲ與フル事

六　法律勅令ニ依テ負擔スル義務ニ非スシテ向五箇年以上ニ亘リ新ニ市住民ニ負擔ヲ課スル事

七　均一税率ニ據ラスシテ國税府縣税ニ附加税ヲ賦課スル事(第九十條第二項)

八　第九十九條ニ從ヒ數個人又ハ市内ノ一區ニ費用ヲ賦課スル事

九　第百一條ノ準率ニ據ラスシテ夫役及現品ヲ賦課スル事

第百二十四條　府縣知事ハ市長、助役、市參事會員、委員、區長其他市吏員ニ對シ懲戒處分ヲ行フコトヲ得其懲戒處分ハ譴責及過怠金トス其過怠金ハ二十五圓以下トス

市吏員ノ懲戒法ヲ設クル迄ハ左ノ區別ニ從ヒ官吏懲戒例ヲ適用ス可シ

一　市參事會ノ懲戒處分(第六十四條第二項第五)ニ不服アル者ハ府縣知事ニ訴願シ府縣知事ノ裁決ニ不服アル者ハ行政裁判所ニ出訴スルコトヲ得

二　府縣知事ノ懲戒處分ニ不服アル者ハ行政裁判所ニ出訴スルコトヲ得

三　本條第一項ニ掲載スル市吏員職務ニ違フコト再三ニ及ヒ又ハ其情狀重キ者又ハ行狀ヲ亂リ廉恥ヲ失フ者、財産ヲ浪費シ其分ヲ守ラサル者又ハ職務曠ラサル者ハ懲戒裁判ヲ以テ其職ヲ解クコトヲ得其隨時解職スルコトヲ得可キ者ハ(第六十三條)懲戒裁判ヲ以テスルノ限ニ在ラス

過テ解職セラレタル者ハ自己ノ所爲ニ非スシテ職務ヲ執ルニ堪ヘサルカ爲メ解職セラレタル場合ヲ除クノ外退職料ヲ受クルノ權ヲ失フモノトス

四　懲戒裁判ハ府縣知事其審問ヲ爲シ府縣參事會之ヲ裁決ス其裁決ニ不服アル者ハ行政裁判所ニ出訴スルコトヲ得

市長ノ解職ニ係ル裁決ハ上奏シテ之ヲ執行ス

監督官廳ハ懲戒裁判ノ裁決前吏員ノ停職ヲ命シ並給料ヲ停止スルコトヲ得

第百二十五條　市吏員及使丁其職務ヲ盡サス又ハ權限ヲ越エタルコトアルカ爲メ市ニ對シテ賠償ス可キコトアルトキハ府縣參事會之ヲ裁決ス其裁決ニ不服アル者ハ裁決書ヲ交付シ又ハ之ヲ告知シタル日ヨリ七日以内ニ行政裁判所ニ出訴スルコトヲ得但出訴ヲ爲シタルトキハ府縣參事會ハ假ニ其財産ヲ差押フルコトヲ得

第七章　附則

第百二十六條　此法律ハ明治二十二年四月一日ヨリ地方ノ情況ヲ裁酌シ府縣知事ノ具申ニ依リ内務大臣指定スル地ニ之ヲ施行ス

第百二十七條　府縣參事會及行政裁判所ヲ開設スル迄ノ間府縣參事會ノ職務ハ府縣知事行政裁判所ノ職務ハ内閣ニ於テ之ヲ行フ可シ

第百二十八條　此法律ニ依リ初テ議員ヲ選擧スルニ付市參事會及市會ノ職務並市條例ヲ以テ定ム可キ事項ハ府縣知事又ハ其指命スル官吏ニ於テ之ヲ施行ス可シ

第百二十九條　社寺宗教ノ組合ニ關シテハ此法律ヲ適用セス現行ノ例規及其地ノ習慣ニ從フ

第百三十條　此法律中ニ記載セル人口ハ最終ノ人口調査ニ依リ現役軍人ヲ除キタル數ヲ云フ

第百三十一條　現行ノ租税中此法律ニ於テ直接税又ハ間接税トス可キ類別ハ内務大臣及大藏大臣之ヲ告示ス

第百三十二條　明治九年十月第百三十號布告各區町村金穀公借共有物取扱土木起功規則、明治十一年七月第十七號布告郡區町村編制法第四條、明治十七年五月第十四號布告區町村會法、明治十七年五月第十五號布告、明治十七年七月第二十三號布告、明治十八年八月第二十五號布告其他此法律ニ抵觸スル成規ハ此法律施行ノ日ヨリ總テ之ヲ廢止ス

第百三十三條　内務大臣ハ此法律實行ノ責ニ任シ之カ爲メ必要ナル命令及訓令ヲ發布ス可シ

町村制

第一章　總則

第一款　町村及其區域

第一條　此法律ハ市制ヲ施行スル地ヲ除キ總テ町村ニ施行スルモノトス

第二條　町村ハ法律上一個人ト均ク權利ヲ有シ義務ヲ負擔シ凡町村公共ノ事務ハ官ノ監督ヲ受ケテ自ラ之ヲ處理スルモノトス

第三條　凡町村ハ從來ノ區域ヲ存シテ之ヲ變更セス但將來其變更ヲ要スルコトアルトキハ此法律ニ準據ス可シ

第四條　町村ノ廢置分合ヲ要スルトキハ關係アル市町村會及郡參事會ノ意見ヲ聞キ府縣參事會之ヲ議決シ內務大臣ノ許可ヲ受ク可シ

町村境界ノ變更ヲ要スルトキハ關係アル町村會及地主ノ意見ヲ聞キ郡參事會之ヲ議決ス其數郡ニ渉リ若クハ市ノ境界ニ渉ルモノハ府縣參事會之ヲ議決ス

町村ノ資力法律上ノ義務ヲ負擔スルニ堪ヘス又ハ公益上ノ必要アルトキハ關係者ノ異議ニ拘ハラス町村ヲ合併シ又ハ其境界ヲ變更スルコトアル可シ

本條ノ處分ニ付其町村ノ財產處分ヲ要スルトキハ併セテ之ヲ議決ス可シ

第五條　町村ノ境界ニ關スル爭論ハ郡參事會之ヲ裁決ス其數郡ニ渉リ若クハ市ノ境界ニ渉ルモノハ府縣參事會之ヲ裁決ス其郡參事會ノ裁決ニ不服アル者ハ府縣參事會ニ訴願シ其府縣參事會ノ裁決ニ不服アル者ハ行政裁判所ニ出訴スルコトヲ得

第二款　町村住民及其權利義務

第六條　凡町村內ニ住居ヲ占ムル者ハ總テ其町村住民トス

凡町村住民タル者ハ此法律ニ從ヒ公共ノ營造物竝町村有財產ヲ共用スルノ權利ヲ有シ及町村ノ負擔ヲ分任スルノ義務ヲ有スルモノトス但特ニ民法上ノ權利及義務ヲ有スル者アルトキハ此限ニ在ラス

第七條　凡帝國臣民ニシテ公權ヲ有スル獨立ノ男子二年以來(一)町村ノ住民トナリ(二)其町村ノ負擔ヲ分任シ及(三)其町村內ニ於テ地租ヲ納メ者クハ直接國稅年額二圓以上ヲ納ムル者ハ其町村公民トス其公民ヲ以テ救助ヲ受ケタル後二年ヲ經サル者ハ此限ニ在ラス但場合ニ依リ町村會ノ議決ヲ以テ本條ニ定ムル二箇年ノ制限ヲ特免スルコトヲ得

此ノ法律ニ於テ獨立ト稱スルハ滿二十五歲以上ニシテ一戶ヲ擕ヘ且治產ノ禁ヲ受ケサル者ヲ云フ

第八條　凡町村公民ハ町村ノ選擧ニ參與シ町村ノ名譽職ニ選擧セラルヽノ權利アリ又其名譽職ヲ擔任スルハ町村公民ノ義務ナリトス

左ノ理由アルニ非サレハ名譽職ヲ拒辭シ又ハ任期中退職スルコトヲ得ス

一　疾病ニ罹リ公務ニ堪ヘサル者

二　營業ノ爲メニ常ニ其町村內ニ居ルコトヲ得サル者

三　年齡滿六十歲以上ノ者

四　官職ノ爲メ町村公務ヲ執ルコトヲ得サル者

五　四年間無給ニシテ町村吏員ノ職ニ任シ爾後四年ヲ經過セサル者及六年間町村議員ノ職ニ居リ爾後六年ヲ經過セサル者

六　其他町村會ノ議決ニ於テ正當ノ理由アリト認ムル者

前項ノ理由ナクシテ名譽職ヲ拒辭シ又ハ任期中退職シ若クハ無任期ノ職務ヲ少クモ三年間擔當セス又ハ其職務ヲ實際ニ執行セサル者ハ町村會ノ議決ヲ以テ三年以上六年以下其町村公民タルノ權ヲ停止シ且同年期間其負擔ス可キ町村費ノ八分一乃至四分一ヲ增課スルコトヲ得

前項町村會ノ議決ニ不服アル者ハ郡參事會ニ訴願シ其郡參事會ノ裁決ニ不服アル者ハ府縣參事會ニ訴願シ其府縣參事會ノ裁決ニ不服アル者ハ行政裁判所ニ出訴スルコトヲ得

第九條　町村公民タル者第七條ニ揭載スル要件ノ一ヲ失フトキハ其公民タルノ權ヲ失フモノトス町村公民タル者身代限處分中又ハ公權剝奪若クハ停止ヲ附加ス可キ重輕罪ノ爲メ裁判上ノ訊問若クハ拘留中又ハ租稅滯納處分中ハ其公民タルノ權ヲ停止ス

陸海軍ノ現役ニ服スル者ハ町村ノ公務ニ參與セサルモノトス

町村公民タル者ニ限リテ任ス可キ職務ニ在ル者本條ノ場合ニ當ルトキハ其職務ヲ解ク可キモノトス

第三款　町村條例

第十條　町村ノ事務及町村住民ノ權利義務ニ關シ此法律中ニ明文ナク又ハ特例ヲ設クルコトヲ許セル事項ハ各町村ニ於テ特ニ條例ヲ設ケテ之ヲ規定スルコトヲ得

町村ニ於テハ其町村ノ設置ニ係ル營造物ニ關シ規則ヲ設クルヿヲ得

町村條例及規則ハ法律命令ニ抵觸スルコトヲ得ス且之ヲ發行スルトキハ地方慣行ノ公告式ニ依ル可シ

第二章　町村會

第一款　組織及選擧

第十一條　町村會議員ハ其町村ノ選擧人其被選擧權アル者ヨリ之ヲ選擧ス其定員ハ其町村ノ人口ニ準シ左ノ割合ヲ以テ之ヲ定ム但町村條例ヲ以テ特ニ之ヲ增減スルコトヲ得

一　人口千五百未滿ノ町村ニ於テハ　議員八人

一　人口千五百以上五千未滿ノ町村ニ於テハ　議員十二人

一　人口五千以上一萬未滿ノ町村ニ於テハ　議員十八人

一　人口一萬以上三萬未滿ノ町村ニ於テハ　議員二十四人

一　人口二萬以上ノ町村ニ於テハ　議員三十人

第十二條　町村公民(第七條)ハ總テ選擧權ヲ有ス但其公民權ヲ停止セラルヽ者(第八條第三項、第九條第二項)及陸海軍ノ現役ニ服スル者ハ此限ニ在ラス

凡內國人ニシテ公權ヲ有シ直接町村稅ヲ納ムル者其額町村公民ノ最多ノ納稅スル者三名中ノ一人ヨリモ多キトキハ第七條ノ要件ニ當ラスト雖モ選擧權ヲ有ス但公民權ヲ停止セラルヽ者及陸海軍ノ現役ニ服スル者ハ此法律ニ從テ設立シタル會社其他法人ニシテ前項ノ場合ニ當ルトキモ亦同シ

第十三條　選擧人ハ分テ二級ト爲ス

選擧人中直接町村稅ノ納額多キ者ヲ合セテ選擧人全員ノ納ムル總額ノ半ニ當ル可キ者ヲ一級トシ爾餘ノ選擧人ヲ二級トス

一級二級ノ間納稅額兩級ニ跨ル者アルトキハ一級ニ入ル可シ又兩級ノ間ニ同額ノ納稅者二名以上アルトキハ其町村內ニ住居スル年數ノ多キ者ヲ以テ一級ニ入ル若シ住居ノ年數ニ依リ難キトキハ年齡ヲ以テシ年齡ニモ依リ難キトキハ町村長抽籤ヲ以テ之ヲ定ム可シ

選擧人每級各別ニ議員ノ半數ヲ選擧ス其被選擧人ハ同級內ノ者ニ限ラス兩級ニ通シテ選擧セラルヽコトヲ得

第十四條　特別ノ事情アリテ前條ノ例ニ依リ難キ町村ニ於テハ町村條例ヲ以テ別ニ選擧ノ特例ヲ設クルコトヲ得

第十五條　選擧權ヲ有スル町村公民(第十二條第一項)ハ總テ被選擧權ヲ有ス

左ニ揭クル者ハ町村會議員タルコトヲ得ス

一　所屬府縣郡ノ官吏

二　有給ノ町村吏員

三　檢察官及警察官吏

四　神官僧侶及其他諸宗教師

五　小學校教員

其他官吏ニシテ當選シ之ニ應セントスルトキハ所屬長官ノ許可ヲ受ク可シ

代言人ニ非スシテ他人ノ爲メニ裁判所又ハ其他ノ官廳ニ對シテ事ヲ辨スルヲ以テ業ト爲ス者ハ議員ニ選擧セラルルコトヲ得ス

父子兄弟タルノ緣故アル者ハ同時ニ町村會議員タルコトヲ得ス其同時ニ選擧セラレタルトキハ投票ノ數ニ依テ其多キ者一人ヲ當選トシ若シ同數ナレハ年長者ヲ當選トス其時ヲ異ニシテ選擧セラレタル者ハ後者議員タルコトヲ得ス

町村長若クハ助役トノ間父子兄弟タルノ緣故アル者ハ之ト同時ニ町村會議員タルコトヲ得ス若シ議員トノ間ニ其緣故アル者町村長若クハ助役ニ選擧セラレ認可ヲ受クルトキハ其緣故アル議員ハ其職ヲ退ク可シ

第十六條　議員ハ名譽職トス其任期ハ六年トシ每三年各級ニ於テ其半數ヲ改選ス若シ各級ノ議員二分シ難キトキハ初回ニ於テ多數ノ一半ヲ解任セシム初回ニ於テ解任ス可キ者ハ抽籤ヲ以テ之ヲ定ム

退任ノ職員ハ再選セラルヽコトヲ得

第十七條　議員中闕員アルトキハ每三年定期改選ノ時ニ至リ同時ニ補闕

選擧ヲ行フ可シ若シ定員三分ノ一以上闕員アルトキ又ハ町村會町村長若クハ郡長ニ於テ臨時補闕ヲ必要ト認ムルトキハ定期前ト雖モ其補闕選擧ヲ行フ可シ

補闕議員ハ其前任者ノ殘任期間在職スルモノトス

定期改選及補闕選擧トモ前任者ノ選擧セラレタル選擧等級ニ從テ之カ選擧ヲ行フ可シ

第十八條　町村長ハ選擧ヲ行フ毎ニ其選擧前六十日ヲ限リ選擧原簿ヲ製シ各選擧人ノ資格ヲ記載シ此原簿ニ據リテ選擧人名簿ヲ製ス可シ

選擧人名簿ハ七日間町村役場ニ於テ之ヲ關係者ノ縱覽ニ供ス可シ若シ關係者ニ於テ訴願セントスルコトアルトキハ同期限內ニ之ヲ町村長ニ申立ツ可シ町村長ハ町村會ノ裁決(第三十七條第一項)ニ依リ名簿ヲ修正ス可キトキハ選擧前十日ヲ限リテ之ニ修正ヲ加ヘテ確定名簿トナシ之ニ登錄セラレサル者ハ何人タリトモ選擧ニ關スルコトヲ得ス

本條ニ依リ確定シタル名簿ハ當選ヲ辭シ若クハ選擧ノ無効トナリタル場合ニ於テ更ニ選擧ヲ爲ストキモ亦之ヲ適用ス

第十九條　選擧ヲ執行スルトキハ町村長ハ選擧ノ場所日時ヲ定メ及選擧ス可キ議員ノ數ヲ各級ニ分チ選擧前七日ヲ限リテ之ヲ公告ス可シ

各級ニ於テ選擧ヲ行フノ順序ハ先ツ二級ノ選擧ヲ行ヒ次ニ一級ノ選擧ヲ行フ可シ

第二十條　選擧掛ハ名譽職トシ町村長ニ於テ臨時ニ選擧人中ヨリ二名若クハ四名ヲ選任シ町村長若クハ其代理者ハ其係長トナリ選擧會ヲ開閉シ其會場ノ取締ニ任ス

第二十一條　選擧開會中ハ選擧人ノ外何人タリトモ選擧會場ニ入ルコトヲ得ス選擧人ハ選擧會場ニ於テ協議又ハ勸誘ヲ爲スコトヲ得ス

第二十二條　選擧ハ投票ヲ以テ之ヲ行フ投票ニハ被選擧人ノ氏名ヲ記シ封緘ノ上選擧人自ラ掛長ニ差出ス可シ但選擧人ノ氏名ハ投票ニ記入スルコトヲ得ス

選擧人投票ヲ差出ストキハ自己ノ氏名及住所ヲ係長ニ申立テ係長ハ選擧人名簿ニ照シテ之ヲ受ケ封緘ノ儘投票函ニ投入ス可シ但投票函ハ投票ヲ終ル迄之ヲ開クコトヲ得ス

第二十三條　投票ニ記載ノ人員其選擧ス可キ定數ニ過キ又ハ不足アルモ其投票ヲ無効トセス其定數ニ過クルモノハ末尾ニ記載シタル人名ヲ順次ニ棄却ス可シ

左ノ投票ハ之ヲ無効トス

一　人名ヲ記載セス又ハ記載セル人名ノ證ミ難キモノ

二　被選擧人ノ何人タルヲ確認シ難キモノ

三　被選擧權ナキ人名ヲ記載スルモノ

四　被選擧人氏名ノ外他事ヲ記入スルモノ

投票ノ受理並効力ニ關スル事項ハ選擧掛假ニ之ヲ議決ス可否同數ナルトキハ掛長之ヲ決ス

第二十四條　選擧ハ選擧人自ラ之ヲ行フ可シ他人ニ託シテ投票ヲ差出スコトヲ許サス

第十二條第二項ニ依リ選擧權ヲ有スル者ハ代人ヲ出シテ選擧ヲ行フコトヲ得若シ其獨立ノ男子ニ非サル者又ハ會社其他法人ニ係ルトキハ必ス代人ヲ以テス可シ其代人ハ內國人ニシテ公權ヲ有スル獨立ノ男子ニ限ル但一人ニシテ數人ノ代理ヲ爲スコトヲ得ス且代人ハ委任狀ヲ選擧掛ニ示シテ代理ノ證トス可シ

第二十五條　町村ノ區域廣濶ナルトキ又ハ人口稠密ナルトキハ町村會ノ議決ニ依リ區證ヲ定メテ選擧分會ヲ設クルコトヲ得但特ニ二級選擧人ノミ此分會ヲ設クルモ妨ケナシ

分會ノ選擧掛ハ町村長ノ選任シタル代理者ヲ以テ其長トシ第二十條ノ例ニ依リ掛員二名若クハ四名ヲ選任ス

選擧分會ニ於テ爲シタル投票ハ投票函ノ儘本會ニ集メテ之ヲ合算シ總數ヲ以テ當選ヲ定ム

選擧分會ハ本會ト同目時ニ之ヲ開ク可シ其他選擧ノ手續會場ノ取締等總テ本會ノ例ニ依ル

第二十六條　議員ノ選擧ハ有効投票ノ多數ヲ得ル者ヲ以テ當選トス投票ノ數相同キモノハ年長者ヲ取リ同年ナルトキハ掛長自ラ抽籤シテ其當選ヲ定ム

同時ニ補闕員數名ヲ選擧スルトキハ(第十七條)投票數ノ最多キ者ヲ以テ殘任期ノ最長キ前任者ノ補闕ト爲シ其數相同キトキハ抽籤ヲ以テ其順序ヲ定ム

第二十七條　選擧掛ハ選擧錄ヲ製シテ選擧ノ顚末ヲ記錄シ選擧ヲ終リタル後之ヲ則讀シ選擧人名簿其他關係書類ヲ合綴シテ之ニ署名ス可シ

投票ハ之ヲ選擧錄ニ附屬シ選擧ヲ結了スルニ至ル迄之ヲ保存ス可シ

第二十八條　選擧ヲ終リタル後選擧掛長ハ直ニ當選者ニ其當選ノ旨ヲ告知ス可シ其當選ヲ辭セントスル者ハ五日以內ニ之ヲ町村長ニ申立ツ可シ

一人ニシテ兩級ノ選擧ニ當リタルトキハ同期限內何レノ選擧ニ應ス可キコトヲ申立ツ可シ其期限內ニ之ヲ申立テサル者ハ總テ其選擧ヲ辭スル者トナシ第八條ノ處分ヲ爲ス可シ

第二十九條　選擧人選擧ノ効力ニ關シテ訴願セントスルトキハ選擧ノ日ヨリ七日以內ニ之ヲ町村長ニ申立ツルコトヲ得(第三十七條第二項)

町村長ハ選擧ヲ終リタル後之ヲ郡長ニ報告シ郡長ニ於テ選擧ノ効力ニ關シ異議アルトキハ訴願ノ有無ニ拘ラス郡參事會ニ付シテ處分ヲ行フコトヲ得

選擧ノ定規ニ違背スルコトアルトキハ其選擧ヲ取消シ又被選擧人中其資格ノ要件ヲ有セサル者アルトキハ其人ノ當選ヲ取消シ更ニ選擧ヲ行ハシム可シ

第三十條　當選者中其資格ノ要件ヲ有セサル者アルコトヲ發見シ又ハ就職後其要件ヲ失フ者アルトキハ其人ノ當選ハ効力ヲ失フモノトス其要件ノ有無ハ町村會之ヲ議決ス

第三十一條　小町村ニ於テハ郡參事會ノ議決ヲ經町村條例ノ規定ニ依リ町村會ヲ設ケス選擧權ヲ有スル町村公民ノ總會ヲ以テ之ニ充ツルコトヲ得

第二款　職務權限及處務規程

第三十二條　町村會ハ其町村ヲ代表シ此法律ニ準據シテ町村一切ノ事件並從前特ニ委任セラレ又ハ將來法律勅令ニ依テ委任セラルヽ事件ヲ議決スルモノトス

第三十三條　町村會ノ議決ス可キ事件ノ概目左ノ如シ

一　町村條例及規則ヲ設ケ並改正スル事

二　町村費ヲ以テ支辨ス可キ事業但第六十九條ニ揭クル事務ハ此限ニ在ラス

三　歲入出豫算ヲ定メ豫算外ノ支出及豫算超過ノ支出ヲ認定スル事

四　決算報告ヲ認定スル事

五　法律勅令ニ定ムルモノヲ除クノ外使用料、手數料、町村稅及夫役現品ノ賦課徵收ノ法ヲ定ムル事

六　町村有不動產ノ賣買交換讓受讓渡並賃入書入ヲ爲ス事

七　基本財產ノ處分ニ關スル事

八　歲入出豫算ヲ以テ定ムルモノヲ除クノ外新ニ義務ノ負擔ヲ爲シ及權利ノ棄却ヲ爲ス事

九　町村有ノ財產及營造物ノ管理方法ヲ定ムル事

十　町村吏員ノ身元保證金ヲ徵シ並其金額ヲ定ムル事

十一　町村ニ係ル訴訟及和解ニ關スル事

第三十四條　町村會ハ法律勅令ニ依リ其職權ニ屬スル町村吏員ノ選擧ヲ行フ可シ

第三十五條　町村會ハ町村ノ事務ニ關スル書類及計算書ヲ檢閱シ町村長ノ報告ヲ請求シテ事務ノ管理、議決ノ施行並收入支出ノ正否ヲ監査スルノ職權ヲ有ス

町村會ハ町村ノ公益ニ關スル事件ニ付意見書ヲ監督官廳ニ差出スコトヲ得

第三十六條　町村會ハ官廳ノ諮問アルトキハ意見ヲ陳述ス可シ

第三十七條　町村住民及公民タル權利ノ有無、選擧權及被選擧權ノ有無、選擧人名簿ノ正否並其等級ノ當否、代理ヲ以テ執行スル選擧權(第十二條第二項)及町村會議員選擧ノ効力(第二十九條)ニ關スル訴願ハ町村會之ヲ裁決ス

前項ノ訴願中町村住民及公民タル權利ノ有無並選擧權ノ有無ニ關スルモノハ町村會ノ設ケナキ町村ニ於テハ町村長之ヲ裁決ス

町村會若クハ町村長ノ裁決ニ不服アル者ハ郡參事會ニ訴願シ其郡參事會ノ裁決ニ不服アル者ハ府縣參事會ニ訴願シ其府縣參事會ノ裁決ニ不

服アル者ハ行政裁判所ニ出訴スルコトヲ得

本條ノ事件ニ付テハ町村長ヨリモ亦訴願及訴訟ヲ爲スコトヲ得

本條ノ訴願及訴訟ノ爲メニ其執行ヲ停止スルコトヲ得ス但判決確定スルニ非サレハ更ニ選擧ヲ爲スコトヲ得ス

第三十八條　凡議員タル者ハ選擧人ノ指示若クハ委囑ヲ受ク可ラサルモノトス

第三十九條　町村會ハ町村長ヲ以テ其議長トス若シ町村長故障アルトキハ其代理タル町村助役ヲ以テ之ニ充ツ

第四十條　會議ノ事件議長及其父母兄弟若クハ妻子ノ一身上ニ關スル事アルトキハ議長ニ故障アルモノトシテ其代理者之ニ代ル可シ

議長代理者共ニ故障アルトキハ町村會ハ年長ノ議員ヲ以テ議長ト爲ス可シ

第四十一條　町村長及助役ハ會議ニ列席シテ議事ヲ辨明スルコトヲ得

第四十二條　町村會ハ會議ノ必要アル毎ニ議長之ヲ招集ス若シ議員四分ノ一以上ノ請求アルトキハ必ス之ヲ招集ス可シ其招集並會議ノ事件ヲ告知スルハ急施ヲ要スル場合ヲ除クノ外少クモ開會ノ三日前タル可シ但町村會ノ議決ヲ以テ除メ會議日ヲ定ムルモ妨ケナシ

第四十三條　町村會ハ議員三分ノ二以上出席スルニ非サレハ議決スルコトヲ得ス但同一ノ議事ニ付招集再回ニ至ルモ議員猶三分ノ二ニ滿タサルトキハ此限ニ在ラス

第四十四條　町村會ノ議決ハ可否ノ多數ニ依リ之ヲ定ム可否同數ナルトキハ再議議決ス可シ若シ猶同數ナルトキハ議長ノ可否スル所ニ依ル

第四十五條　議員ハ自己及其父母兄弟若クハ妻子ノ一身上ニ關スル事件ニ付テハ町村會ノ議決ニ加ハルコトヲ得ス

議員ノ數此除名ノ爲メニ減少シテ會議ヲ開クノ定數ニ滿タサルトキハ郡參事會町村會ニ代テ議決ス

第四十六條　町村會ニ於テ町村吏員ノ選擧ヲ行フトキハ其一名毎ニ匿名投票ヲ以テ之ヲ爲シ有効投票ノ過半數ヲ得ル者ヲ以テ當選トス若シ過半數ヲ得ル者ナキトキハ最多數ヲ得ル者二名ヲ取リ之ニ就テ更ニ投票セシム若シ最多數ヲ得ル者三名以上同數ナルトキハ議長自ラ抽籤シテ其二名ヲ取リ更ニ投票セシム此再投票ニ於テモ猶過半數ヲ得ル者ナキトキハ抽籤ヲ以テ當選ヲ定ム其他ハ第二十二條、第二十三條、第二十四條第一項ヲ適用ス

第四十七條　町村會ノ會議ハ公開ス但議長ノ意見ヲ以テ傍聽ヲ禁スルコトヲ得

前項ノ選擧ニハ町村會ノ議決ヲ以テ指名推選ノ法ヲ用フルコトヲ得

第四十八條　議長ハ各議員ニ事務ヲ分課シ會議及選擧ノ事ヲ總理シ開會閉會並延會ヲ命シ議場ノ秩序ヲ保持ス若シ傍聽者ノ公然贊成又ハ擯斥ヲ表シ又ハ喧擾ヲ起ス者アルトキハ議長ハ之ヲ議場外ニ退出セシムルコトヲ得

第四十九條　町村會ハ書記ヲシテ議事錄ヲ製シテ其議決及選擧ノ顚末並出席議員ノ氏名ヲ記錄セシム可シ議事錄ハ會議ノ末之ヲ朗讀シ議長及議員二名以上之ニ署名ス可シ

町村會ノ書記ハ議長之ヲ選任ス

第五十條　町村會ハ其會議細則ヲ設ク可シ其細則ニ違背シタル議員ニ科ス可キ過怠金二圓以下ノ罰則ヲ設クルコトヲ得

第五十一條　第三十二條ヨリ第四十九條ニ至ルノ規定ハ之ヲ町村總會ニ適用ス

第三章　町村行政

第一款　町村吏員ノ組織選任

第五十二條　町村ニ町村長及町村助役各一名ヲ置ク可シ但町村條例ヲ以テ助役ノ定員ヲ增加スルコトヲ得

第五十三條　町村長及助役ハ町村會ニ於テ其町村公民中年齡滿三十歲以上ニシテ選擧權ヲ有スル者ヨリ之ヲ選擧ス

町村長及助役ハ第十五條第二項ニ揭載スル職ヲ兼ヌルコトヲ得ス

父子兄弟タルノ緣故アル者ハ同時ニ町村長及助役ノ職ニ在ルコトヲ得ス若シ其緣故アル者助役ノ選擧ニ當ルトキハ其當選ヲ取消シ其町村長ノ選擧ニ當リテ認可ヲ得ルトキハ其緣故アル助役ハ其職ヲ退ク可シ

第五十四條　町村長及助役ノ任期ハ四年トス

町村長及助役ノ選擧ハ第四十六條ニ依テ行フ可シ但投票同數ナルトキハ抽籤ノ法ニ依ラス郡參事會之ヲ決ス可シ

第五十五條　町村長及助役ハ名譽職トス但第五十六條ノ有給町村長及有給助役ハ此限ニ在ラス

町村長ハ職務取扱ノ爲メニ要スル費費辨償ノ外勤務ニ相當スル報酬ヲ受クルコトヲ得助役ニシテ行政事務ノ一部ヲ分掌スル場合（第七十條第二項）ニ於テモ亦同シ

第五十六條　町村ノ情況ニ依リ町村條例ノ規定ヲ以テ町村長ニ給料ヲ給スルコトヲ得又大ナル町村ニ於テハ町村條例ノ規定ヲ以テ助役一名ヲ有給吏員ト爲スコトヲ得

有給町村長及有給助役ハ其町村公民タル者ニ限ラス但當選ニ應シ認可ヲ得ルトキハ其公民タルノ權ヲ得

第五十七條　有給町村長及有給助役ハ三箇月前ニ申立ツルトキハ隨時退職ヲ求ムルコトヲ得此場合ニ於テハ退隱料ヲ受クルノ權ヲ失フモノトス

第五十八條　有給町村長及有給助役ハ他ノ有給ノ職務ヲ兼任シ又ハ株式會社ノ社長及重役トナルコトヲ得ス其他ノ營業ハ郡長ノ認許ヲ得ルニ非サレハ之ヲ爲スコトヲ得ス

第五十九條　町村長及助役ノ選擧ハ府縣知事ノ認可ヲ受ク可シ

第六十條　府縣知事前條ノ認可ヲ與ヘサルトキハ府縣參事會ノ意見ヲ聞クコトヲ要ス若シ府縣參事會同意セサルモ猶府縣知事ニ於テ認可ス可カラスト爲ストキハ自己ノ責任ヲ以テ之ニ認可ヲ與ヘサルコトヲ得其他第六十一條ヲ適用ス

府縣知事ノ不認可ニ對シ町村長又ハ町村會ニ於テ不服アルトキハ內務大臣ニ具申シテ認可ヲ請フコトヲ得

第六十一條　町村長及助役ノ選擧其認可ヲ得サルトキハ再選擧ヲ爲ス可シ

再選擧ニシテ猶其認可ヲ得サルトキハ進テ選擧ヲ行ヒ認可ヲ得ルニ至ルノ間認可ノ權アル監督官廳ハ臨時ニ代理者ヲ選任シ又ハ町村費ヲ以テ官吏ヲ派遣シ町村長及助役ノ職務ヲ管掌セシム可シ

第六十二條　町村ニ收入役一名ヲ置ク收入役ハ町村長ノ推薦ニ依リ町村會之ヲ選任ス

收入役ハ有給吏員ト爲シ其任期ハ四年トス

收入役ハ町村長及助役ヲ兼ヌルコトヲ得ス其他第五十六條第二項、第五十七條及第七十六條ヲ適用ス

收入役ノ選任ハ郡長ノ認可ヲ要ク可シ若シ認可ヲ與ヘサルトキハ郡參事會ノ意見ヲ聞クコトヲ要ス郡參事會之ニ同意セサルモ猶郡長ニ於テ認可ス可カラスト爲ストキハ自己ノ責任ヲ以テ之ニ認可ヲ與ヘサルコトヲ得其他第六十一條ヲ適用ス

郡長ノ不認可ニ對シ町村長又ハ町村會ニ於テ不服アルトキハ府縣知事ニ具申シテ認可ヲ請フコトヲ得

收入支出ノ算少ナル町村ニ於テハ郡長ノ許可ヲ得テ町村長又ハ助役ヲシテ收入役ノ事務ヲ兼掌セシムルコトヲ得

第六十三條　町村ニ書記其他必要ノ附屬員竝使丁ヲ置キ相當ノ給料ヲ給ス其人員ハ町村會ノ議決ヲ以テ之ヲ定ム但町村長ニ相當ノ書記料ヲ給與シテ書記ノ事務ヲ委任スルコトヲ得

町村附屬員ハ町村長ノ推薦ニ依リ町村會之ヲ選任シ使丁ハ町村長之ヲ任用ス

第六十四條　町村ノ區域廣濶ナルトキ又ハ人口稠密ナルトキハ處務便宜ノ爲メ町村會ノ議決ニ依リ之ヲ數區ニ分チ每區區長及其代理者各一名ヲ置クコトヲ得區長及其代理者ハ名譽職トス

區長及其代理者ハ町村會ニ於テ其町村ノ公民中選擧權ヲ有スル者ヨリ之ヲ選擧ス區會（第百十四條）ヲ設クル區ニ於テハ其區會ニ於テ之ヲ選擧ス

第六十五條　町村ハ町村會ノ議決ニ依リ臨時又ハ常設ノ委員ヲ置クコトヲ得其委員ハ名譽職トス

委員ハ町村會ニ於テ町村會議員又ハ町村公民中選擧權ヲ有スル者ヨリ選擧シ町村長又ハ其委任ヲ受ケタル助役ヲ以テ委員長トス

常設委員ノ組織ニ關シテハ町村條例ヲ以テ別段ノ規定ヲ設クルコトヲ得

第六十六條　區長及委員ニハ職務取扱ノ爲メニ要スル費費辨償ノ外町村會ノ議決ニ依リ勤務ニ相當スル報酬ヲ給スルコトヲ得

第六十七條　町村吏員ハ任期滿限ノ後再選セラルヽコトヲ得
町村吏員及使丁ハ別段ノ規定又ハ規約アルモノヲ除クノ外隨時解職スルコトヲ得

第二款　町村吏員ノ職務權限

第六十八條　町村長ハ其町村ヲ統轄シ其行政事務ヲ擔任ス
町村長ノ擔任スル事務ノ概目左ノ如シ
一　町村會ノ議事ヲ準備シ及其議決ヲ執行スル事若シ町村會ノ議決其權限ヲ越エ法律命令ニ背キ又ハ公衆ノ利益ヲ害スト認ムルトキハ町村長ハ自己ノ意見ニ依リ又ハ監督官廳ノ指揮ニ依リ理由ヲ示シテ議決ノ執行ヲ停止シ之ヲ再議セシメ猶其議決ヲ更メサルトキハ郡參事會ノ裁決ヲ請フ可シ其權限ヲ越エ又ハ法律勅令ニ背クニ依テ議決ノ執行ヲ停止シタル場合ニ於テ府縣參事會ノ裁決ニ不服アル者ハ行政裁判所ニ出訴スルコトヲ得
二　町村ノ營造ニ係ル營造物ヲ管理スル事若シ特ニ之カ管理者アルトキハ其事務ヲ監督スル事
三　町村ノ歲入ヲ管理シ歲入出納算表其他町村會ノ議決ニ依テ定マリタル收入支出ヲ命令シ會計及出納ヲ監視スル事
四　町村ノ權利ヲ保護シ町村有ノ財產ヲ管理スル事
五　町村吏員及使丁ヲ監督シ懲戒處分ヲ行フ事其懲戒處分ハ譴責及五圓以下ノ過怠金トス
六　町村ノ諸證書及公文書類ヲ保管スル事
七　外部ニ對シテ町村ヲ代表シ町村ノ名義ヲ以テ其訴訟並和解ニ關シ又ハ他廳若クハ人民ト商議スル事
八　法律勅令ニ依リ又ハ町村會ノ議決ニ從テ使用料、手數料、町村稅及夫役現品ヲ賦課徵收スル事
九　其他法律命令又ハ上司ノ指令ニ依テ町村長ニ委任シタル事務ヲ處理スル事

第六十九條　町村長ハ法律命令ニ從ヒ左ノ事務ヲ管掌ス
一　司法警察補助官タルノ職務及法律命令ニ依テ其管理ニ屬スル地方警察ノ事務但別ニ官署ヲ設ケテ地方警察事務ヲ管掌セシムルトキハ此限ニ在ラス
二　浦役場ノ事務
三　國ノ行政並府縣郡ノ行政ニシテ町村ニ屬スル事務但別ニ吏員ノ設ケアルトキハ此限ニ在ラス
右三項中ノ事務ハ監督官廳ノ許可ヲ得テ之ヲ助役ニ分掌セシムルコトヲ得
本條ニ掲載スル事務ヲ執行スルカ爲メニ要スル費用ハ町村ノ負擔トス

第七十條　町村助役ハ町村長ノ事務ヲ補助ス
町村長ハ町村會ノ同意ヲ得テ助役ヲシテ町村行政事務ノ一部ヲ分掌セシムルコトヲ得
助役ハ町村長故障アルトキ之ヲ代理ス助役數名アルトキハ上席者之ヲ代理ス可シ

第七十一條　町村收入役ハ町村ノ收入ヲ受領シ其費用ノ支拂ヲ爲シ其他會計事務ヲ掌ル

第七十二條　書記ハ町村長ニ屬シ庶務ヲ分掌ス

第七十三條　區長及其代理者ハ町村長ノ機關トナリ其指揮命令ヲ受ケテ區內ニ關スル町村長ノ事務ヲ補助執行スルモノトス

第七十四條　委員（第六十五條）ハ町村行政事務ノ一部ヲ分掌シ又ハ營造物ヲ管理シ若クハ監督シ又ハ一時ノ委託ヲ以テ事務ヲ處辨スルモノトス
委員長ハ委員ノ議決ニ加ハルノ權ヲ有ス助役ヲ以テ委員長ト爲ス場合ニ於テモ町村長ハ隨時委員會ニ出席シテ其委員長ト爲リ並ニ其議決ニ加ハルノ權ヲ有ス
常設委員ノ職務權限ニ關シテハ町村條例ヲ以テ別段ノ規定ヲ設クルコトヲ得

第三款　給料及給與

第七十五條　名譽職員ハ此法律中別ニ規定アルモノヲ除クノ外職務取扱ノ爲メニ要スル費用ノ辨償ヲ受クルコトヲ得
費用辨償額、報酬額及書記料ノ額（第六十三條第一項）ハ町村會之ヲ議決ス

第七十六條　有給町村長有給助役其他有給吏員及使丁ノ給料額ハ町村會ノ議決ヲ以テ之ヲ定ム
町村會ノ議決ヲ以テ町村長及助役ノ給料額ヲ定ムルトキハ郡長ノ許可ヲ受クルコトヲ要ス郡長ニ於テ之ヲ許可ス可カラスト認ムルトキハ郡參事會ノ議決ニ付シテ之ヲ確定ス

第七十七條　町村條例ノ規定ヲ以テ有給吏員ノ退隱料ヲ設クルコトヲ得

第七十八條　有給吏員ノ給料、退隱料其他第七十五條ニ定ムル給與ニ關シテ異議アルトキハ關係者ノ申立ニ依リ郡參事會之ヲ裁決ス其郡參事會ノ裁決ニ不服アル者ハ府縣參事會ニ訴願シ其府縣參事會ノ裁決ニ不服アル者ハ行政裁判所ニ出訴スルコトヲ得

第七十九條　退隱料ヲ受クル者官職又ハ府縣郡市町村及公共組合ノ職務ニ就キ給料ヲ受クルトキハ其間之ヲ停止シ又ハ更ニ退隱料ヲ受クルノ權ヲ得ルトキ其額若退隱料ト同額以上ナルトキハ若退隱料ハ之ヲ廢止ス

第八十條　給料、退隱料、報酬及辨償等ハ總テ町村ノ負擔トス

第四章　町村有財產ノ管理

第一款　町村有財產及町村稅

第八十一條　町村ハ其不動產、積立金穀等ヲ以テ基本財產ト爲シ之ヲ維持スルノ義務アリ
臨時ニ收入シタル金穀ハ基本財產ニ加入ス可シ但寄附金等寄附者其使用ノ目的ヲ定ムルモノハ此限ニ在ラス

第八十二條　凡町村有財產ハ全町村ノ爲メニ之ヲ管理シ及共用スルモノトス但特ニ民法上ノ權利ヲ有スル者アルトキハ此限ニ在ラス

第八十三條　若來ノ慣行ニ依リ町村住民中特ニ其町村有ノ土地物件ヲ使用スル權利ヲ有スル者アルトキハ町村會ノ議決ヲ經ルニ非サレハ其若慣行改ムルコトヲ得ス

第八十四條　町村住民中特ニ其町村有ノ土地物件ヲ使用スル權利ヲ得ントスル者アルトキハ町村條例ノ規定ニ依リ使用料若クハ一時ノ加入金ヲ徵收シ又ハ使用料加入金ヲ共ニ徵收シテ之ヲ許可スルコトヲ得但特ニ民法上使用ノ權利ヲ有スル者ハ此限ニ在ラス

第八十五條　使用權ヲ有スル者（第八十三條、第八十四條）使用ノ多寡ニ準シテ其土地物件ニ係ル必要ナル費用ヲ分擔ス可キモノトス

第八十六條　町村會ハ町村ノ爲メニ必要ナル場合ニ於テハ使用權（第八十三條、第八十四條）ヲ取上ケ又ハ制限スルコトヲ得但特ニ民法上使用ノ權利ヲ有スル者ハ此限ニ在ラス

第八十七條　町村有財產ノ賣却貸與又ハ建築工事及物品調達ノ請負ハ公ケノ入札ニ付ス可シ但臨時急施ヲ要スルトキ及ヒ入札ノ價額其費用ニ比シテ得失相償ハサルトキハ又ハ町村會ノ認許ヲ得ルトキ此限ニ在ラス

第八十八條　町村ハ其必要ナル支出及從前法律命令ニ依テ賦課セラレ又ハ將來法律勅令ニ依テ賦課セラルヽ支出ヲ負擔スルノ義務アリ
町村ハ其財產ヨリ生スル收入及使用料、手數料（第八十九條）並科料、過怠金其他法律勅令ニ依リ町村ニ屬スル收入ヲ以テ前項ノ支出ニ充テ猶不足アルトキハ町村稅（第九十條）及夫役現品（第百一條）ヲ賦課徵收スルコトヲ得

第八十九條　町村ハ其所有物及營造物ノ使用ニ付又ハ特ニ數個人ノ爲メニスル事業ニ付使用料又ハ手數料ヲ徵收スルコトヲ得

第九十條　町村稅トシテ賦課スルコトヲ得ヘキ目左ノ如シ
一　國稅府縣稅ノ附加稅
二　直接又ハ間接ノ特別稅
附加稅ハ直接ノ國稅又ハ府縣稅ニ附加シ均一ノ稅率ヲ以テ町村ノ全部ヨリ徵收スルヲ常例トス特別稅ハ附加稅ノ外別ニ町村限リ稅目ヲ起シテ賦課スルコトヲ要スルトキ賦課徵收スルモノトス

第九十一條　此法律ニ規定セル條項ヲ除クノ外使用料、手數料（第八十九條）特別稅（第九十條第一項第二）及從前ノ町村費ニ關スル細則ハ町村條例ヲ以テ之ヲ規定ス可シ其條例ニハ科料一圓九十五錢以下ノ罰則ヲ設クルコトヲ得
科料ニ處シ及之ヲ徵收スルハ町村長之ヲ掌ル其處分ニ不服アル者ハ令狀交付後十四日以內ニ司法裁判所ニ出訴スルコトヲ得

第九十二條　三箇月以上町村內ニ滯在スル者ハ其町村稅ヲ納ムルモノト

ス但其課税ハ滞在ノ初ニ遡リ徴收ス可シ

第九十三條　町村内ニ住居ヲ構ヘス又ハ三箇月以上滞在スルコトナシト雖モ町村内ニ土地家屋ヲ所有シ又ハ營業ヲ爲ス者（店舗ヲ定メサル行商ヲ除ク）ハ其土地家屋營業若クハ其所得ニ對シテ賦課スル町村税ヲ納ムルモノトス其法人タルトキモ亦同シ但郵便電信及官設鐵道ノ業ハ此限ニ在ラス

第九十四條　所得税ニ加附税ヲ賦課シ及町村ニ於テ特別ニ所得税ヲ賦セントスルトキハ納税者ノ町村外ニ於ケル所有ノ土地家屋又ハ營業（店舗ヲ定メサル行商ヲ除ク）ヨリ收入スル所得ハ之ヲ控除ス可キモノトス

第九十五條　數市町村ニ住居ヲ構ヘ又ハ滞在スル者ニ前條ノ町村税ヲ賦課スルトキハ其所得ヲ各市町村ニ平分シ其一部分ニノミ課税ス可シ但土地家屋又ハ營業ヨリ收入スル所得ハ此限ニ在ラス

第九十六條　所得税法第三條ニ掲クル所得ハ町村税ヲ免除ス

第九十七條　左ニ掲クル物件ハ町村税ヲ免除ス

一　政府、府縣郡市町村及公共組合ニ屬シ直接ノ公用ニ供スル土地、營造物及家屋

二　社寺及官立公立ノ學校病院其他學藝、美術及慈善ノ用ニ供スル土地、營造物及家屋

三　官有ノ山林又ハ荒蕪地但官有山林又ハ荒蕪地ノ利益ニ係ル事業ヲ起シ内務大臣及大藏大臣ノ許可ヲ得テ其費用ヲ徴收スルハ此限ニ在ラス

新開地及開墾地ハ町村條例ニ依リ年月ヲ限免税スルコトヲ得

第九十八條　前二條ノ外町村税ヲ免除ス可キモノハ別段ノ法律勅令ニ定ムル所ニ從フ皇族ニ係ル町村税ノ賦課ハ追テ法律勅令ヲ以テ定ムル迄現今ノ例ニ依ル

第九十九條　數個人ニ於テ專ラ使用スル所ノ營造物アルトキハ其修築及保存ノ費用ハ之ヲ其關係者ニ賦課ス可シ

町村内ノ一部ニ於テ專ラ使用スル營造物アルトキハ其部内ニ住居シ若クハ滞在シ又ハ土地家屋ヲ所有シ營業（店舗ヲ定メサル行商ヲ除ク）ヲ爲ス者ニ於テ其修築及保存ノ費用ヲ負擔ス可シ但其一部ノ所有財産アルトキハ其收入ヲ以テ先ツ其費用ニ充ツ可シ

第百條　町村税ハ納税義務ノ起リタル翌月ノ初ヨリ免税理由ノ生シタル月ノ終迄月割ヲ以テ之ヲ徴收ス可シ

會計年度中ニ於テ納税義務消滅シ又ハ變更スルトキハ納税者ヨリ之ヲ町村長ニ屆出ツ可シ其屆出ヲ爲シタル月ノ終迄ハ從前ノ税ヲ徴收スルコトヲ得

第百一條　町村公共ノ事業ヲ起シ又ハ公共ノ安寧ヲ維持スルカ爲メニ夫役及現品ヲ以テ納税者ニ賦課スルコトヲ得但學藝、美術及手工ニ關スル勞役ヲ課スルコトヲ得ス

夫役及現品ハ急迫ノ場合ヲ除クノ外直接町村税ヲ準率ト爲シ且ツ之ヲ金額ニ算出シテ賦課ス可シ

夫役ヲ課セラレタル者ハ其便宜ニ從ヒ本人自ラ之ニ當リ又ハ適當ノ代人ヲ出スコトヲ得又急迫ノ場合ヲ除クノ外金四ヲ以テ之ニ代フルコトヲ得

第百二條　町村ニ於テ徴收スル使用料、手數料（第八十九條）町村税（第九十條）夫役ニ代フル金圓（第百一條）其他町村ノ收入ヲ定期内ニ納メサルトキハ町村長ハ之ヲ督促シ猶之ヲ完納セサルトキハ國税滞納處分法ニ依リ之ヲ徴收ス可シ其督促ヲ爲スニハ町村條例ノ規定ニ依リ手數料ヲ徴收スルコトヲ得

納税者中無資力ナル者アルトキハ町村長ノ意見ヲ以テ會計年度内ニ限リ納税延期ヲ許スコトヲ得其年度ヲ越ユル場合ニ於テハ町村會ノ議決ニ依ル

本條ニ記載スル徴收金ノ追徴、期滿得免及先取特權ニ付テハ國税ニ關スル規則ヲ適用ス

第百三條　地租ノ附加税ハ地租ノ納税者ニ賦課シ其他土地ニ對シテ賦課スル町村税ハ其所有者又ハ使用者ニ賦課スルコトヲ得

第百四條　町村税ノ賦課ニ對スル訴願ハ賦課令狀ノ交付後三箇月以内ニ之ヲ町村長ニ申立ツ可シ此期限ヲ經過スルトキハ其年度内減税免税及償還ヲ請求スルノ權利ヲ失フモノトス

第百五條　町村税ノ賦課及町村ノ營造物、町村有ノ財産並其所得ヲ使用スル權利ニ關スル訴願ハ町村長之ヲ裁決ス但民法上ノ權利ニ係ルモノハ此限ニ在ラス

前項ノ裁決ニ不服アル者ハ郡參事會ニ訴願シ其郡參事會ノ裁決ニ不服アル者ハ府縣參事會ニ訴願シ其府縣參事會ノ裁決ニ不服アル者ハ行政裁判所ニ出訴スルコトヲ得

本條ノ訴願及訴訟ノ爲メニ其處分ノ執行ヲ停止スルコトヲ得ス

第百六條　町村ニ於テ公債ヲ募集スルハ從前ノ公債元額ヲ償還スル爲メ又ハ天災時變等已ムヲ得サル支出若クハ町村永久ノ利益トナル可キ支出ヲ要スルニ方リ通常ノ歲入ヲ增加スルトキハ其町村住民ノ負擔ニ堪ヘサルノ場合ニ限ルモノトス

町村會ニ於テ公債募集ノ事ヲ裁決スルトキハ併セテ其募集ノ方法、利息ノ定率及償還ノ方法ヲ定ム可シ償還ノ初期ハ三年以内ト爲シ年々償還ノ歩合ヲ定メ募集ノ時ヨリ三十年以内ニ還了ス可シ

定額豫算内ノ支出ヲ爲スカ爲メ必要ナル一時ノ借入金ハ本條ノ例ニ依ラス其年度内ノ收入ヲ以テ償還ス可キモノトス

第二款　町村ノ歲入出豫算及決算

第百七條　町村長ハ毎會計年度收入支出ノ豫知シ得可キ金額ヲ見積リ年度前二箇月ヲ限リ歲入出豫算表ヲ調製スヘシ但町村ノ會計年度ハ政府ノ會計年度ニ同シ

内務大臣ハ省令ヲ以テ豫算表調製ノ式ヲ定ムルコトヲ得

第百八條　豫算表ハ會計年度前町村會ノ議決ヲ取リ之ヲ郡長ニ報告シ並地方慣行ノ方式ヲ以テ其要領ヲ公告ス可シ

豫算表ヲ町村會ニ提出スルトキハ町村長ハ併セテ其町村事務報告書及財産明細表ヲ提出ス可シ

第百九條　定額豫算外ノ費用又ハ豫算ノ不足アルトキハ町村會ノ認定ヲ得テ之ヲ支出スルコトヲ得

定額豫算中臨時ノ場合ニ支出スルカ爲メニ豫備費ヲ置キ町村長ハ豫メ町村會ノ認定ヲ受クスシテ豫算外ノ費用又ハ豫算超過ノ費用ニ充ツルコトヲ得但町村會ノ否決シタル費途ニ充ツルコトヲ得ス

第百十條　町村會ニ於テ豫算表ヲ議決シタルトキハ町村長ヨリ其謄寫ヲ以テ之ヲ收入役ニ交付ス可シ其豫算表中監督官廳若クハ參事會ノ許可ヲ受ク可キ事項アルトキハ（第百二十五條ヨリ第百二十七條ニ至ル）先ツ其許可ヲ受ク可シ

收入役ハ町村長（第六十八條第二項第三）又ハ監督官廳ノ命令アルニ非サレハ支拂ヲ爲スコトヲ得ス又收入役ハ町村長ノ命令ヲ受クルモ其支出豫算表中ニ豫定ナキカ又ハ其命令第百九條ノ規定ニ依ラサルトキハ支拂ヲ爲スコトヲ得ス

前項ノ規定ニ背キタル支拂ハ總テ收入役ノ責任ニ歸ス

第百十一條　町村ノ出納ハ毎月例日ヲ定メテ檢査シ及毎年少クモ一回臨時檢査ヲ爲ス可シ例月檢査ハ町村長又ハ其代理者之ヲ爲シ臨時檢査ハ町村長又ハ其代理者ノ外町村會ノ互選シタル議員一名以上ノ立會ヲ要ス

第百十二條　決算ハ會計年度ノ終ヨリ三箇月以内ニ之ヲ終了シ證書類ヲ併セテ收入役ヨリ之ヲ町村長ニ提出シ町村長ハ之ヲ審査シ意見ヲ附シテ之ヲ町村會ノ認定ニ付ス可シ第六十二條第五項ノ場合ニ於テハ前例ニ依リ町村長ヨリ直チニ之ヲ町村會ニ提出ス可シ其町村會ノ認定ヲ經タルトキハ町村長ハ之ヲ郡長ニ報告ス可シ

第百十三條　決算報告ヲ爲ストキハ第四十條ノ例ニ準シテ議長代理者共ニ故障アルモノトス

第五章　町村内各部ノ行政

第百十四條　町村内ノ區（第六十四條）又ハ町村内ノ一部若クハ合併町村（第四條）ニシテ別ニ其區域ヲ存シテ一區ヲ爲スモノ特別ニ財産ヲ所有シ若クハ營造物ヲ設ケ其一區限リ特ニ其費用（第九十九條）ヲ負擔スルトキハ郡參事會ハ其町村會ノ意見ヲ聞キ條例ヲ發行シ財産及營造物ニ關スル事務ノ爲メ區會又ハ區總會ヲ設クルコトヲ得其會議ハ町村會ノ例ヲ適用スルコトヲ得

第百十五條　前條ニ記載スル事務ハ町村ノ行政ニ關スル規則ニ依リ町村長之ヲ管理ス可シ但區ノ出納及會計ノ事務ハ之ヲ分別ス可シ

第六章　町村組合

第百十六條　數町村ノ事務ヲ共同處分スル爲メ其協議ニ依リ監督官廳ノ許可ヲ得テ其町村ノ組合ヲ設クルコトヲ得

法律上ノ義務ヲ負擔スルニ堪フ可キ資力ヲ有セサル町村ニシテ他ノ町村ト合併(第四條)スルノ協議整ハス又ハ其事情ニ依リ合併ヲ不便ト爲ストキハ郡參事會ノ議決ヲ以テ數町村ノ組合ヲ設クシムルコトヲ得

第百十七條　町村組合ヲ設クルノ協議ヲ爲ストキハ(第百十六條第一項)組合會議ノ組織、事務ノ管理方法並其費用ノ支辨方法ヲ併セテ規定ス可シ

前條第二項ノ場合ニ於テハ其關係町村ノ協議ヲ以テ組合費用ノ分擔法等其他必要ノ事項ヲ規定ス可シ若シ其協議整ハサルトキハ郡參事會ニ於テ之ヲ定ム可シ

第百十八條　町村組合ハ監督官廳ノ許可ヲ得ルニ非サレハ之ヲ解クコトヲ得ス

第七章　町村行政ノ監督

第百十九條　町村ノ行政ハ第一次ニ於テ郡長之ヲ監督シ第二次ニ於テ府縣知事之ヲ監督シ第三次ニ於テ內務大臣之ヲ監督ス但法律ニ指定シタル場合ニ於テ郡參事會及府縣參事會ノ參與スルハ別段ナリトス

第百二十條　此法律中別段ノ規定アル場合ヲ除クノ外凡町村ノ行政ニ關スル郡長若クハ郡參事會ノ處分若クハ裁決ニ不服アル者ハ府縣知事若クハ府縣參事會ニ訴願シ其府縣知事若クハ府縣參事會ノ裁決ニ不服アル者ハ內務大臣ニ訴願スルコトヲ得

町村ノ行政ニ關スル訴願ハ處分書若クハ裁決書ヲ交付シ又ハ之ヲ告知シタル日ヨリ十四日以內ニ其理由ヲ具シテ之ヲ提出ス可シ但此法律中別ニ期限ヲ定ムルモノハ此限ニ在ラス

此法律中ニ指定スル場合ニ於テ府縣知事若クハ府縣參事會ノ裁決ニ不服アリテ行政裁判所ニ出訴セントスル者ハ裁決書ヲ交付シ又ハ之ヲ告知シタル日ヨリ二十一日以內ニ出訴ス可シ

行政裁判所ニ出訴スルコトヲ許シタル場合ニ於テハ內務大臣ニ訴願スルコトヲ得ス

訴願及訴訟ヲ提出スルトキハ處分又ハ裁決ノ執行ヲ停止ス但此法律中別ニ規定アリ又ハ當該官廳ノ意見ニ依リ其停止ノ爲メニ町村ノ公益ニ害アリト爲ストキハ此限ニ在ラス

第百二十一條　監督官廳ハ町村行政ノ法律命令ニ背戻セサルヤ其事務錯亂滯セサルヤ否ヲ監視ス可シ監督官廳ハ之カ爲メニ行政事務ニ關シテ報告ヲ爲サシメ豫算及決算等ノ書類帳簿ヲ徵シ並實地ニ就テ事務ノ現況ヲ視察シ出納ヲ檢閱スルノ權ヲ有ス

第百二十二條　町村又ハ其組合ニ於テ法律勅令ニ依テ負擔シ又ハ當該官廳ノ職權ニ依テ命令スル所ノ支出ヲ定額豫算ニ載セス又ハ臨時之ヲ承諾セス又ハ實行セサルトキハ郡長ハ理由ヲ示シテ其支出額ヲ定額豫算表ニ加ヘ又ハ臨時支出セシム可シ

町村又ハ其組合ニ於テ前項ノ處分ニ不服アルトキハ府縣參事會ニ訴願シ其府縣參事會ノ裁決ニ不服アルトキハ行政裁判所ニ出訴スルコトヲ得

第百二十三條　凡町村會ニ於テ議決ス可キ事件ヲ議決セサルトキハ郡參事會代テ之ヲ議決ス可シ

第百二十四條　內務大臣ハ町村會ヲ解散セシムルコトヲ得解散ヲ命シタル場合ニ於テハ同時ニ三箇月以內更ニ議員ヲ改選ス可キコトヲ命ス可シ但改選町村會ノ集會スル迄ハ郡參事會町村會ニ代テ一切ノ事件ヲ議決ス

第百二十五條　左ノ事件ニ關スル町村會ノ議決ハ內務大臣ノ許可ヲ受クルコトヲ要ス

一　町村條例ヲ設ケ並改正スル事

二　學藝、美術ニ關シ又ハ歷史上貴重ナル物品ノ寶却讓與賣入書入交換若クハ大ナル變更ヲ爲ス事

前項第一ノ場合ニ於テ人口一萬以上ノ町村ニ係ルトキハ勅裁ヲ經テ之ヲ許可ス可シ

第百二十六條　左ノ事件ニ關スル町村會ノ議決ハ內務大臣及大藏大臣ノ許可ヲ受クルコトヲ要ス

一　新ニ町村ノ負債ヲ起シ又ハ負債額ヲ增加シ及第百六條第二項ノ例ニ違フモノ但償還期限三年以內ノモノハ此限ニ在ラス

二　町村特別稅並使用料、手數料ヲ新設シ增額シ又ハ變更スル事

三　地租七分ノ一其他直接國稅百分ノ五十ヲ超過スル附加稅ヲ賦課スル事

四　間接無稅ニ附加稅ヲ賦課スル事

五　法律勅令ノ規程ニ依リ官廳ヨリ補助スル歩合金ニ對シ支出金額ヲ定ムル事

第百二十七條　左ノ事件ニ關スル町村會ノ議決ハ郡參事會ノ許可ヲ受クルコトヲ要ス

一　町村ノ營造物ニ關スル規則ヲ設ケ並改正スル事

二　基本財產ノ處分ニ關スル事(第八十一條)

三　町村有不動產ノ賣却讓與並賣入書入ヲ爲ス事

四　各個人特ニ使用スル町村有土地使用法ノ變更ヲ爲ス事(第八六條)

五　各種ノ保證ヲ與フル事

六　法律勅令ニ依テ負擔スル義務ニ非スシテ向五箇年以上ニ亘リ新ニ町村住民ニ負擔ヲ課スル事

七　均一ノ稅率ニ據ラスシテ國稅府縣稅ニ附加稅ヲ賦課スル事(第九十條第二項)

八　第九十九條ニ從ヒ數個人又ハ町村內ノ一部ニ費用ヲ賦課スル事

九　第百一條ノ準率ニ據ラスシテ夫役及現品ヲ賦課スル事

第百二十八條　府縣知事郡長ハ町村長、助役、委員、區長其他町村吏員ニ對シ懲戒處分ヲ行フヿヲ得其懲戒處分ハ譴責及過怠金トス郡長ノ處分ニ係ル過怠金ハ十圓以下府縣知事ノ處分ニ係ルモノハ廿五圓以下トス道テ町村吏員ノ懲戒法ヲ設クル迄ハ左ノ區別ニ從ヒ官吏懲戒例ヲ適用ス可シ

一　町村長ノ懲戒處分(第六十八條第二項第五)ニ不服アル者ハ郡長ニ訴願シ其郡長ノ裁決ニ不服アル者ハ府縣知事ニ訴願シ其府縣知事ノ裁決ニ不服アル者ハ行政裁判所ニ出訴スルコトヲ得

二　郡長ノ懲戒處分ニ不服アル者ハ府縣知事ニ訴願シ府縣知事ノ懲戒處分及其裁決ニ不服アル者ハ行政裁判所ニ出訴スルコトヲ得

三　本條第一項ニ掲載スル町村吏員職務ニ違フコト再三ニ及ヒ又ハ其情狀重キ者又ハ行狀ヲ亂リ廉恥ヲ失フ者、二產ヲ浪費シ其分ノ守ラサル者又ハ職務怠ラサル者ハ懲戒裁判ヲ以テ其職ヲ解クコトヲ得其隨時解職スルコトヲ得可キ者ハ(第六十七條)懲戒裁判ヲ以テスルノ限ニ在ラス

總テ解職セラレタル者ハ自己ノ所爲ニ非スシテ職務ヲ執ルニ堪ヘサルカ爲メ解職セラレタル場合ヲ除クノ外退隱料ヲ受クルノ權ヲ失フモノトス

懲戒裁判ハ郡長其審問ヲ爲シ郡參事會之ヲ裁決ス其裁決ニ不服アル者ハ府縣參事會ニ訴願シ其府縣參事會ノ裁決ニ不服アル者ハ行政裁判所ニ出訴スルコトヲ得

監督官廳ハ懲戒裁判ノ裁決前吏員ノ停職ヲ命シ並給料ヲ停止スルコトヲ得

第百二十九條　町村吏員及使丁其職務ヲ怠サス又ハ權限ヲ越エタル事アルカ爲メ町村ニ對シテ賠償ス可キコトアルトキハ郡參事會之ヲ裁決ス其裁決ニ不服アル者ハ裁決書ヲ交付シ又ハ之ヲ告知シタル日ヨリ七日以內ニ府縣參事會ニ訴願シ其府縣參事會ノ裁決ニ不服アル者ハ行政裁判所ニ出訴スルコトヲ得但訴願ヲ爲シタルトキハ郡參事會ハ假ニ其財產ヲ差押フルコトヲ得

第八章　附則

第百三十條　郡參事會、府縣參事會及行政裁判所ヲ開設スル迄ノ間郡參事會ノ職務ハ郡長、府縣參事會ノ職務ハ府縣知事、行政裁判所ノ職務ハ內閣ニ於テ之ヲ行フ可シ

第百三十一條　此法律ニ依リ初テ議員ヲ選擧スルニ付町村長及町村會ノ職務並町村條例ヲ以テ定ム可キ事項ハ郡長又ハ其指命スル官吏ニ於テ之ヲ施行ス可シ

第百三十二條　此法律ハ北海道、沖繩縣其他勅令ヲ以テ指定スル島嶼ニ之ヲ施行セス別ニ勅令ヲ以テ其制ヲ定ム

第百三十三條　前條ノ外特別ノ事情アル地方ニ於テハ町村會及町村長ノ具申又ハ郡參事會ノ具申ニ依リ勅令ヲ以テ此法律中ノ條規ヲ中止スルコトアル可シ

第百三十四條　社寺宗教ノ組合ニ關シテハ此法律ヲ適用セス現行ノ例規及其地ノ習慣ニ從フ

第百三十五條　此法律中ニ記載セル人口ハ最終ノ人口調査ニ依リ現役軍人ヲ除キタル數ヲ云フ

第百三十六條　現行ノ租稅中此法律ニ於テ直接稅又ハ間接稅トス可キ類別ハ內務大臣及大藏大臣之ヲ告示ス

第百三十七條　此法律ハ明治二十二年四月一日ヨリ地方ノ情況ヲ裁酌シ府縣知事ノ具申ニ依リ內務大臣ノ指揮ヲ以テ之ヲ施行ス可シ

第百三十八條　明治九年十月第百三十號布告各區町村金穀公借共有物取扱土木起功規則、明治十一年七月第十七號布告郡區町村編制法第六條及第九條但書、明治十七年五月第十四號布告區町村會法、明治十七年五月第十五號布告、明治十七年七月第二十三號布告、明治十八年八月第二十五號布告其他此法律ニ抵觸スル成規ハ此法律施行ノ日ヨリ總テ之ヲ廢止ス

第百三十九條　內務大臣ハ此法律實行ノ責ニ任シ之カ爲メ必要ナル命令及訓令ヲ發布ス可シ

◎市制中東京京都大阪ノ三市ニ特例ヲ設ク

明治二十二年三月　法律第十二號

朕市制中東京市京都市大阪市ニ特例ヲ設クルノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

第一條　東京市京都市大阪市ニ於テハ市長及助役ヲ置カス市長ノ職務ハ府知事之ヲ行ヒ助役ノ職務ハ書記官之ヲ行フ

第二條　東京市京都市大阪市ノ市參事會ハ府知事書記官及名譽職參事會員ヲ以テ之ヲ組織ス

第三條　東京市京都市大阪市ニ於テハ從來ノ區ヲ存シ每區ニ區長一名及書記ヲ置キ有給吏員ト爲シ市參事會之ヲ選任ス但書記ノ人員ハ市會議決ヲ以テ之ヲ定ム

第四條　東京市京都市大阪市ニ於テハ區長代理者ヲ置カズ區長事故アルトキハ上席書記之ヲ代理ス

第五條　東京市京都市大阪市ニ於テハ府知事ハ區長ヲシテ其區內ニ關スル國ノ行政及府ノ行政並收入役ノ事務ヲ補助執行セシムルヿヲ得

第六條　東京市京都市大阪市ニ於テ區ノ廢置分合ヲ要スルトキハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

第七條　東京市京都市大阪市ニ於テハ區ヲ以テ市會議員選擧區ト爲ス

◎町村制ヲ施行セサル島嶼ヲ指定ス

勅令第一號　明治二十二年一月

朕町村制ヲ施行セサル島嶼指定ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

町村制第百三十二條ニ依リ町村制ヲ施行セサル島嶼左ノ通指定ス

東京府管下　小笠原島　伊豆七島

長崎縣管下　對馬國

島根縣管下　隱岐國

鹿兒島縣管下　大隅國大島郡　大島　德ノ島　喜界島　沖永良部島　與論島　薩摩國川邊郡　硫黃島　黑島　竹島　口之島　臥蛇島　平島　中之島　惡石島　諏訪ノ瀨島　寶島

◎島嶼所屬名稱

明治二十四年九月　勅令第百九十號

朕島嶼所屬名稱ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

東京府管下小笠原島南南西沖北緯二十四度零分ヨリ同二十五度三十分東經百四十一度零分ヨリ同百四十一度三十分ノ間ニ散在スル三島嶼ヲ小笠原島ノ所屬トシ其中央ニ在ルモノヲ硫黃島ト稱シ其南ニ在ルモノヲ南硫黃島其北ニ在ルモノヲ北硫黃島ト稱ス

◎市町村制ノ最終調査人口

明治二十三年七月內務省令第三號

市町村ノ人口ハ每年十二月末日調査ノ現在數ニ依リ翌年官報ヲ以テ告示シ之ヲ市制町村制ニ記載スル最終調査ノ人口トス但告示ノ後市町村ヲ廢爲シタル當時ノ調査ニ依ルモノトス

◎町村學校組合設方

勅令第三十三號　明治二十六年五月

朕尋常中學校高等女學校技藝學校設置ノ爲メ町村學校組合ヲ設クル件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

第一條　町村ハ尋常中學校高等女學校又ハ技藝學校ヲ設置センカ爲メ町村制第百十六條第一項ニ依リ町村學校組合ヲ設クルコトヲ得

前項ノ町村學校組合ヲ解カントスルトキハ町村制第百十八條ニ依ル

第二條　前條ノ場合ニ於テ郡長ハ府縣知事ノ指揮ヲ受クヘシ

◎市町村ニ於テ維持スル公園地內使用及使用料等ノ件

明治二十四年五月內務省訓令第四百六十四號

市町村ニ於テ維持保存スル公園地內使用及其使用料徵收等ハ舊來ノ慣行ニ依リ特ニ使用スル者ノ外ハ渾テ市町村營造物規則幷使用料細則ノ規定ニ依リ取扱ハシム可シ

◎市町村行政事務監督

明治二十五年五月內務省訓令第三百四十八號

市町村行政事務監督ノ儀ニ付テハ是迄示達シタル儀モ有之各地方共漸次監督ノ方法ヲ設ケ實施シ來候處客年來已ニ郡制府縣制ヲ實施シタル地方モ不少又其他ノ府縣ニ在テモ不遠施行セラルヘキニ付從テ其下級團體タル市町村行政事務ノ監督ハ此際一層之ヲ嚴密ニシ以テ其事務ノ整理ヲ計リ新制度ノ實効ヲ擧クルコトニ注意セラル可シ今其監督ヲ行フヘキ事項ノ要領ヲ左ニ列擧ス其方法順序ノ詳細ニ至テハ各地方適宜酌量スルコトアル可シ

一　市町村ノ事務ハ國及府縣郡ノ行政ニ係ルモノハ勿論市町村ノ共同事務ニ屬スルモノト雖モ其事務報告ヲ徵シ之ニ依テ其事務ノ整理ヲ檢察シ其違法若クハ不當ナルモノアルトキハ夫々相當ノ處分ヲ施シ又將來ニ向テ訓戒ヲ加フルコトアルヘシ依テ各府縣ニ於テ市町村事務報告例ヲ定メ確實ノ報告ヲ徵スルヲ要ス尤モ定例報告ノ外ト雖モ必要ノ時ハ隨時報告ヲ徵スルコトアルヘシ又天災時變其他重要ノ事件アルトキハ監督官廳ノ命令ヲ俟タスシテ臨時報告スヘキハ當然ノ事ナリトス

二　市町村ノ行政事務ヲ監督スル爲メニ監督官廳ハ各市町村ノ巡視ヲ行フヘシ其巡視規程ハ各府縣